

第2節 吉田構内(吉田遺跡)の調査

1. 経済学部研究棟改修工事に伴う予備発掘調査・立会調査

調査地区 吉田構内L・M-19区

調査面積 約145㎡(予備発掘調査:約26㎡、
立会調査:約119㎡)

調査期間 予備発掘調査:平成20年7月1～10日、
立会調査:平成21年1月23、24、31日、
2月5日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯(図4、写真7・8)

吉田構内の経済学部研究棟の改修工事が決定した。耐震補強工事は建物内で行うため、地下の掘削はなかった。しかし、研究棟周囲において設備配管の取り替え・新設工事が計画された。

経済学部研究棟は吉田構内への統合移転の際、吉田遺跡調査団により設定された第V地区に位置する。同調査団によれば、幅1mの調査区を20m間隔に設けて調査したが、「黒色や暗青灰色のシルトと粘土や、薄い泥炭質の層からなり、遺構らしい遺構は見あたらなかった」とされる^{註1}。しかし、概要報告しかされていないため、詳細は不明であった。

このため、埋蔵文化財資料館専門委員会の指示の下(発掘調査を要する工事計画として、平成20年3月5日埋蔵文化財資料館専門委員会承認)、埋蔵文化財資料館が予備発掘調査を行い、同調査の結果を受けて引き続き立会調査を行った。

(2) 予備発掘調査

予備発掘調査は、平成20年7月1～7日の間、研究棟周囲にA～Dの4ヶ所の調査区を設けて行った。調査面積はA・B調査区が約6㎡、C調査区約11㎡、D調査区約9㎡である。

調査区の掘削を行った結果、A・B調査区は共同溝の設置に伴う攪乱により、埋土が全て造成土であったため、ただちに埋め戻し、C・D調査区を中心に調査を行った。

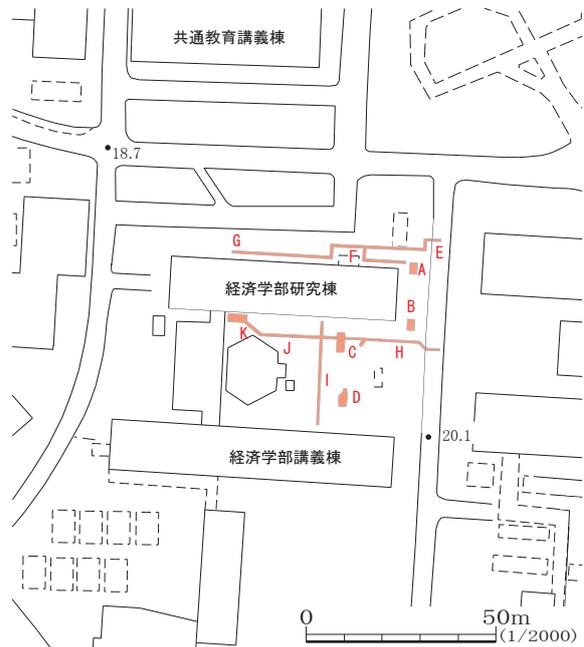


図4 調査区位置図

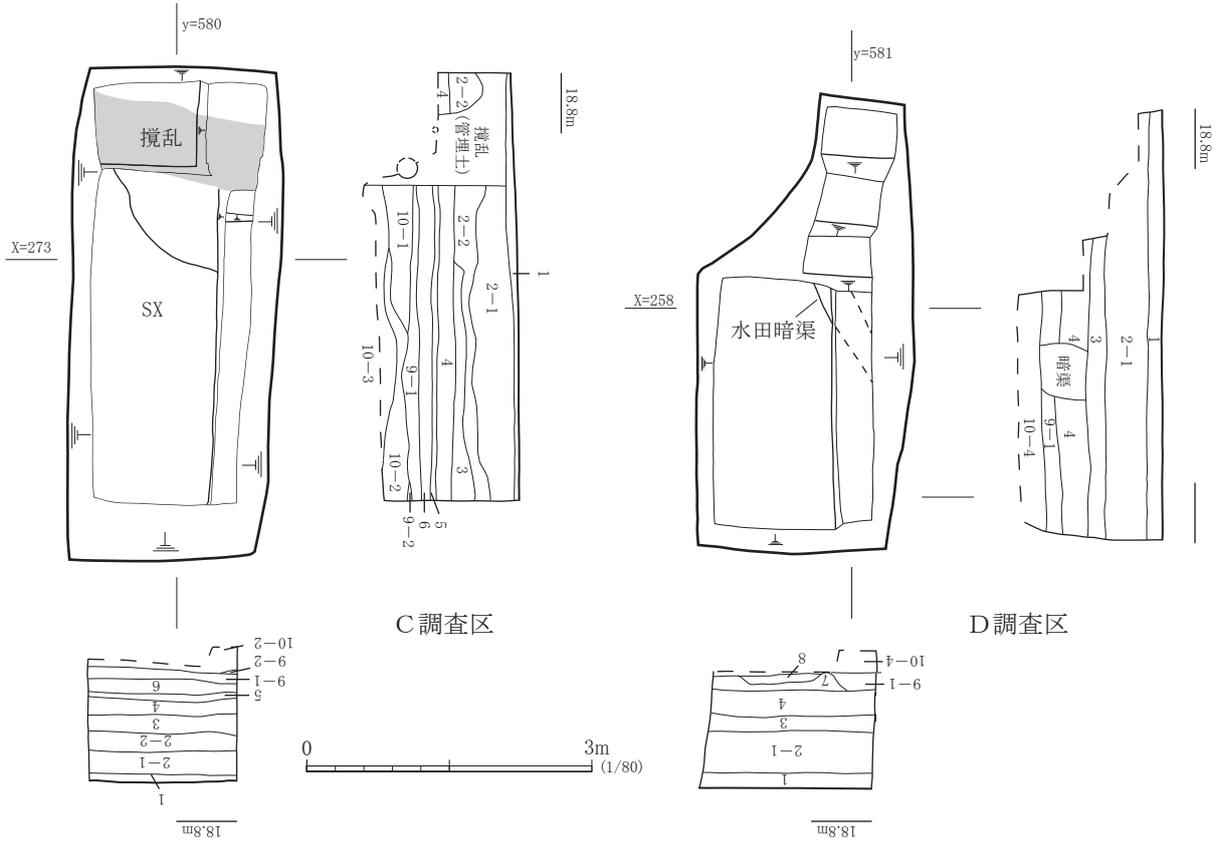


写真7 C調査区調査前全景(南から)



写真8 D調査区調査前全景(北から)

吉田構内(吉田遺跡)の調査



- | | |
|---|---|
| <p>1 表土 (マサ)</p> <p>2-1 造成土</p> <p>2-2 造成土 3主体</p> <p>3 旧耕地1 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト</p> <p>4 旧床土1 オリーブ灰色 (10Y4/1) シルト</p> <p>5 旧耕地2 灰色 (7.5Y4/1) シルト</p> <p>6 旧床土2 オリーブ灰色 (10Y4/2) シルト</p> <p>7 旧耕地もしくは旧床土 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト</p> | <p>8 旧耕地もしくは旧床土 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘土に7を縞状に含む</p> <p>9-1 落ち込み埋土 オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト</p> <p>9-2 落ち込み埋土 灰色 (5Y4/1) 細砂</p> <p>10-1 地山 黄色 (5Y7/6) 粘土</p> <p>10-2 地山 オリーブ黄色 (5Y6/4) 粘土</p> <p>10-3 地山 青灰色 (5BG6/1) 粗砂 1cm大の礫を含む</p> <p>10-4 地山 明青灰色 (5B7/1) シルト</p> |
|---|---|

図5 C・D調査区平面図・断面図



写真9 C調査区全景 (北西から)



写真10 D調査区全景 (北西から)

(3) 層位(図5、写真9・10)

基本層序は下記の通りである。

第1層 表土(マサ土)

第2層 造成土(

第3～8層 旧耕土及び床土

第9層 落ち込み埋土

第10層 地山(弥生時代以降の遺構面形成層)

C調査区では、第2層の下に第3層(旧耕土1)、第4層(旧床土1)、第5層(旧耕土2)、第6層(旧床土2)が連続して確認できたことら、統合移転前の水田面が2面存在したことが分かる。また、D調査区でも第4層の下に旧耕土もしくは旧床土と考えられる第7・8層が堆積しており、C調査区同様、水田面が2面存在したと考えられる。

第9-1層はC・D調査区全面で確認された。同層は水田の造成により削平を受けており、検出標高はC調査区が標高約17.3m、D調査区が約17.4mである。同層はD調査区から約50m南側に位置する資料館(東亜経済研究所)新営工事に伴う予備発掘調査区^{it.2}でも検出された落ち込みの埋土と考えられるが、今回肩部を確認することはできなかった。

C調査区では10-1～3層が堆積しており、D調査区では10-4層のみを確認した。C・D調査区とも検出標高は約17.2mである。いずれも縄文時代以前の河川堆積に由来する土層と考えられる。

(4) 遺構

D調査区で旧水田暗渠を検出した以外に遺構は検出していない。

(5) 遺物

D調査区の第4層中から時期不明の土器片1点、近世の磁器底部片1点が出土した。第9層は遺物包含層の可能性が考えられたため、慎重に精査したが遺物は出土しなかった。この他、D調査区の排土から貝殻1点と薄片1点が出土したが、どの層から出土したものか確認することができなかった。

(6) 小結

今回の予備発掘調査では、落ち込みの埋土と考えられる土層を検出したが、肩部を確認することができなかった。また埋土である第9層から遺物は出土しなかったため、調査区周辺において顕著な埋蔵文化財は存在しないと考えられる。

以上の調査結果を踏まえ、今後の掘削工事にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて、平成20年7月15日開催の埋蔵文化財資料館専門委員会(メール審議)で協議した結果、今回計画された掘削工事にあたっては立会調査で対応することとなった。

(7) 立会調査(写真11・12)

予備発掘調査の結果を受け、立会調査は平成21年1月23、24、31日、2月5日に行った。調査面積は約119㎡である。調査地点は予備発掘調査区に続く、E～Kの7地点である。

E地点は現地地表下約42cmまでが造成土であった。以下は河川堆積土と考えられる土層で、約42～97cmで灰色(10Y5/1)粗砂、約97～127cmで灰色(N4/0)シルトを検出した。F地点は現地地表下約49cmまでが造成土で、以下約49～58cmでオリーブ色(5Y5/4)シルト(旧水田床土)、約58～85cmでオリーブ色(5Y6/6)シルト(地山)を確認した。G地点は現地地表下約90cmまで掘削したが、全て造成土であった。H地点は現地地表下約28cmまでが表土・造成土で、以下約28～63cmで灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト(旧水田床土)、約63～72cmで灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト(旧水田耕土)、約72～82cmでオリーブ灰色(10Y6/



写真 11 E地点土層断面(南から)

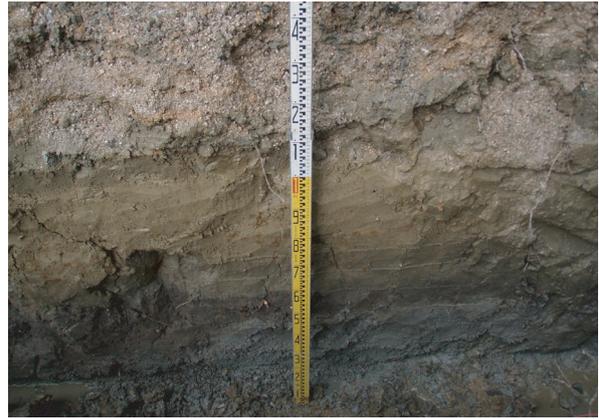


写真 12 H地点土層断面(南から)

2)シルト(旧水田床土)、約82～94cmで落ち込みの埋土と考えられる灰色(N4/0)シルト、約94～130cmで青灰色(5B6/1)シルト(地山)を確認した。I地点は現地表下約62cmまでが表土・造成土で、以下約62～74cmで暗緑灰色(10G4/1)シルト(旧水田耕土)、約74～94cmでオリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト(旧水田床土)、約94～106cmでオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト(旧水田耕土)、約106～119cmで落ち込み埋土と考えられる暗灰色(N3/0)シルト、約119～134cmで明緑灰色(10GY7/1)シルト(地山)を確認した。J地点は現地表下約60cmまでが造成土で、以下約60～78cmでオリーブ黄色(5Y6/3)シルト(旧水田床土)、約78～85cmで旧水田床土と暗灰色(N3/0)シルトのブロック土、約85～100cmで灰色(2.5GY6/1)シルト(旧水田床土)、約100～115cmで落ち込み埋土と考えられる暗灰色(N3/0)シルト、約115～130cmで明緑灰色(10GY7/1)シルト(地山)を確認した。K地点は現地表下約72cmまでが表土・造成土で、以下約72～110cmで灰オリーブ色(7.5Y5/2)シルト(地山)を確認した。以上の地点から遺物は出土しなかった。

調査の結果、E地点で河川堆積土を検出した。また、H、I、J地点では予備発掘調査でも検出した落ち込みの埋土と考えられる土層を検出した。経済学部研究棟の南側は旧地形が北から南へ傾斜して落ち込み、湿地になっていたと推測される。しかし、統合移転直前まで存在した水田の造成により埋土上部が削平されている上、遺物が出土しなかったため、埋没時期は不明である。今後は経済学部研究棟の周囲における落ち込みの範囲を確認するとともに、埋土を精査して、埋没時期等を明らかにする必要がある。

[註]

1)小野忠熙編(1976),山口大学吉田遺跡調査団(編)『吉田遺跡発掘調査概報』,山口

2)田畑直彦(2010)「第1章第2節6 資料館(東亜経済研究所)新営工事に伴う予備発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成18年度－』,山口

2. 新教育棟新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内M・N-11・12区

調査面積 約473㎡

調査期間 平成20年12月1～20日、
平成21年2月17～3月27日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯(図6、写真13・14)

吉田構内の大学会館の北側敷地において、新教育棟(O-HARA 山口大学 就職支援施設)新営工事が決定した。大学会館敷地では縄文～近世の遺物包含層や古墳時代～中世の井戸等が検出され、多数の遺物が出土している。また、分布調査においても遺物の散布が確認されていること^{註1}から、埋蔵文化財が存在することが^{註2}確認された。しかし、詳細な状況が不明であるため、埋蔵文化財資料館専門委員会の指示の下(発掘調査を要する工事計画として、平成20年9月26日埋蔵文化財資料館専門委員会承認)、埋蔵文化財資料館が予備発掘調査を行うこととなった。

調査はA～Dの4ヶ所の調査区を設けて行った。調査面積はA調査区約182.2㎡、B調査区約150㎡、C調査区約107㎡、D調査区約34㎡、合計約473㎡である。

(2) 調査の経過

調査開始直後から、各調査区では遺構・遺物が多数検出された。以上の結果を受けて平成20年12月10日に開催された埋蔵文化財資料館専門委員会で協議した結果、建設計画の大幅な変更が困難であるため、本発掘調査を行うことが決定された。また、担当部局の配慮により、埋蔵文化財の保護を図るべく敷地面積が縮小された。以上の決定を受け、この段階での記録作業は開発対象から外れたA・B調査区の東部のみに限定し、埋め戻した。その後、本発掘調査に併行し、平成21年2月17日～3月27日に埋め立て造成部分のA～D調査区西部を再度掘削し、記録作業を行った。なお、造成土の厚いA調査区西部は2段掘りを行ったが、それでも壁面が随所で著しく崩壊した。同じ場所を再掘削すると、さらに壁面の崩落が進行し、大学会館北側の擁壁が崩落する恐れが生じたため、調査区のとやや北

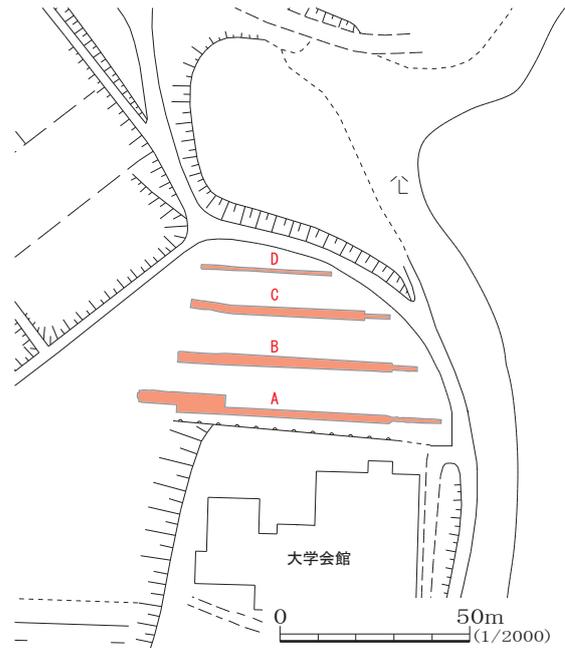


図6 調査区位置図



写真13 敷地東部調査前風景(北西から)



写真14 敷地西部調査前風景(北から)

吉田構内(吉田遺跡)の調査

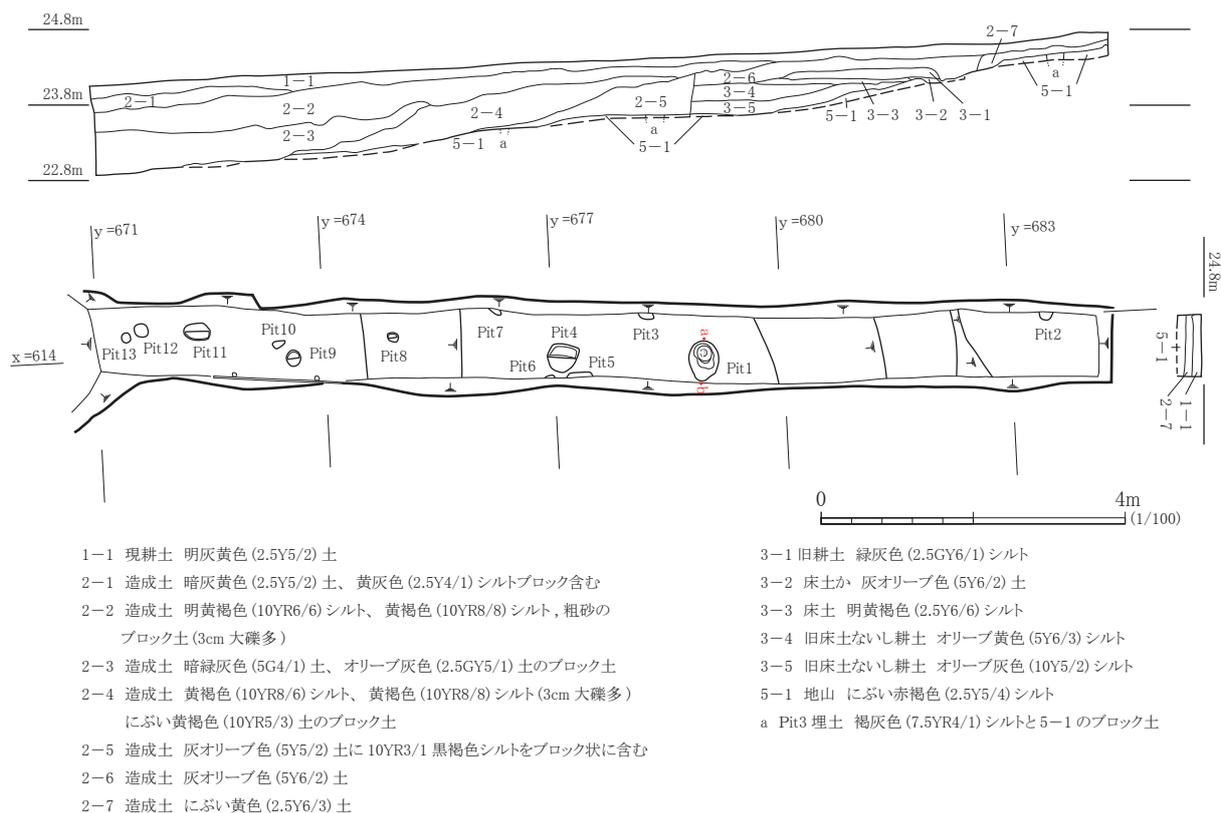


図7 A調査区東部平面図・断面図

側にあたる本発掘調査区の西壁延長部分を再掘削することとし、矢板を打って掘削・記録作業を行った。また、この際の調査では、地山までの掘削は一部にとどめた。以下の報告では本発掘調査区と重複する箇所については割愛し、同調査区と重複しない箇所について行う。

(3) 層位・遺構(図8~13、写真15~29)

基本層序は下記の通りである。

- 第1層 表土(現耕土)
- 第2層 造成土
- 第3層 旧耕土及び床土
- 第4層 遺物包含層(B調査区のみ)
- 第5層 地山(弥生時代以降)

予定地は姫山の支脈から張り出す洪積段丘の西側傾斜面に位置する。統合移転前までは棚田が存在し、統合移転後は造成され牧草地となっていたが、現地表面においても東部と西部で4mを超える高低差があった(A調査区東端:24.8m、同調査区西端:約20.2m)。なお、遺物包含層である谷の埋土はV層とし、層名は各調査区毎に付した。以後、詳細は各調査区ごとに述べる。

A調査区東部

調査区は東から西へ傾斜している。調査区東端の現地表面の標高は約24.8m、西端は約24.1mで、約0.7mの高低差がある。Y=679以西は大学会館新営に伴う発掘調査区と重複するため、第3層はY=679~682付近でのみ残存する。そのような状況ではあったが、調査区内において柱穴を13基検出した。Pit1は長径約54cm、短径約41cm、深さ約59cmを測る。柱抜き取り後に瓦質土器の鍋が破碎された状態で廃棄されていた。祭祀行為に伴うものであろう。遺構確認を目的とした調査であるため、その他の柱穴

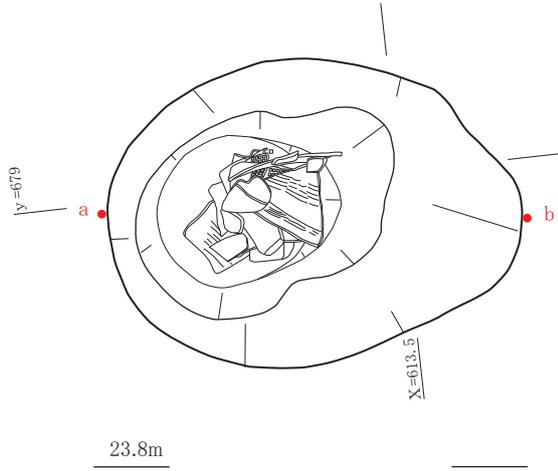


写真 15 A調査区Pit1土器出土状況1 (北西から)

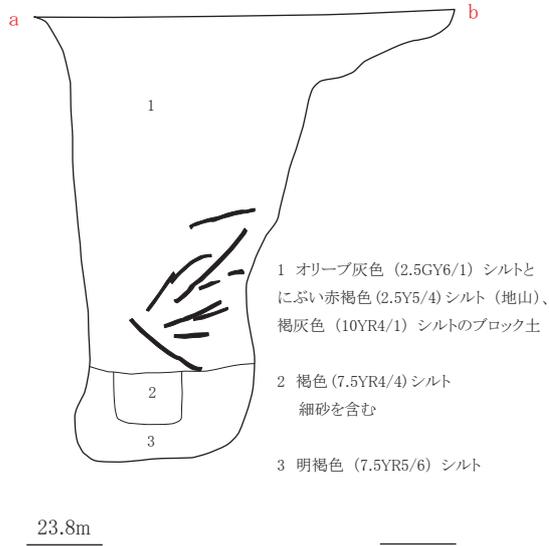


写真 16 A調査区Pit1土器出土状況2 (北西から)



写真 17 A調査区Pit1柱痕・掘方土層断面 (西から)



図 8 A調査区 Pit1 平面図・断面図

吉田構内(吉田遺跡)の調査

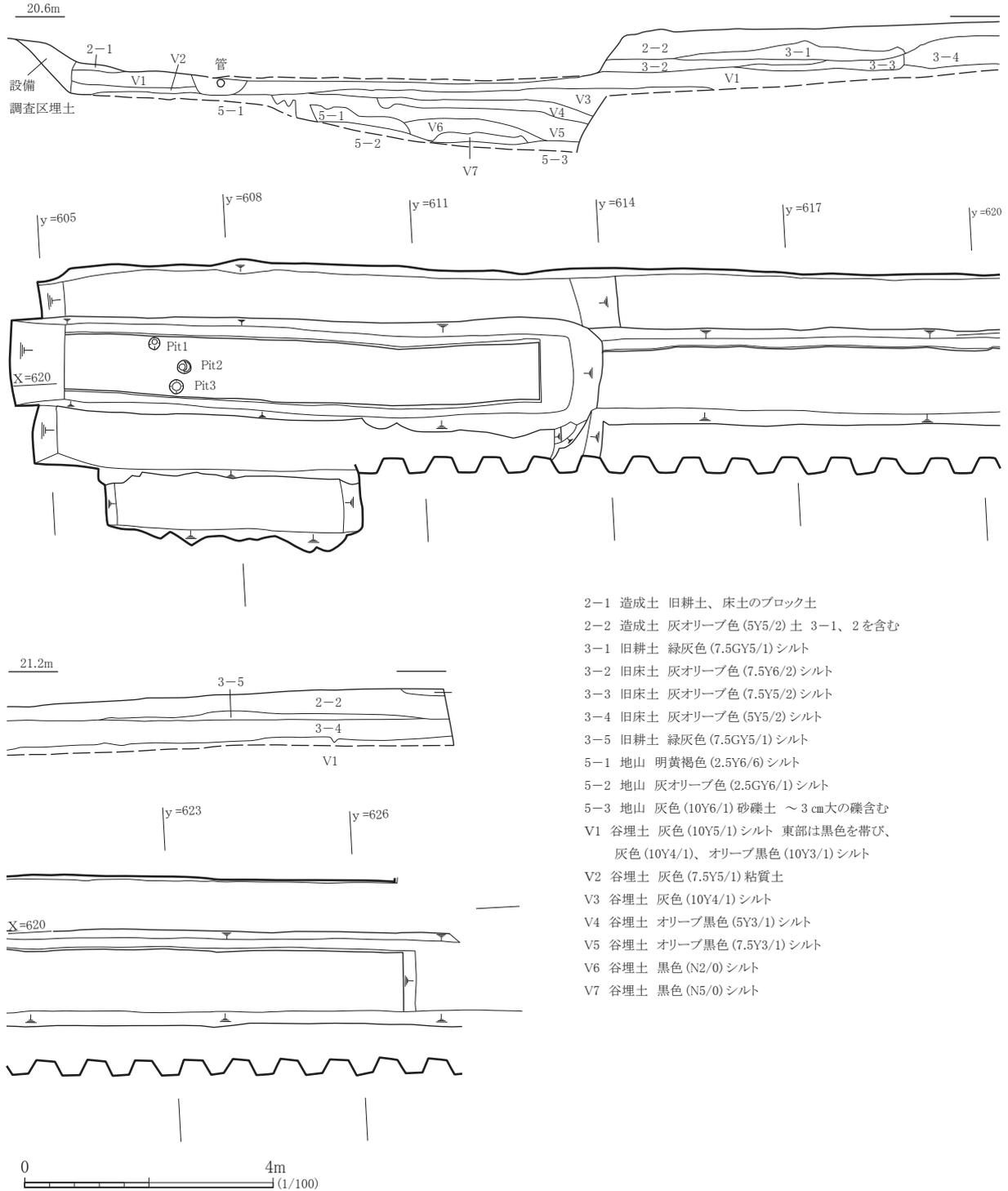


図9 A調査区西部平面図・断面図

は完掘していないが、大半が中世の柱穴と考えられる。

A調査区西部

調査区の全面が予定地の東部及び大学会館敷地から派生する谷の中に位置する。統合移転後の造成は盛土で行われたため、第3層は良好に遺存していた。第3層以下には谷埋土が堆積する。旧地形はY=608付近から緩やかに落ち込んでおり、Y=614付近において、谷埋土の層厚は約0.8mを測る。これより東側については掘削を上面にとどめたため、詳細は不明であるが、東側にかけてさらに落ち込

吉田構内(吉田遺跡)の調査

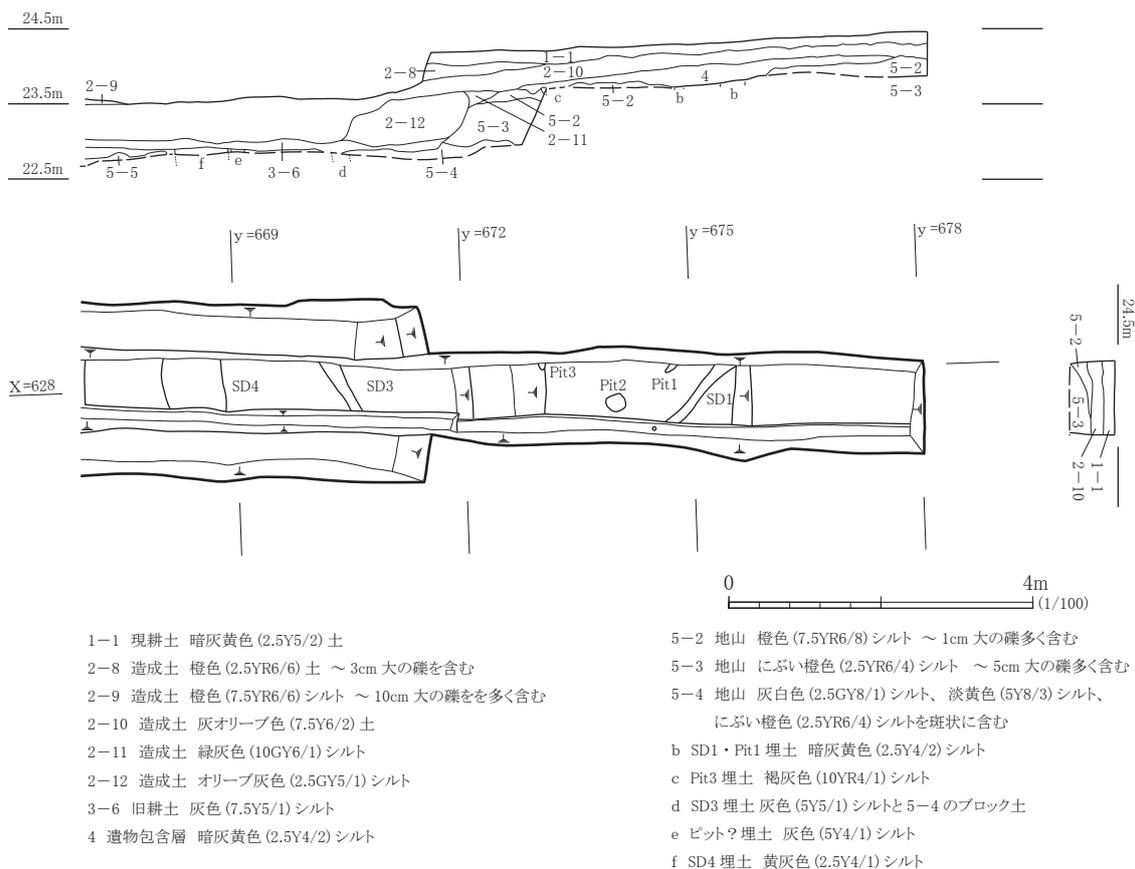


図 10 B調査区東部平面図・断面図

むものと推測される。谷埋土のうち、V-1層からは土師器坏、碗、白磁碗、青磁碗、青磁皿片等が出土した。一方、V-3~5層からは弥生土器壺・甕片、砥石が出土したほか、土層断面中に弥生土器の胴部片が含まれていることを確認した。以上から、谷の埋積が長期に渡って進行したことがうかがえるが、調査面積が狭小であるため、今後、周辺の調査による検討が必要である。遺構としては、調査区西端部で直径約20~22cm、深さ約2~10cmの柱穴を3基検出し、このうちPit3からは土師器小片が1点出土している。

B調査区東部

基本層序はA調査区東部と同じである。ただし、統合移転時の造成による削平のため、第3層はY=672以西でのみ残存していた。調査区内ではY=672付近で約0.7mの高低差を持つ段を確認した。1段低い西側で第3層が残存していることから、この段は棚田造成に伴うものと考えられる。また第4層は谷埋土の可能性はあるが、段に伴う削平により西部への連続性が確認できなかったため、遺物包含層として扱った。なお、同層は微細な土器片を含んでいることを確認したのみで、詳細な時期は不明である。調査区内では柱穴3基、溝4条を検出したが、掘削は行っていない。遺構のうち、SD3・4は水田暗渠である。

B調査区西部

第2層の直下には旧耕土(第3-1層)、旧床土(第3-2層)が残存していた。また第3-2層の直下にはV-1~4層が順次堆積していた。地山である第5-1層の検出標高は調査区東部で約20.0m、調査区西部で約19.3mであり、旧地形は東から西へ傾斜していることが確認できた。また、調査区西端部ではV-2層が西側に落ち込んでおり、調査区外にかけてさらに旧地形が落ち込むものと推測される。V-

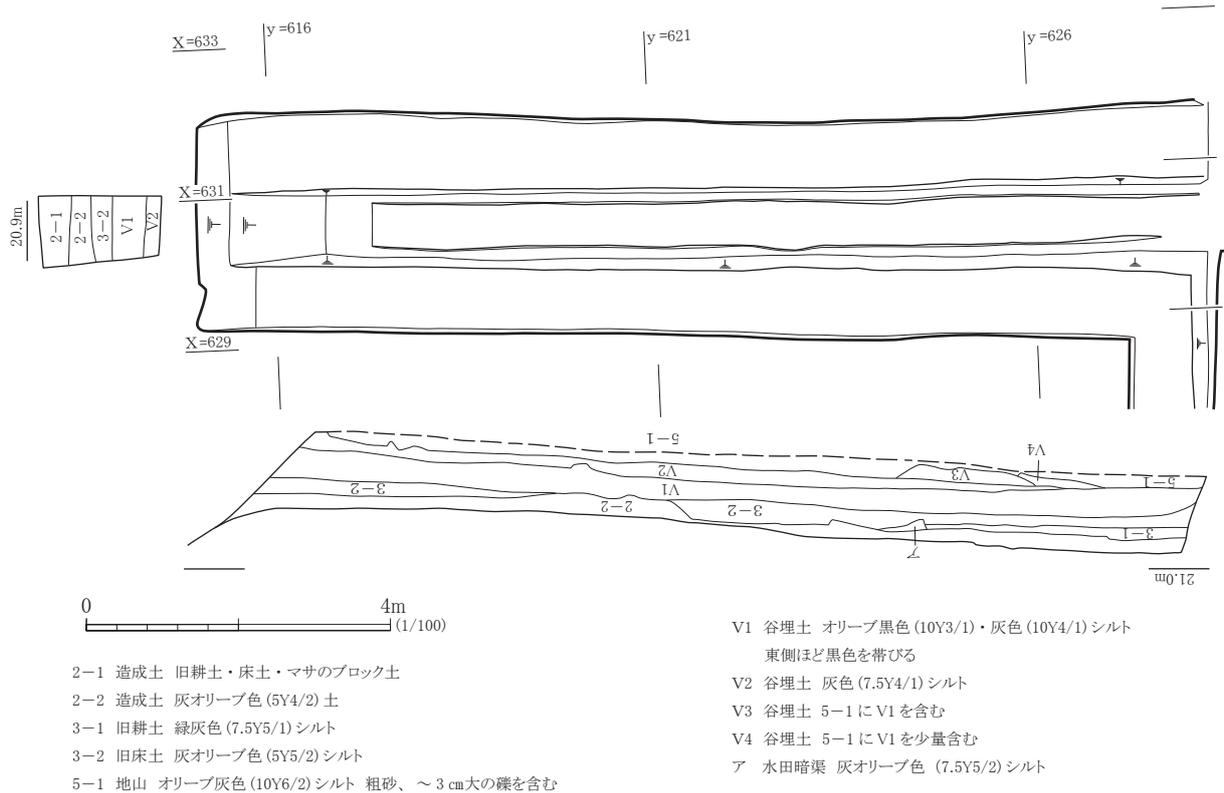


図 11 B調査区西部平面図・断面図

1層からは土師器、須恵器、青磁、瓦質土器片が出土している。

C調査区西部

統合移転時の削平が著しいため、第3層は調査区東端部で僅かに残存するに過ぎず、調査区の大半では第2・3層の直下で地山である第5-1・2層を検出した。調査区東部の第5-1層の検出標高は約20.7m、西部における第5-2層の検出標高は約20.3mである。第5-1層上で検出したのは攪乱のみであり、遺構は皆無であった。壁面及び床面清掃時に瓦質土器片が2点出土している。

D調査区西部

調査区東部では、第2層の下に第3層が残存していたが、調査区西部では統合移転時の削平により第3層は遺存していなかった。なお、V-1・2層については、本発掘調査時の所見から谷の埋積土と位置づけている。調査区東端部における第5-1層の検出標高は約22.2m、削平を受けていない西部における標高は約20.8mである。調査区東部では第5-3・5層上に層厚約5～20cmのV-1層が堆積していたが、Y=639付近からV-1層の直下にV-2層が堆積し、Y=638付近からは第5-3層が西側へ緩やかに落ち込んでいる状況を確認した。V-1層からは瓦質土器片、土師器片、V-2層からは青磁碗片が出土している。

遺構としては、柱穴14基、溝4条を検出した。また、V-1層上面でPit7を検出し、谷埋土上にも遺構が存在することを確認した。これらの遺構については掘削を行っておらず、SD1周辺の遺構検出時に須恵器坏蓋片が出土したに過ぎないため、詳細な時期は不明である。本発掘調査時の所見を参考にと、大半が中世の遺構である可能性が高い。

吉田構内(吉田遺跡)の調査

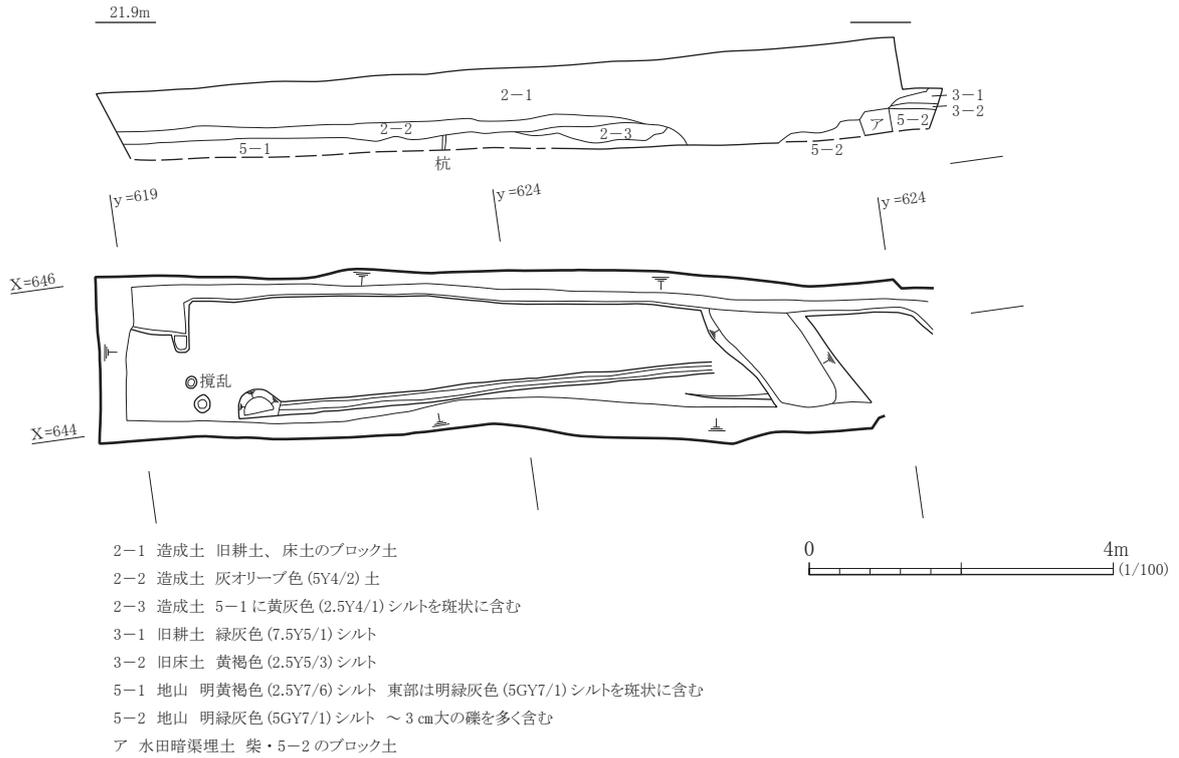


図12 C調査区西部平面図・断面図

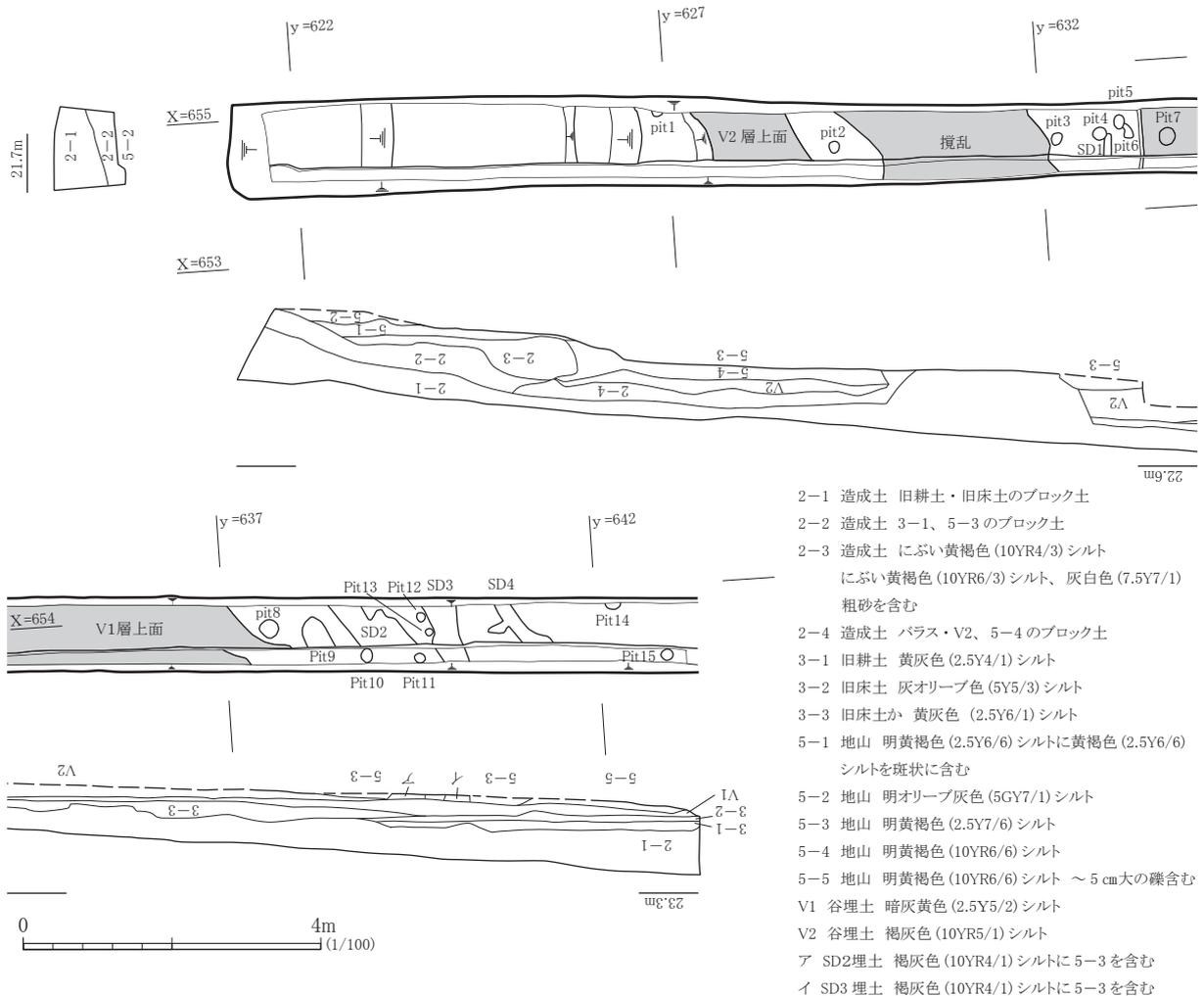


図13 D調査区西部平面図・断面図



写真18 A調査区全景（東から）



写真19 B調査区全景（東から）



写真20 C調査区全景（東から）



写真21 D調査区全景（東から）



写真22 A調査区東部北壁土層断面(南東から)



写真23 A調査区西部北壁土層断面(南東から)



写真24 A調査区西端部北壁土層断面(南西から)



写真25 B調査区東部全景(西から)



写真26 B調査区西部全景(北東から)



写真27 C調査区西部全景(南東から)



写真28 D調査区西部全景(東から)



写真29 D調査区SD1他検出状況(北から)

(4) 遺物(図14、写真30・31、表2、3)

A調査区出土遺物

1はPit1出土の瓦質土器鍋である。外面にはススが付着する。胴部上半にはタテハケ、胴部下半には格子目叩きを施す。一方胴部内面はヨコハケ、右上がりのハケを施す。口縁部形態が岩崎編年^{註4}のVIA古～新形式に近似していることから、16世紀後半に位置づけられる。2・3・17は谷埋土(V-3～5層)出土遺物。2は弥生時代中期の垂下口縁壺の口縁部である。口縁部に1条単位の山形文を施す。3は弥生時代後期後半～終末期の甕の底部である。外面に僅かにハケメを観察できるが、風化が激しい。17は砥石。上下端は欠損するが、4面を使用する。4～9は谷埋土(V-1層)出土遺物である。4は土師器甕の口縁部～胴部、5は土師器椀の底部である。6は土師器坏で底面は糸切りを施す。7は須恵器坏蓋である。8は同安窯系青磁碗の口縁部、9は同安窯系青磁皿の底部である。

B調査区出土遺物

10・11は谷埋土(V-1層)出土遺物。10は白磁碗の底部。外面は露胎であるが、内面全体に施釉し、見込みに1条の圏線を施す。11は瓦質土器の焙烙で、口縁部内面を肥厚させる。

D調査区出土遺物

12は谷埋土(V-2層)出土の龍泉窯系青磁碗の胴部片、13は谷埋土(V-1層)出土の瓦質土器足鍋の口縁部である。14は遺構検出時出土の須恵器坏蓋の天井部で、扁平な宝珠摘みを持つ。15、16は旧耕土・床土出土遺物。15は龍泉窯系青磁碗の口縁部、16は底部である。

(5) 小結

今回の予備発掘調査の結果、A調査区東部・B調査区東部、D調査区西部では柱穴・溝等の遺構を検出した。掘削を行った遺構はごく一部であるが、大半が中世の遺構と考えられる。一方、A調査区西部、B調査区西部、D調査区西部では谷埋土を検出した。谷埋土には弥生土器から16世紀後半の瓦質土器を含んでいたが、検出時・清掃時等の混入と思われるものを除き、近世以降の土器は含まれていなかった。一方、A調査区西部では谷埋土最下層から弥生土器のみが出土した。しかし、小面積の調査で土器の出土量も少ないため、現時点では、堆積開始時期に関する判断は差し控えたい。

以上、今回の予備発掘調査で新教育棟敷地及びその周辺には、濃密に埋蔵文化財が分布することが明らかとなった。

[註]

- 1) 河村吉行(1985)「第2章 吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口
- 2) 田畑直彦(2004)「付篇Ⅱ 吉田構内農学部附属農場の分布調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報XVI・XVII』,山口
- 3) 前掲註1参照
- 4) 岩崎仁志(2007)「山陽西部における中世の土製煮沸具—周防・長門を中心に—」『中近世土器の基礎研究21』,高槻(大阪)

吉田構内(吉田遺跡)の調査

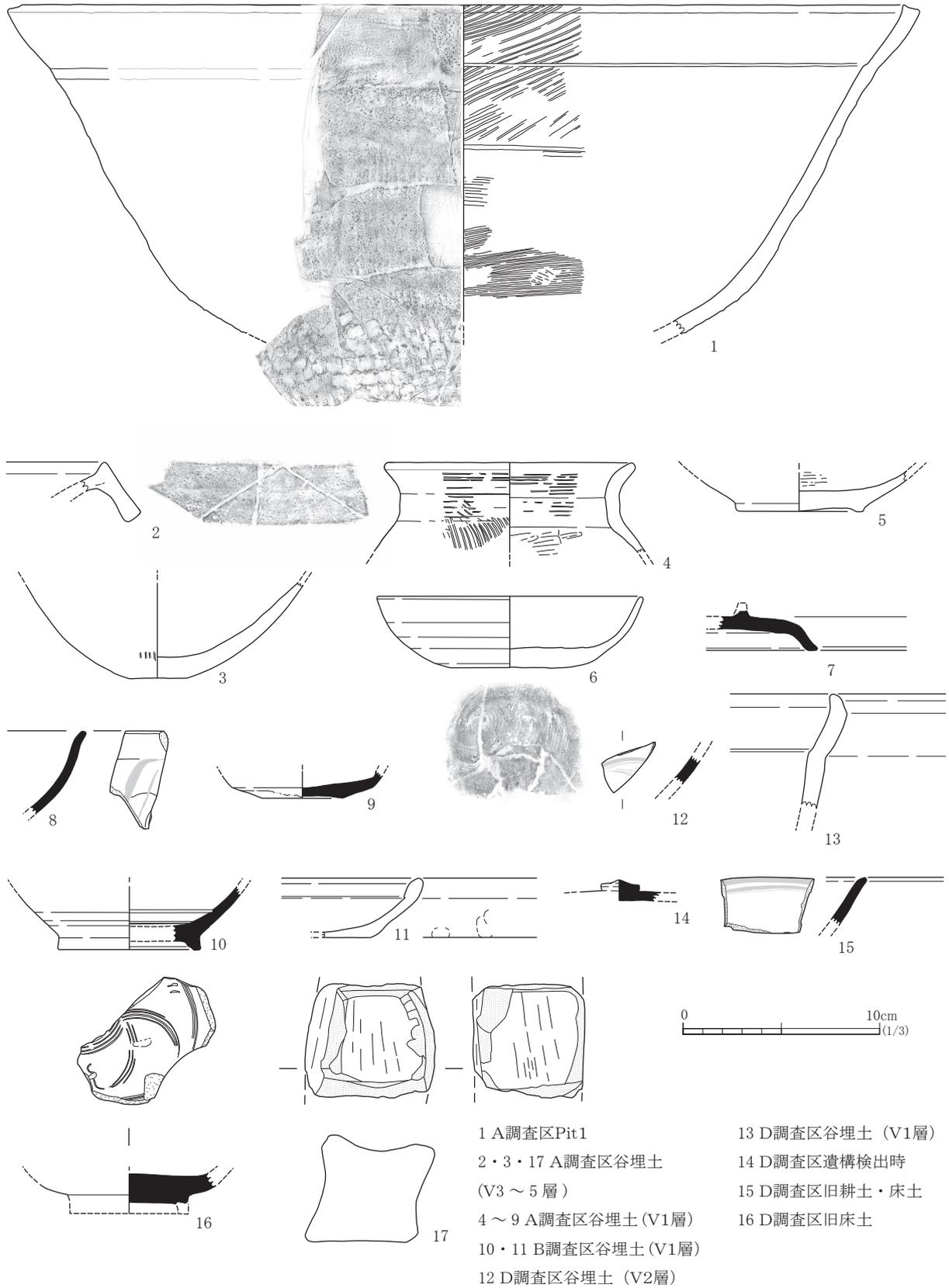


図14 出土遺物実測図

吉田構内(吉田遺跡)の調査



1-1

A調査区Pit1



1-2

A調査区Pit1



2

A調査区谷埋土 (V3~5層)



4-1

A調査区谷埋土 (V1層)



5-1

A調査区谷埋土 (V1層)



3

A調査区谷埋土 (V3~5層)



4-2

A調査区谷埋土 (V1層)



5-2

A調査区谷埋土 (V1層)



6-1

A調査区谷埋土 (V1層)



7-1

A調査区谷埋土 (V1層)



8-1

A調査区谷埋土 (V1層)



6-2

A調査区谷埋土 (V1層)



7-2

A調査区谷埋土 (V1層)

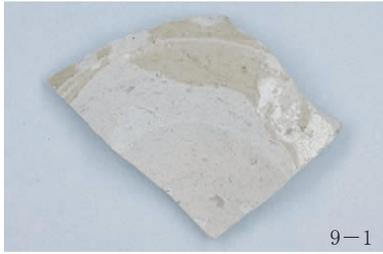


8-2

A調査区谷埋土 (V1層)

写真 30 出土遺物①

吉田構内(吉田遺跡)の調査



9-1

A調査区谷埋土 (V1層)



10-1

B調査区谷埋土 (V1層)



11-1

B調査区谷埋土 (V1層)



9-2

A調査区谷埋土 (V1層)



10-2

B調査区谷埋土 (V1層)



11-2

B調査区谷埋土 (V1層)



12-1

D調査区谷埋土 (V2層)



13

D調査区谷埋土 (V1層)



15-1

D調査区旧耕土・床土



12-2

D調査区谷埋土 (V2層)



14

D調査区遺構検出時



15-2

D調査区旧耕土・床土



16-1

D調査区旧床土



17-1



17-2



17-3



16-2

D調査区旧床土



17-4

A調査区谷埋土 (V3~5層)

写真 31 出土遺物②

表2 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	調査区	遺構	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
					①口径②底径③器高		①外面 ②内面			
1	A	Pit1	瓦質土器 鍋	口縁部 ~胴部	①(46.4)		①②灰色(N5/0)		0.1~4mmの砂粒を 多く含む	
2	A	谷埋土 (V3~5層)	弥生土器 壺	口縁部			①②にぶい黄橙色 (10YR6/3)		0.1~3mmの砂粒を 多く含む	
3	A	谷埋土 (V3~5層)	弥生土器 甕	底部	②2.8		①②浅黄色(2.5Y7/3)		0.1~3mmの砂粒を 多く含む	
4	A	谷埋土 (V1層)	土師器 甕	口縁部			①②にぶい黄橙色 (10YR6/4)		0.1~2mmの砂粒を 多く含む	
5	A	谷埋土 (V1層)	土師器 椀	底部	②6.6		①黄褐色(2.5Y5/3) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)		0.1~3mmの砂粒を 少量含む	
6	A	谷埋土 (V1層)	土師器 坏	口縁部 ~底部	①(13.5)②(6.0) ③(3.7)		①②浅黄色(2.5Y7/4)		0.1~4mmの砂粒を 多く含む	
7	A	谷埋土 (V1層)	須恵器 坏蓋	天井部			①②灰色(N6/0)		0.1~1mmの砂粒を 少量含む	
8	A	谷埋土 (V1層)	青磁 碗	口縁部			素地 灰白色(5Y7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y6/2)	精良		同安窯系
9	A	谷埋土 (V1層)	青磁 皿	底部	②(4.1)		素地 灰白色(5Y7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y6/2)	精良		同安窯系
10	B	谷埋土 (V1層)	白磁 碗	底部	②(7.2)		素地 灰白色(5Y7/2) 釉 灰オリーブ色(7.5Y6/3)	精良		
11	B	谷埋土 (V1層)	瓦質土器 焙烙	口縁部 ~底部	③2.9		①明褐灰色(7.5YR7/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)		0.1~3mmの砂粒を 少量含む	
12	D	谷埋土 (V2層)	青磁 碗	胴部			素地 灰白色(5Y8/2) 釉 灰オリーブ色(7.5Y6/2)	精良		
13	D	谷埋土 (V1層)	瓦質土器 足鍋	口縁部			①②灰色(5Y6/1)		0.1~3mmの砂粒を 多く含む	
14	D	遺構 検出時	須恵器 坏蓋	天井部			①②灰色(N5/0)		0.1~1mmの砂粒を 少量含む	
15	D	旧耕土・ 床土	青磁 碗	口縁部			素地 灰色(10Y6/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/3)	精良		龍泉窯系
16	D	旧床土	青磁 碗	底部			素地 灰色(10Y7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/2)	精良		龍泉窯系

表3 出土遺物(石器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	地区	遺構	器種	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
17	A	谷埋土 (V3~5層)	砥石	最大長5.8 最大幅6.6 最大厚5.4	310.6	砂岩	4面使用

3. 新教育棟設備関連工事に伴う本発掘調査

調査地区 吉田構内L-12～14区、M-12・13区

調査面積 約313m²

調査期間 平成20年12月24～平成21年2月16日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯(図15、写真32)

新教育棟新営工事に伴い、設備配管の新設工事が決定した。工事は本部2号館から新たに電気・給排水・ガス管を布設するほか、将来の施設整備に備えて正門方向へも配管工事を行うもので、総延長は約100mに及ぶ。また、B・C区周辺では正門等改修工事に伴い、道路新設に伴う掘削工事も計画された。

工事予定地及びその周辺では、これまでに吉田遺跡調査団による第I地区D区^{註1}の調査、当館による本部2号館新営に伴う発掘調査^{註2}、大学会館排水管布設に伴う発掘調査^{註3}、農学部附属農場E7圃場排水管布設に伴う立会調査^{註4}、本部裏給水管布設に伴う発掘調査^{註5}が行われており、多数の遺構・遺物が確認されていることから、ルート内における埋蔵文化財の存在が確実視された。このため、埋蔵文化財資料館専門委員会(平成20年9月26日・12月10日開催)の指示の下、当該工事に伴う本発掘調査を行うことになった。

(2) 調査の経過

調査区が長い為、調査区を南側からA区、B区、C区の3区に大別して報告を行う。機械掘削は12月24日にA区南端部から北へ向けて開始し、年末年始を挟んで1月5日に終了した。この際、A区で多数の柱穴、B区北端部からC区西部に至る広範囲で谷を検出し、埋土が遺物包含層であることを確認した。このため、谷の堆積状況を詳しく把握することを優先させることとし、以後の遺構検出から実測に至る作業はC区から南に向けて進めることとした。

1月は雪ないし小雨の降る日が多かったため、床面がしばしばぬかるみ、作業は難航したが、2月13日に遺構の掘削が終了した。また、2月15日には全ての実測作業が終了し、2月16日に調査区の埋め戻



図15 調査区位置図



写真32 調査前風景(南西から)

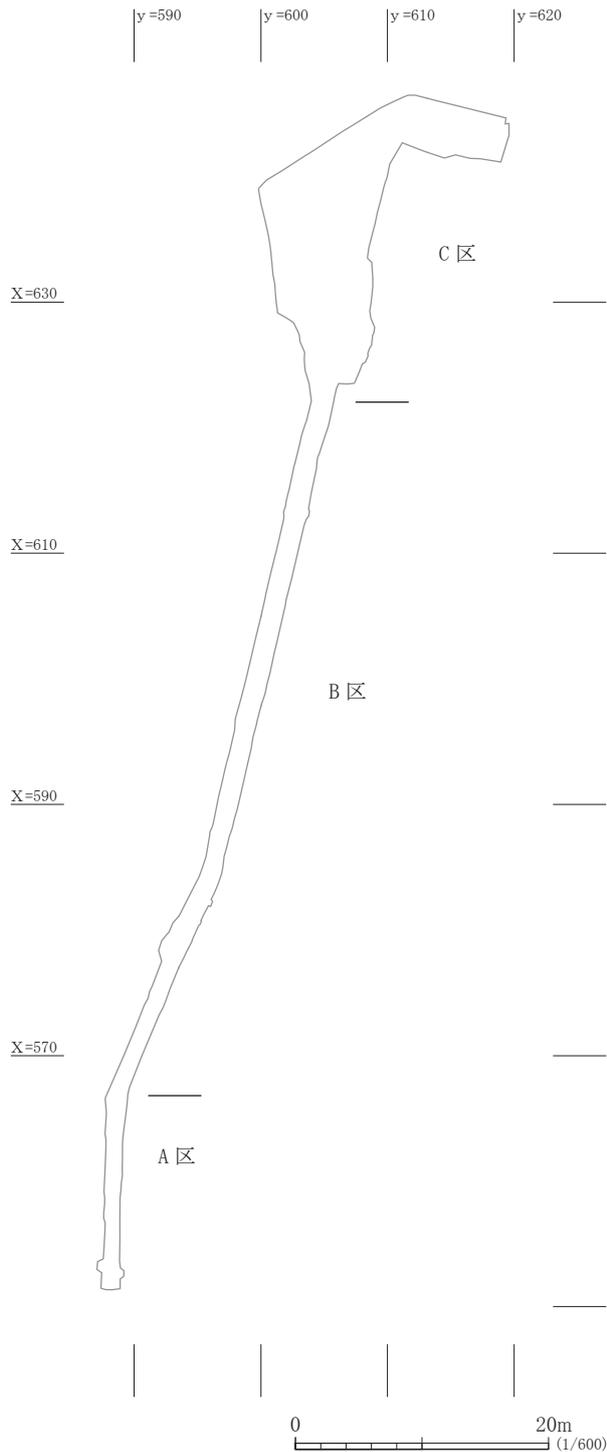


図 16 調査区設定図

し作業を行った。

(3) 層位・遺構(図17～24、写真33～54)

基本層序は下記の通りである。調査区で第4層は存在しないが、混乱を避けるため、層序は第2・4項で報告する新教育棟敷地の予備発掘調査・本発掘調査に準拠した。

第1層 統合移転後(近年)の造成土・耕土

第2層 統合移転時から本部2号館新営前後の造成土

第3層 旧耕土及び床土

第5層 地山(弥生時代以降の遺構面形成層)

調査区は本部2号館が建つ洪積段丘上から北側に向けて下降する低地にかけて位置する。地下の状況は各区により異なるため、以後、詳細は各区毎に述べる。

【A区】

本部2号館の北側に隣接する。統合移転前までは水田として利用されていたが、統合移転後は飼料園等に利用されていた。また、本部2号館新営後から順次埋め立てられ、駐車場として利用されていた。

調査区の南端部では攪乱により、第3層は残存していなかったが、これより南側では第2層の下で旧耕土である第3-1層、旧床土である第3-2層を検出した。また、X=559付近までは第3-1・2層の直下で第5-2・3層を検出し、これより南では部分的に第5-1層を検出した。第5層の検出標高は約20.8～20.9mである。

遺構は第5層上面で柱穴を54基、土壙を1基検出した。遺構は南部に集中しており、切り合いも顕著に認められた。

SK1(図17・写真34・35)

大学会館排水管布設に伴う調査ですすでに大半が調査されている。また、調査区外に広がるため、全体規模は不明である。埋土は第5-1層に黄灰色(10YR4/1)シルトを斑状に含む。最大幅は約104cm、遺構面からの深さは約12cmである。出土遺物はない。

柱穴群(図17・写真34～37)

Pit1～54を検出した。これらの柱穴の直径は約10～40cm、遺構面から底面までの深さは約3～40cmで、10cmを越えるものが主体である。埋土は黄灰色(10YR4/1)シルトに遺構面である第5層を部分的に

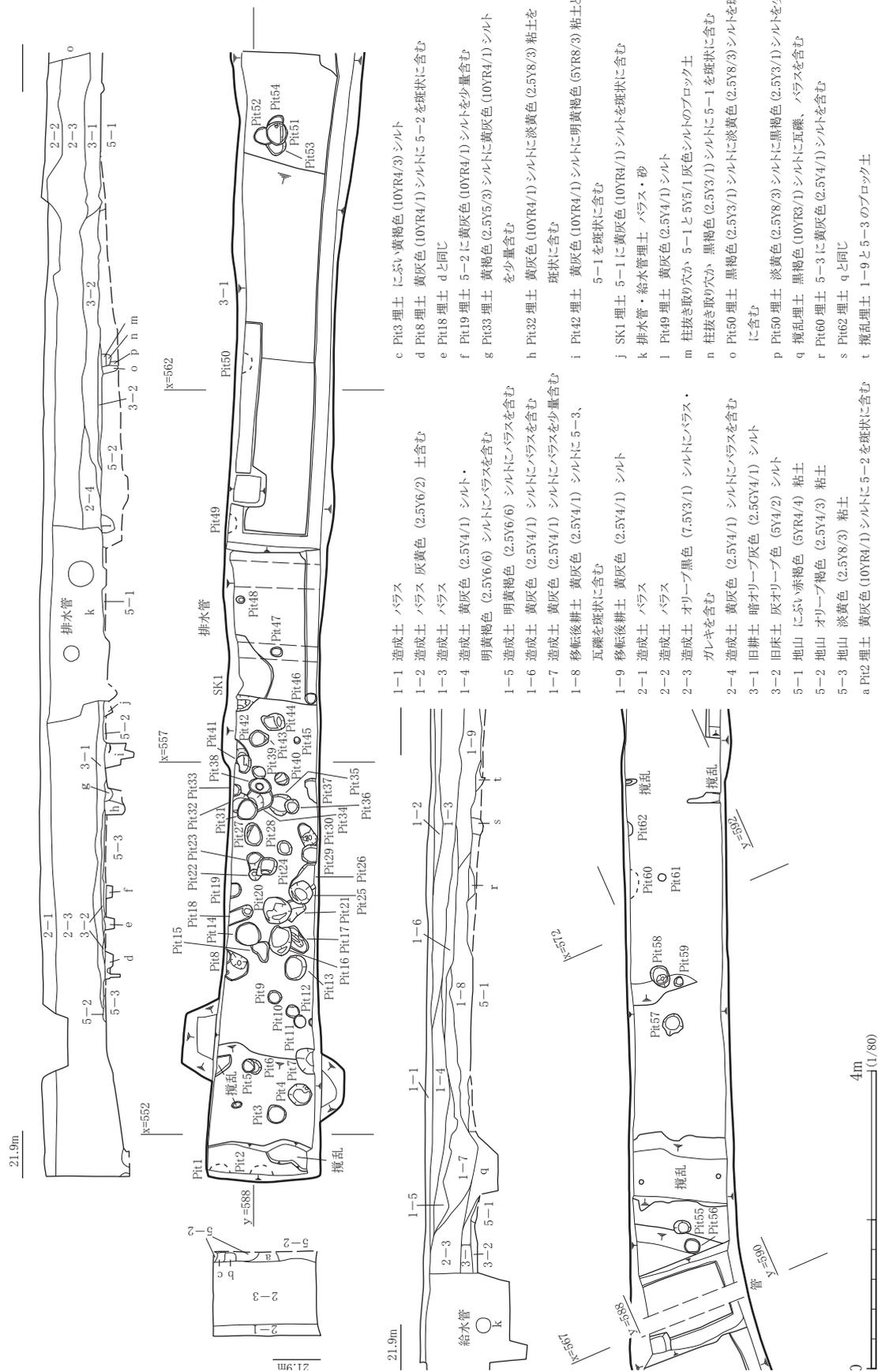


図 17 調査区平面図・断面図 1

交えるものが多い。また、Pit4、7、8、13、15、16、20、24～36、38～44、51、53から土師器片を主体として少量の須恵器、白磁、青磁、瓦質土器、陶器片が出土している。出土土器の主体は土師器皿片と考えられること、瓦質土器片が出土している柱穴(Pit16・25、26)も見られることから、14～16世紀代の柱穴が中心かと思われた。しかし、Pit25のように瓦質土器足鍋の脚部と近世以降の陶器片(土瓶)が出土している柱穴も存在する。また、出土土器がいずれも小片であることを考慮すると、これらの柱穴は14世紀から近世までの時期幅を持ってとらえざるを得ない。

【B区】

X=580以南はA区と同様、駐車場として利用されていたが、X=580以北は統合移転後、飼料園となり、近年は牧草地として利用されていた。現地表下から遺構面までの深さは浅い箇所では15cm前後である。また、第3層は部分的に残存するに過ぎず、北端部を除く大半の箇所では第1層の直下で第5層が検出された。以上から、統合移転後に大規模な削平を受けたと考えられる。遺構は第5層上面で溝7条、土壇2基、不明遺構1基、柱穴80基を検出した。なお、北端部で検出した谷については、C区と合わせて報告する。

溝(図18・20・21・写真38～41)

SD1～7を検出した。このうち、SD1～4・7は耕作溝で、中世以前の遺構と考えられるのはSD5・6である。SD5の最大幅は154cm、検出面からの深さは最深部で18cm、同溝底の標高は20.22mで、西一東の流路方向を持つ。出土遺物はない。SD6の最大幅は334cm、検出面からの深さは最深部で16cm、同溝底の標高は19.95mで、南東一北西方向の流路方向を持つ。断面形が緩やかであることから谷に伴う落ち込みの一部であった可能性もある。埋土は灰色(7.5Y4/1)シルトで、須恵器胴部片、スラグ片、土師器皿底部片が出土している。

土壇(図19・写真42・43)

SK2、3を検出した。SK2は直径約49cm、検出面からの深さ約10cmで、底面の標高は20.56m。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルトと第5～8層とのブロック土である。埋土からは近世の播鉢片、瓦質土器片が出土している。SK3は谷埋土下で検出した。幅約50cm、長さ約68cm、検出面からの深さ約8cm、底面の標高は20.01m。埋土は灰色(2.5Y4/1)シルトである。遺物は出土していない。

柱穴群(図18・20・写真38・39)

Pit55～134を検出した。直径約10～34cmで、検出面からの深さは10cm以下のものが主体である。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。なお、谷の中で検出した柱穴はすべて谷埋土除去後に検出したが、色調が谷埋土と近似していたため、谷埋土との前後関係を確認することができなかった。これらの柱穴は削平を受けていること、他遺構の状況から、大半は近世以降に所属する可能性が高い。

【C区】

B区同様、統合移転後は飼料園として利用されていた。調査区は道路新設工事に伴う掘削予定範囲にも対応したため、不整形を呈する。南部では第1層の直下で第3層を検出したが、東北部では第3層は残存せず、第1層の直下で第5層を検出しており、統合移転時の削平が顕著であったことがうかがえる。谷埋土はB区北端部のX=614からC区のX=640付近において第3層の直下で検出した。検出標高は

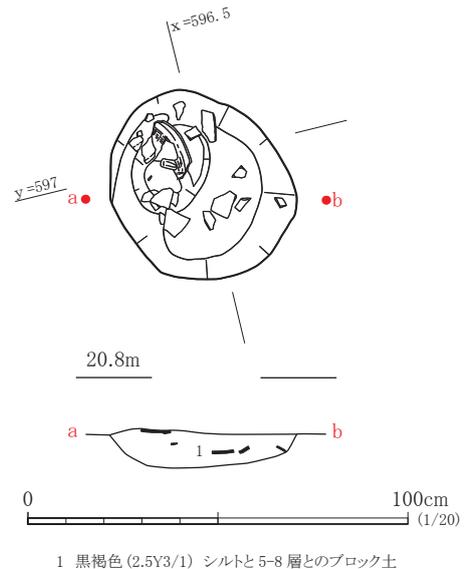
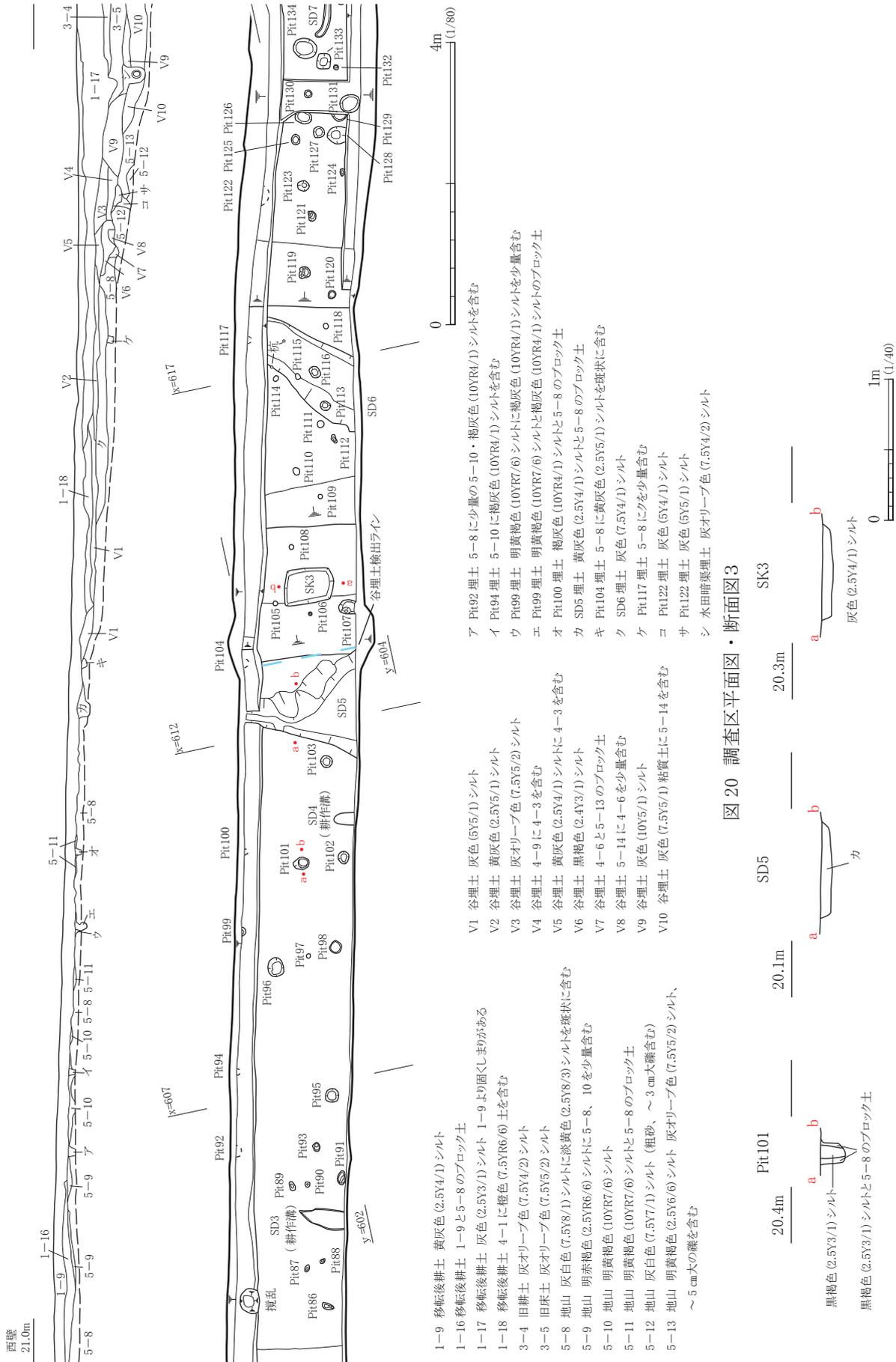


図19 SK2平面図・断面図



吉田構内(吉田遺跡)の調査

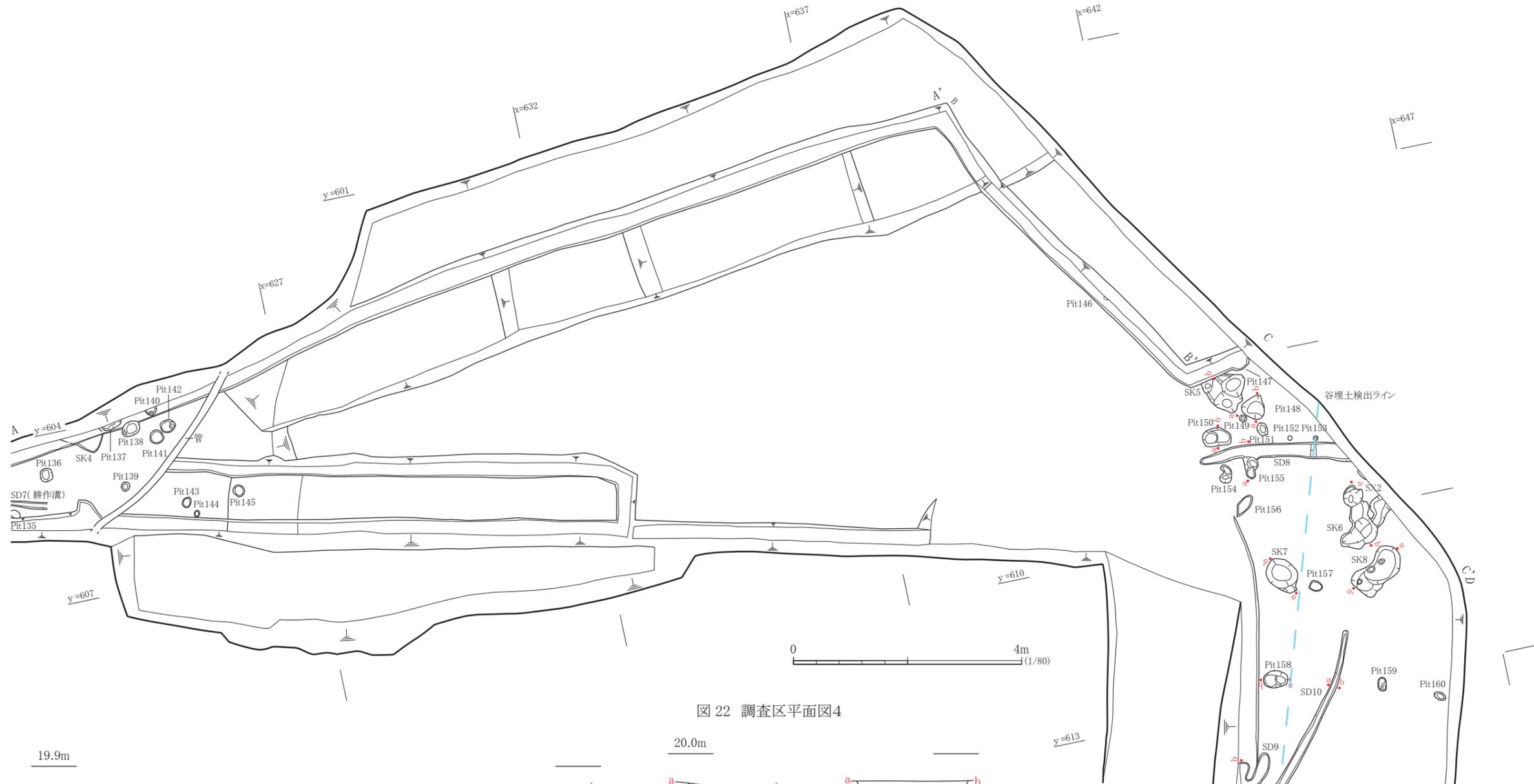


図 22 調査区平面図4

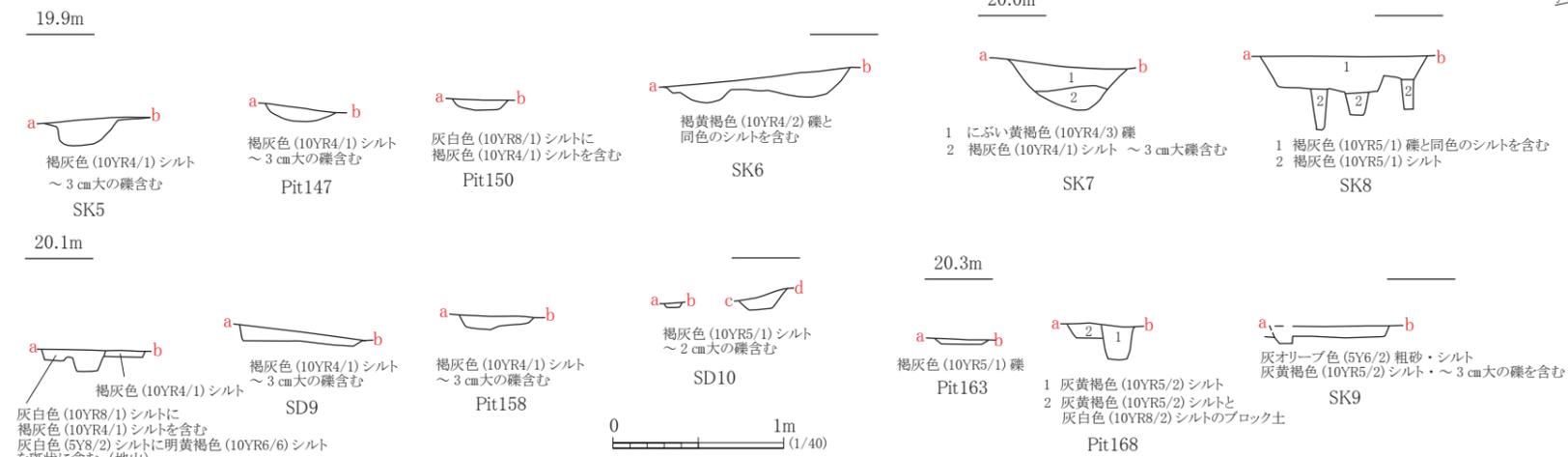


図 23 遺構断面図2

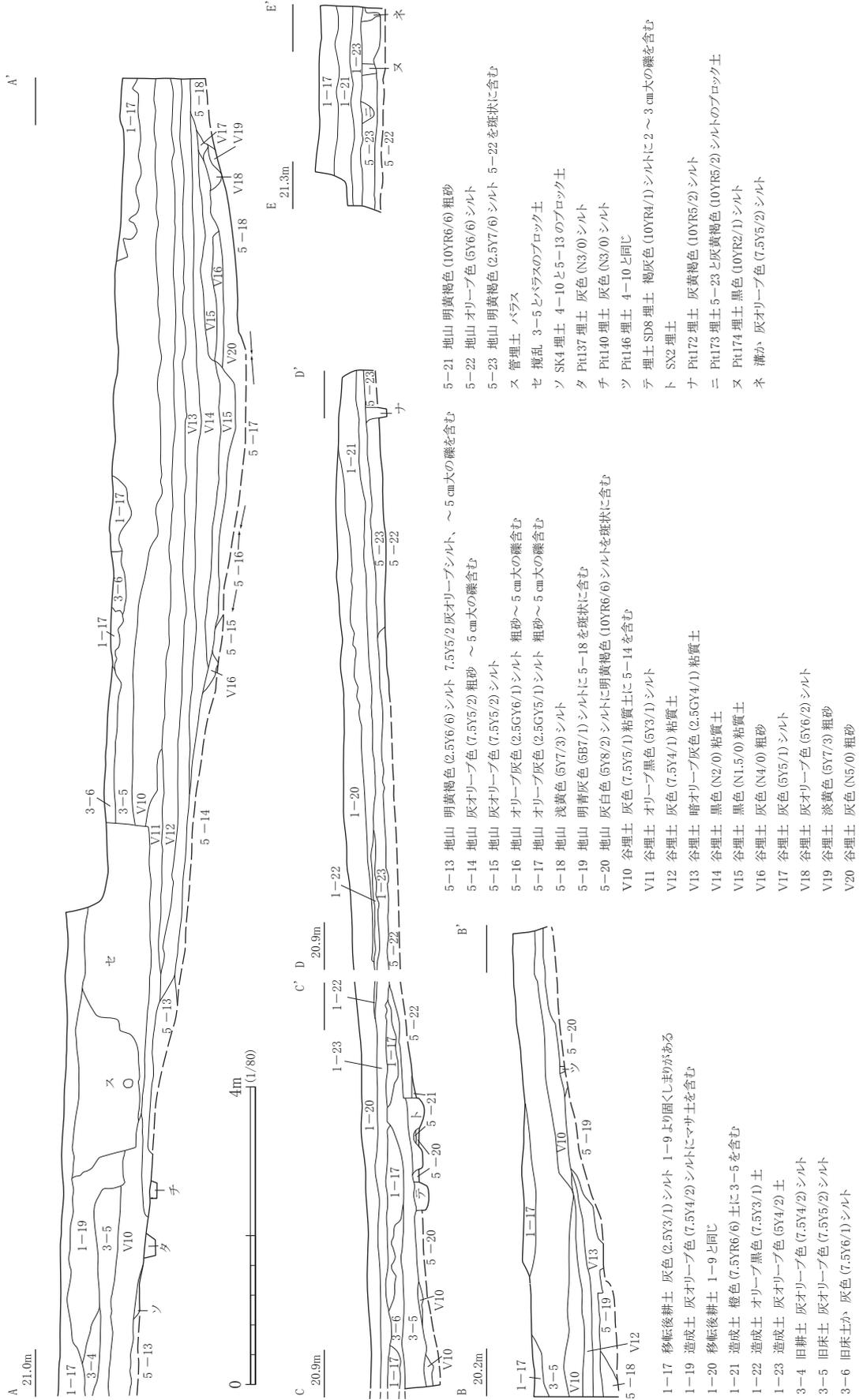


図 24 調査区断面図 4

X=614付近で約20.5m、X=640付近で約19.7mである。なお、道路新設工事の掘削深度が谷埋土上面付近にとどまることが判明したため、谷埋土の掘削は工事掘削深度の深い西壁沿いの配管ラインと東壁沿いの一部でのみ行った。弥生時代以降の遺構面である第5層の検出標高はX=614付近で約20.5m、X=365.6付近(谷最深部)で約18.0m、X=640付近で約19.6mである。谷埋土はV-10~20層に分層されるが、このうち、V-10・12~13層からは土師器(坏・椀)、須恵器、緑釉陶器、青磁、鉄釘、砥石が出土している。土器はいずれも小片であるが、瓦質土器を含まない。また、V-14・15層からは底面付近を中心として、古墳時代中期の土師器がまとまって出土している。以上から、古墳時代中期以後、中世にかけて谷の堆積が進行したと考えられる。

第5層上面で検出された遺構は溝6条、土壙6基、柱穴40基、不明遺構1基である。なお、北東部では、上層からの染みこみが顕著であったため、遺構面をやや掘り下げた状態で検出した。

溝(図22・23・写真48~50・54)

SD7~12を検出した。このうち、近~現代の耕作溝であるSD7・11・12以外の溝について報告する。SD8は検出長約2.6m、最大幅約30cm、検出面からの深さは最深部で約20cm、同底面の標高は19.5mである。底面レベルはほぼ平坦であるが、北-南方向の流路方向を持つと考えられる。土師器皿の底部小片が出土している。SD9・10は南東-北西方向の流路方向を持つ溝である。SD9は検出長約95cm、最大幅約70cm、検出面からの深さは最深部で約10cm、同底面の標高は19.6mである。須恵器甕の口縁部小片が出土している。SD10は検出長約4.2m、最大幅約24cm、検出面からの深さは最深部で約12cm、同底面の標高は19.79mである。土師器椀の高台部分の小片、須恵器小片が出土している。

SD8~10の時期は不明であるが、恐らく中世の遺構と考えられる。また、付近の柱穴の分布から掘立柱建物の区画溝であった可能性がある。

土壙(図22・23・写真48~53)

SK4~9を検出した。このうち、全形を検出できたのはSK5~8である。SK5は長軸84cm、短軸72cmで、検出面からの深さは15cm、底面の標高は19.26m。SK6は長軸106cm、短軸68cm、検出面からの深さは15cm、底面の標高は約19.5m。溝もしくは土壙と推測されるSX2を切り込んでいる。北側の柱穴状の落ち込みは別遺構の可能性はあるが、断面で識別できなかったため、同一遺構として扱った。SK7は長軸68cm、短軸48cm、検出面からの深さは30cm、底面の標高は19.45m。SK8は長軸96cm、短軸44cm、検出面からの深さは19cm、底面の標高は19.54m。なお、底面からは深さ13~24cmの位置まで杭が3本打ち込まれていた。

遺物は極めて少なく、SK5・7・8及び、SK6に切り込まれたSX2から土師器小片が少量出土しているに過ぎない。しかし、東北部で検出したSK5~9については溝と埋土が近似することから、中世の遺構である可能性が高い。

柱穴群(図22・写真48~50・54)

Pit135~174を検出した。直径約12~42cm、検出面からの深さは4~28cmで、10cmを越えるものが多い。なお、谷の中で検出した柱穴は谷埋土除去後に検出したが、B区同様、埋土が近似していたため、谷埋土との前後関係を確認できなかった。

Pit159~162はその位置関係から、掘立柱建物の一部である可能性が考えられる。なお、Pit143から近世の磁器口縁部小片、Pit144から土師器微細片が出土しているほかは、遺物は出土していない。恐らく中~近世の柱穴が主体と推測される。



写真33 調査区全景(南西から)



写真34 A区遺構検出状況(南から)



写真35 A区西壁土層断面(南東から)



写真36 A区柱穴半裁状況(東から)



写真37 A区Pit42土器出土状況(東から)



写真38 B区SK2付近遺構検出状況(南東から)



写真39 B区SK2付近遺構完掘状況(南東から)



写真40 B区北端部西壁土層断面(南東から)



写真41 B区SD5土層断面(東から)



写真42 B区SK2土層断面(東から)



写真43 B区SK3土層断面(北から)



写真44 C区調査風景(南東から)



写真45 C区西壁土層断面(南東から)



写真46 C区北東部(南西から)



写真47 C区西端部北壁土層断面(南から)



写真48 C区北東部遺構検出状況(東から)



写真49 C区北東部遺構完掘状況(東から)



写真50 C区SD8他土層断面(北から)



写真51 C区SK6土層断面(南から)



写真52 C区SK7土層断面(北から)



写真53 C区SK8土層断面(南西から)



写真54 C区SD9・10完掘状況(南西から)

(4) 遺物(図25、写真55～57、表4・5)

調査区からは土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入磁器(白磁、青磁)、近世国産陶器、砥石、鉄釘等が出土している。遺構出土遺物は少なく、谷埋土出土遺物が大半を占める。以下、主要な遺物について報告する。

遺構出土遺物

1はA区Pit24出土の土師器皿で、底面に糸切り痕を持つ。2、3はA区Pit25出土土器である。2は瓦質土器足鍋の脚部。3は近世国産陶器の土瓶口縁部で、内外面に透明釉を施釉する。Pit25からは他に土師器、須恵器の小片が出土している。4は口禿の白磁碗口縁部である。5はPit42出土の土師器皿で、底面に糸切り痕を持つ。6はSK2出土の近世の国産(須佐唐津系か)陶器播鉢である。口縁部を折り曲げて肥厚させる。内面には4条単位の卸目が密に施される。これに類似した播鉢はメディア基盤センター敷地(旧教養部複合棟)第1号井戸からも出土している。SK2からは他に佐野焼の甕と推測される瓦質土器片も出土しているが、いずれも小片で図化できない。7はSD6出土の土師器皿の底部である。風化が激しく調整は不明。

谷埋土出土遺物

8～14はV-14・15層出土の土師器である。8は壺の口縁部で口縁部外面にタテミガキ、内面にヨコナデを施す。また、接合面で剥離している。9は壺の口縁～胴部で、口縁部内外面にヨコナデ、胴部内面にケズリを施す。10は小型丸底壺の胴部～底部で、胴部内面にケズリを施す。11は甕の口縁部。口縁部内外面にヨコナデを施す。胴部の調整は摩滅により不明。12～14は高杯の坏部である。内外面に左上がりのハケを施した後にヨコナデを施し、口縁部を折り曲げによって外反させる。12は坏部が直線的に外反し、13は緩やかに外反する。14は坏部下半のみの破片で、脚部との接合面で剥離している。以上の土師器は古墳時代中期(5世紀)頃に比定でき、時期的なまとまりを持つことから、谷埋没の開始時期を示す土器と位置づけられよう。

15～21はV-13層出土土器である。15は弥生時代後期後半～終末期の複合口縁壺の頸部で1条の貼付突帯を持つ。他の土師器と比較して摩滅が目立つことから、混入したものと考えられる。16は古代の土師器甕の口縁部である。17は須恵器甕の胴部である。外面にタタキ、内面にヨコナデを施す。18～20は土師器椀底部である。18は底部がやや外面に張り出し、底面に縦方向の板ナデを施す。19、20は高台を持つ。21は緑釉陶器の底部で、内外面に施釉する。見込みには沈線を1条施し、トチンの痕跡が残る。30はV-13層出土の砥石である。4面を使用し、先端には研磨による線条痕が顕著に残る。石質は片岩である。

22、23はV-12層出土土器で、高台を持つ土師器椀の底部である。23は外面にヨコミガキを施す。

24～27はV-10・12層出土土器である。24・25は高台を持つ土師器椀の底部。26は緑釉陶器で、内外面に施釉する。高台が剥離しており、風化が激しい。27は龍泉窯系青磁碗の胴部片である。31はV-10・12層出土の鉄釘である。錆が顕著で上部を欠損する。

V-10・12、13層出土土器には瓦質土器が含まれていないことから、V-10層までは瓦質土器が出現するとされる13世紀前半以前に堆積した可能性がある^{註8}。ただし、時期の判別が困難な土師器小片も見られるため断定はできない。詳細は周辺の調査を含め、今後の検討が必要であろう。

調査区壁面清掃時出土遺物

28は土師器椀の底部である。29は龍泉窯系青磁碗の底部で、見込みに1条の沈線を施す。

吉田構内(吉田遺跡)の調査

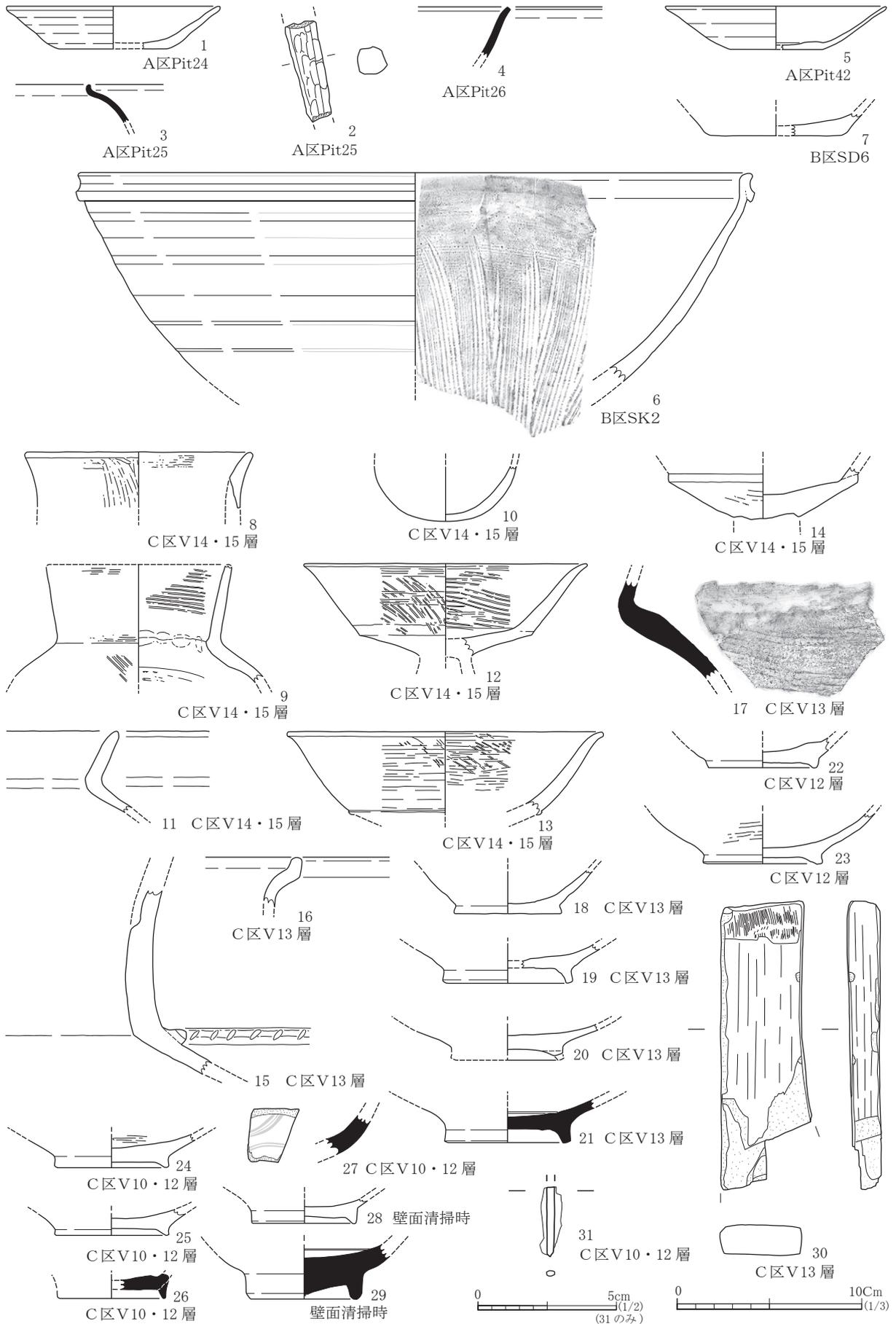


図25 出土遺物実測図

吉田構内(吉田遺跡)の調査



1
A区Pit24



3-1
A区Pit25



4-1
A区Pit26



2
A区Pit25



3-2
A区Pit25



4-2
A区Pit26



6-1
B区SK2



6-2
B区SK2



5
A区Pit42



8
C区V-14・15層



9-1
C区V-14・15層



7
C区SD6



10
C区V-14・15層



9-2
C区V-14・15層

写真 55 出土遺物①

吉田構内(吉田遺跡)の調査



11

C区V-14・15層



13

C区V-14・15層



17-1

C区V-14・15層



12

C区V-14・15層



14

C区V-14・15層



17-2

C区V-13層



15

C区V-13層



18

C区V-13層



20

C区V-13層



16

C区V-13層



19

C区V-13層



22

C区V-13層



21-1

C区V-13層



23-1

C区V-12層



24

C区V-10・12層



21-2

C区V-13層



23-2

C区V-12層



25

C区V-10・12層

写真 56 出土遺物②

吉田構内(吉田遺跡)の調査



C区V-10・12層



C区V-10・12層



C区壁面清掃時



C区V-10・12層



C区V-10・12層



C区V-10・12層



C区壁面清掃時



C区壁面清掃時



30-1



30-2



C区V-13層

写真 57 出土遺物③

表4 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	地区	遺構	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
					①口径②底径③器高	①外面 ②内面				
1	A	Pit24	土師器 皿	口縁部 ～底部	①(11.6)②(5.8) ③2.3		①②灰白色(2.5Y8/2)	0.1～1mmの砂粒を 含む		
2	A	Pit25	瓦質土器 足鍋	脚部			①灰白色(2.5Y8/1)	0.1～1mmの砂粒を 含む		
3	A	Pit25	陶器 土瓶	口縁部			素地 灰白色(5Y8/2) 釉 灰白色(5Y8/2)	精良		
4	A	Pit26	白磁 碗	口縁部			素地 灰白色(2.5GY7/1) 釉 明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	精良		
5	A	Pit42	土師器 皿	口縁部 ～底部	①(6.0)②(5.0) ③3.3		①②淡黄色(2.5Y8/3)	0.1～1mmの砂粒を 少量含む		
6	B	SK2	陶器 播鉢	口縁部 ～胴部	①(36.6)		素地 にぶい橙色(7.5YR7/3) 釉 灰褐色(7.5YR4/2)	0.1～3mmの砂粒を 少量含む		
7	B	SD6	土師器 皿	底部	②(7.8)		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	0.1～3mmの砂粒を 含む		
8	C	V14・15 層	土師器 壺	口縁部	①(12.4)		①②暗灰黄色(2.5Y5/2)	0.1～1mmの砂粒を 含む		
9	C	V14・15 層	土師器 壺	頸部～ 胴部			①暗灰黄色(5YR6/6) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	0.1～3mmの砂粒を 多く含む		
10	C	V14・15 層	土師器 壺	胴部～ 底部			①橙色(2.5Y5/2) ②にぶい黄褐色(10YR6/3)	0.1～2mmの砂粒を 多く含む		
11	C	V14・15 層	土師器 甕	口縁部			①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)	0.1～3mmの砂粒を 多く含む		
12	C	V14・15 層	土師器 高坏	坏部	①(15.4)		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1～3mmの砂粒を 含む		
13	C	V14・15 層	土師器 高坏	坏部	②(17.1)		①浅黄色(2.5YR7/3) ②灰白色(2.5Y8/3)	0.1～3mmの砂粒を 多く含む		
14	C	V14・15 層	土師器 高坏	坏部			①灰黄褐色(10YR5/2) ②灰黄褐色(10YR4/2)	0.1～4mmの砂粒を 少量含む		
15	C	V13層	弥生土器 壺	頸部			①にぶい黄褐色(10YR7/4) ②にぶい橙色(2.5YR7/4)	0.1～3mmの砂粒を 多く含む		
16	C	V13層	土師器 甕	口縁部			①②浅黄褐色(10YR8/4)	0.1～3mmの砂粒を 含む		
17	C	V13層	須恵器 甕	頸部～ 胴部			①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	0.1～2mmの砂粒を 含む		
18	C	V13層	土師器 椀	底部	②5.8		①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②灰オリーブ色(5Y6/2)	0.1～3mmの砂粒を 含む		
19	C	V13層	土師器 椀	底部	②(7.0)		①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②褐灰色(10YR6/1)	0.1～3mmの砂粒を 含む		
20	C	V13層	土師器 椀	底部			①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②灰白色(2.5Y8/2)	0.1～3mmの砂粒を 含む		
21	C	V13層	緑釉陶器 椀	底部	②6.8		素地 灰白色(5Y8/1) 釉 暗緑色	精良		
22	C	V12層	土師器 椀	底部	②5.8		①淡黄色(2.5Y8/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/4)	0.1～2mmの砂粒を 含む		
23	C	V12層	土師器 椀	底部	②6.4		①淡黄色(2.5Y7/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.1～2mmの砂粒を 含む		
24	C	V10・12 層	土師器 椀	底部	②6.2		①②灰白色(10YR8/2)	0.1～3mmの砂粒を 含む		
25	C	V10・12 層	土師器 椀	底部	②6.2		①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②明褐色(7.5YR5/6)	0.1～2mmの砂粒を 含む		
26	C	V10・12 層	緑釉陶器 椀	底部			素地 淡黄色(2.5y8/3) 釉 淡緑色	0.1～0.5mmの砂粒を 少量含む		
27	C	V10・12 層	青磁 碗	胴部			素地 灰色(N7/0) 釉 オリーブ灰色(10Y4/2)	精良	龍泉窯系	
28	C	壁面 清掃時	土師器 椀	底部	②5.7		①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1～1mmの砂粒を 含む		
29	C	壁面 清掃時	青磁 碗	底部	②(6.3)		素地 灰白色(5Y7/1) 釉 オリーブ灰色(10Y5/2)	精良	龍泉窯系	

表5 出土遺物(石器・鉄器)観察表

遺物 番号	地区	遺構	器種	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
30	C	V13層	砥石	最大長15.8 最大幅5.0 最大厚1.8	265.3	片岩	4面使用
31	C	V10・12層	釘	最大長2.5 最大幅0.3 最大厚0.2	1.6	鉄	一部欠損

(5) 小結

今回の調査において、A区では中世～近世の柱穴を多数検出した。A区の状況から、調査区に隣接する駐車場では遺構が濃密に分布していることが予測されるため、今後の開発行為にあたっては、埋蔵文化財の保護に注意が必要である。

B区では北端部を除き、統合移転時に大規模な削平を受けていることが判明した。検出した遺構の大半は近世以降のもと考えられる。また、B区の状況から、B区西部に隣接する空地も一定程度の削平を受けている可能性が高い。

B区北端部からC区にかけては谷を検出した。谷は^{註9} 大学会館敷地・第2・4項で報告する新教育棟敷地から連なるもので、調査区西側へさらに広がっていることを確認できた。谷埋土のV-14・15層からは古墳時代中期の土師器がまとまって出土していることから、谷の埋没は古墳時代中期に始まると考えられる。一方、谷埋土の上部は一定の削平を受けていると考えられるため、埋没完了時期は不明である。ただし、V-13層～V-10層までの出土土器には瓦質土器が含まれていなかったことから、V-10層までは^{註10} 13世紀前半以前に堆積した可能性が考えられる。

C区東北部においては溝、土壇、柱穴を検出した。これらの遺構は中世に属すると考えられるが、出土土器が少量であるため、詳細な時期、遺構の性格は不明である。今後周辺の調査を踏まえた検討が必要であろう。

なお、C区における道路新設工事においては、工事掘削深度が谷埋土の上面付近ににとどまることが判明したこと、谷以外に顕著な遺構が検出されなかったことから、それ以上の掘削は行わず、工事施工時に立会調査を行うことになった。

[註]

- 1) 河村吉行(1990)「付篇Ⅱ 吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』,山口
- 2) 豆谷和之(1995)「付篇Ⅰ 吉田遺跡第Ⅰ地区D区の調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅢ』,山口
- 3) 河村吉行(1985)「第7章 吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』,山口
- 4) 河村吉行(1988)「第5章第1節4 農学部附属農場E7圃場排水管布設およびE6圃場進入路拡幅に伴う立会調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』,山口
- 5) 豆谷和之(1995)「第2章 吉田構内本部裏給水管布設に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅢ』,山口
- 6) 前掲註3
- 7) 河村吉行(1988)「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』,山口
- 8) 岩崎仁志(2007)「山陽西部における中世の土製煮沸具—周防・長門を中心に—」『中近世土器の基礎研究21』,高槻(大阪)
- 9) 河村吉行(1985)「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口
- 10) 前掲註8

4. 新教育棟新営工事に伴う本発掘調査

調査地区 吉田構内M・N-11・12区

調査面積 約1333㎡

調査期間 平成21年2月17～平成21年4月24日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯(図26)

第2項で報告したように、予備発掘調査の結果を埋蔵文化財資料館専門委員会(平成20年12月10日開催)で協議した結果、建設計画の大幅な変更が困難であるため、盛土部分を除く敷地の大半について本発掘調査を行うことになった。

(2) 調査の経過

予備発掘調査では各調査区から多数の柱穴・溝、土壌が検出されたことから、掘立柱建物等の遺構が多数存在することが予想された。本発掘調査ではこれらの遺構の調査を優先するため、遺物包含層・谷堆積土については遺構が確認された箇所を除き、機械による掘削を行った。

調査は前項で報告した設備関連工事に伴う本発掘調査終了後の翌日、2月17日に開始し、併行して造成土の厚い調査区南壁における矢板の設置作業を2月18～21日にかけて行った。また、地形に沿って遺構が分布することが予想されたため、真北から約45°東に傾く軸を基準とした地区設定を行い、機械掘削終了後、3月10日に杭の設置作業を行った。機械掘削は造成土・耕土が薄い調査区北東部は比較的順調に進んだ。しかし、造成土の厚い調査区西部では、使用したクローラーダンプの運搬量が限られていたこともあり、掘削が難航した。

遺構の検出、掘削、実測作業は標高の高い調査区北東部から西へ向かって順次行い、4月17日までにほぼ終了した。以後、4月18日に空撮・空測を行い、4月20日～24日に埋め戻し作業を行った。

(3) 基本層序(図29～32、写真65～75)

基本層序は下記の通りである。

第1層 表土(現耕土)

第2層 造成土

第3層 旧耕土及び床土

第4層 遺物包含層(調査区北東部のみ)

第5層 地山(弥生時代以降)

調査区は姫山の支脈から張り出す洪積段丘の西側傾斜面に位置する。現地表においても、調査区北東部では標高約24.2m、調査区南西部では標高約21.2mで、約3mの高低差がある。統合移転前までは棚田であったため、調査区北東部では地山が段状に造成されていた。また、統合移転時の造成では、標高の低い調査区西側を埋め立てたため、調査区南西部においては第2層の厚さが1.3～1.4mに達している。第3層は調査区全面で確認された。第4層は調査区北東部でのみ確認した。谷埋土である可能性もあるが、棚田の造成により土層の連続性が確認できなかつたため、遺物包含層としてとらえた。

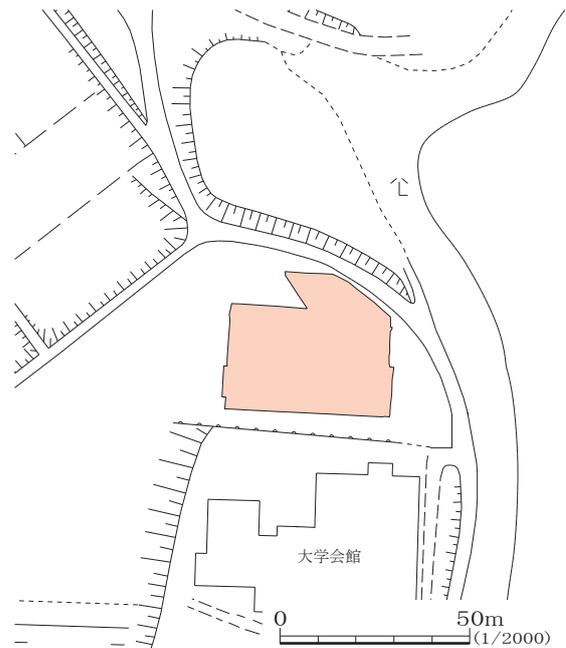
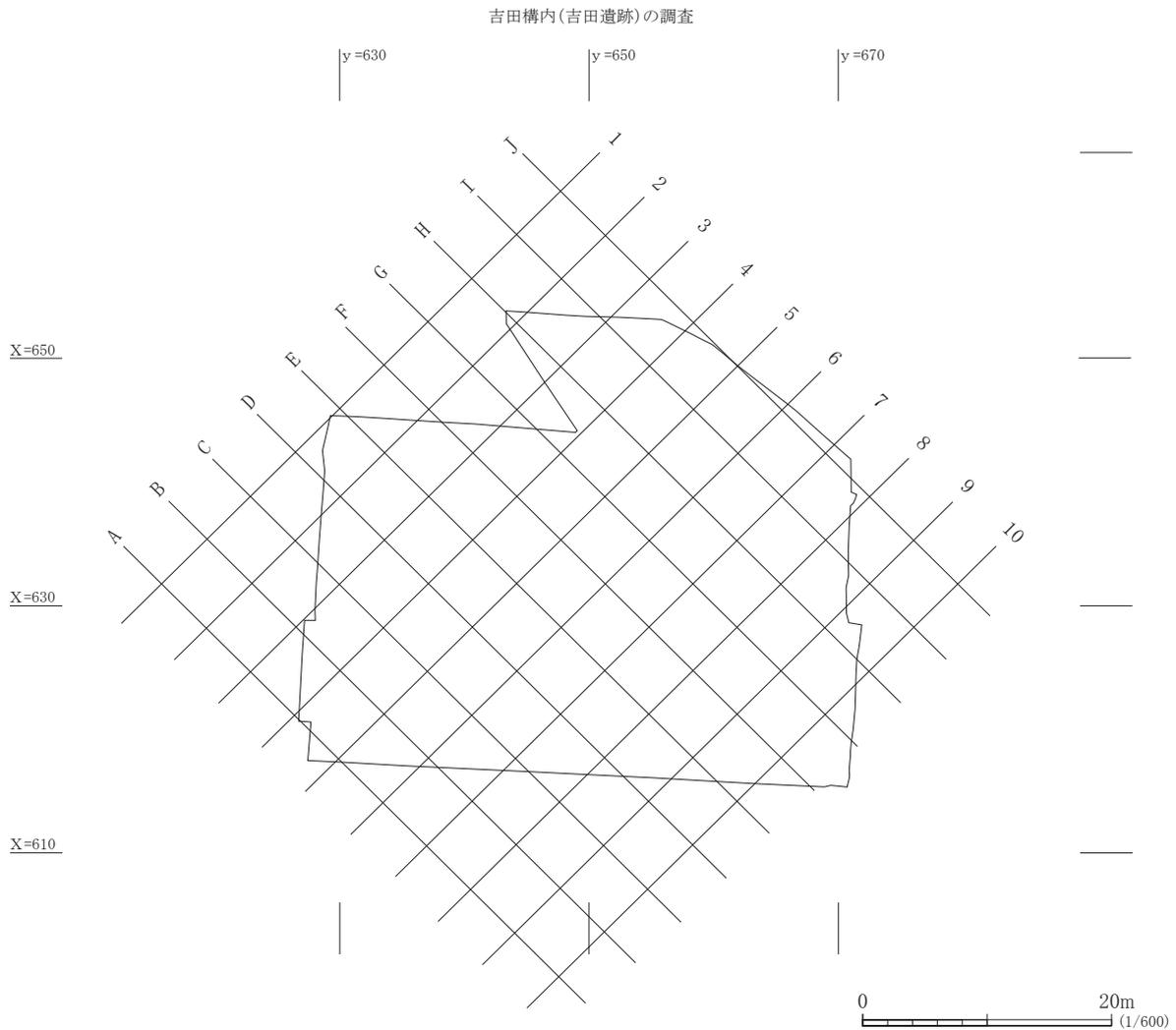


図26 調査区位置図



谷埋土は第2・3項同様、V層としている。V層は調査区北壁では、I-I'断面東端のY=649以西、調査区南壁ではY=661.2以西で検出している。棚田の造成による削平を受けているため、本来はさらに東に広がっていたと考えられる。谷は調査区中央部において、X=625以南、Y=636～650付近において播鉢状に落ち込んでいる。最深部のSU1南側における標高は約18.9mで、北部と約2m、東部と約2.2m、西部と約1.5mの標高差が認められた。この付近のV層の層厚は最大で約110cmである。V-5～V-8層までの出土土器には13～16世紀の瓦質土器片を多数含んでいたが、以下の土層からは出土せず、時期差が認められた。そこで、V-8層までを上層、以下を下層として記述を進める。下層うち、地山直上の最下層では粗砂層も多く認められた。また、黒色シルト・粘質土からは木製品が多数出土しており、流水状態から滞水状態となって堆積が進行した状況がうかがえる。また、下層のV-17層は北側ほど色調が淡くなる。その変化が漸移的であるため分層することができなかったが、第2項で報告した予備発掘調査区B調査区西部では、同一層から足鍋口縁部が出土していることから、本来は分層できた可能性が高い。上層は灰色シルト・褐灰色シルトを主体としており、砂層はない。下層堆積後の流れ込みにより堆積したものと考えられる。地山である第5層は、調査区北東部では黄褐色もしくは橙色系シルトが主体であるが、調査区南西部においては灰色系の色調で、粗砂や5cm大の礫を含むものが多い。

吉田構内(吉田遺跡)の調査



図 28 調査区平面図

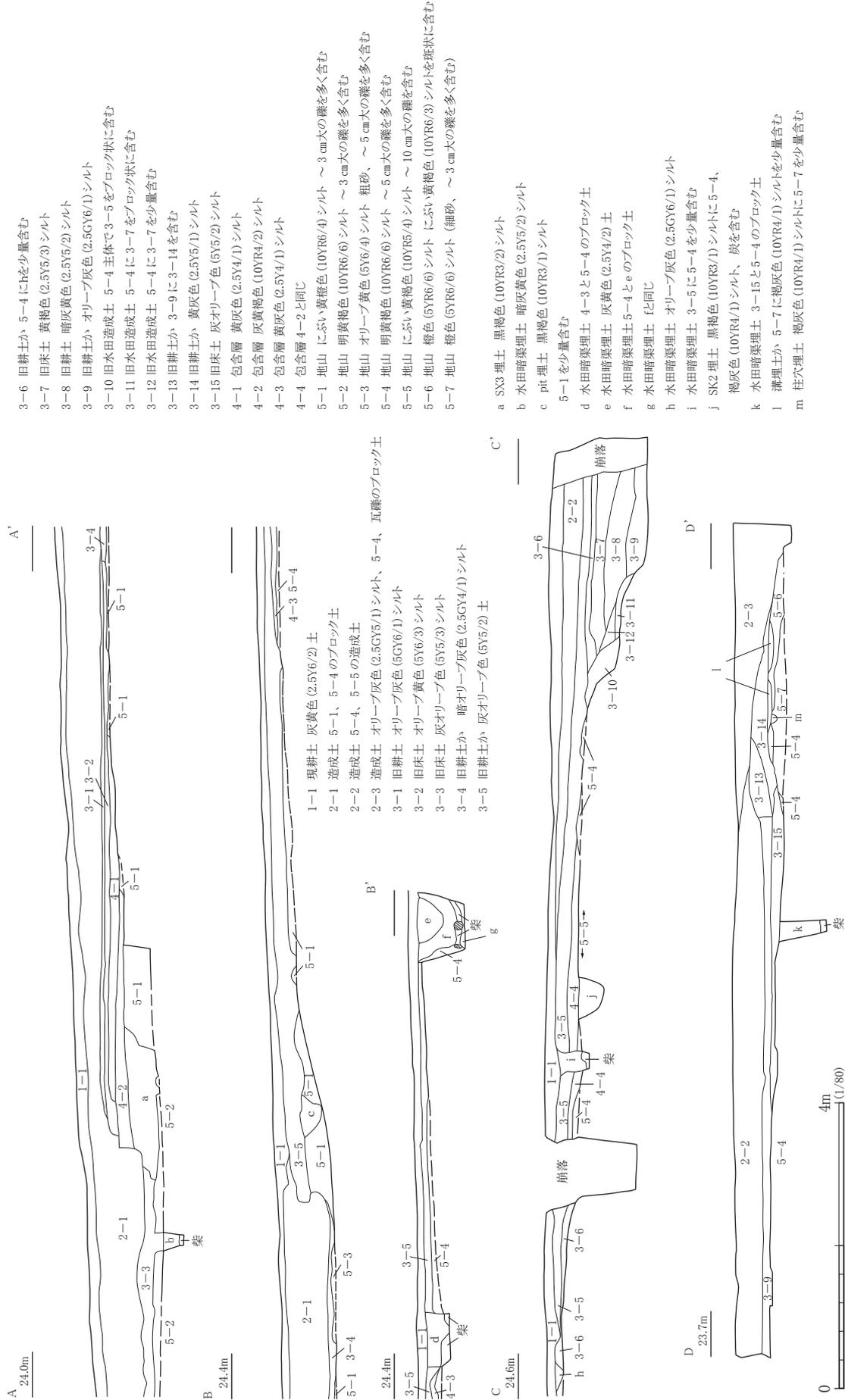


図 29 調査区断面図 1

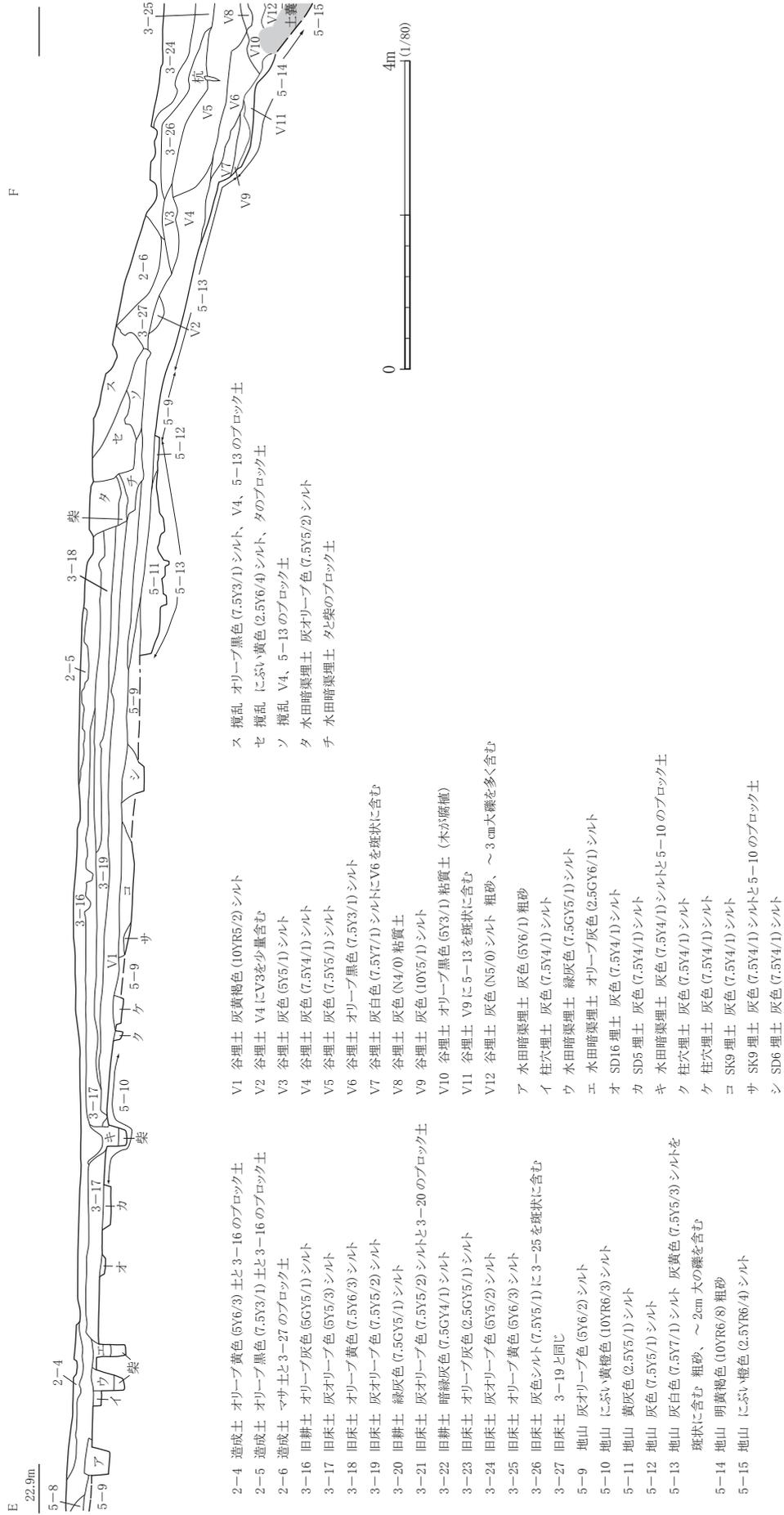
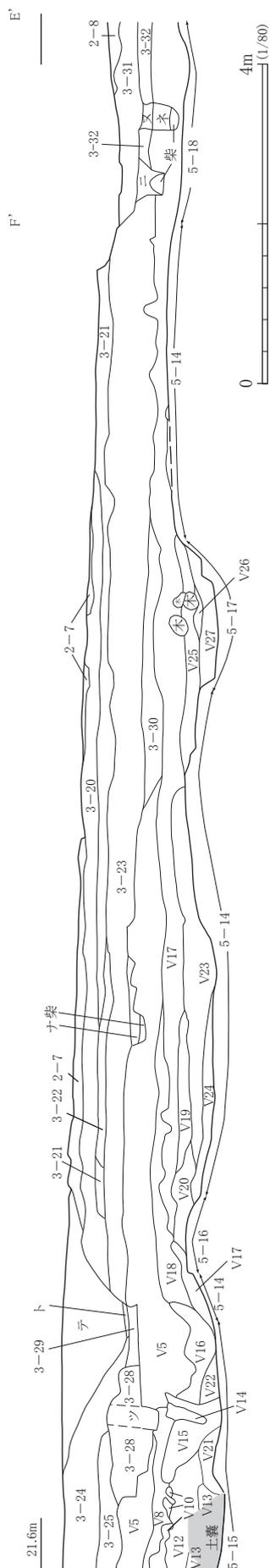


図 30 調査区断面図 2



- | | | | |
|----------|-----------------------------------|----------|-------------------------------------|
| 2-7 造成土 | マサ土と3-20のブロック土 | ツ 水田暗栗理土 | オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルトと3-28のブロック土 |
| 2-8 造成土 | 3-31、32のブロック土 | テ 攪乱理土 | 黄褐色(2.5Y5/3)シルト、2-7、3-20、3-23のブロック土 |
| 3-24 旧床土 | 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト | ト 攪乱理土 | V5 主体 |
| 3-25 旧床土 | オリーブ黄色(5Y6/3)シルト | ナ 水田暗栗理土 | 3-23と同じ 同層よりしまりが無い |
| 3-26 旧床土 | 灰色(7.5Y5/1)シルトに3-25を斑状に含む | ニ 水田暗栗理土 | 3-20とV17のブロック土 |
| 3-27 旧床土 | 3-19と同じ | ヌ 水田暗栗理土 | 3-32とV17のブロック土 |
| 3-28 旧床土 | 3-24とV5のブロック土 | ネ 水田暗栗理土 | V17に3-32を少量含む |
| 3-29 旧床土 | 明黄褐色(2.5Y7/6)シルト | | |
| 3-30 旧床土 | 3-23にV19を少量含む | | |
| 3-31 旧耕土 | 緑灰色(7.5GY5/1)シルト | | |
| 3-32 旧床土 | 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト | | |
| 5-15 地山 | にぶい、橙色(2.5YR6/4)シルト | | |
| 5-16 地山 | 5-14に灰色(7.5Y6/1)粗砂を斑状に含む | | |
| 5-17 地山 | 青灰色(5B6/1)粗砂 黄褐色(10YR6/6)粗砂を斑状に含む | | |
| 5-18 地山 | 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト 粗砂 ~ 5cm 大の礫含む | | |
| V5 谷理土 | 灰色(7.5Y5/1)シルト | | |
| V8 谷理土 | 灰色(N4/0)粘質土 | | |
| V12 谷理土 | 灰色(N5/0)シルト 粗砂 ~ 3 cm 大礫を多く含む | | |
| V13 谷理土 | V10と同じ | | |
| V14 谷理土 | 灰色(7.5Y4/1)粘質土 | | |
| V15 谷理土 | V10、13と同じ | | |
| V16 谷理土 | V14と同じ | | |
| V17 谷理土 | オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土 | | |
| V18 谷理土 | 暗灰色(N3/0)シルトにV17を斑状に含む | | |
| V19 谷理土 | 暗灰色(N3/0)シルト 粗砂 ~ 3 cm 大礫含む | | |
| V20 谷理土 | 黒色(7.5Y2/1)粘質土・粗砂 ~ 2 cm 大礫含む | | |
| V21 谷理土 | 灰色(N6/0)粗砂 ~ 3 cm 大礫含む | | |
| V22 谷理土 | V8と同じ | | |
| V23 谷理土 | N2/0 黒色シルト 粗砂 ~ 3 cm 大礫含む | | |
| V24 谷理土 | 黒色(7.5Y2/1)粘質土 粗砂 ~ 5 cm 大礫含む | | |
| V25 谷理土 | オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘質土 | | |
| V26 谷理土 | 暗灰色(N3/0)シルト | | |
| V27 谷理土 | 灰色(N4/0)シルト 粗砂 ~ 3 cm 大礫含む | | |

図 31 調査区断面図 3

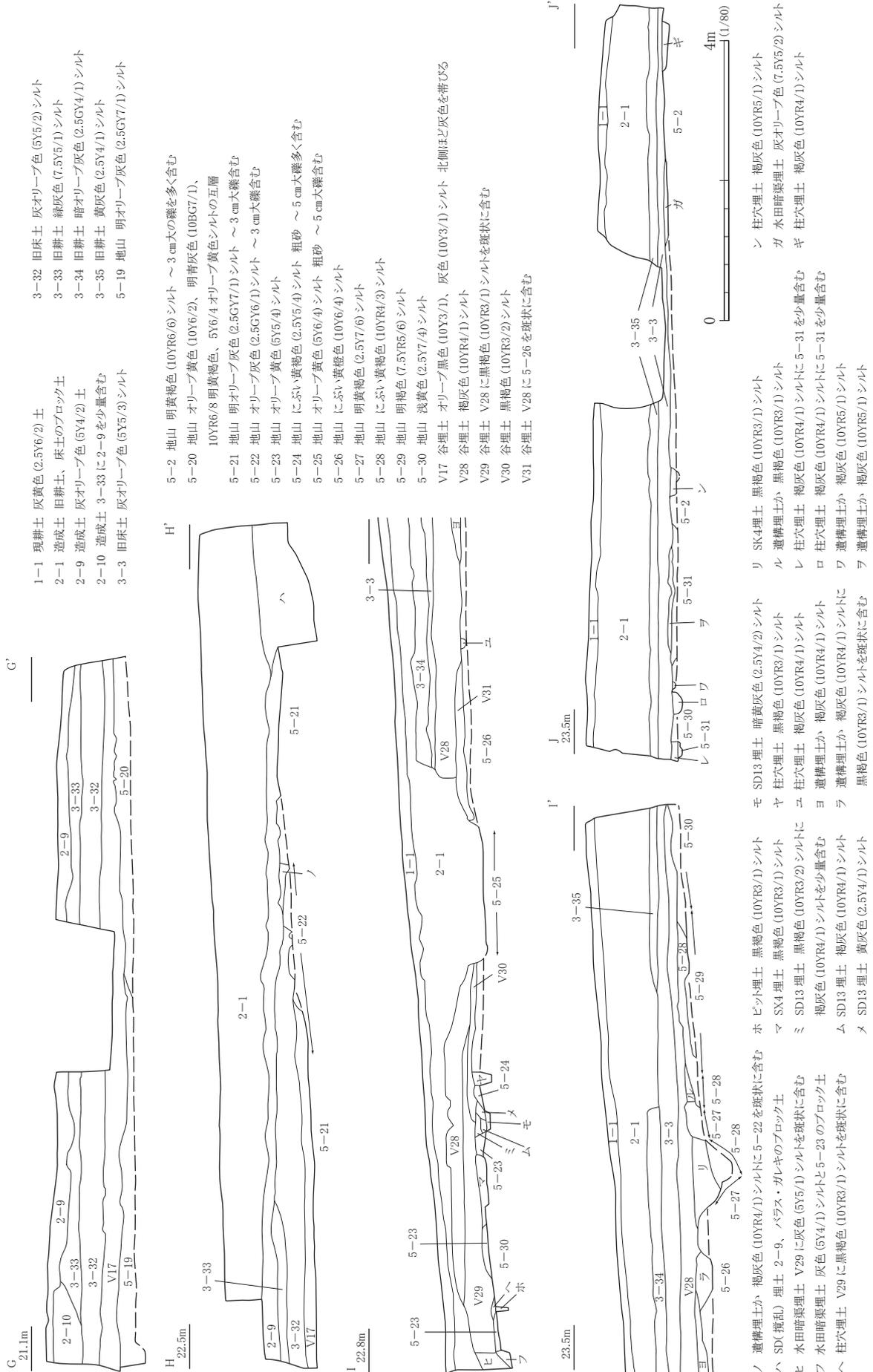


図 32 調査区断面図 4

(4) 遺構(図28、図33～49、写真60～64、76～112)

調査区においては縄文時代の貯蔵穴1基、時期不明のものを含むが、14～16世紀を主体とする掘立柱建物跡19棟、溝18条、井戸2基、土壇18基、不明遺構4基、柱穴約700基を検出した。また、統合移転直前まで存在した棚田に伴う水田暗渠群、井戸1基、統合移転後に掘削された攪乱溝などを検出した。なお、調査時において、遺構は各地区ごとに番号を付していたが、報告にあたり、柱穴を除く遺構については通し番号を付した。以下、順を追って報告する。

【縄文時代の遺構】

SU1(図33・写真76)

今回検出した唯一の縄文時代の遺構である。谷が播鉢状に落ち込むD-6区北斜面に位置する。直径約85cm、検出面からの深さ約55cm、底面の標高は19.35mである。遺構検出前に降雨により谷の斜面が崩落して埋土の一部が流失した上、谷清掃時に埋土がぬかるんだ状態で踏み込むなどしてしまったため、遺構検出後、土層断面は底部付近でしか確認することができなかった。確認できた限り、失われた埋土の大半は黒褐色(2.5Y3/1)シルトであった。同層からはドングリのほか、縄文時代晩期の深鉢胴部片が1点出土している。

【中世の遺構】

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区北東部を中心に19棟検出した。水田暗渠、統合移転後の攪乱により少なからず削平をうけているため、実際にはさらに多くの掘立柱建物跡が存在したと考えられる。建物の棟方向は地形の制約を受けているため、北西-南東に棟方向を持つものが多い。国土座標の北を基準とすると、これらは①N36°～42°WであるSB3～6、10～13、15～17と、②N49°～55°WであるSB1、7、14、19に大別できる。一方、北東-南西に棟方向を持つものは、③N50°～55°EのSB2、9と、④N38°EのSB8、18に大別される。よって、掘立柱建物跡は棟方向がほぼ直交する①と③、②と④からなるグループに分けることができる。

前者のグループの柱穴からは14～16世紀の瓦質土器片が出土している。一方、後者のグループの柱穴からは、土師器椀、皿、須恵器片等が出土するが、瓦質土器片を含まない。以上を考慮すると、両グループは建物の時期を反映している可能性がある。ただし、同方向もしくは直交する棟方向の掘立柱建物跡が重複する箇所が多い。また、建物間の距離を考慮すると、さらに小時期が存在したのは確実に、19棟のうち、同時期に存在した掘立柱建物跡は少なかったと推測される。なお、各掘立柱建物からは、遺物が出土していないか極めて少ないものが多いため、詳細な時期比定は困難である。以下、各掘立柱建物跡について報告する。

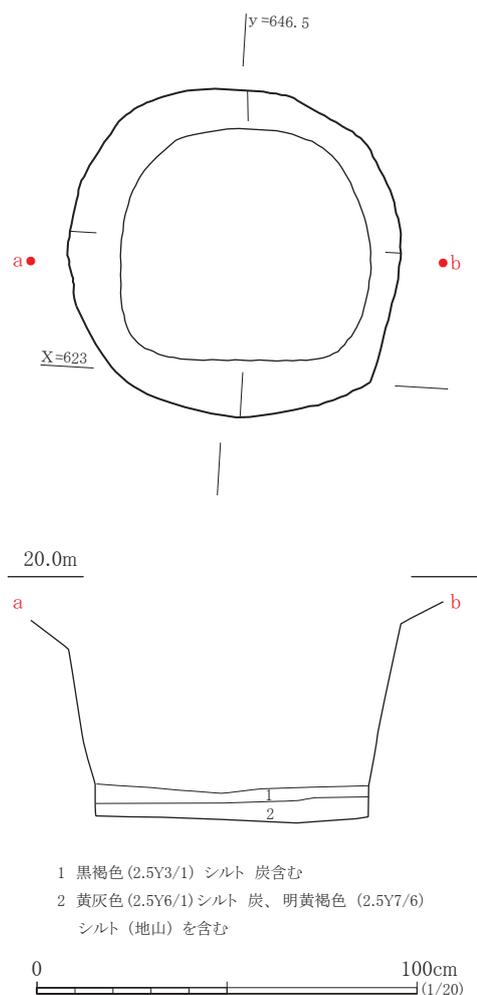


図 33 SU1平面図・断面図

SB1(図34・写真61)

調査区外へ広がるため、全体規模は不明であるが、桁行3間(6.5m)以上、梁行1間(2.1m)、床面積13.7㎡以上の規模を持つ。棟方向はN49°Wである。各柱穴の規模は直径約26~40cmで他と比較してやや大きい。柱穴埋土は他が褐灰色(10YR4/1)シルトが主体であるのに対して、黒褐色(10YR3/1)シルトのもの(I-3区Pit2・5、I-4区Pit1)も見られる。I-4区Pit4から土師器片が2点、須恵器片が各1点出土しているほか、出土遺物はない。柱穴の規模、埋土、出土遺物から、古代以前に位置づけられる可能性がある。

SB2(図34・写真61)

桁行2間(3.8m)、梁行1間(2.2m)、床面積は8.36㎡を測る。棟方向はN55°Eである。H-4区Pit6から龍泉窯系青磁碗片、土師器、須恵器小片、H-5区Pit5から瓦質土器片が出土している。

SB3(図34・写真62)

南東隅の柱穴は水田暗渠により破壊されたと考えられる。桁行2間(4.2m)、梁行1間(2.5m)、床面積は10.5㎡に復元できる。棟方向はN37°Wで、SB4~7と重複する。G-6区Pit4から摩滅した土師器碗底部片、土師器片、G-6区Pit24から土師器皿口縁部小片が出土している。

SB4(図35・写真62)

桁行2間(3.9m)、梁行1間(2.1m)、床面積は8.19㎡を測る。棟方向は、N37°Wで、SB3・5~7と重複する。G-6区Pit15では柱が残存していた。柱穴からの出土遺物はない。

SB5(図35・写真62)

南東隅の柱穴は溝群7、H-6区Pit16が重複しているため、確認できなかった。桁行1間(3.0m)、梁行1間(2.1m)、床面積は6.3㎡に復元できる。棟方向はN38°Wで、SB3~4・6・7と重複する。G-5区Pit1から瓦質土器胴部片、G-5区Pit8から土師器片が出土している。

SB6(図35・写真62)

梁行南側柱穴の一部が水田暗渠により破壊されている。桁行2間(4.8m)、梁行2間(3.8m)、床面積は18.24㎡に復元できる。棟方向はN42°Wで、SB3~5、7と重複する。G-6区Pit7から土師器片、G-6区Pit6から土師器微細片が出土している。

SB7(図36・写真62)

南東隅の柱穴は水田暗渠により破壊されたと考えられる。桁行2間(4.8m)、梁行2間(4.7m)、床面積は22.6㎡に復元できる。棟方向はN52°Wで、SB3~6・8と重複する。G-5区Pit13から土師器皿底部、G-5区Pit14からは土師器片、須恵器片が出土している。

SB8(図36・写真62)

北西隅の柱穴は水田暗渠により破壊されたと考えられる。桁行3間(5.5m)、梁行1間(3.6m)、床面積19.8㎡に復元できる。棟方向はN38°EでSB7と重複する。F-5区Pit2、F-6区Pit1から土師器片、須恵器片が出土している。

SB9(図35・写真63)

桁行2間(3.9m)、梁行1間(3.2m)で、建物中央にも柱穴を有する。床面積は12.48㎡である。棟方向はN50°Eで、SB10と重複する。柱穴からの出土遺物はない。

SB10(図37・写真63)

桁行2間(3.7m)、梁行2間(2.9m)、床面積10.73㎡を測る。棟方向はN42°Wで、SB9と重複する。G-7区Pit6から瓦質土器播鉢口縁部、G-8区Pit11から土師器片が出土している。

SB11(図37・写真63)

桁行西側中央の柱穴は攪乱により破壊されたと考えられる。桁行2間(5.1m)、梁行2間(3.6m)、床面積18.36㎡を測る。棟方向はN36°WでSB12・13と重複する。F-8区Pit14から土師器片が出土している。

SB12(図38・写真63)

梁行西側の柱穴は攪乱により破壊されたと考えられる。桁行2間(5.4m)、梁行2間(3.6m)、床面積19.44㎡に復元できる。棟方向はN37°Wで、SB11・13と重複する。柱穴からの出土遺物はない。

SB13(図38・写真63)

梁行西側の柱穴が攪乱により破壊されたと考えられる。梁行西側は判然としないが、桁行3間(4.8m)、梁行2間(3.0m)、床面積14.4㎡に復元できる。棟方向はN40°Wで、SB11、12と重複する。F-7区Pit9、G-8区Pit6から土師器片が出土している。

SB14(図39・写真61)

一部が調査区外であるが、桁行4間(8.9m)、梁行1間(北西部)/2間(南西部・3.7m)、床面積32.93㎡に復元できる。棟方向はN50°Wで、SB15・16と重複する。

棚田の造成により桁行西側を中心に削平を受けているが、桁行東側の柱穴は直径約43~52cmとやや規模が大きい。柱穴からは、H-4区Pit9から土師器片が1点出土しているのみである。

SB15(図39・写真61)

一部が調査区外であるが、桁行3間(9.1m)、梁行2間(4.4m)で、桁行南西面に庇(1.04m)を持つ。床面積は40.04㎡に復元でき、今回検出した中で最大の掘立柱建物跡である。棟方向はN36°Wで、SB14・16と重複する。G-2区Pit9から土師器碗底部片、G-3区Pit11から土師器皿口縁部片、G-3区Pit16から須恵器、土師器片、H-3区Pit12から土師器片、F-3区Pit6から土師器碗口縁部・底部片が出土している。

SB16(図40・写真61)

一部が調査区外であるが、桁行3間(8.4m)、梁行1間(3.4m)、床面積28.6㎡に復元できる。棟方向はN39°WでSB14・15と重複する。柱穴からの出土遺物はない。

SB17(図40・写真64)

E・F-3・4区に位置する。桁行2間(4.6m)、梁行2間(3.4m)、床面積15.64㎡を測る。棟方向はN40°Wである。F-3区Pit9から土師器片、F-4区Pit16から須恵器片、F-4区Pit17から土師器、須恵器片が出土している。

SB18(図41・写真64)

E-3・4区、D-4区に位置する。桁行2間(5.0m)、梁行2間(3.7m)、床面積18.5㎡を測る。棟方向はN38°Eである。D-4区Pit3から土師器片が出土している。

SB19(図41・写真64)

北西隅の柱穴は棚田による造成で破壊されたと考えられる。桁行2間(4.7m)、梁行4.2m、床面積19.74㎡の総柱建物に復元できる。棟方向はN51°Wである。D-3区Pit2から焼土塊、E-3区Pit2から土師器碗底部片、土師器片が出土している。

吉田構内(吉田遺跡)の調査

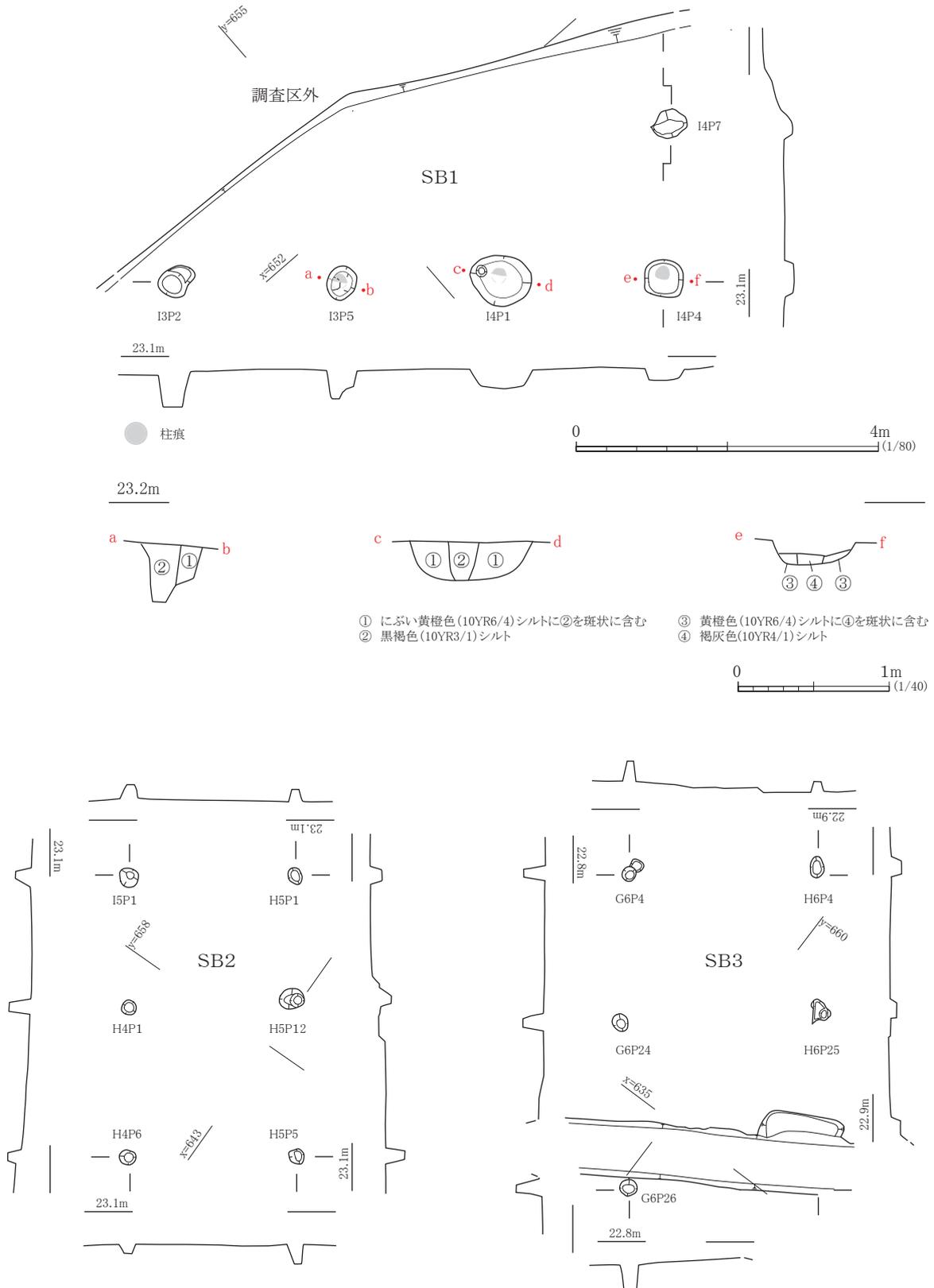


図 34 SB1~3平面図・断面図

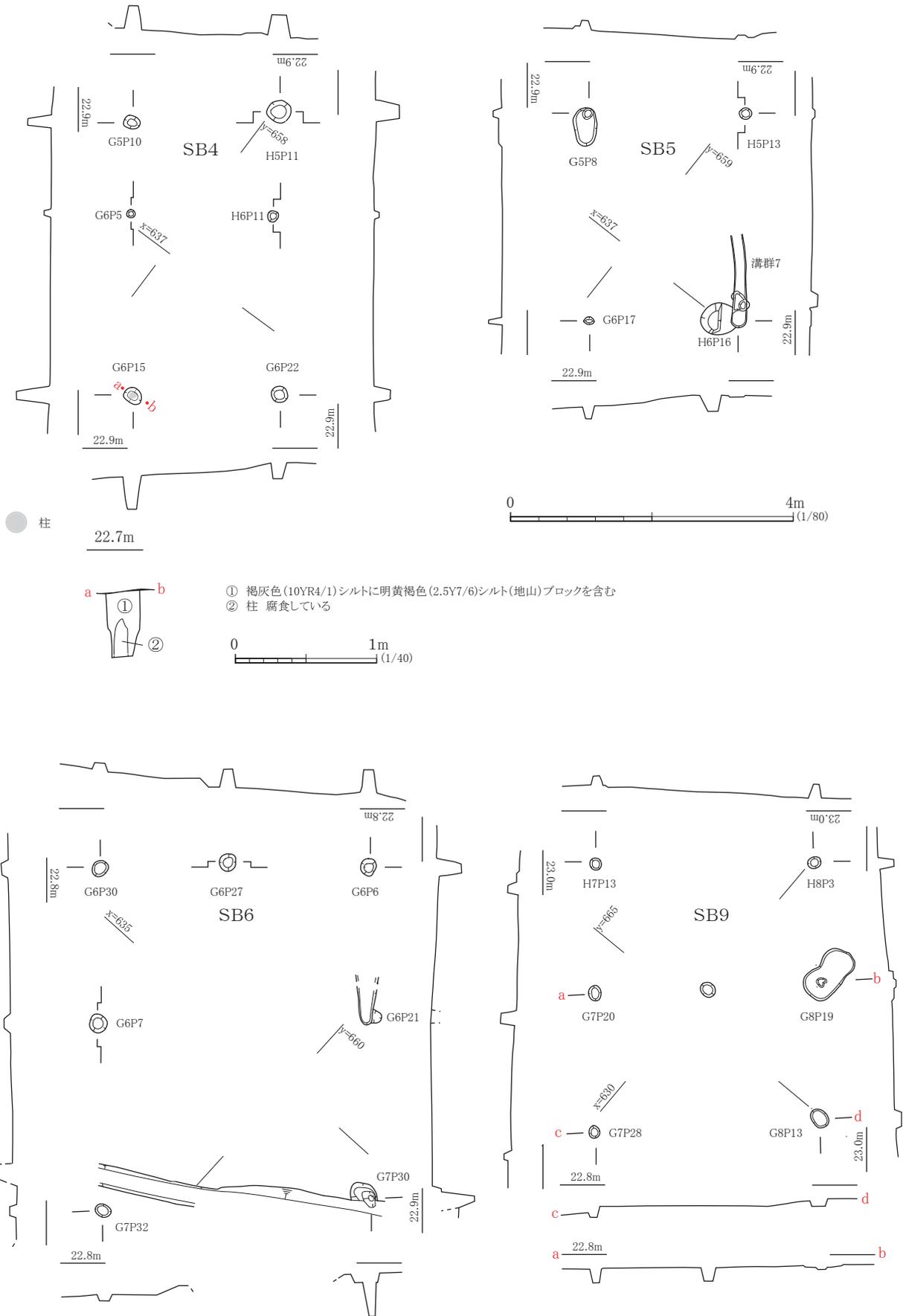


図 35 SB4~6・9平面図・断面図

吉田構内(吉田遺跡)の調査

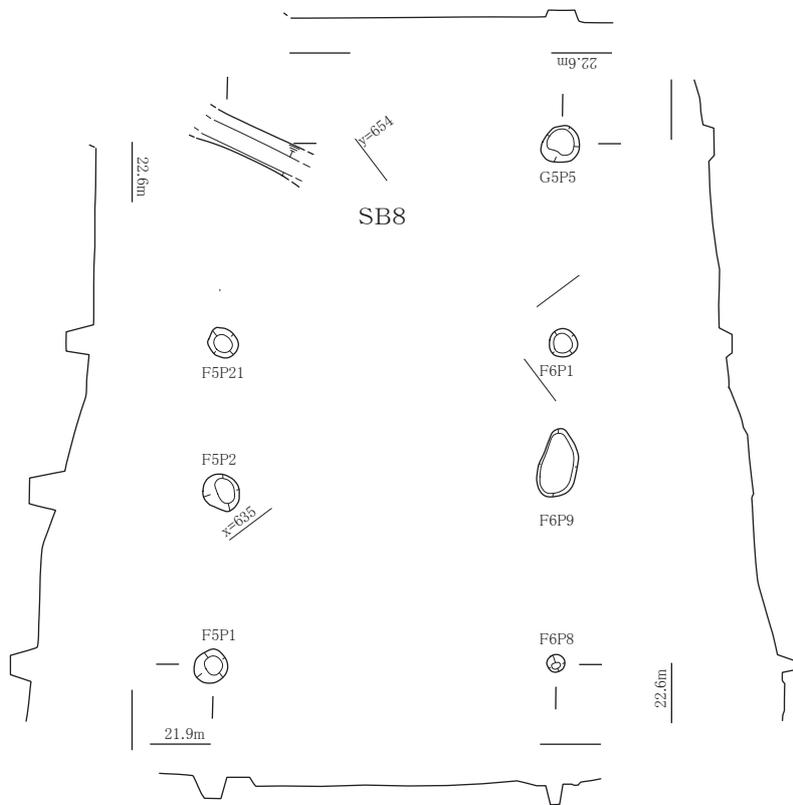
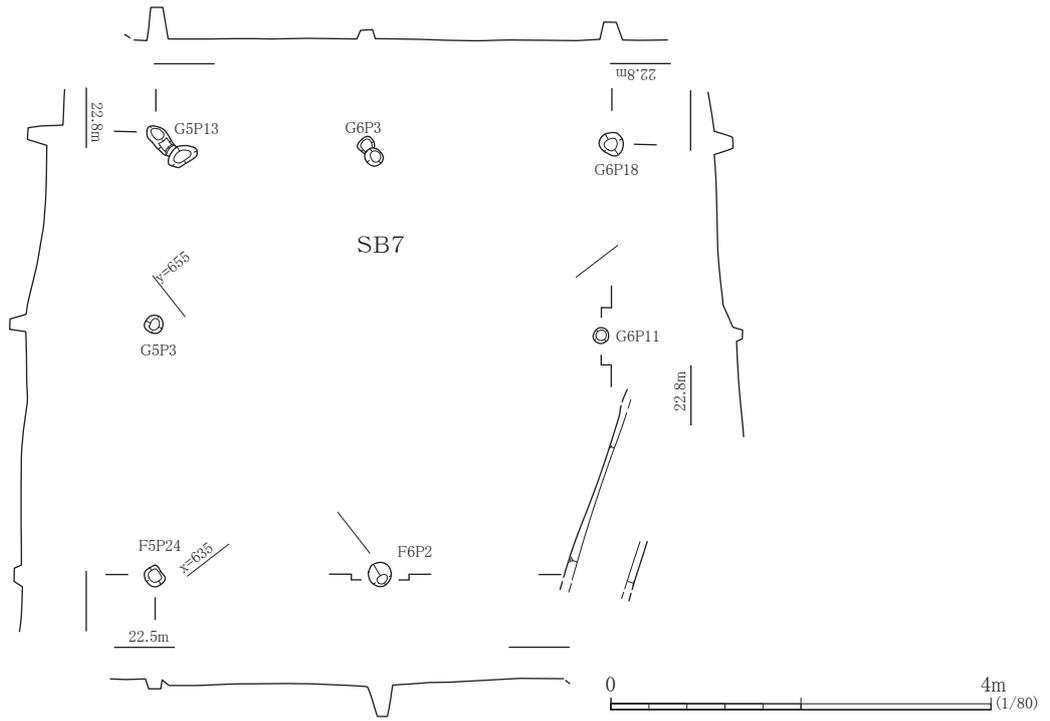


図 36 SB7・8平面図・断面図

吉田構内(吉田遺跡)の調査

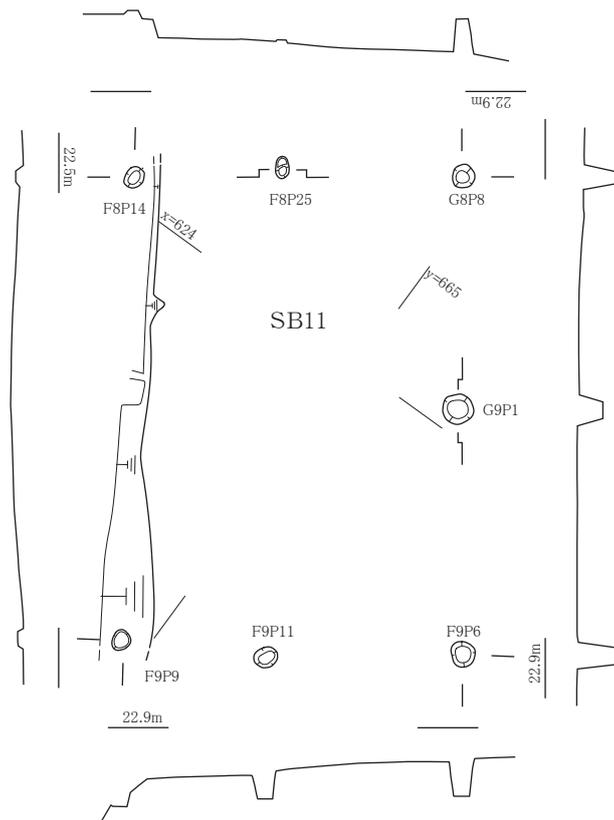
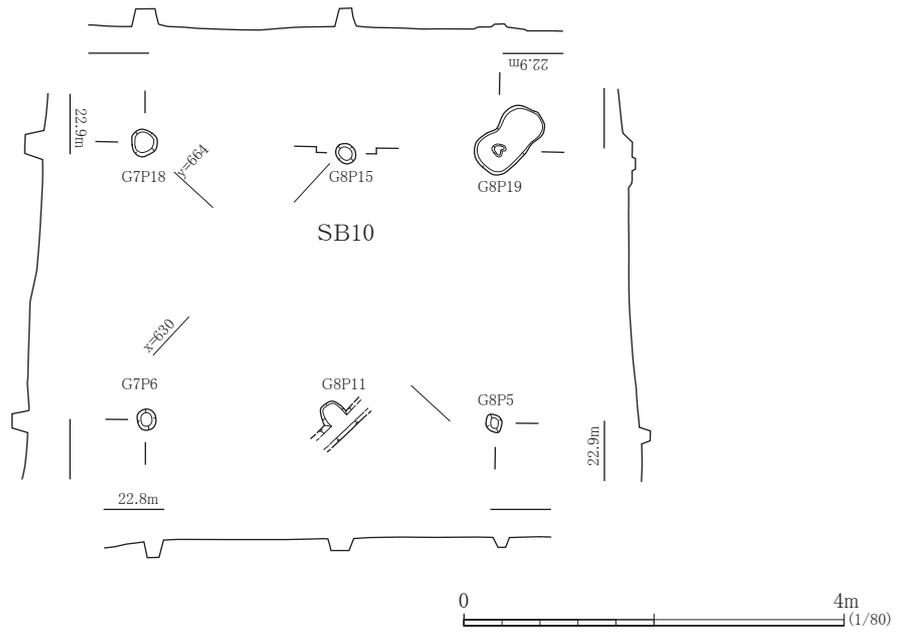


図 37 SB10・11 平面図・断面図

吉田構内(吉田遺跡)の調査

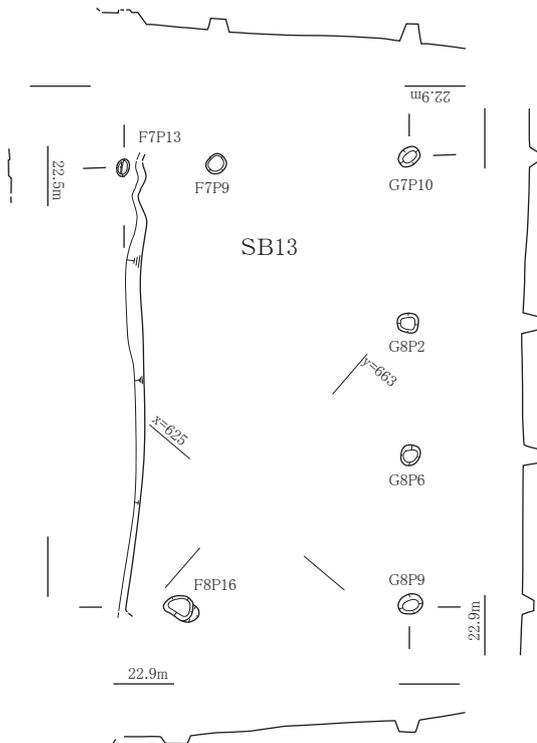
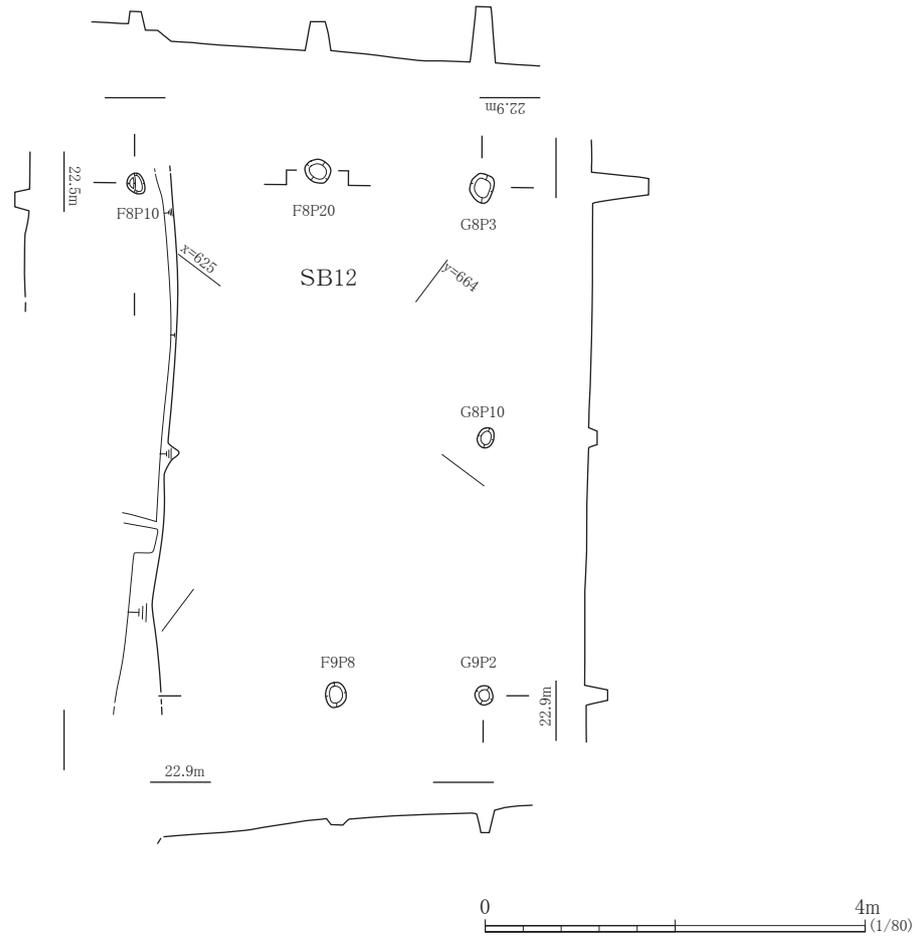
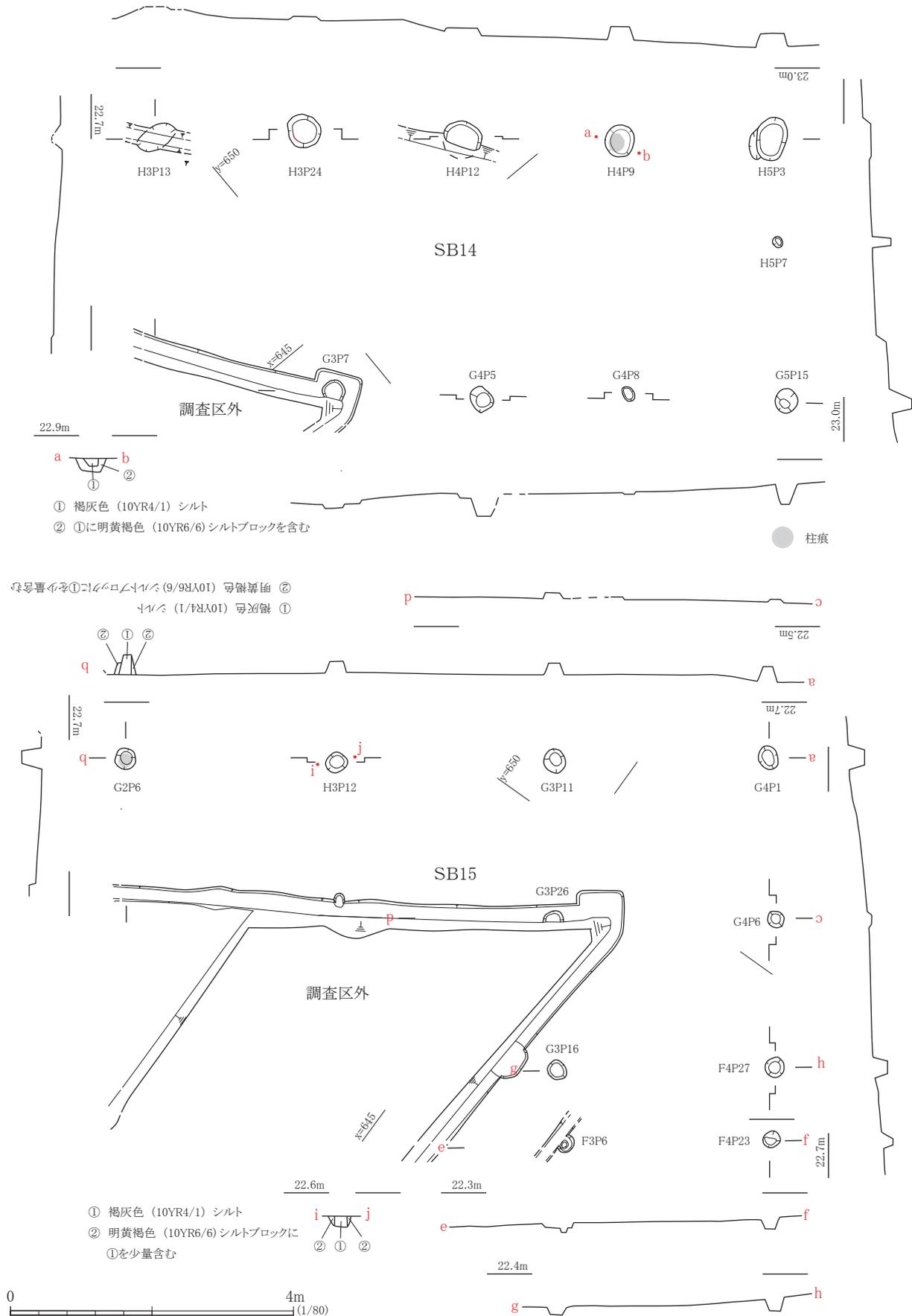


図 38 SB12・13 平面図・断面図

吉田構内(吉田遺跡)の調査



吉田構内(吉田遺跡)の調査

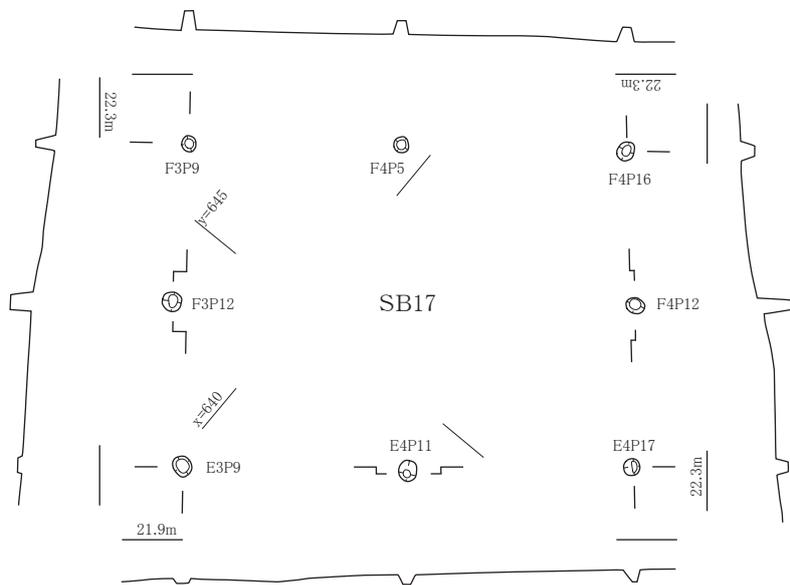
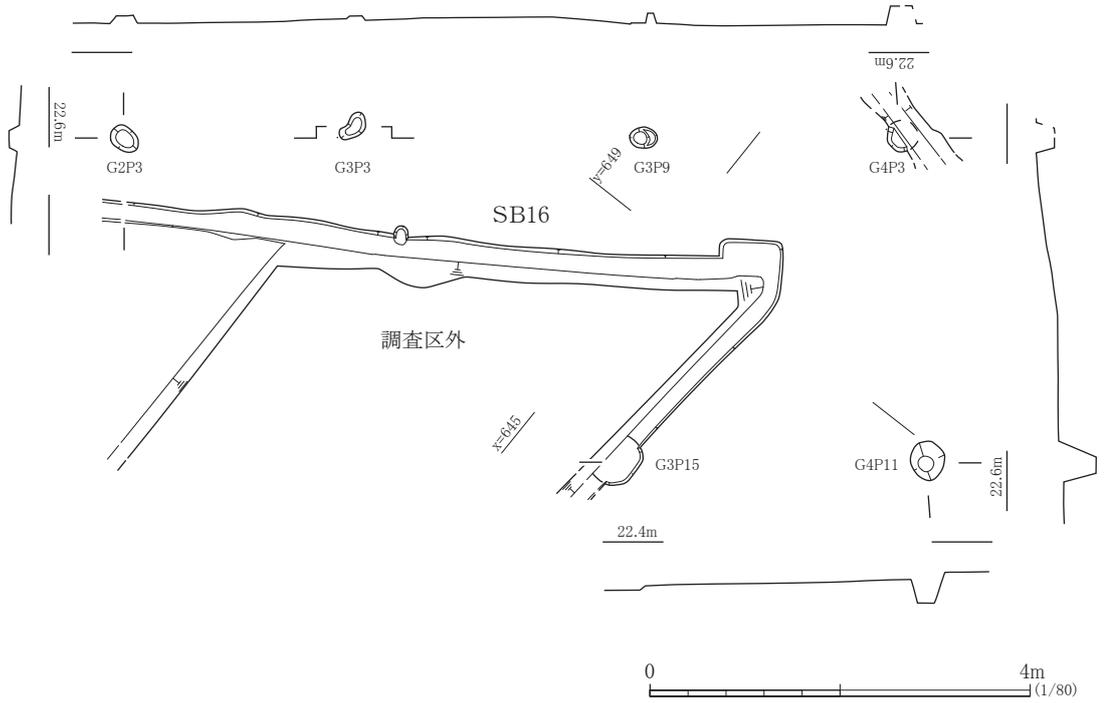


図 40 SB16・17 平面図・断面図

吉田構内(吉田遺跡)の調査

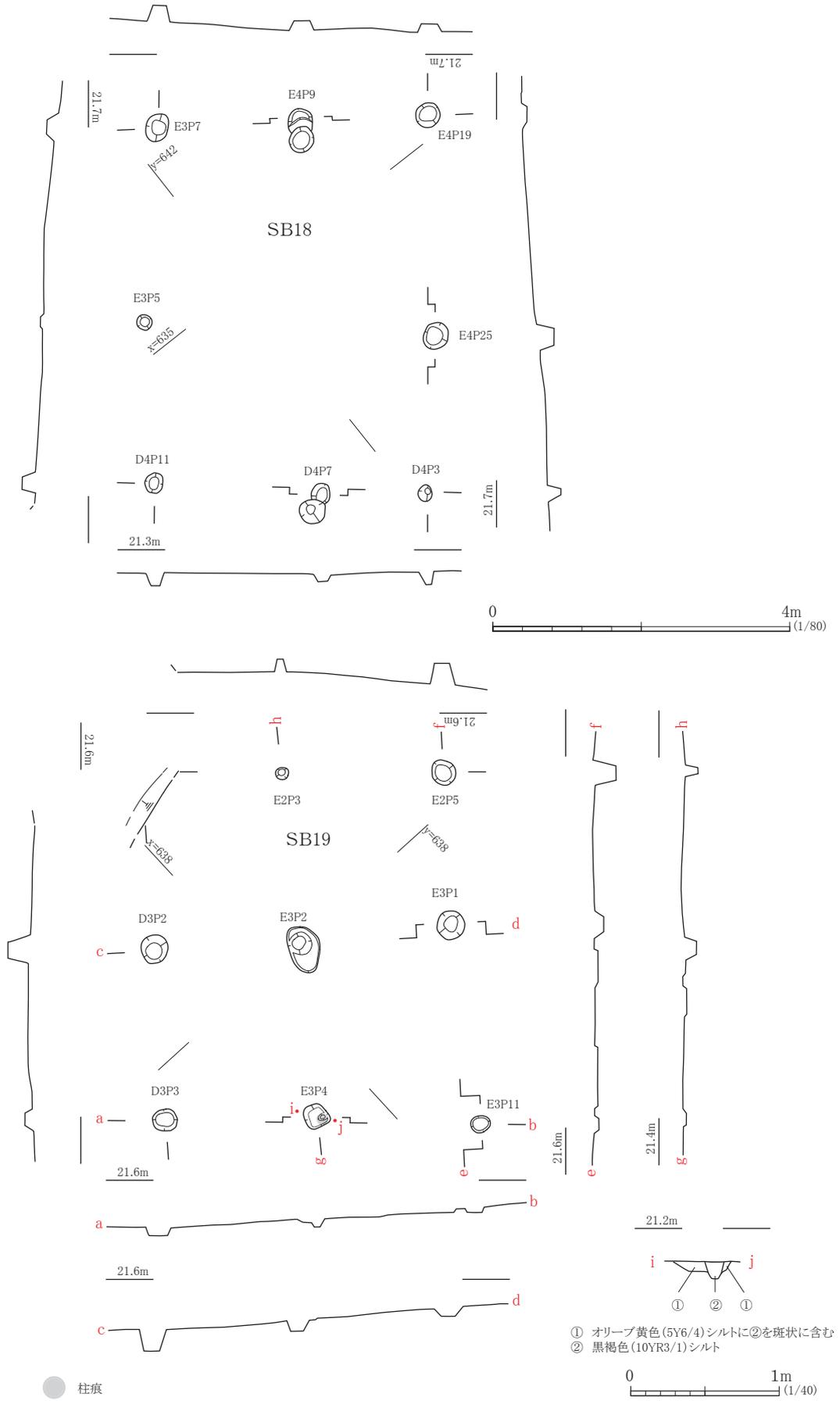


図 41 SB18・19 平面図・断面図

溝

溝群、溝18条が検出された。以下、主要な溝について報告する。いずれの溝からも出土遺物は少ない。遺物が出土している溝埋土には土師器片、須恵器片、瓦質土器片、白磁片など時期幅のある遺物を含むが、近世以降の土器は出土していない。以上から、溝の所属時期は主に14～16世紀と考えられるが、詳細は不明である。

溝群(図42・写真81～85)

SB3～9周辺において、溝が多数検出された。しかし、棚田造成及び水田暗渠による削平により、これらの溝は複数箇所ですて切れた状態であった。このため、これらの溝が本来連続するものか、別のものなのかを含め、元の形状を明らかにすることができない。以上の事情により、以下の報告ではこれらの溝を溝群として一括し、検出した溝に番号を付して報告を行う。

検出された溝は1、3～6、7、4・8～10、11～14、15、16～19の6列でほぼ併行する。比較的残りのよい8北端から10南端までの長さは約14.2mである。流路方向は北東－南西で溝群8北端の溝底検出高は約22.8m、溝群10南端の溝底検出高は約22.6mである。埋土は灰色系シルトに地山を含む単一層で、検出面から溝底までの深さは約2～14cmである。溝の埋土のうち、2・9から土師器、須恵器片、4から土師器碗底部片、須恵器片、瓦質土器足鍋、同播鉢の口縁部片、11から土師器片、12、13から瓦質土器底部片が出土している。以上の土器はいずれも小片・少量のため、時期を判断する根拠に乏しいが、4、12における瓦質土器片の存在から14～16世紀に属するものが多いと推測される。

検出された溝はいずれも主軸方向がSB3～6と近似するほか、4は後述するSD2、4と同様にL字状に屈曲する。また、溝群周辺にはSB3～6の他、柱穴が密集しており、溝を切る柱穴や溝埋土の下から検出された柱穴も見られる。以上から、検出された溝は掘立柱建物に合わせて掘削された区画溝であった可能性が高い。

SD1(図43・写真87)

調査区の北部、SB1の南側に位置し、南端部はすて切れた状態で検出した。検出長は239cm、幅約10～17cmで、検出面からの深さは約3cm。溝底の標高は北部で22.69m、南部で22.72mである。埋土から土師器片が出土している。

SD2(図43・写真89)

調査区の北東壁西側に位置する。北部、南部の一部が水田暗渠により破壊されている。北部の一部がL字状に屈曲する。検出長は303cm、幅33～107cmで、検出面からの深さは1～6cm。溝底の標高は北部で23.79m、南部で23.82mである。埋土からは土師器碗片、瓦質土器片が出土している。その形状から掘立柱建物の区画溝であった可能性が高い。

SD3(図43・写真63)

調査区東部、SB9・10の南東側に位置し、南端部はすて切れた状態で検出した。検出長は305cm、幅約34～58cmで、検出面からの深さは3～6cmである。溝底の標高は北部で22.68m、南部で22.66mである。瓦質土器足鍋口縁部片が出土している。

SD4(図43・写真88)

調査区南東部、SB11～13の東側に位置する。L字状に屈曲する溝で、各先端部はすて切れた状態で検出したほか、屈曲部をSK1に切られる。検出長は578cmで、幅約5～60cm、検出面からの深さは2～14cm。溝底の標高は北部で22.54m、南部で22.47mである。埋土からは土師器片、須恵器片、瓦質土器足鍋口縁部、白磁碗底部片が出土している。SB11～13とは約42～78cmしか離れていないことから関連は

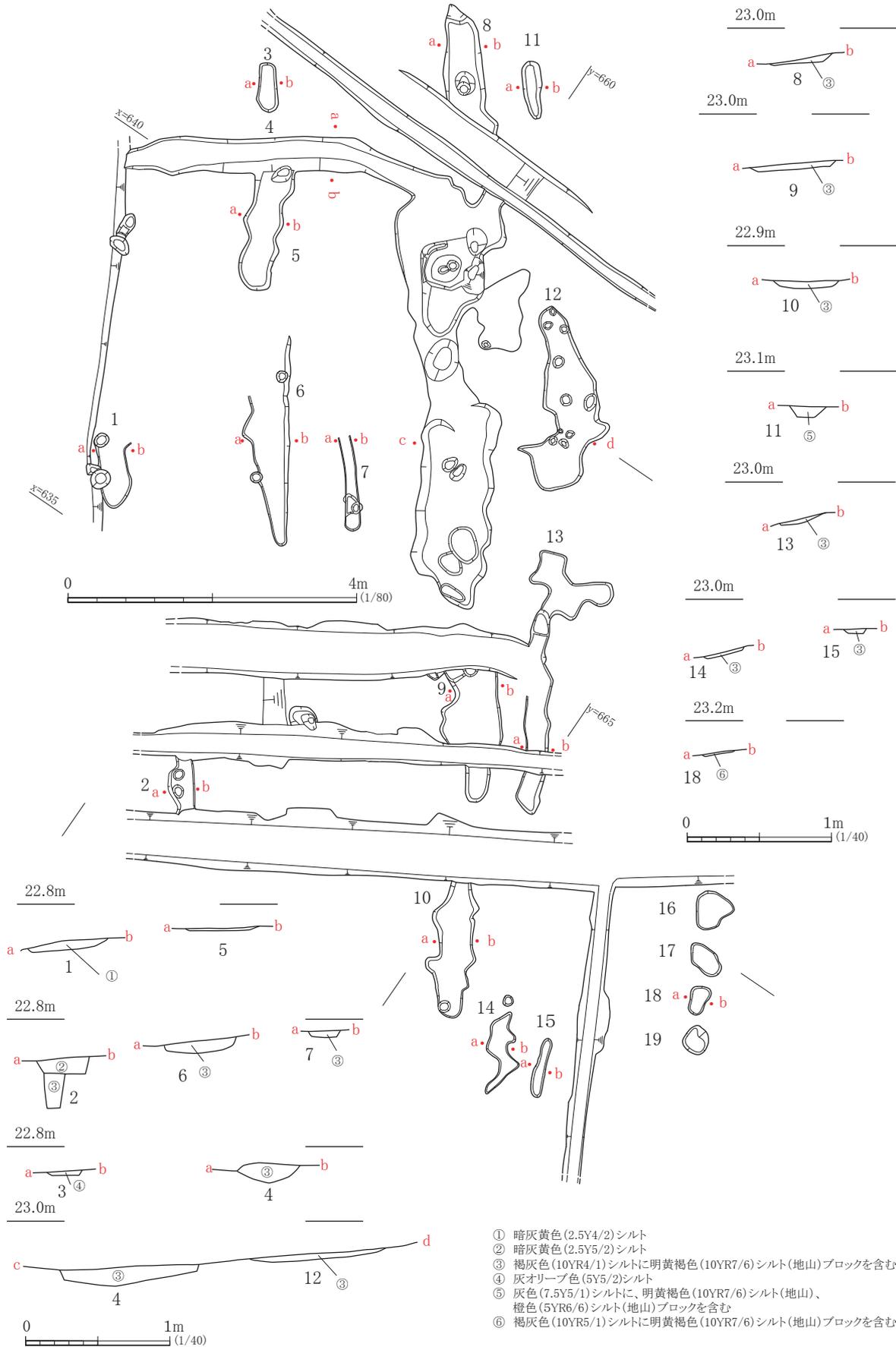


図 42 溝群平面図・断面図

考えにくい、約5.4m南西側にはSE2も存在することから、掘立柱建物、井戸等の施設を囲む区画溝であった可能性が高い。

SD5(図43・写真72)

調査区の南東部に位置し、南部は調査区外となる。検出長は450cmで、幅約20～52cm、検出面からの深さは5～13cm。溝底の標高は北部で21.95m、南部で21.98mである。埋土からは瓦質土器片、土師器皿底部片が出土している。

SD6(図43・写真72)

調査区の南東部に位置し、南部は調査区外となる。検出長は280cmで、幅約32～45cm、検出面からの深さは3～13cm。溝底の標高は北・南部で21.55m、中央付近(e-f断面)で21.47mである。埋土からは瓦質土器片、土師器皿底部片が出土している。

SD7(図43・写真90)

調査区の東部、SD3の東側に位置する。検出長は120cmで、幅約16～33cm、検出面からの深さは12cm。溝底の標高は22.76mである。埋土から瓦質土器片が1点出土している。

SD8(図43・写真88)

調査区の南東部、SD4の南西側に位置する。検出長は180cmで、幅約24～55cm、検出面からの深さは2～10cm。溝底の標高は22.49～22.53mである。埋土から瓦質土器片が1点出土している。

SD9(図44・写真92)

調査区の中央部SB17と18の間に位置する。北部が土壙状に落ち込むが埋土は南部と同一であった。検出長は340cmで、幅約19～72cm、検出面からの深さは5～24cm。溝底の標高は22.19～22.40mである。北部から、弥生土器もしくは土師器と考えられる胴部片が出土している。

SD10(図44・写真64)

調査区中央部、SB18の南東側に位置する。検出長は230cmで、幅約44～60cm、検出面からの深さは3～10cm。溝底の標高は北東部で21.05m、南西部で21.01mである。出土遺物はない。

SD11(図44・写真64)

調査区北西部、SB19と重複して位置する。北部をSX1、SB19(E-3区Pit2)に切られる。検出長は414cmで、幅約39～77cm、検出面からの深さは1～6cm。溝底の標高は北部で21.09m、南部で20.96mである。埋土から土師器片1点が出土している。

井戸

2基の井戸が検出された。

SE1(図45・写真93)

調査区南西部の南壁寄りにおいて、谷埋土(V-17層)を掘削中に検出された。このため、どの層から掘り込まれたものかは不明である。しかし、SE1付近のV-17層は層厚約20cm、その上層のV-5層は層厚25～30cmであることから、統合移転前の棚田の造成により、大半はすでに削平されていたと見られる。曲物の上面を確認した段階で掘削を止め、上面を精査したところ、谷埋土よりもわずかに茶褐色を呈して粘性のある掘方の埋土、黒褐色(2.5Y3/1)シルトを検出した。堀方の長軸は76cm、短軸は71cmで、中心に直径約48cmの曲物が据えられていた。検出面からの深さは17cm、底面の標高は20.1mである。曲物内の埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトで、この埋土をはじめ、底面、掘方埋土から土師器片、須恵器片が出土している。しかし、これらはいずれも遺構面であるV-17層に含まれていたもので、遺構の時期を示すものではないと考えられる。残存状況を参考にすると、SE1は少なくともV-5層から掘り込まれてい

吉田構内(吉田遺跡)の調査

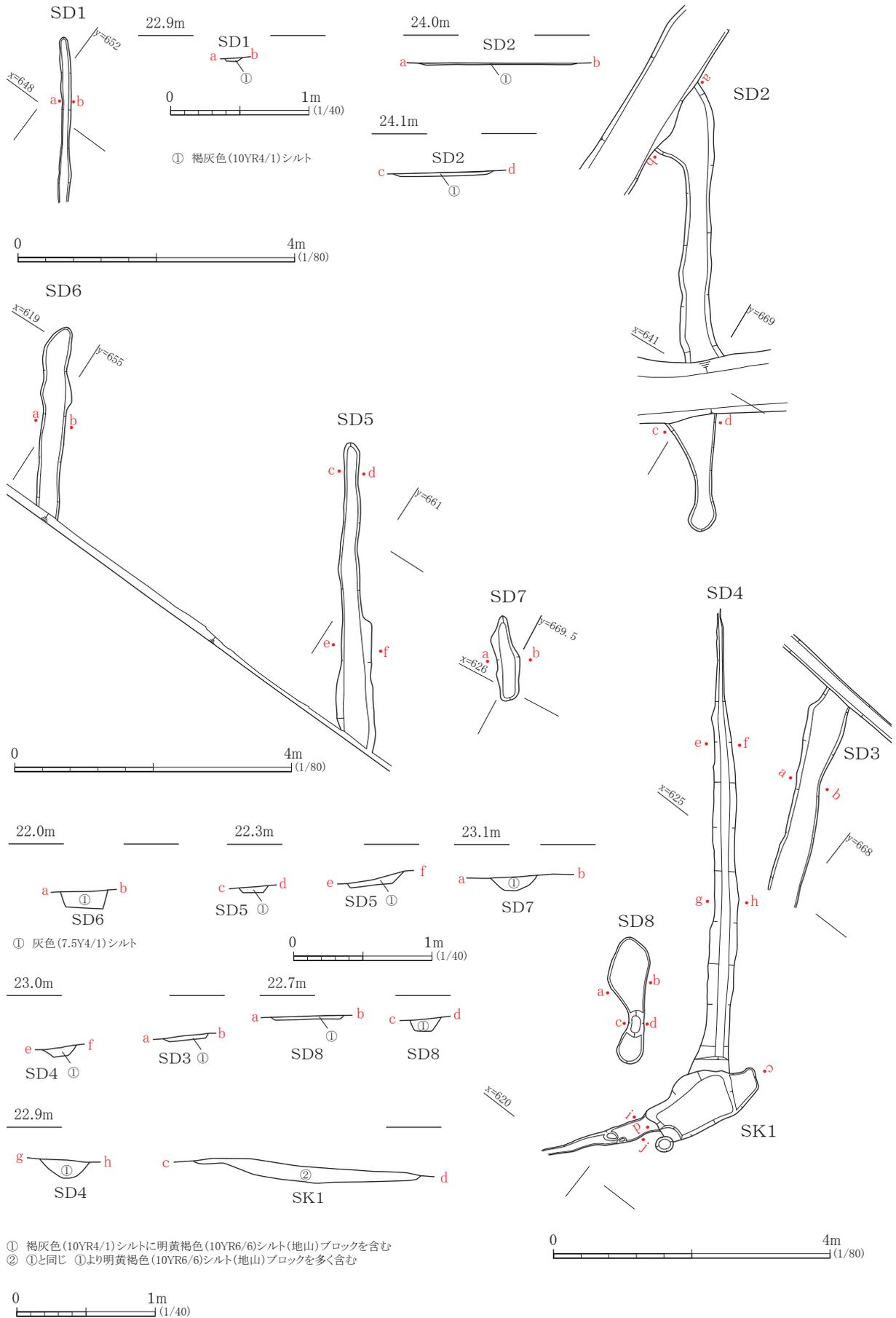


図 43 SD1~8・SK1平面図・断面図

吉田構内(吉田遺跡)の調査

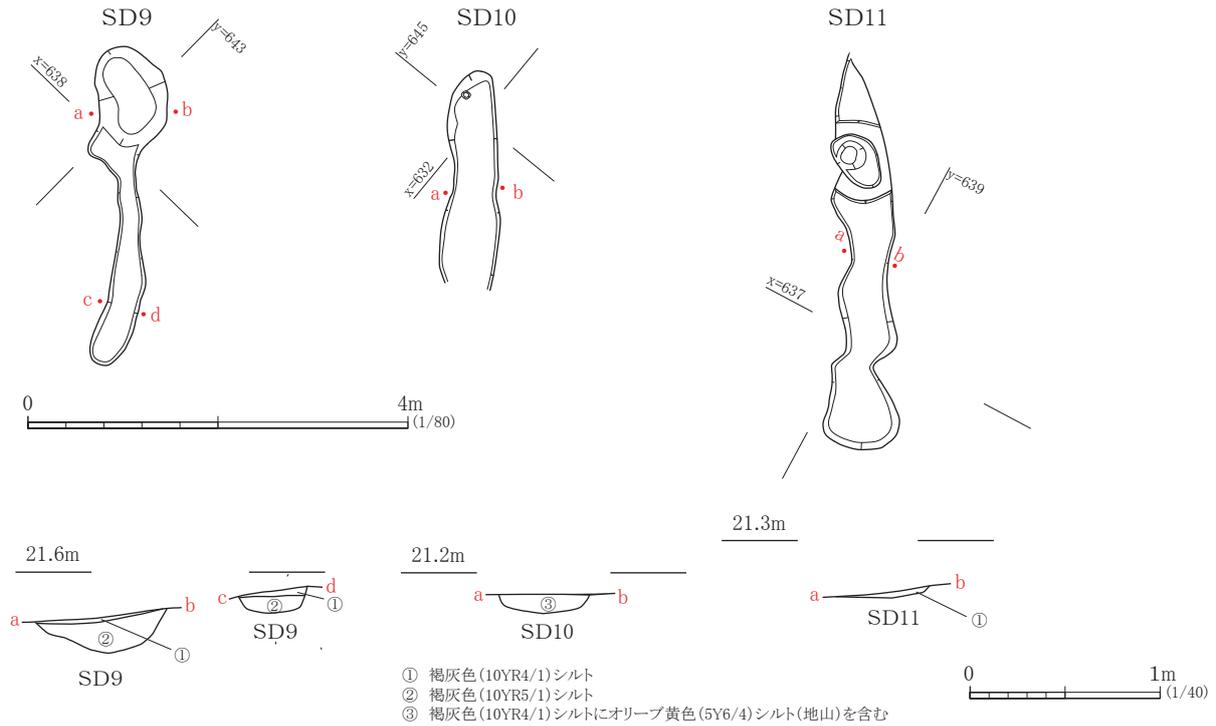


図44 SD9～11 平面図・断面図

たとえられるため、所属時期は同層が堆積した16世紀以後と推測される。

SE2(図45・写真94～96)

調査区南東部において検出した石組みの井戸で、北東部側は水田暗渠・攪乱により削平を受けている。検出時に確認した堀方の平面形は攪乱によりやや不整形を呈するが、本来は隅丸長方形であったと推測される。長軸186cm×短軸177cmの規模で、長軸方向は北東－南西である。石組みには河原石を使用しており、上部が一部崩れた状態であった。また、東側は堀方が2段になっていたほか、裏込めに灰色粘土を使用していた。石組みの内法は上部で115cm前後と推測される。下部の内法は62～68cmである。底面には曲物桶を設置する。検出面の標高は22.10～22.15mで、検出面からの深さは128cm以上である。第6層まで掘削を行い、記録作業を行っていたところ、石が崩落し、安全上の観点から直ちに埋め戻さざるを得なかったため、記録作業を完全に行うことができなかった。

埋土のうち、第4層からは瓦質土器播鉢口縁部、第5層からは曲物柄杓、青磁碗片、植物遺体、第6層からは土師器皿、曲物片、用途不明木製品、植物遺体等の遺物が出土している。土師器皿・瓦質土器播鉢の特徴から14世紀に属するものと考えられる。

なお、北西隅・南隅に位置する柱穴から覆屋が付属していた可能性があるが、SE2北東側は攪乱により遺構が失われているため、詳細は不明である。また、位置関係からSB11～13との関連が考えられるが、SB11～13からは土師器小片しか出土しておらず、詳細な時期が不明であるため、断定はできない。

土壌

18基の土壌を検出した。以下主要なものについて報告する。

SK1(図43・写真88)

調査区南東部でSD4を切った状態で検出された。また、南隅は柱穴に切られている。長軸169cm、短軸86cm、検出面からの深さは最深部で15cm。同底面の標高は22.5mである。底面は東部が高く、西側にかけて落ち込んでいる。埋土からは土師器片、瓦質土器足鍋脚部が出土している。

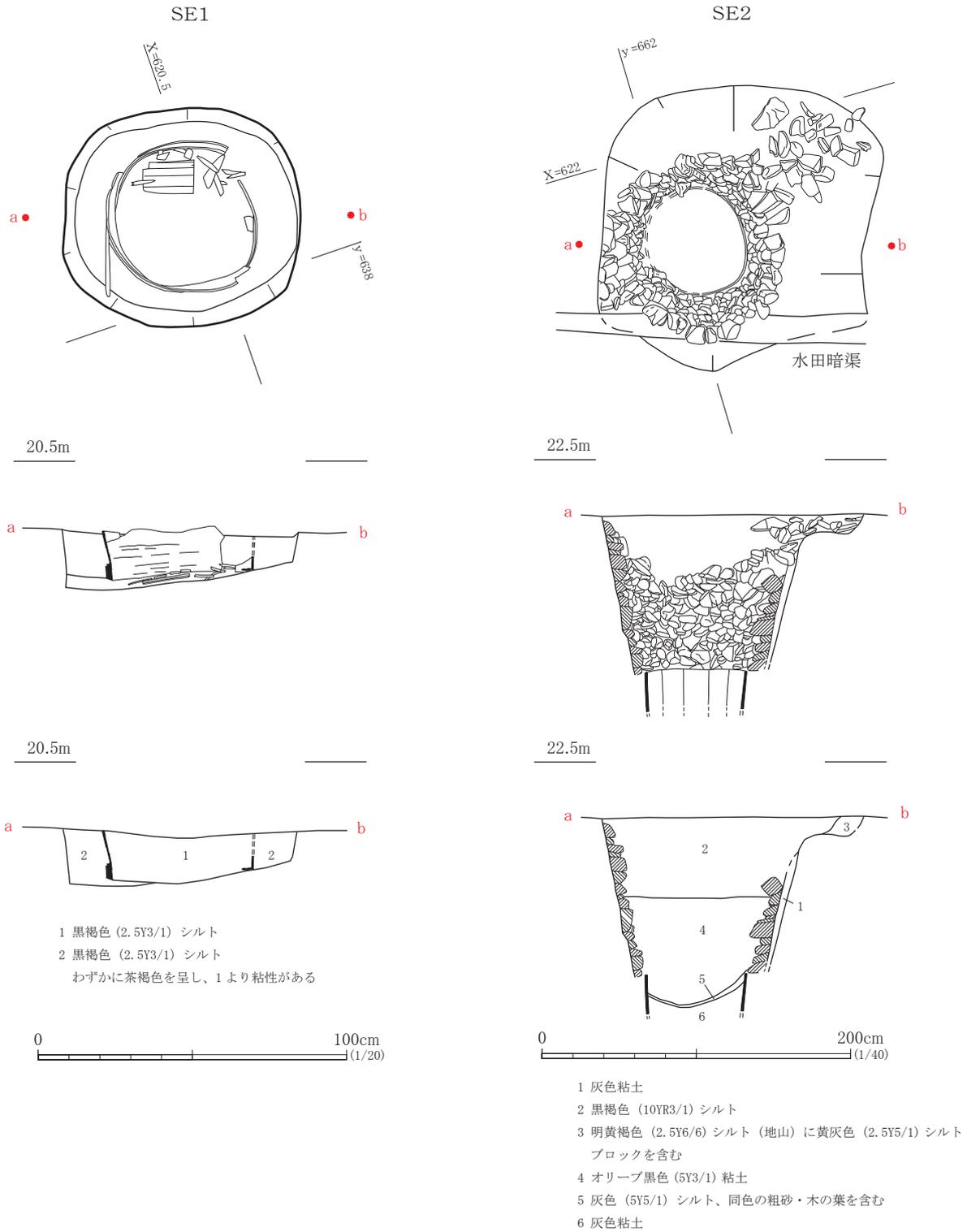


図 45 SE1・2平面図・断面図

SK2(図46・写真97)

調査区北東部、SD2南側の東壁沿いで検出された。調査区外に広がるため全形は不明。長軸122cm、短軸58cm、検出面からの深さは最深部で34cm。同底面の標高は23.43mである。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトで、周辺の遺構埋土がいずれも灰色系であるのと異なる。出土遺物はないが、埋土の色調から古代以前の遺構の可能性はある。

SK3(図46・写真98)

調査区の南東部でSB10と重複して検出された。また、南東隅をSB9(G-7区Pit28)に切られる。長軸125cm、短軸85cm、検出面からの深さは最深部で8cm、同底面の標高は22.37mである。埋土からの出土遺物はない。

SK4(図46・写真99)

調査区北部、SB17の北側に位置する。調査区外に広がるため全形は不明。予備発掘調査のC調査区内に位置しており、やや掘り下げた状態で検出した。長軸190cm、短軸124cm、検出面からの深さは最深部で37cm、同底面の標高は21.42mである。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトで、周辺の遺構埋土がいずれも灰色系であるのと異なる。出土遺物はないが、埋土の色調から古代以前の遺構の可能性はある。

SK6(図46・写真100)

調査区北西部、SB19の北側に位置する。水田暗渠に切られる。長軸320cm、短軸220cm、検出面からの深さは最深部で25cm、同底面の標高は20.96mである。また、底面で深さ5～16cmの柱穴を8基検出した。土壌埋土、柱穴埋土からの出土遺物はない。

SK8(図47・写真101・102)

調査区の北東部、SB1とSB14の間に位置する。遺物包含層である第4-1層上面から掘り込まれていることを確認したが、埋土の色調が近似していて検出が困難であったため、第4-1層掘削後に検出作業を行った。長軸320cm、短軸220cm、検出面からの深さは最深部で42cm、同底面の標高は22.35mである。底面は東部が高く、西側にかけて落ち込んでいる。埋土は褐灰色(10YR4/1)シルト・明黄褐色(2.5Y7/6)シルト(地山)・オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトのブロック土の単一層である。同層からは土師器片、須恵器片、瓦質土器播鉢胴部片が出土している。また、床面中央から西部では臥せられた状態の土師器皿が1点、自然石が2点出土している。以上の状況から人骨は出土しなかったものの、土壙墓の可能性が高い。瓦質土器、土師器皿の特徴から15～16世紀に属するものと考えられる。

不明遺構(落ち込み)

4基の不明遺構を検出した。このうち、SX1～3について報告する。

SX1・2(図46・写真103)

調査区北西部、SB19と重複して検出された。SD11を切っているが、SX2のほか、SB19を構成するE-3区Pit1、11に切られる。不整形を呈しており、長軸521cm、短軸239cm、検出面からの深さは最深部で7cm、同底面の標高は21.14mである。埋土からは木片1点が出土しているのみである。性格は不明であるが、整地層もしくは雨水等の浸食による自然地形の落ち込みであった可能性がある。

SX2は長軸223cm、短軸207cm、検出面からの深さは最深部で約6cm、同底面の標高は21.13mである。また、底面で深さ11～16cmの柱穴を2基検出した。SX2、柱穴埋土から遺物は出土していない。

SX3(図46・写真104)

調査区北部、SB15、16の北側で検出した。中央を柱穴及び水田暗渠に切られるほか、棚田造成時の削平を受けている。調査区北部に広がるため、全形は不明である。長軸335cm、短軸191cm、検出面からの深さは最深部で14cmで、同底面の標高は22.07mである。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトに明黄褐色(10YR6/6)シルトブロックを含む。また、北壁断面では黒褐色(10YR3/2)シルトの埋土を確認している。出土遺物はなく性格は不明であるが、埋土の色調から古代以前の遺構の可能性はある。

柱穴群

約700基の柱穴が検出された。柱穴の大半は第5層上面で検出されたが、北東部においては遺物包

含層である第4-1層、中央部においては谷埋土上層を検出面として柱穴が検出された。谷埋土上面で検出した柱穴の埋土は谷埋土と色調・土質が近似しており、検出が困難であったため、今回報告したものの以外にも谷埋土から掘りこまれた柱穴が存在した可能性がある。なお、調査区壁面においても精査を行ったが、谷埋土を掘り込む柱穴は存在しなかった。また、調査区南西部の柱穴は検出面からの深さが5cm未満のものが多く、一部は染みこみもしくは凹みに谷埋土が残存していたものであった可能性がある。以下、遺物が出土している柱穴2基、谷埋土、第4-1層上面で検出された柱穴について報告する。

G-7区Pit26(図48・写真106)

溝群2底面で検出した。長軸18cm、短軸16cm、検出面からの深さは26cmである。底面近くからは土師器皿の底部が伏せられた状態で出土している。

H-7区Pit5(図48・写真107)

長軸26cm、短軸18cm、検出面からの深さは26cmである。埋土上位から青磁碗底部が出土している。

谷埋土上面で検出された柱穴(図49・写真108・109)

調査区中央部の土層観察用畦を精査中に、谷埋土上面を検出面として、D-6区Pit4、E-6区Pit12、13の3基の柱穴が検出された。柱穴の直径は14~26cm、検出面からの深さは10~20cmである。D-6区Pit4から瓦器椀口縁部1点、土師器片2点、E-6区Pit12から土師器片2点が出土している。検出面は灰黄色褐色(10YR4/2)シルトで、土師器、須恵器、瓦質土器片を含む。また、これらの柱穴も谷埋土で、土師器片、瓦質土器足鍋脚部等含む灰色(5Y4/1)、褐灰色(10YR4/1)シルト等に覆われている。検出層及びその上層とも前述した谷埋土上層に相当する。以上から、これらの柱穴は14~16世紀に属すると考えられる。

第4-1層上面で検出された柱穴(図49・写真110)

調査区北東部の第4層上面でH-6区Pit1、2を検出した。Pit2上面では検出時に土師質こね鉢が張りついた状態で出土し、Pit1埋土からも同一個体が出土している。なお、写真110では、Pit1がPit2を切っているが、土師質こね鉢を取り上げ後、再度上面を精査した結果、Pit2がPit1を切っていたことが判明した。Pit1は長軸32cm、短軸22cm、Pit2は長軸42cm、短軸36cmでいずれも検出面からの深さは2cmである。遺構を検出した第4-1層は岩崎編年Ⅲ型式古段階と考えられる瓦質土器足鍋口縁部を含むことから、Pit1・2は15~16世紀に属するものと推測される。

【近世以降の遺構】(図28・写真111・112)

多数の水田暗渠と、井戸1基(SE3)を検出した。水田暗渠は北西-南東方向に流路方向を持つものと、北-南もしくは北東-南西方向に流路方向を持つものがある。後者は基幹となる暗渠であったようで、直径20cm程度の木材を敷き詰めていた。また、調査区北西部の水田暗渠の肩部には護岸のための杭が多数打ち込まれていた。

暗渠には柴・素焼土管・陶管が使用されており、埋土から近世~現代の陶磁器類が出土している。なお、素焼土管には輪積みの痕跡と外面にハケメを施すものが見られた。恐らく土管木型を使用して製作されたもので、佐野焼である可能性が高い。

SE3は調査区北西部の水田暗渠西側に位置する素掘りの井戸で、水田に伴う施設と考えられる。直径約150cmである。崩落する危険性があったため完掘していないが、検出面からの深さは130cm以上あり、近~現代の陶磁器類・木製品等が出土している。

吉田構内(吉田遺跡)の調査

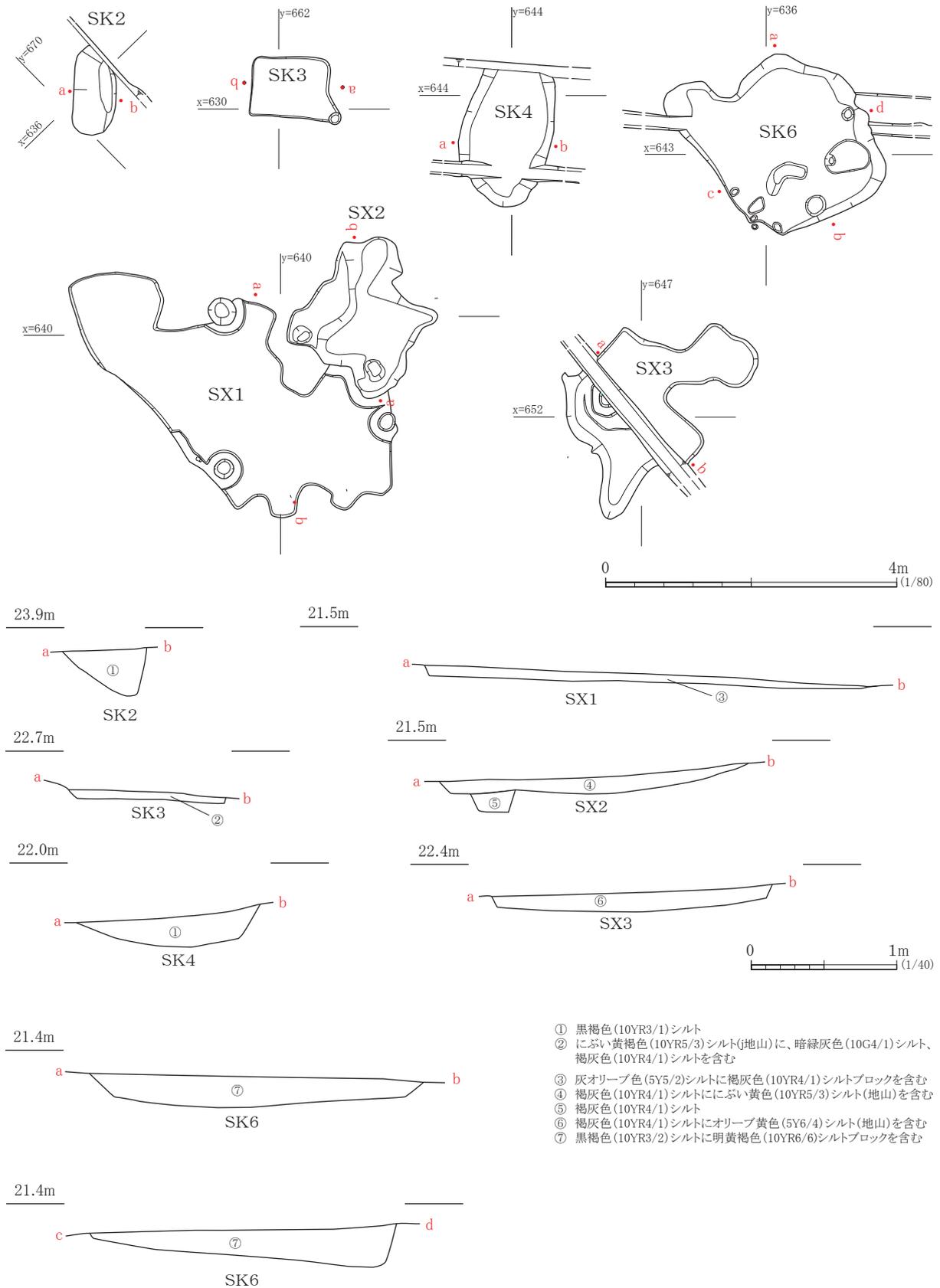


図 46 SK2~4, 6・SX1~3平面図・断面図

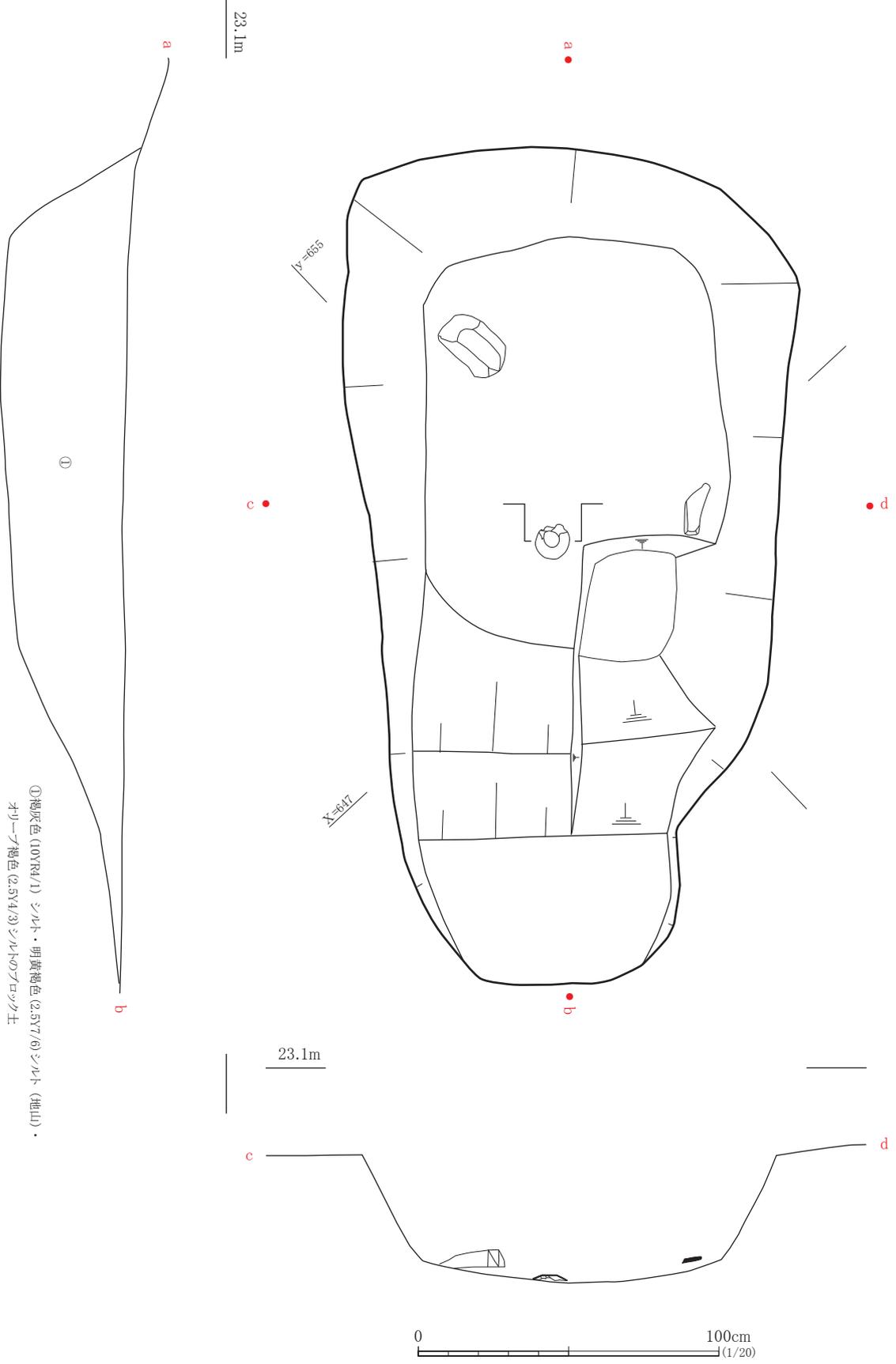


図 47 SK8平面図・断面図

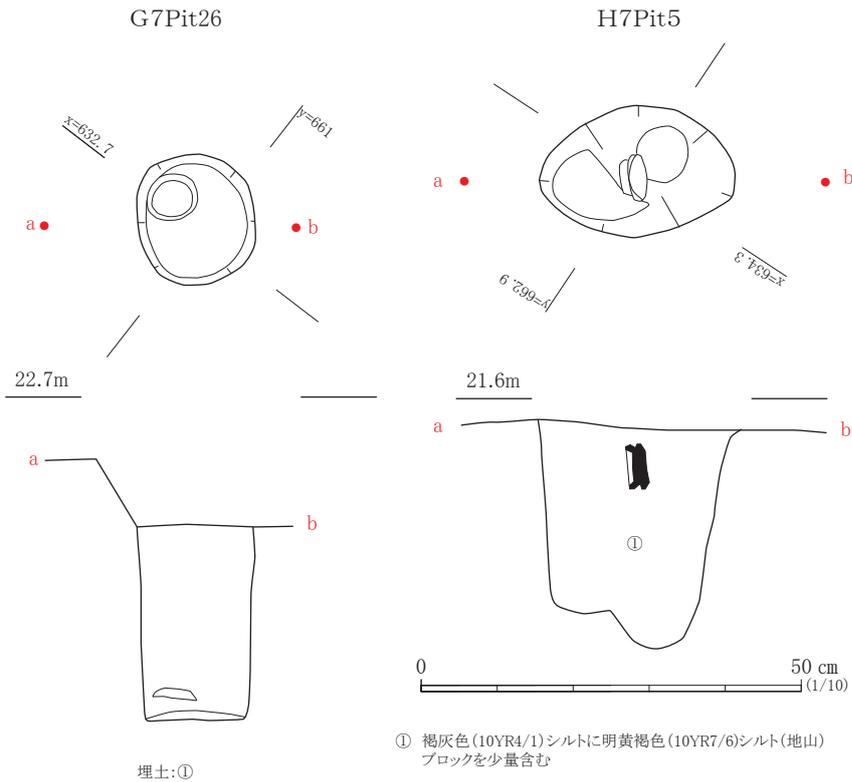


図 48 G-7 区Pit26、H-7 区Pit5、平面図・断面図

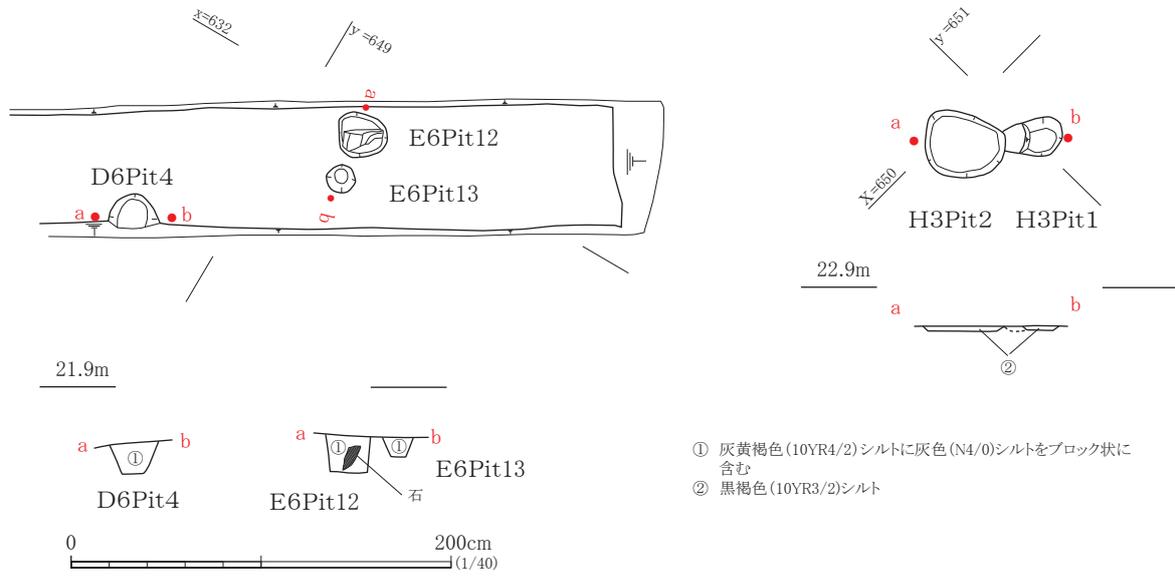


図 49 谷埋土・遺物包含層上面検出ピット平面図・断面図

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真58 調査区全景（北東から）



写真59 調査区全景（西から）



写真60 調査区全景 (西から)



写真61 掘立柱建物跡分布状況1(南から)

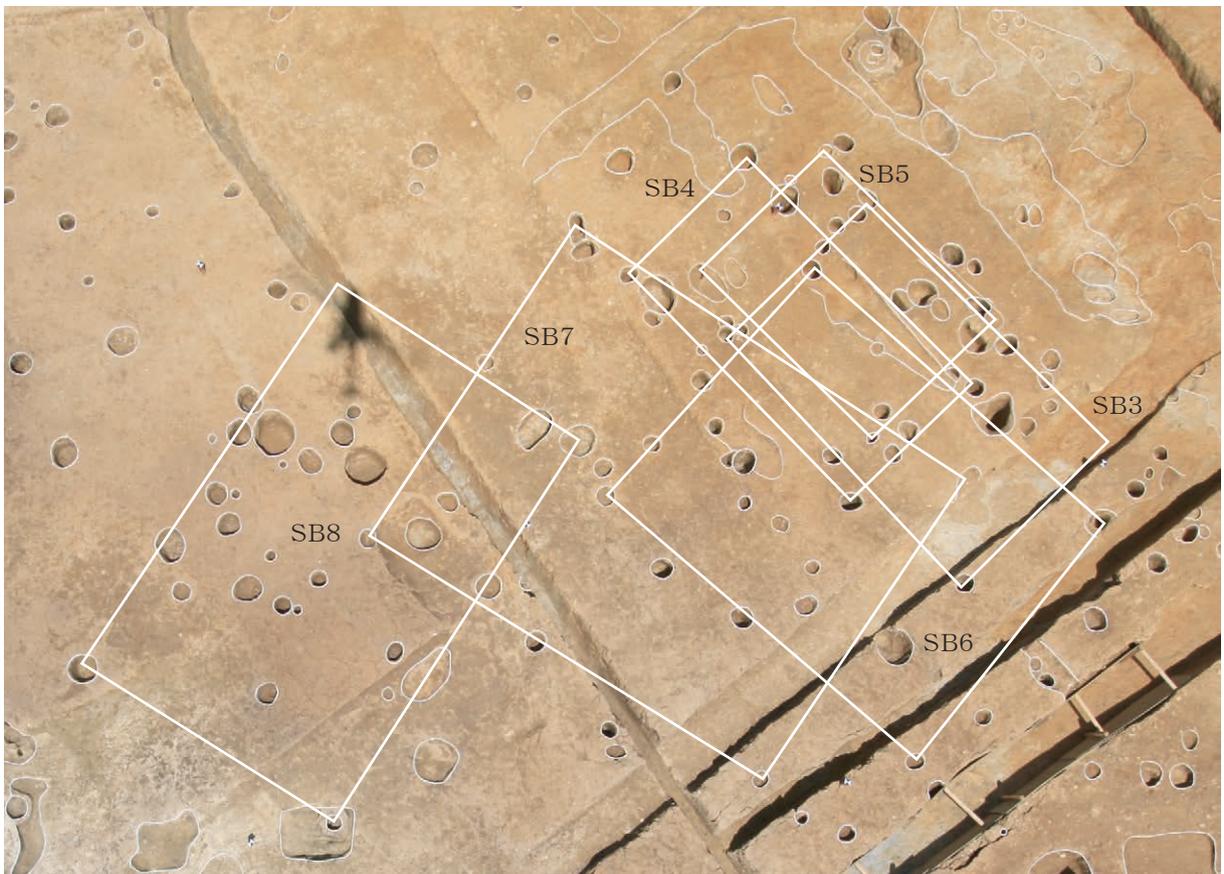


写真62 掘立柱建物跡分布状況2(南から)

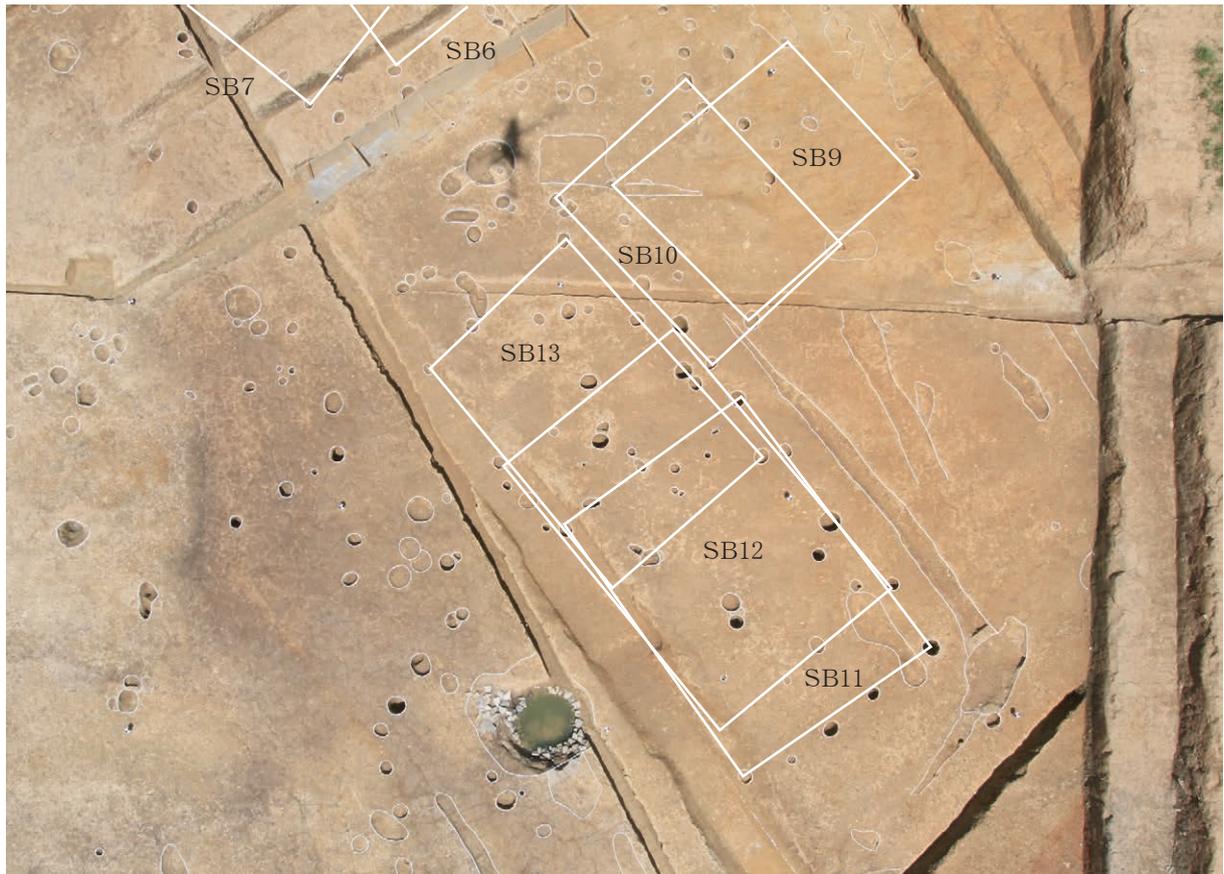


写真63 掘立柱建物跡分布状況3(南から)



写真64 掘立柱建物跡分布状況4(南から)



写真65 調査区北壁(I-I')土層断面(南東から)



写真66 調査区西壁(J-J')土層断面(南西から)



写真67 調査区北壁(A-A')土層断面1(南西から)



写真68 調査区北壁(A-A')土層断面2(南西から)



写真69 調査区北東壁(B-B')土層断面(南西から)



写真70 調査区東壁(C-C')土層断面(北西から)



写真71 調査区東部南壁土層断面(北東から)



写真72 調査区SD5・6付近南壁土層断面(北西から)



写真73 調査区西部南壁土層断面1(北東から)



写真74 調査区西部南壁土層断面2(北東から)

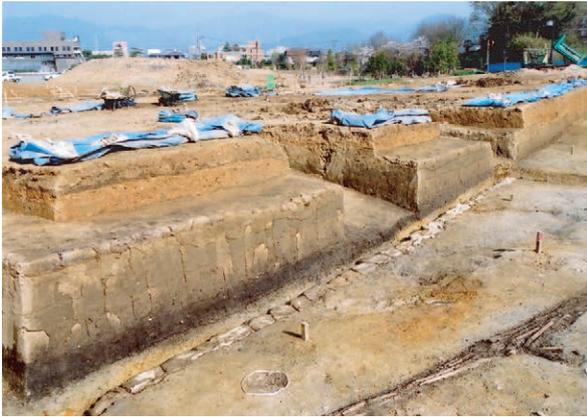


写真75 調査区西壁土層断面(南東から)



写真76 SU1土層断面(南から)



写真77 SB1 I-4区Pit1土層断面(西から)



写真78 SB2 H-4区Pit6土層断面(西から)



写真79 SB4 G-6区Pit15土層断面(南西から)



写真80 SB19 E-3区Pit2土層断面(南西から)



写真81 溝群北部検出状況(北西から)



写真82 溝群土層断面(北西から)



写真83 溝群4土層断面(北西から)



写真84 溝群9・13土層断面(南西から)



写真85 溝群11土層断面(南から)



写真86 調査区北部遺構検出状況(北西から)



写真87 SD1及び周辺Pit土層断面(北西から)



写真88 SD2土層断面(南から)



写真89 SD4・8・SK1土層断面(西から)



写真90 SD7土層断面(北西から)



写真91 SD8土層断面(北西から)



写真92 SD9土層断面(南から)



写真93 SE1土層断面(東から)



写真94 SE2曲物柄杓出土状況(北東から)



写真95 SE2土師器皿出土状況1(北東から)



写真96 SE2土師器皿出土状況2(北東から)



写真97 SK2土層断面(北西から)

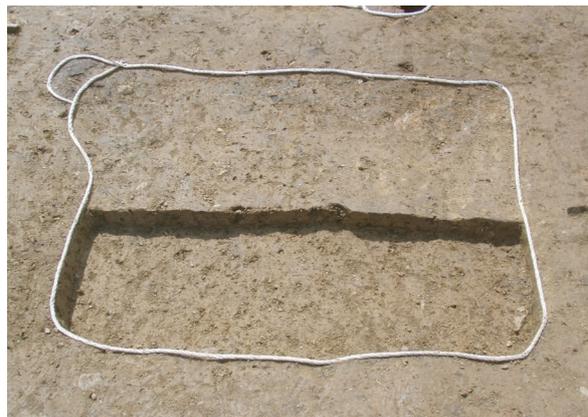


写真98 SK3土層断面(北から)



写真99 SK4土層断面(南から)



写真100 SK6土層断面(南西から)



写真101 SK8土層断面(北から)



写真102 SK8遺物出土状況(北東から)



写真103 SX1土層断面(南東から)

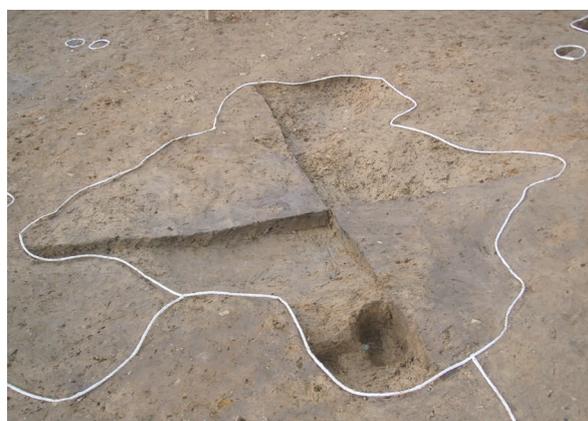


写真104 SX2土層断面(北東から)



写真105 SX3土層断面(南から)



写真106 G-7区Pit26遺物出土状況(北西から)



写真107 H-7区Pit5遺物出土状況土(北西から)



写真108 D-6区Pit4土層断面(南東から)



写真109 E-6区Pit12・13土層断面(西から)



写真110 H-6区Pit1・2遺物出土状況(南西から)



写真111 D-3区水田暗渠(南から)



写真112 C・D-4区水田暗渠(南西から)



写真113 矢板設置 (2月18日 西から)



写真114 機械掘削 (2月20日 北から)



写真115 調査区北東部掘削状況 (3月14日 北西から)



写真116 谷清掃状況 (3月26日 南から)



写真117 谷埋土下層掘削状況 (3月28日 南東から)



写真118 遺構実測 (4月10日 北から)



写真119 遺構清掃状況 (4月18日 南東から)



写真120 空撮 (4月18日 南西から)

表6 掘立柱建物観察表

遺構番号	棟方向	規模(桁行×梁行)	面積()は復元値	出土遺物	備考
SB1	N49°W	3間(6.5m)×1間(2.1m)以上	13.7㎡以上	土師器、須恵器	一部調査区外
SB2	N55°E	2間(3.8m)×1間(2.2m)	8.36㎡	土師器、瓦質土器、青磁碗	
SB3	N37°W	2間(4.2m)×1間(2.5m)	(10.5㎡)	土師器	
SB4	N37°W	2間(3.9m)×1間(2.1m)	8.19㎡		
SB5	N38°W	1間(3.0m)×1間(2.1m)	(6.3㎡)	土師器、瓦質土器	
SB6	N42°W	2間(4.8m)×2間(3.8m)	(18.24㎡)	土師器	
SB7	N52°W	2間(4.8m)×2間(4.7m)	(22.6㎡)	土師器皿、須恵器	
SB8	N38°E	3間(5.5m)×1間(3.6m)	(19.8㎡)	土師器、須恵器	
SB9	N50°E	2間(3.9m)×1間(3.2m)	12.48㎡		
SB10	N42°W	2間(3.7m)×2間(2.9m)	10.73㎡	土師器、瓦質土器	
SB11	N36°W	2間(5.1m)×2間(3.6m)	18.36㎡	土師器	
SB12	N37°W	2間(5.4m)×2間(3.6m)	(19.44㎡)		
SB13	N40°W	3間(4.8m)×2間(3.0m)	(14.4㎡)	土師器	
SB14	N50°W	4間(8.9m)×1間/2間(3.7m)	(32.93㎡)	土師器	一部調査区外
SB15	N36°W	3間(9.1m)×2間(4.4m)	(40.04㎡)	土師器、土師器皿、須恵器	一部調査区外 桁行南西面に庇(1.04m)
SB16	N39°W	3間(8.4m)×1間(3.4m)	(28.6㎡)		一部調査区外
SB17	N40°W	2間(4.6m)×2間(3.4m)	15.64㎡	土師器、須恵器	
SB18	N38°E	2間(5.0m)×2間(3.7m)	18.5㎡	土師器	
SB19	N51°W	2間(4.7m)×2間(4.2m)	(19.74㎡)	土師器、土師器坏、焼土塊	総柱建物

表7 溝・土壇・不明遺構観察表

()は残存値

種類	遺構番号	平面形	規模(cm)			出土遺物	時期	備考
			長さ/長軸 (cm)	幅/短軸 (cm)	深さ (cm)			
溝	SD1		239	10~17	3	土師器		
溝	SD2		(303)	33~117	1~6	土師器、瓦質土器	暗渠に切られる	
溝	SD3		(305)	34~58	3~6	瓦質土器	暗渠に切られる	
溝	SD4		(578)	5~60	2~14	土師器、須恵器、瓦質土器 白磁底部	SK1に切られる	
溝	SD5		(450)	20~52	5~13	土師器皿、須恵器、 瓦質土器	一部調査区外	
溝	SD6		(280)	32~45	3~13		一部調査区外	
溝	SD7		120	16~33	12	瓦質土器		
溝	SD8		180	24~55	2~10	瓦質土器		
溝	SD9		340	19~72	5~24	土師器		
溝	SD10		230	44~60	3~10			
溝	SD11		(414)	39~77	1~6	土師器	柱穴・SX1に切られる	
溝	SD12		153	47~61	6			

吉田構内(吉田遺跡)の調査

種類	遺構番号	平面形	規模(cm)			出土遺物	時期	備考
			長さ/長軸 (cm)	幅/短軸 (cm)	深さ (cm)			
溝	SD13		(109)	37	8			一部調査区外
溝	SD14		124	7~18	4			
溝	SD15		109	33	2	土師器		
溝	SD16		(175)	26~103	9	土師器、須恵器、瓦質土器		一部調査区外 暗渠に切られる
溝	SD17		124	21~46	6			
溝	SD18		105	32~44	15~23			
土壇	SK1	不整形	169	86	15	土師器、瓦質土器(足鍋)		
土壇	SK2	楕円形か	(122)	58	34			一部調査区外
土壇	SK3	不整形	125	85	8			柱穴に切られる
土壇	SK4	楕円形か	(190)	124	37			一部調査区外
土壇	SK5	不整形	(154)	84	15			柱穴に切られる
土壇	SK6	不整形	320	220	25			暗渠に切られる
土壇	SK7	不整形	(177)	103	10			暗渠に切られる
土壇	SK8	不整形	280	152	42	土師器皿		土壇墓か
土壇	SK9	隅丸方形か	(146)	82	16	土師器		一部調査区外
土壇	SK10	不整形	(90)	64	2	土師器		暗渠に切られる
土壇	SK11	不整形	133	82	19			柱穴に切られる
土壇	SK12	円形	89	83	5			
土壇	SK13	不整形	(93)	74	2			SE2に切られる
土壇	SK14	不整形	(119)	69	5	土師器		暗渠に切られる
土壇	SK15	隅丸方形	84	57	14			
土壇	SK16	楕円形	80	53	4			
土壇	SK17	円形	50	45	8			
土壇	SK18	不整形	105	48	5			
不明遺構	SX1	不整形	521	239	7			SD11を切る・SX2に切られる
不明遺構	SX2	不整形	223	207	12			SX1を切る
不明遺構	SX3	不整形	(335)	191	14			暗渠・柱穴に切られる
不明遺構	SX4	不整形	(104)	(20)	16			大半が調査区外

(5)遺物(図50～56、写真121～131、表8・9)

【土器】

SU1出土土器

1は縄文時代晩期の深鉢胴部である。内外面に二枚貝による条痕を施す。

掘立柱建物跡出土土器

2はSB2・H-4区Pit6出土の龍泉窯系青磁碗。内面に草花文、見込みに蓮弁文を施す。3はSB6・G-7区Pit30出土の土師器坏。摩滅が激しく内外面の調整は不明。4はSB7・G-5区Pit13出土の土師器坏底部。底面は糸切りを施す。5はSB10・G-7区Pit6出土の播鉢口縁部。6はSB15・F-3区Pit6出土の土師器皿。摩滅でやや不明瞭であるが、底面中央を穿孔する。7はSB19・E-3区Pit2出土の土師器坏底部。摩滅が激しい。

溝群・その他の溝出土土器

8～10は溝群8出土。8は土師器碗底部。断面三角形の低い貼り付け高台を持つ。9は瓦質土器足鍋口縁部。外面にススが付着する。10は瓦質土器播鉢口縁部。11は溝群9出土の土師器坏。内外面に丹塗りを施す。12はSD3出土の瓦質土器足鍋口縁部。外面にススが付着する。岩崎編年Ⅲ型式古段階。13～15はSD4出土土器。13・14は瓦質土器足鍋口縁～胴部。13は外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。14は外面にススが付着する。岩崎編年Ⅵ型式新段階。15は白磁皿の底部。見込みに1条の沈線を施す。16はSD8出土の羽釜口縁部。17はSD16出土の須恵器坏底部。高台の内端が下方に突出して接地する。18はSD17出土の土師器皿底部。底面は糸切りである。

井戸出土土器

19、20はSE1出土土器。19は土師器坏ないし碗の口縁部。20は土師器碗の底部である。

21～24はSE2出土土器。21、22は第6層出土の土師器坏。内外面にロクロ痕を顕著に残す。底面はいずれも糸切りである。形態から14世紀に属するものと考えられる。23は第5層上面出土の青磁碗の胴部。同層からは曲物柄杓も出土している。24は第4層出土の瓦質土器播鉢口縁部である。ヨコナデにより口縁部を若干肥厚させ、口唇部を面取りする。内面には5条単位の卸目を持つ。口縁部内面に肥厚帯を持たない特徴から、14世紀に属するものと考えられる。

土壙出土土器

25はSK1出土の足鍋脚部。26はSK8底面出土の土師器皿である。摩滅が激しいが内外面にロクロ痕を残す。底面は糸切りである。

柱穴出土土器

27はG-7区Pit24出土の土師器皿。28はG-7区Pit26出土の土師器皿底部である。29・30はH-7区Pit5出土土器。30は青磁碗底部で見込みに印花文を施す。30は瓦質土器甕の胴部。外面に格子目タタキを施す。31はD-6区Pit4出土の瓦器碗口縁部。外面はヨコナデにより凹む。摩滅により調整が判然としないが、内面に暗文状のミガキを施す。32は土師質のこね鉢。口唇部を面取りして、2条の沈線を施す。口縁部内面にも1条の沈線を施す。胴部外面はナデ調整に伴う指頭痕が顕著に残る。内面にはヨコハケを施す。

谷埋土下層出土土器

33～53は谷埋土下層出土土器。33は弥生時代終末期の長頸壺の口縁部～頸部である。頸部外面にタテミガキを施し、胴部内面の上端には接合時の指頭痕が顕著に残る。34は弥生時代後期～終末期の壺底部で、35は弥生時代中期の甕底部。34・35とも風化が激しく調整は不明。36～42は古墳時代の前

～中期の土師器。36は直口壺。外面・口縁部内面にヨコミガキ、胴部内面にケズリを施す。37・38は甕。口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にケズリを施す。38は外面にススが付着する。39は高杯坏部、40～42は高杯脚部である。43は須恵器長頸壺の頸部～胴部である。頸部・胴部最大径の位置に2条の沈線を施す。頸部先端がやや強く外反することから、有段の口縁部を持つと考えられる。44は須恵器甕胴部。45～49は土師器坏。45・48は内底面にヘラ記号を施す。また底面はヘラ切り後、縦方向の板ナデを施す。49は底面糸切りである。これらは周防国府跡の編年^{註2}を参考にすると、10～11世紀に属するものと考えられる。50・51は土師器椀底部である。50は断面長方形の高台、51は端面が丸味を帯びた断面三角形の高台を持つ。52は土師器皿である。口唇部は丸く、底面はヘラ切り後に板ナデを施す。53は土師器台付皿の底部で、底面は糸切りである。

谷埋土上層出土土器

54～85は谷埋土上層出土土器。54は弥生時代後期～終末期の甕である。口縁部は短く折り曲げて外反させ、内外面にヨコナデを施す。胴部外面にはタテハケ、内面にはケズリを施す。55～62は古墳時代前～中期の土師器である。55～58は甕である。57の内面調整が摩滅で不明なほかは、外面にタテハケ・内面にケズリを施す。60は高杯坏部で、直線的に外反し、屈曲部接合部で剥離している。61、62は高杯脚部である。いずれも摩滅が激しい。61は脚部と坏部を円板充填技法で接合する。62は内面にケズリを施す。63～67は須恵器である。63は甕の頸部で内外面にヨコナデを施す。64は高杯脚部で、裾部近くに1条の沈線を施す。65は坏蓋裾部である。端部を丸くおさめ、屈曲部に2条の沈線を施す。還元・焼成は不良である。66は坏底部である。低い高台を底部と胴部の屈曲部に貼り付ける。67は坏底部で、底面にヘラ切り痕を持つ。須恵器は、他に甕胴部片等が出土しているが小片が多く、土師器、瓦質土器と比較して出土量は少ない。

68、69は緑釉陶器である。68は素地が土師質で貼付高台を持つ。摩滅が激しいが、内外面に部分的に釉が残る。69は素地が須恵質で内外面に部分的に釉が残る。73～56は瓦質土器である。73は羽釜の口縁部。74～79は足鍋の口縁部である。これらは前掲の岩崎編年Ⅱ型式(74)、Ⅲ型式古(75～77)、Ⅲ型式新(78)、Ⅳ型式(79)のものがあ、时期的には14世紀後半から16世紀後半までのものを含む。80・81は足鍋の脚部である。81は端部を屈曲させる獣脚である。82は播鉢口縁部で、内面に2条単位の卸目を施す。83は白磁で玉縁の口縁部を持つ。84、85は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。84は外面に蓮弁文を削り出す。85は内面に草花文を施す。

H-2～4区第4-1・2層出土土器

86は瓦質土器羽釜の口縁部。上端を欠損するが、口縁部に接して鏝が貼り付けられる。87は瓦質土器足鍋口縁部である。岩崎編年Ⅲ型式古に属するものか。

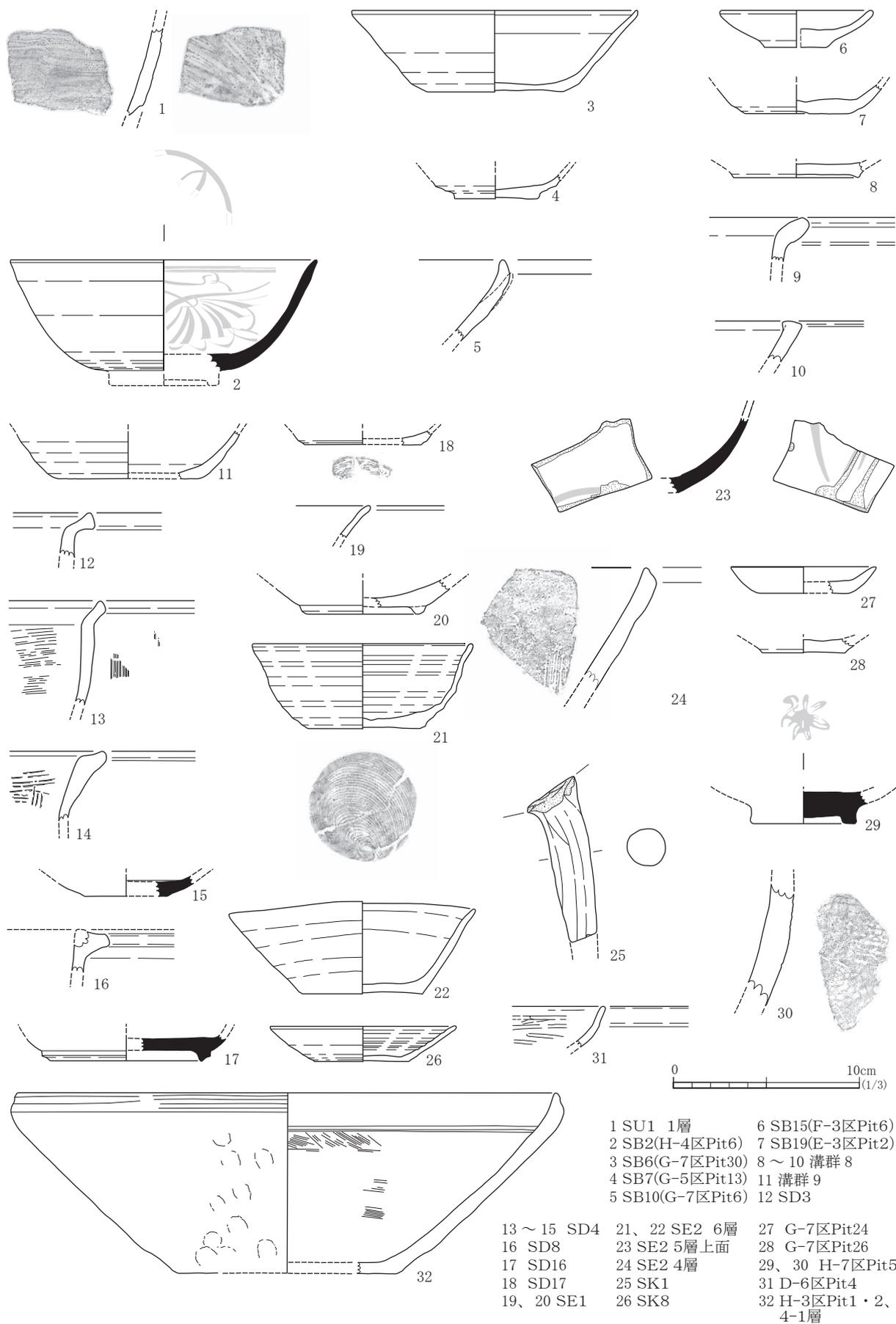
調査区清掃時・遺構検出時出土土器

88は須恵器坏底部。高台をやや底部中心よりに貼り付け、高台の内端面が接地する。89は土師器坏底部で、底面は糸切りである。90は白磁碗の口縁部。内面に1条の沈線を施す。91は瓦質土器播鉢。内面に4条単位の卸目を施す。92は足鍋の脚部で、端部を屈曲させる。

耕土(第3層)・排土表採土器

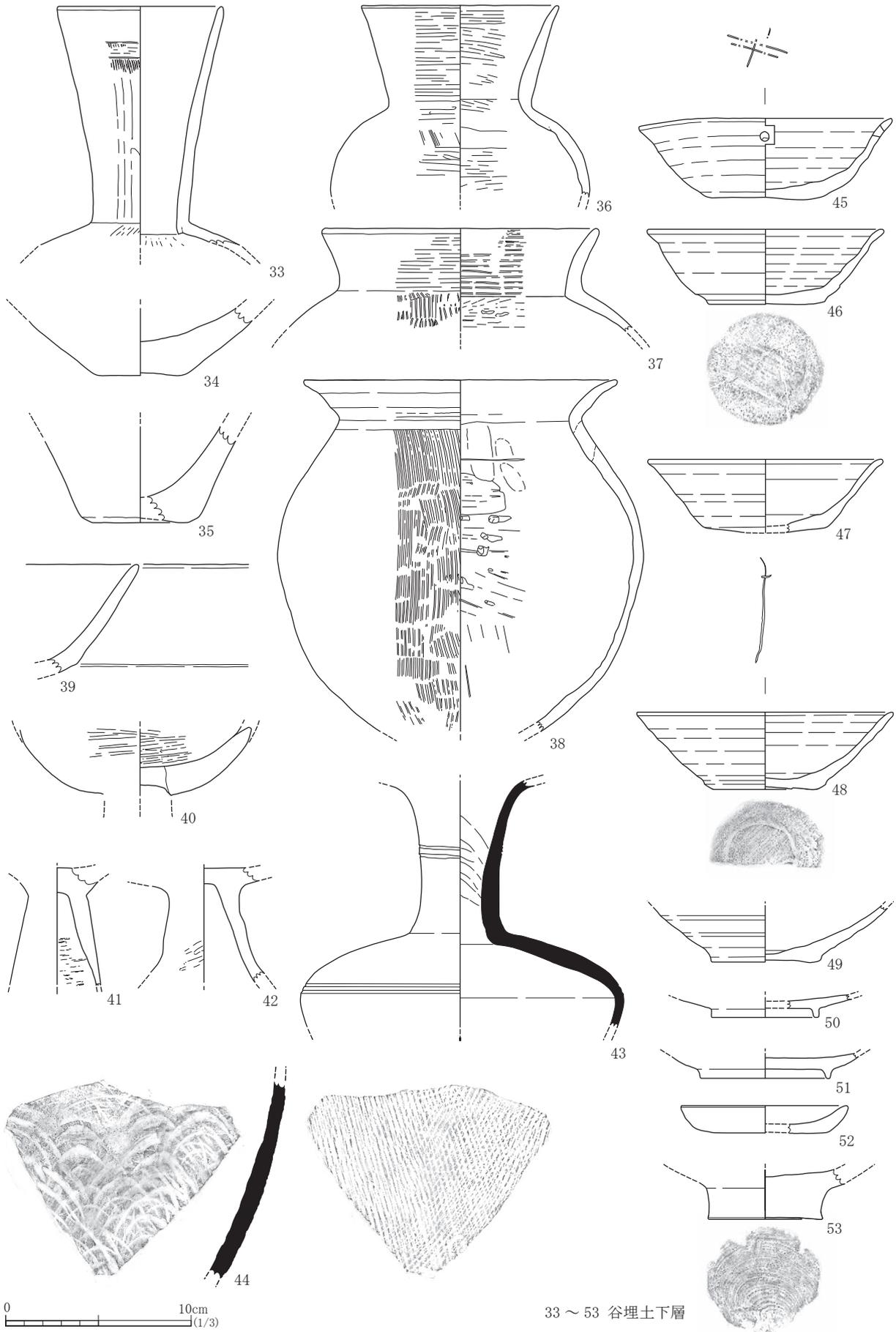
93は白磁皿の底部。94は龍泉窯系青磁碗底部である。内面に1条の沈線を施す。高台内は露胎である。95は須恵器壺の口縁部～胴部である。外面には自然釉が付着する。他に耕土からは土師器、瓦質土器、近世陶磁器等が出土している。

吉田構内(吉田遺跡)の調査



- | | |
|------------------|--------------------|
| 1 SU1 1層 | 6 SB15(F-3区Pit6) |
| 2 SB2(H-4区Pit6) | 7 SB19(E-3区Pit2) |
| 3 SB6(G-7区Pit30) | 8 ~ 10 溝群 8 |
| 4 SB7(G-5区Pit13) | 11 溝群 9 |
| 5 SB10(G-7区Pit6) | 12 SD3 |
| 13 ~ 15 SD4 | 21, 22 SE2 6層 |
| 16 SD8 | 23 SE2 5層上面 |
| 17 SD16 | 24 SE2 4層 |
| 18 SD17 | 25 SK1 |
| 19, 20 SE1 | 26 SK8 |
| | 27 G-7区Pit24 |
| | 28 G-7区Pit26 |
| | 29, 30 H-7区Pit5 |
| | 31 D-6区Pit4 |
| | 32 H-3区Pit1・2、4-1層 |

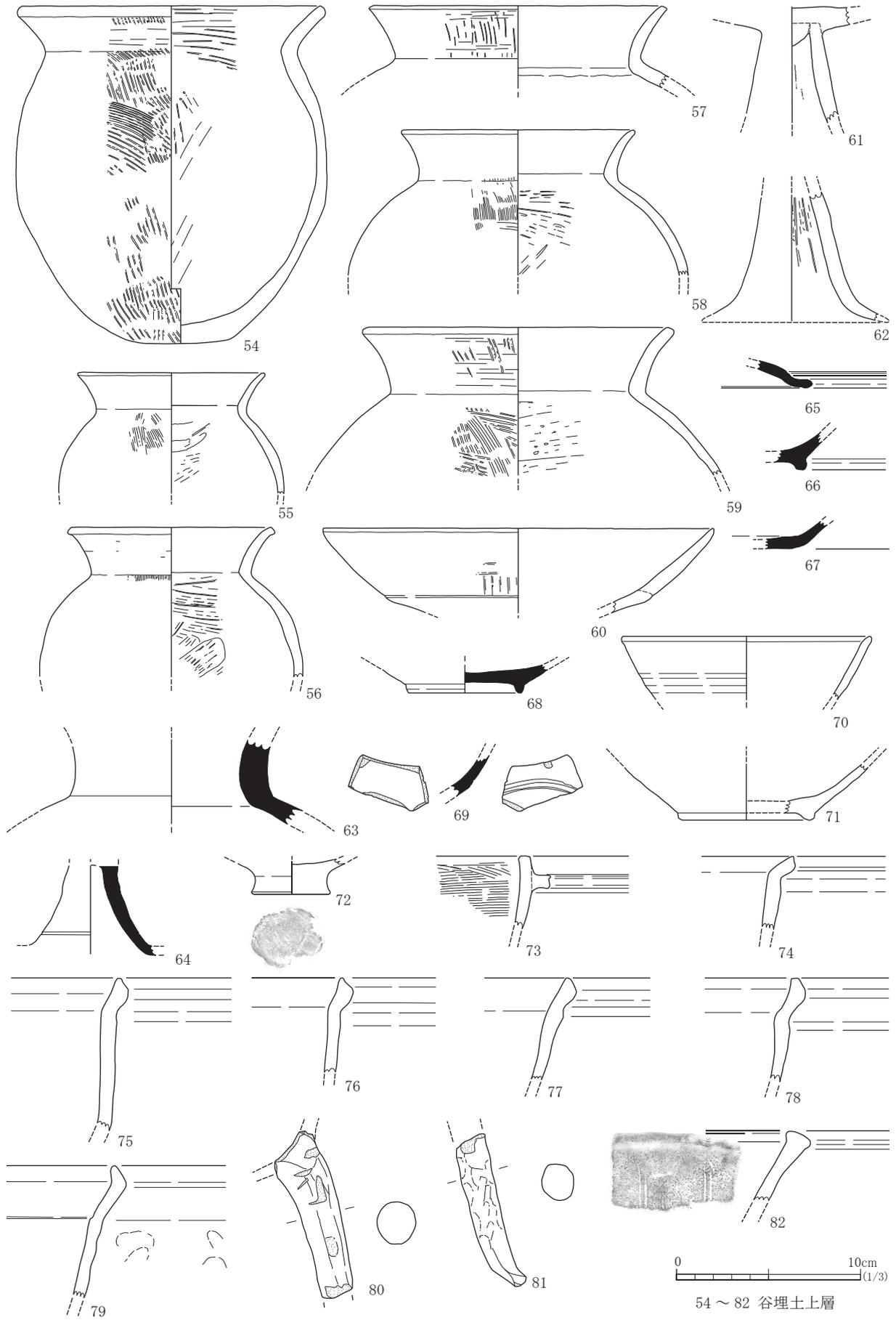
図 50 出土遺物実測図(土器①)



33 ~ 53 谷埋土下層

図 51 出土遺物実測図(土器②)

吉田構内(吉田遺跡)の調査



54 ~ 82 谷埋土上層

図 52 出土遺物実測図(土器③)

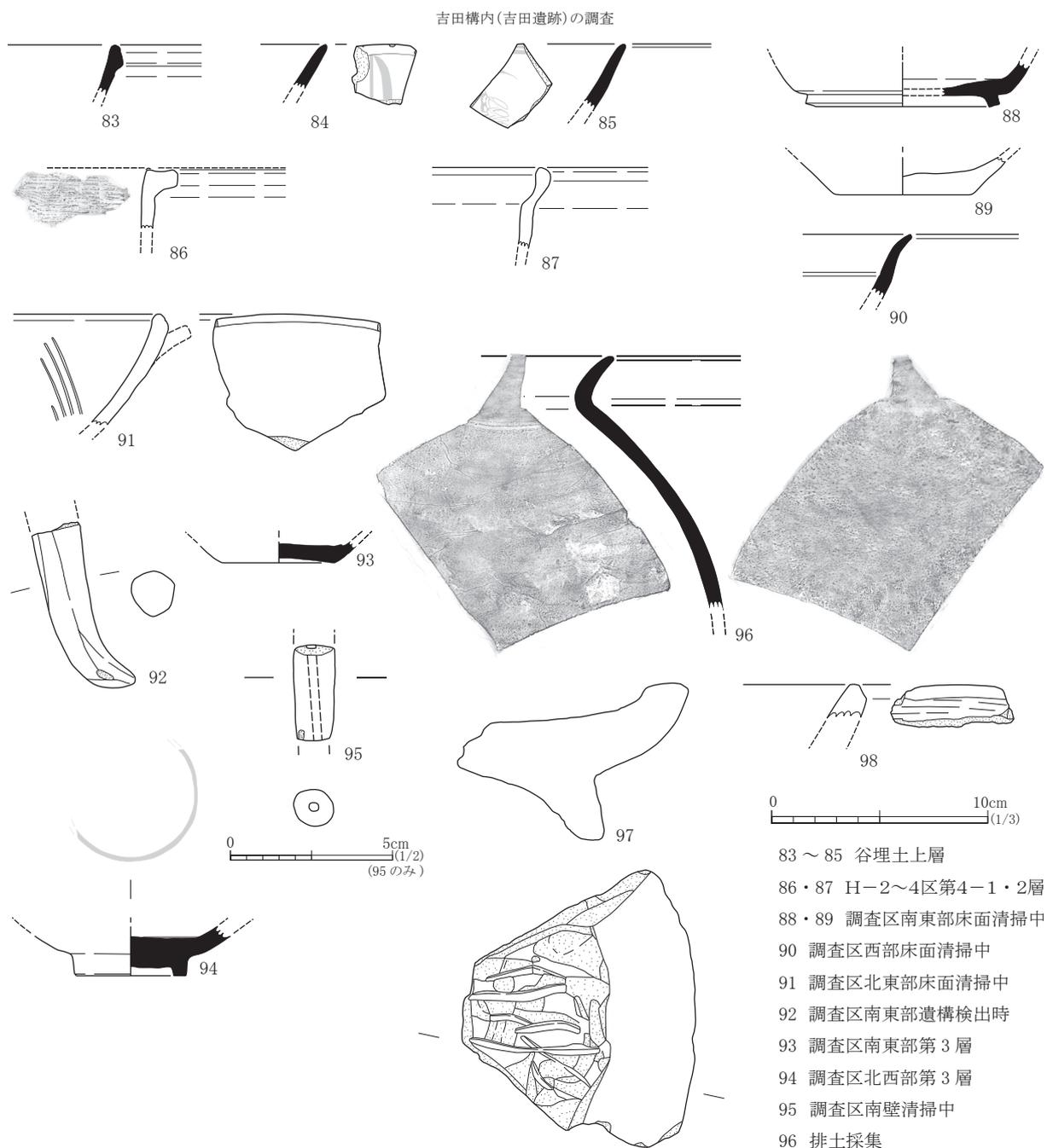


図 53 出土遺物実測図(土器④・土製品・石器)

【土製品】

95は調査区南壁清掃中に出土した土錘である。上・下端部を欠損する。

【石製品】

97は谷埋土下層(底面)出土の石臼の上臼片である。全体的に風化が激しい。主溝4条とこれに斜交する副溝と見られる溝2条が彫られるが、後者は摩滅のため判然としない。また、供給口・挽き手孔は残存しない。復元径は28.8cmで、石質は砂岩である。98は調査区南東部清掃中に出土した。滑石製石鍋口縁部か。口唇部はやや凹ませて面をとる。内外面とも摩滅するが、外面に施されたヨコミガキが確認できる。

【木製品】

木製品の分類・部位の名称等は主に『木器集成図録 近畿古代篇』^{JE 3}に準拠する。

SB4・G-6区Pit15出土木製品

99は柱。腐食が激しい。ほとんど加工されなかったようであり、節や枝の一部を残す。残存長は28.4cm、最大径は10.9cmである。

SE2第5層上面出土木製品

100は曲物柄杓の身、101は同柄杓の底である。両者は組み合わされた状態で出土したが、上・下端部の一部と身の側板の綴じ合わせ部が破損しており、身と底の結合もはずれていた。取り上げ後、身は固定しなければ広がる恐れがあり、実測が不可能であったことから、実測に先行して保存処理を行った。遺物写真は保存処理後のものである。身の側板の綴じ合わせは1箇所である。綴じ合わせ部は図の左から向かって3列認められる。前列は最上段で樺皮が残存するが、これより下は欠損する。中列は綴孔が8箇所残存する。後列は最上段に樺皮が残存し、これより下に綴孔が2箇所残存する。内面には縦平行線及び斜格子のケビキを入れており、柄孔は身の手前が正方形、奥が長方形を呈する。身と底との結合は5箇所から打ち込んだ木釘で行っている。

谷埋土下層出土木製品

102～122は谷埋土下層出土。102は連歯下駄である。板目材の木表を上面にしてつくる。左半分を欠損しており、現存部も台と歯の境界部分で破損する。前壺は台の中央付近、後壺は歯の内側にあげられている。前壺周辺には指の痕跡が残る。現存長22.5cm、幅7.3cm、最大高5.9cmである。103は皿。白木の挽物で内外面に轆轤目を残す。横木取りで柾目。復元口径17.4cm、器高4.1cm、底径8.4cm。

104は曲物の側板綴じ合わせ部付近の破片である。綴孔が2箇所残存しており、内面には縦方向・斜方向のケビキを入れる。他にも曲物の断片は多数出土している。105～107は円形曲物の蓋の一部である。105は3箇所て結合孔が残存する。また、2箇所て樺皮紐が残存する。内面においては図中央の結合孔て樺皮紐の間に側板の一部が残存するほか、側板の痕跡が残る。復元径は16.6cm、厚さ0.6cm。106は2破片からなり、間を欠損する。結合孔が1箇所て残存し、内面には側板の痕跡が残る。また、外面には墨書がある。赤外線写真から何らかの文字と考えられるが、間を欠損するため、1字もしくは2字であるかを含め、詳細は不明である。復元径は17.1cm、厚さ0.5cm。107は大型品で、中央部でも折損する。現状で木釘による4箇所て結合孔が残存する。復元径38.8cm、厚さ1.0cm。108、109は長方形曲物の底板の一部。108は結合孔が1箇所て残存する。残存長14.5cm、幅3.0cm、厚さ0.35cm。109は全長32.1cm、幅6.4cm、厚さ0.4cmで、結合孔が2箇所て残存する。

110～114は蓋の一部で、復元径は10.4cm(110)～15.3cm(112)、厚さ0.55cm(111)～1.2cm(112)である。115・116は檜扇の一部か。115は要孔、2孔一対の綴目孔の一部て残存する。残存長17.0cm、幅1.4cm、厚さ0.25cm。116は2孔一対の綴目孔の一部て残存する。残存長10.6cm、幅、厚さは116と同数値。117・118は松明灯か。いずれも先端が尖り炭化している。同様な木片は他にも多数出土している。

119～120は不明部材。いずれも断面方形の棒状の部材に2箇所て釘孔と見られる孔がある。121は厚さ0.4cmの板の先端を三角形に尖らせる用途不明品。122は板材。残存長41.1cm、幅6.1cm、厚さ0.85cm。

排土表採木製品

123は皿。白木の挽物で内外面に轆轤目を残す。横木取りで柾目。復元口径17.7cm、器高4.6cm、底径9.7cm。表採時に黒褐色粘質土が付着していたことから、谷下層出土の可能性が高い。

吉田構内(吉田遺跡)の調査

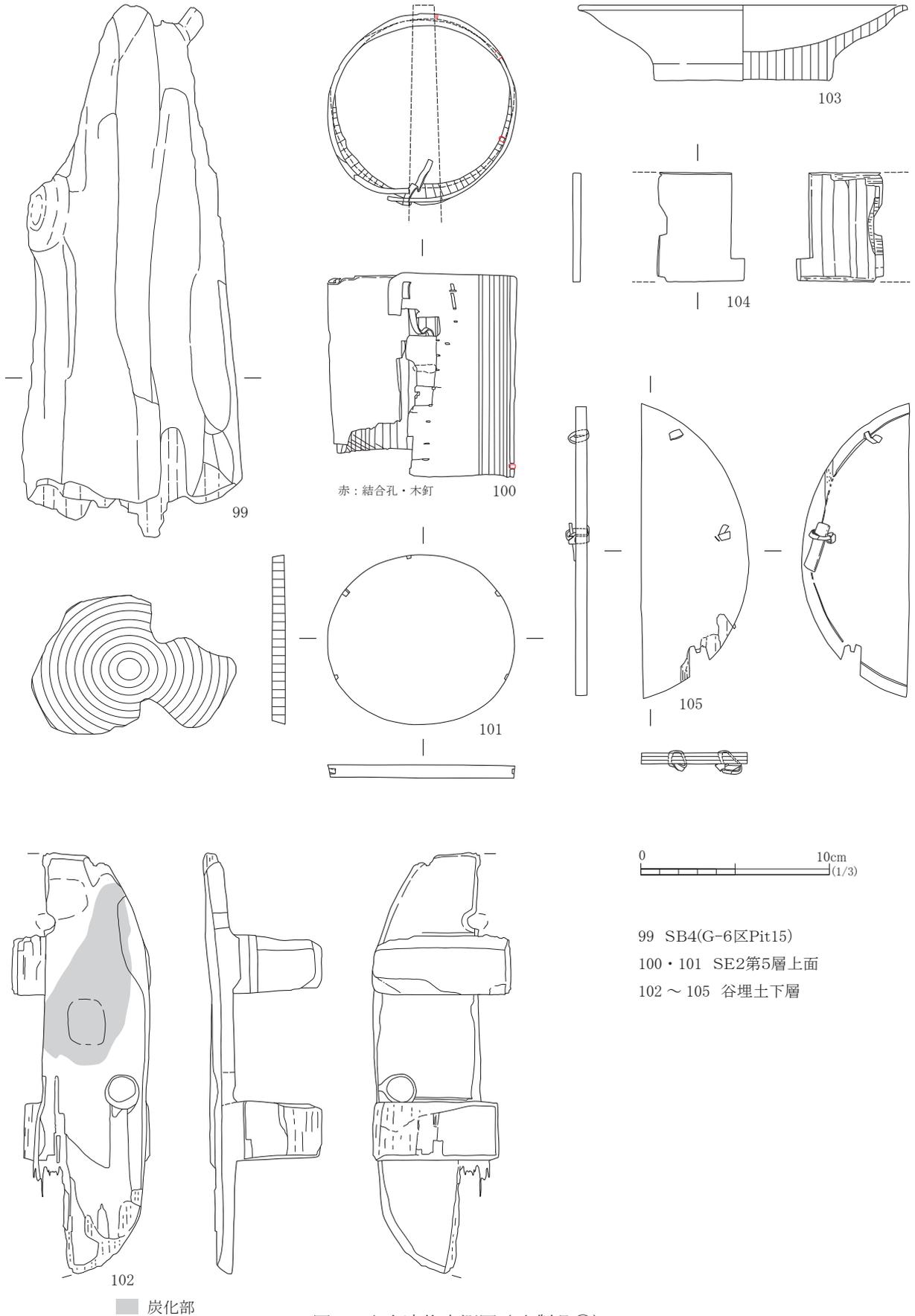


図 54 出土遺物実測図(木製品①)

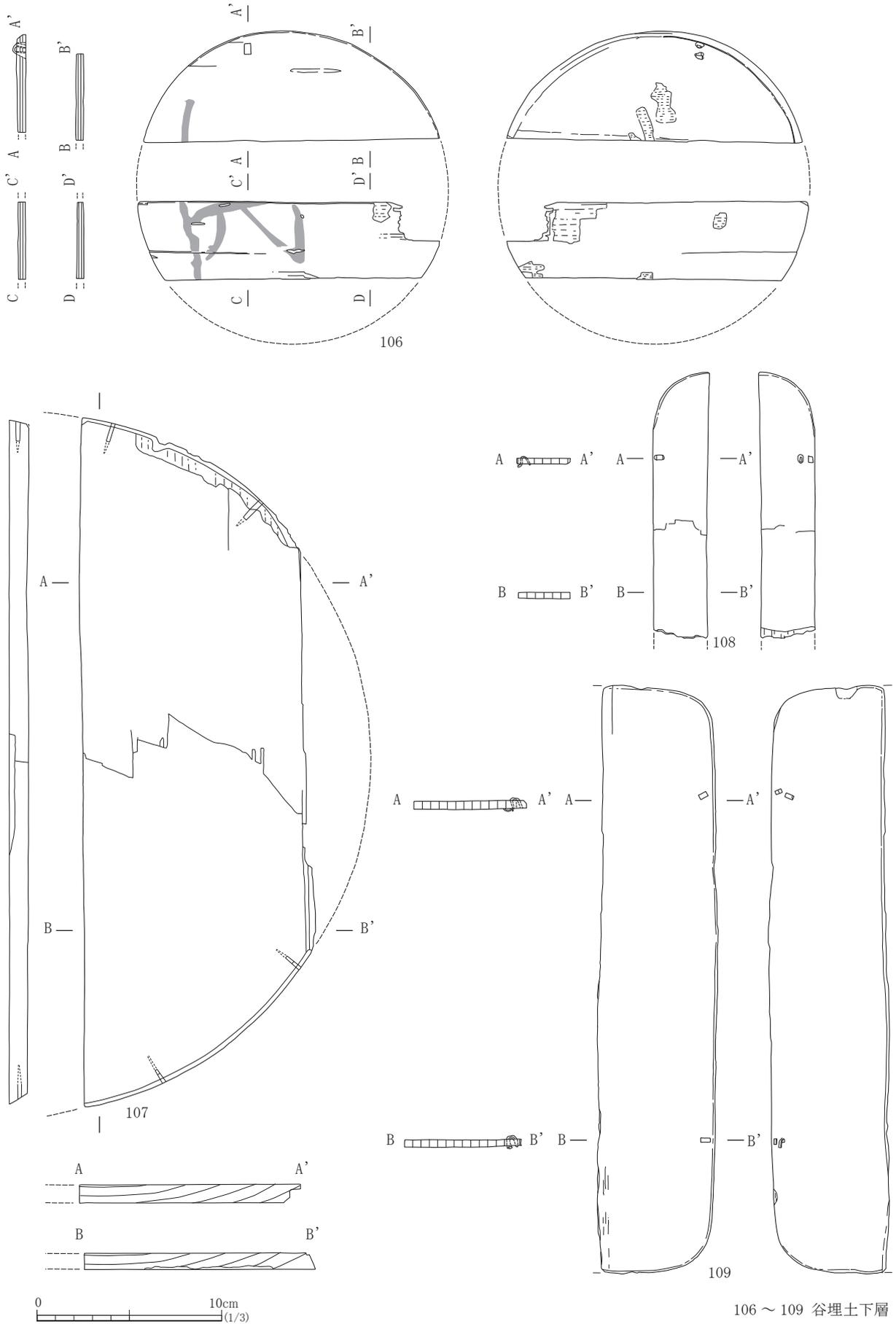


図 55 出土遺物実測図(木製品②)

106 ~ 109 谷埋土下層

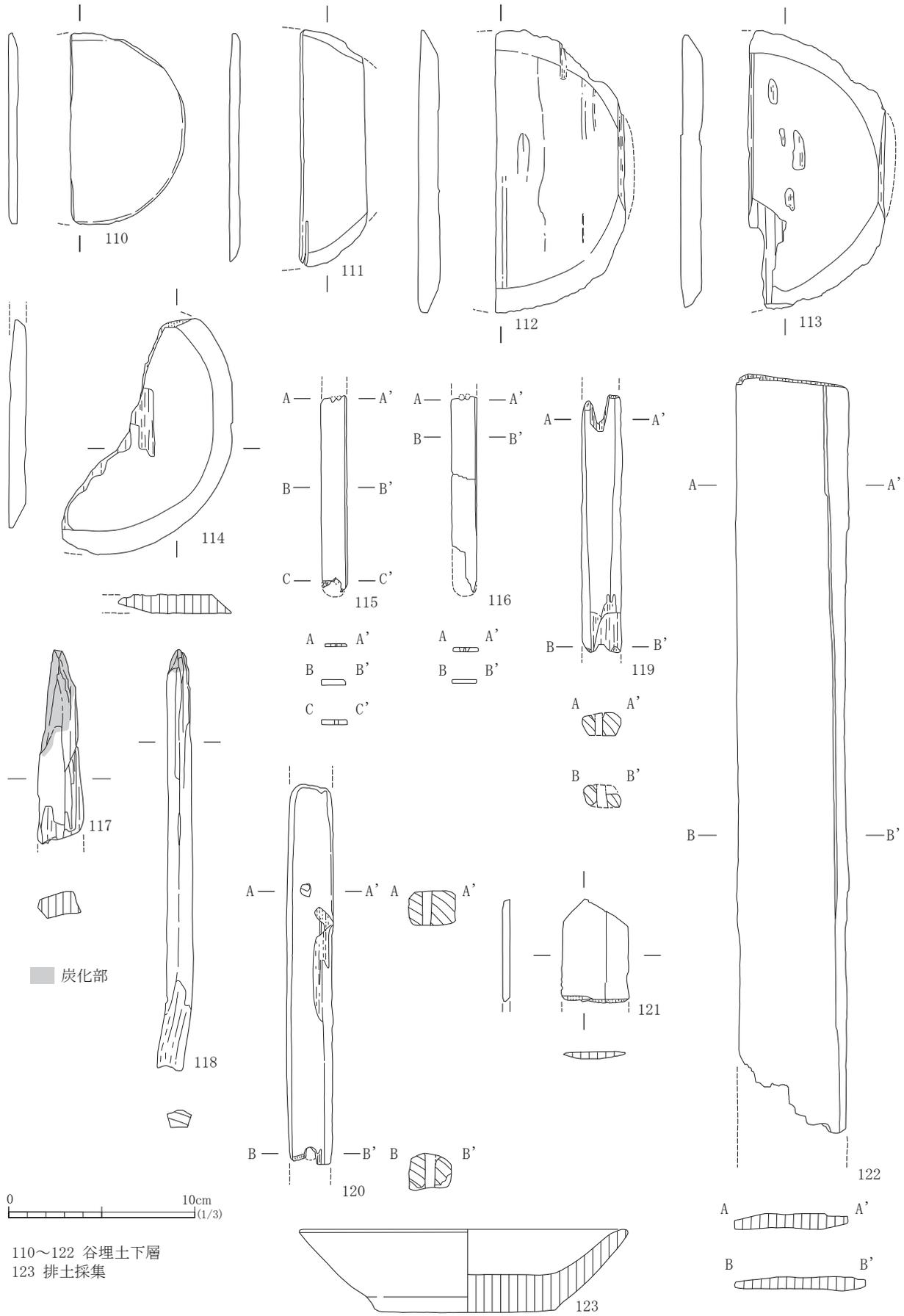


図 56 出土遺物実測図(木製品③)

(6) 小結

谷について

谷は調査区北東部以西で検出された。調査区中央部の落ち込み部は^{註4} 大学会館敷地から連続するものとみられる。同敷地では地山がX=584付近から落ちこんでおり、今回調査区ではX=625以南で落ち込むことから、落ち込み部の南北幅は約41mであることが判明した。また、同敷地北部の谷底面の標高は20.8m前後であったが、約11m北西側に位置する今回調査区の底面は最も低い箇所^{註5} で18.9mで、約1.9mの高低差がある。また、大学会館敷地においては、谷の緩斜面から古墳時代中期の完形の高杯が出土していること、同時期の井戸が見られることから、該期から谷の埋没が開始されたとされる。しかし、今回調査区の谷埋土下層は、出土土器からこれより新しく、瓦質土器を含まないことから、13世紀前半以前に堆積した可能性が高い。また、上層は13～16世紀後半の土器を含むが近世以降の土器を含まない。以上から、谷は古墳時代中期以後も場所によっては浸食を繰り返しつつ、16世紀後半にかけて埋没したと推測される。

遺構について

今回の調査で、縄文時代の貯蔵穴1基、時期不明のものを含むが、14～16世紀を主体とする掘立柱建物跡19棟、溝18条、井戸2基、土壇18基、不明遺構4基、柱穴約700基を検出した。また、統合移転直前まで存在した棚田に伴う水田暗渠群、井戸1基を検出した。

縄文時代の低湿地型貯蔵穴であるSU1は、確実なものとしては吉田遺跡で初めて確認された縄文時代の貯蔵穴である。ただ、検出できたのは1基にとどまった。通常は群集して存在することを踏まえると、SU1周辺で検出されたが、深さが4～14cmと浅く、遺物も出土しなかったSK15～17についても貯蔵穴であった可能性がある。また、谷の開折作用によって削平された可能性も考えられよう。

中世の掘立柱建物は棟方向から、A:N36°～42°WであるSB3～6、10～13、15～17とほぼこれに直交するN50°～55°EのSB2、9、B:N49°～55°WであるSB1、7、14、19とほぼこれに直交するN38°EのSB8、18の2グループに分けることができる。Aグループの掘立柱建物の柱穴からは14～16世紀の瓦質土器片が出土している。一方、Bグループの掘立柱建物の柱穴か柱穴からは、土師器碗、皿、須恵器片等が出土するが、瓦質土器片を含まなかった。以上から、両グループは建物の時期を反映している可能性があるが、遺物は小片かつ量が少ないため、詳細な時期決定を行うことができなかった。しかし、SE2、土壇墓の可能性が高いSK8、掘立柱建物跡の区画溝と見られる溝群やSD4・5など、比較的遺物が多く出土した遺構は、いずれも14～16世紀の土器を含んでいたため、掘立柱建物跡を含め、この時期の遺構が主体であったと考えられる。また、谷埋土を掘りこむ井戸(SE1)や柱穴が見られたことから、谷下層堆積後は埋積が進行するにつれ、谷埋土上も次第に生活面となったことがうかがえる。

調査区周辺では本部2号館敷地で16世紀後半の井戸をはじめ、^{註6} 多数の柱穴が検出されている。立地上は、本部2号館から第2学生食堂敷地にかけてはまとまった平坦面が見られることから、傾斜地に位置する本調査区周辺は集落の縁辺部に位置づけられる。これらの集落跡は、13世紀から戦国期にかけて平川地域を支配していた恒富氏・吉田氏との関連も考えられるため、今後周辺の調査を踏まえて検討を行う必要がある。

近世以後になると、調査区付近一帯は水田化され、集落は本部1・2号館周辺に集約されたと考えられる。なお、本部2号館から第2学生食堂敷地は、古代において吉田遺跡における中心的な地域であったと考えられるが、今回調査区では古代に位置づけられる確実な遺構は存在しなかった。ただし、中世の遺構や谷埋土からは8～9世紀の須恵器が少量出土してるほか、須恵器小片が出土する柱穴が多数

見られたことから、古代の遺構が削平された可能性も考慮すべきであろう。

遺物について

今回の調査では縄文時代晩期から16世紀後半の土器が出土した。縄文土器はSU1から出土した深鉢胴部片1点のみである。弥生土器の量は少なく、摩滅したものが多い。量的にやや多いのは古墳時代中期の土師器で、谷埋土下層・上層から出土している。第2学生食堂敷地では該期の^{註8}堅穴住居跡、^{註9}大学会館敷地では井戸が検出されていることから、調査区内においても集落が存在した可能性が高い。古代の土器は小破片で量も少ないが、谷埋土・中世の遺構・水田耕土等から8～9世紀の須恵器^{註10}坏等が出土している。谷埋土下層からは10～11世紀の土師器坏が出土し、下駄・皿・円形曲物・蓋等多数の木製品が出土したことも注目される。これらの木製品については、出土土器の状況から、10～13世紀前半の時間幅でとらえておきたい。輸入磁器は白磁、龍泉窯系青磁が出土している。大学会館敷地からは破片総数数百点以上出土したとされるが、今回調査区からは、可能性がある小片、耕土等からの出土土器を含めても30点に満たなかった。この他、溝、井戸、土壇、柱穴等の遺構、谷埋土上層からは13～16世紀後半の土器が多数出土した。

今回の発掘調査は限られた期間ではあったが、吉田遺跡における中世集落の実態を知る上で、多大な成果を得ることができた。調査区で検出した谷や掘立柱建物等の遺構は調査区隣接地にさらに広がっているとみられることから、今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意が必要である。

[註]

- 1) 岩崎仁志(2007)「山陽西部における中世の土製煮沸具—周防・長門を中心に—」『中近世土器の基礎研究21』,高槻(大阪)
- 2) 大林達夫(2010)「第七章考察(1)10～11世紀中頃までの土器編年」『周防国府発掘調査報告I』,防府(山口)
- 3) 奈良国立文化財研究所(1985)『木器集成図録 近畿古代篇』,奈良
- 4) 河村吉行(1985)「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口
- 5) 前掲註4 同報告では「古墳時代前期」とされているが、現在の編年観では古墳時代中期に位置づけられる。
- 6) 河村吉行(1990)「付篇Ⅱ 吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』,山口
- 7) 森田孝一(1985)「周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相—吉田遺跡をめぐる諸問題—」『山口大学埋蔵文化財資料館(編)』山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』,山口
- 8) 豆谷和之(1994)「付篇Ⅰ 吉田遺跡第Ⅰ地区E区の調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』,山口
- 9) 前掲註4
- 10) 前掲註7

吉田構内(吉田遺跡)の調査



1-1

SU1第1層



2-1

SB2(H-4区Pit6)



3

SB6(G-7区Pit30)



1-2

SU1第1層



2-1

SB2(H-4区Pit6)



4

SB7(G-5区Pit13)



5

SB10(G-7区Pit6)



7

SB19(E-3区Pit2)



9

溝群8



6

SB15(F-3区 Pit6)



8

溝群8



10

溝群8



11

溝群9



13

SD4



15-1

SD4



12

SD3



14

SD4



15-2

SD4

写真 121 出土遺物(土器①)

吉田構内(吉田遺跡)の調査



16
SD8



18
SD17



20
SE1(第1層)



17
SD16



19
SE1(第1層)



23
SE2(第5層上面)



24
SE2(第4層)



27
G-7区Pit24



29-1
H-7区Pit5



25
SK1



28
G-7区Pit26



29-2
H-7区Pit5



30
H-7区Pit5



31-1
D-6区Pit4



35
谷埋土下層



34
谷埋土下層



31-2
D-6区Pit4



39
谷埋土下層

写真 122 出土遺物(土器②)

吉田構内(吉田遺跡)の調査



21

SE2 第6層



36-1

谷埋土下層



36-2

谷埋土下層



22

SE2 第6層



38

谷埋土下層



26

SK8



32-1

H-3区Pit1・2、第4-1層



32-2

H-3区Pit1・2、第4-1層



43

谷埋土下層



33

谷埋土下層



37

谷埋土下層



40

谷埋土下層

写真 123 出土遺物(土器③)

吉田構内(吉田遺跡)の調査



41

谷埋土下層



46

谷埋土下層



44-1

谷埋土下層



42

谷埋土下層



49

谷埋土下層



44-2

谷埋土下層



50

谷埋土下層



52

谷埋土下層



57

谷埋土上層



51

谷埋土下層



53

谷埋土下層



60

谷埋土上層



61

谷埋土上層



63

谷埋土上層



65

谷埋土上層



62

谷埋土上層



64

谷埋土上層



66

谷埋土上層

写真 124 出土遺物(土器④)

吉田構内(吉田遺跡)の調査



67



68-1



69-1



70



68-2



69-2



71



73



75



72



74



76



77



79



81



78



80



82

67 ~ 82 谷埋土上層

写真 125 出土遺物(土器⑤)

吉田構内(吉田遺跡)の調査



83-1
谷埋土上層



84-1
谷埋土上層



85-1
谷埋土上層



83-2
谷埋土上層



84-2
谷埋土上層



85-2
谷埋土上層



86
H-2~4区第4-1・2層



88
調査区南東部床面清掃中



90-1
調査区西部床面清掃中



87
H-2~4区第4-1・2層



89
調査区南東部床面清掃中



90-2
調査区西部床面清掃中



91
調査区北東部床面清掃中



93
調査区南東部第3層



94-1
調査区北西部第3層



92
調査区南東部遺構検出時



95
調査区南壁清掃中



94-2
調査区北西部第3層

写真 126 出土遺物(土器⑥・土製品)

吉田構内(吉田遺跡)の調査



45-1

谷埋土下層



59

谷埋土上層



45-2

谷埋土下層



56

谷埋土上層



58

谷埋土上層



47

谷埋土下層



96-1

排土表採



97-1

谷埋土下層



48-1

谷埋土下層



96-2

排土表採



97-2

谷埋土下層



48-2

谷埋土下層



54

谷埋土上層



98-1

調査区南東部床面清掃中



98-2

調査区南東部床面清掃中

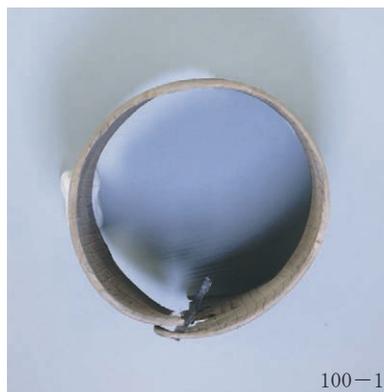


55

谷埋土上層

写真 127 出土遺物(土器⑦・石製品)

吉田構内(吉田遺跡)の調査



100-1



100-2



99-1



99-2



101-1



101-2



105-1



105-2



102-1



102-2



102-3



104-1



104-2

99 SB4(G-6区Pit15)
100・101 SE2 第5層上面
102・104・105 谷埋土下層

写真 128 出土遺物(木製品①)



106 赤外線写真(部分)



106-1



106-2



108-1



108-2



107-1



107-2



109-1



109-2



110-1



110-2

106 ~ 109・110 谷埋土下層

写真 129 出土遺物(木製品②)

吉田構内(吉田遺跡)の調査



111 ~ 117・119・122 谷埋土下層

写真 130 出土遺物(木製品③)

吉田構内(吉田遺跡)の調査



103-1



123-1



103-2



123-2



103-3



123-3



119-1



119-2



120-1



120-2



121-1



121-2

103・118・120・121 谷埋土下層
123 排土表採

写真 131 出土遺物(木製品④)

表8 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)		胎土	備考	
				①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面			
1	SU1 第1層	縄文土器 深鉢	胴部			①灰黄褐色(10YR5/2) ②褐灰色(10YR5/1)	0.1~1mmの砂粒を含む	
2	SB2 H-4区Pit6	青磁 碗	口縁部 ~底部	①(16.6)		素地 灰白色(10YR7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/1)	精良	龍泉窯系
3	SB6 G-7区Pit30	土師器 坏	口縁部 ~底部	①(15.4)②(7.4) ③4.4		①②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1~2mmの砂粒を含む	
4	SB7 G-5区Pit13	土師器 坏	底部	②(4.4)		①灰色(7.5Y4/1) ②褐灰色(10YR5/1)	0.1~3mmの砂粒を含む	
5	SB10 G-7区Pit6	瓦質土器 こね 鉢	口縁部			①灰黄色(2.5Y7/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	0.1~3mmの砂粒を含む	
6	SB15 F-3区Pit6	土師器 皿	口縁部 ~底部	①(8.2)②(3.4) ③2.0		①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~2mmの砂粒を含む	
7	SB19 E-3区Pit2	土師器 坏か	底部	②(5.6)		①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②浅黄橙色(10YR8/3)	0.1~5mmの砂粒を含む	
8	溝群 8	土師器 坏	底部	②(6.7)		①淡黄色(2.5Y8/3) ②青灰色(5PB6/1)	0.1~2mmの砂粒を含む	
9	溝群 8	瓦質土器 足鍋	口縁部			①黄灰色(2.5Y4/1) ②オリーブ黄色(5Y6/3)	0.1~5mmの砂粒を多く含む	
10	溝群 8	瓦質土器 播鉢	口縁部			①②暗灰色(N3/0)	0.1~1mmの砂粒を含む	磨滅激しい
11	溝群 9	土師器 坏	底部	②(7.8)		①赤褐色(10YR6/8) ②淡黄色(2.5Y8/4)	0.1~1mmの砂粒を含む	外面丹塗り
12	SD3	瓦質土器 足鍋	口縁部			①黒褐色(10YR3/1) ②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1~2mmの砂粒を含む	外面スス 付着
13	SD4	瓦質土器 足鍋	口縁部			①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②浅黄橙色(10YR8/3)	0.1~2mmの砂粒を含む	
14	SD4	瓦質土器 足鍋	口縁部			①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1~2mmの砂粒を含む	
15	SD4	白磁 皿	底部	②(4.4)		素地 灰白色(5Y8/1) 釉 浅黄色(5Y7/3)	精良	
16	SD8	瓦質土器 羽釜	口縁部			①灰色(5Y4/1) ②灰色(5Y6/1)	0.1~1mmの砂粒を含む	
17	SD16	須恵器 坏	底部	②(8.2)		①②灰色(N6/0)	0.1~4mmの砂粒を 少量含む	
18	SD17	土師器 皿	底部	②(6.2)		①②にぶい黄橙色 (10YR7/3)	0.1~5mmの砂粒を含む	
19	SE1 第1層	土師器 坏	口縁部			①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~1mmの砂粒を含む	
20	SE1 第1層	土師器 坏	底部	②(6.6)		①灰黄色(2.5Y6/2) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	0.1~1mmの砂粒を含む	
21	SE2 第6層	土師器 坏	口縁部 ~底部	①11.9②6.0③4.6		①②橙色(5YR7/8)	0.1~0.5mmの砂粒を含む	
22	SE2 第6層	土師器 坏	口縁部 ~底部	①6.2~6.8 ②12.4~13.3③5.0		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1~3mmの砂粒を含む	外底面磨滅
23	SE2 第5層上面	青磁 碗	胴部			素地 灰白色(10YR7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/2)	精良	龍泉窯系
24	SE2 第4層	瓦質土器 播鉢	口縁部			①②灰色(N7/0)	0.1~3mmの砂粒を含む	
25	SK1	瓦質土器 足鍋	脚部			①灰色(5Y4/1) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1~2mmの砂粒を含む	
26	SK8	土師器 皿	口縁部 ~胴部	①10.0②5.1③1.9		①②灰白色(10YR8/2)	0.1~3mmの砂粒を含む	磨滅激しい
27	G-7区Pit24	土師器 皿	口縁部 ~底部	②(7.6)②(4.5)③1.5		①②橙色(7.5YR6/6)	0.1~3mmの砂粒を含む	磨滅激しい
28	G-7区Pit26	土師器 皿	底部	②4.5		①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1~2mmの砂粒を含む	磨滅激しい
29	H-7区Pit5	青磁 碗	底部	②5.5		素地 灰白色(2.5Y7/1) 釉 明緑灰色(10GY7/1)	精良	龍泉窯系
30	H-7区Pit5	瓦質土器 甕か	胴部			①②灰色(7.5Y6/1)	0.1~3mmの砂粒を含む	
31	D-6区Pit4	瓦器 椀	口縁部			①暗灰色(N3/0) ②灰色(7.5Y5/1)	精良	
32	H-3区Pit1・2、 第4-1層	土師質 こね鉢	口縁部 ~底部	①29.0②11.6③9.8		①②橙色(5YR7/6)	0.1~3mmの砂粒を含む	
33	谷埋土 下層	弥生土器 壺	口縁部 ~胴部	①(8.8)		①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	0.1~3mmの砂粒を含む	
34	谷埋土 下層	弥生土器 壺	底部	③(5.2)		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい黄褐色(10YR7/2)	0.1~8mmの砂粒を 多く含む	磨滅激しい

吉田構内(吉田遺跡)の調査

遺物 番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
35	谷埋土 下層	弥生土器 甕	底部	②(6.4)	①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②黒褐色(10YR3/1)		0.1~5mmの砂粒を 多く含む	
36	谷埋土 下層	土師器 壺	口縁部 ~胴部	①(10.6)	①灰白色(5Y7/1) ②灰オリーブ色(5Y6/2)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
37	谷埋土 下層	土師器 甕	口縁部 ~胴部	①(14.9)	①にぶい黄褐色(10YR5/3) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)		0.1~5mmの砂粒を 多く含む	
38	谷埋土 下層	土師器 甕	口縁部 ~胴部	①(16.9)	①灰黄褐色(10YR6/2) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)		0.1~6mmの砂粒を 多く含む	
39	谷埋土 下層	土師器 高坏	坏部		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②浅黄色(2.5Y7/3)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
40	谷埋土 下層	土師器 高坏	坏部		①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰黄色(2.5Y6/2)		0.1~1mmの砂粒を 含む	
41	谷埋土 下層	土師器 高坏	脚部		①②にぶい黄色(2.5Y6/3)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
42	谷埋土 下層	土師器 高坏	脚部		①②にぶい浅黄色(2.5Y7/3)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
43	谷埋土 下層	須恵器 長頸壺	頸部~ 胴部		①②灰色(N7/0)		0.1~2mmの砂粒を 含む	
44	谷埋土 下層	須恵器 甕	胴部		①灰色(N5/0) ②灰色(N6/0)		0.1~1mmの砂粒を 少量含む	
45	谷埋土 下層	土師器 坏	口縁部 ~底部	①13.7②6.3③4.4	①灰黄色(2.5Y7/2) ②浅黄褐色(10YR8/3)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
46	谷埋土 下層	土師器 坏	口縁部 ~底部	①(12.8)②6.4③4.1	①浅黄色(2.5Y7/3) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
47	谷埋土 下層	土師器 坏	口縁部 ~底部	①(12.7)②(6.5)③4.0	①②浅黄色(2.5Y7/3)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
48	谷埋土 下層	土師器 坏	口縁部 ~底部	①13.8②6.6③4.2	①②にぶい黄褐色 (10YR7/4)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
49	谷埋土 下層	土師器 坏	胴部 ~底部	②6.1	①にぶい橙色(5YR7/3) ②明褐色(7.5YR7/2)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
50	谷埋土 下層	土師器 椀	底部	②(5.8)	①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰黄色(7.5YR6/2)		0.1~1mmの砂粒を 含む	
51	谷埋土 下層	土師器 椀	底部	②(7.0)	①浅黄褐色(10YR8/3) ②浅黄色(2.5Y7/3)		0.1~1mmの砂粒を 含む	
52	谷埋土 下層	土師器 皿	口縁部 ~底部	①(9.0)②(6.0)③1.5	①②浅黄色(2.5Y7/4)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
53	谷埋土 下層	土師器 台付皿	底部	②6.2	①②灰黄色(2.5Y6/2)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
54	谷埋土 上層	弥生土器 甕	口縁部 ~底部	①(16.7)②(5.4)③18.5	①浅黄褐色(10YR8/3) ②黄灰色(2.5Y6/1)		0.1~6mmの砂粒を 多く含む	
55	谷埋土 上層	土師器 甕	口縁部 ~胴部	①(10.2)	①②橙色(2.5YR6/8)		0.1~3mmの砂粒を 多く含む	
56	谷埋土 上層	土師器 甕	口縁部 ~胴部	①(10.8)	①明赤褐色(5YR5/6) ②橙色(5YR6/6)		0.1~3mmの砂粒を 多く含む	
57	谷埋土 上層	土師器 甕	口縁部 ~胴部	①(16.2)	①にぶい黄褐色(10YR7/4) ②淡黄色(2.5Y8/4)		0.1~3mmの砂粒を 多く含む	
58	谷埋土 上層	土師器 甕	口縁部 ~胴部	①(12.8)	①にぶい黄褐色(10YR6/4) ②橙色(7.5YR7/6)		0.1~4mmの砂粒を 多く含む	
59	谷埋土 上層	土師器 甕	口縁部 ~胴部	①(16.9)	①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)		0.1~5mmの砂粒を 多く含む	
60	谷埋土 上層	土師器 高坏	坏部	①(22.2)	①②浅黄色(2.5Y7/3)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
61	谷埋土 上層	土師器 高坏	脚部		①②浅黄褐色(10YR8/4)		0.1~4mmの砂粒を 含む	
62	谷埋土 上層	土師器 高坏	脚部		①橙色(7.5YR7/6) ②橙色(5YR7/6)		0.1~3mmの砂粒を 含む	
63	谷埋土 上層	須恵器 甕	頸部 ~胴部		①②灰色(N5/0)		0.1~1mmの砂粒を 含む	
64	谷埋土 上層	須恵器 高坏	脚部		①②灰色(N6/0)		0.1~4mmの砂粒を 含む	
65	谷埋土 上層	須恵器 坏蓋	口縁部		①灰黄褐色(10YR6/2) ②明褐色(5YR7/2)		0.1~2mmの砂粒を 含む	摩滅激しい
66	谷埋土 上層	須恵器 坏	底部		①②灰色(5Y6/1)		0.1~1mmの砂粒を 含む	
67	谷埋土 上層	須恵器 坏	底部		①②灰白色(N7/0)		0.1~2mmの砂粒を 含む	
68	谷埋土 上層	緑釉陶器 椀	底部	②(6.2)	素地 灰白色(2.5Y8/2) 釉 オリーブ灰色(10Y6/2)		0.1~1mmの砂粒を 少量含む	土師質 摩滅激しい
69	谷埋土 上層	緑釉陶器 椀か	胴部		素地 灰白色(2.5Y8/2) 釉 灰オリーブ色(7.5Y6/2)		精良	須恵質

吉田構内(吉田遺跡)の調査

遺物 番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
70	谷埋土 上層	土師器 椀	口縁部	①(13.6)		①灰白色(2.5Y8/2) ②灰白色(2.5Y8/1)	0.1~2mmの砂粒を 含む	
71	谷埋土 上層	土師器 椀	底部	②(7.4)		①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	0.1~3mmの砂粒を 含む	
72	谷埋土 上層	土師器 台付皿	底部	②(4.3)		①浅黄色(2.5Y7/4) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~2mmの砂粒を 含む	
73	谷埋土 上層	瓦質土器 羽釜	口縁部			①灰色(5Y6/1) ②灰色(5Y5/1)	0.1~4mmの砂粒を 含む	
74	谷埋土 上層	瓦質土器 足鍋	口縁部			①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②黄灰色(2.5Y6/1)	0.1~3mmの砂粒を 含む	
75	谷埋土 上層	瓦質土器 足鍋	口縁部			①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1~4mmの砂粒を 含む	
76	谷埋土 上層	瓦質土器 足鍋	口縁部			①灰色(7.5Y5/1) ②灰色(7.5Y6/1)	0.1~3mmの砂粒を 含む	
77	谷埋土 上層	瓦質土器 足鍋	口縁部			①灰黄色(2.5Y6/2) ②淡黄色(2.5Y8/3)	0.1~3mmの砂粒を 含む	
78	谷埋土 上層	瓦質土器 足鍋	口縁部			①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y6/1)	0.1~2mmの砂粒を 含む	
79	谷埋土 上層	瓦質土器 足鍋	口縁部			①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰色(7.5Y5/1)	0.1~3mmの砂粒を 含む	
80	谷埋土 上層	瓦質土器 足鍋	脚部			①黄灰色(2.5Y6/1) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~3mmの砂粒を 含む	
81	谷埋土 上層	瓦質土器 足鍋	脚部			①2.5Y8/3淡黄色	0.1~3mmの砂粒を 含む	
82	谷埋土 上層	瓦質土器 播鉢	口縁部			①灰色(10Y5/1) ②灰色(10Y6/1)	0.1~2mmの砂粒を 含む	
83	谷埋土 上層	白磁 碗	口縁部			素地 灰白色(10Y8/1) 釉 灰白色(7.5Y7/1)	精良	
84	谷埋土 上層	青磁 碗	口縁部			素地 灰白色(2.5Y7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/2)	精良	龍泉窯系
85	谷埋土 上層	青磁 碗	口縁部			素地 灰白色(2.5Y7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/2)	精良	龍泉窯系
86	H-2~4区 第4-1・2層	瓦質土器 羽釜	口縁部			①②灰白色(N7/0)	0.1~3mmの砂粒を 含む	
87	H-2~4区 第4-1・2層	瓦質土器 足鍋	口縁部			①黄灰色(2.5Y4/1) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	0.1~3mmの砂粒を 含む	
88	調査区南東部 床面清掃中	須恵器 坏	底部	②(9.0)		①灰色(N5/0) ②灰色(N6/0)	0.1~1mmの砂粒を 含む	
89	調査区南東部 床面清掃中	土師器 坏	底部	②6.4		①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~2mmの砂粒を 含む	
90	調査区西部 床面清掃中	白磁 碗	口縁部			素地 灰白色(7.5Y8/1) 釉 灰白色(7.5Y7/1)	精良	
91	調査区北東部 床面清掃中	瓦質土器 播鉢	口縁部			①灰色(7.5Y5/1) ②灰オリーブ色(5Y5/2)	0.1~3mmの砂粒を 含む	
92	調査区南東部 遺構検出時	瓦質土器 足鍋	脚部			①灰白色(10YR8/2)	0.1~3mmの砂粒を 含む	
93	調査区南東部 第3層	白磁 皿	底部	②5.2		素地 灰白色(7.5Y8/1) 釉 灰白色(10Y7/1)	精良	
94	調査区北西部 第3層	青磁 碗	底部	②5.2		素地 灰色(N6/0) 釉 オリーブ灰色(5GY6/1)	精良	龍泉窯系
96	排土表採	須恵器 壺	口縁部 ~胴部			①灰色(7.5Y6/1) ②灰白色(7.5Y7/1)	0.1~0.5mmの砂粒を 僅かに含む	

表9 出土遺物(土製品・石器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・層位	器種	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
95	調査区南壁清掃中	土錘	残存長3.0 最大幅1.3	5.5	粘土	上・下端部を欠損
97	谷埋土 下層	石臼	径(28.8) 残存高7.3	590.6	砂岩	上臼 摩滅激しい
98	調査区南東部 床面清掃中	石鍋か	最大厚1.2	27.1	滑石	

表10 出土遺物(木器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	法量(cm)	材質	備考
99	SB4 G-6区Pit15	柱	残存長28.4 最大径10.9	針葉樹	腐食激しい
100	SE2 第5層上面	曲物柄杓 身	短径9.7、長径10.0 高さ11.0 最大厚0.35	針葉樹	100と同一個体
101	SE2 第5層上面	曲物柄杓 身の底部	短径9.1 長径9.9 厚さ0.7	針葉樹	99と同一個体
102	谷埋土 下層	下駄	最大長22.5 残存幅7.3 最大高5.9	針葉樹	約1/2残存
103	谷埋土 下層	皿	口径(17.4) 底径8.4 器高4.1	針葉樹	挽物
104	谷埋土 下層	曲物 結合部	残存長4.7 残存幅5.8 厚さ0.4	針葉樹	
105	谷埋土 下層	円形曲物 蓋	径(16.6) 残存長8.3 残存幅5.7 厚さ0.6	針葉樹	結合孔3箇所残存 2箇所紐が残存
106	谷埋土 下層	円形曲物 蓋	径(17.1) 厚さ0.5	針葉樹	接合しない2破片・間が欠損 結合孔(紐)1箇所残存 墨書
107	谷埋土 下層	円形曲物 蓋	径(38.8) 残存長37.7 残存幅12.5 厚さ1.0	針葉樹	結合孔(木釘)4箇所残存
108	谷埋土 下層	長方形曲物 底板	残存長14.5 残存幅3.0 厚さ0.35	針葉樹	結合孔(紐)1箇所残存
109	谷埋土 下層	長方形曲物 底板	残存長32.1 残存幅6.4 厚さ0.4	針葉樹	結合孔(紐)2箇所残存
110	谷埋土 下層	蓋	径(10.4) 残存長10.3 残存幅6.2 厚さ0.6	針葉樹	
111	谷埋土 下層	蓋	径(14.0) 残存長12.8 残存幅3.1 厚さ0.55	針葉樹	
112	谷埋土 下層	蓋	径(15.3) 残存長15.3 残存幅7.0 厚さ1.2	針葉樹	
113	谷埋土 下層	蓋	径(15.2) 残存長15.1 残存幅7.4 厚さ1.1	針葉樹	
114	谷埋土 下層	蓋	径(15.2) 残存長12.8 残存幅7.4 厚さ1.0	針葉樹	
115	谷埋土 下層	檜扇か	残存長17.0 最大幅1.4 厚さ0.25	針葉樹	要孔(1孔)、綴目孔(2孔)残存
116	谷埋土 下層	檜扇か	残存長10.6 最大幅1.4 厚さ0.25	針葉樹	綴目孔か(2孔)残存
117	谷埋土 下層	松明灯か	残存長10.5 最大幅2.4 厚さ1.1	針葉樹	
118	谷埋土 下層	松明灯か	残存長22.8 最大幅1.5 厚さ0.9	針葉樹	
119	谷埋土 下層	不明部材	残存長13.9 最大幅2.1 厚さ1.25	針葉樹	釘孔か、2箇所残存
120	谷埋土 下層	不明部材	残存長20.6 最大幅2.5 厚さ1.9	針葉樹	釘孔か、2箇所残存
121	谷埋土 下層	用途不明	残存長5.7 最大幅3.6 厚さ0.4	針葉樹	
122	谷埋土 下層	板材	残存長41.1 最大幅6.1 厚さ0.85	針葉樹	
123	排土表採	皿	口径(17.7) 底径9.7 器高4.6	針葉樹	谷埋土下層出土か、挽物

5. 農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査

調査地区 吉田構内T-19区・S-20区

調査面積 約250㎡

調査期間 平成21年1月5日～3月19日

調査担当 横山成己・藤野好博

(1) 調査の経緯(図57、写真132・133)

吉田構内南端部に位置する農学部附属動物医療センターの改修Ⅲ期工事が計画されたことを受け、埋蔵文化財の破壊が予想されるセンター北側空閑地(第1調査区)と、浄化槽が新設される西側空閑地(第2調査区)において、本発掘調査を実施する運びとなった。

両調査区の距離は約70mを測るが、各地において確認された埋蔵文化財の内容が大きく異なるため、本書ではそれぞれに項を立てて報告を行うことにする。

(2) 第1調査区

1. 調査の経過

当地点は動物医療センター改修工事と直接の関係はないが、本学開発部局より建物建設用工事重機導入のため、建設地点周域を現地表より約1m掘削する必要があるとの相談を受けた。

動物医療センター周辺域では、改修Ⅰ期・Ⅱ期工事に伴う発掘調査成果ばかりでなく、第1調査区の北に隣接する地においても、昭和61年に実施された農学部附属農場農道整備に伴う立会調査で多数の柱穴群と溝が確認されていたため、まずは掘削予定範囲全域を調査対象範囲と定め、平成20年12月5日に遺構の分布確認の為の予察調査を行った。その結果、調査対象地全域に密に遺構が遺存し、遺構面までの深度も極めて浅いことが確認されたため、開発部局と再度の調整を行うこととなった。その結果、開発工事は予定地西側のみを対象とし、東側は現地保存することが決定され、年の替わった1月5日より本発掘調査を実施することとなった。このため、東側の予察調査部分も継続して調査を実施したため、調査区は東側に柄を向けた羽子板状



図 57 調査区位置図



写真 132 調査区周辺遠景 (南東上空から)



写真 133 第1調査区調査前遠景 (南西から)

を呈している。便宜的に東側トレンチ部を第1調査区東地区、西側本発掘範囲を西地区と命名した。

調査の経過に関しては、1月5日から1月7日までを重機による表土掘削、1月8日から9日にかけてを遺構検出・検出写真撮影、1月13日から2月4日までを遺構掘削・遺構測量、2月5日から2月6日にかけてを調査区内清掃・完掘写真撮影・調査区平面・断面測量に当てた。

[註]

- 1) a:横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口
- b:横山成己(2011)「農学部附属動物医療センター改修Ⅱ期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成19年度—』, 山口
- 2)河村吉行(1987)「農学部附属農場農道整備に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』, 山口

2. 基本層序(図58、写真140・141)

調査前の現地表はほぼ平坦に造成されながらも緩やかに南から北へと降下していたが、遺構面となる地山を検出した結果、従来の地形は東南東から西北西に緩やかに降下していることが明らかとなった。遺構面で見ると、東地区東端部は標高およそ30.6m、西地区北西端部は標高およそ29.8mを測り、その比高は約0.8mとなる。遺構面を計測した等高線から見ると、自然地形としては調査区以南はより高所であった可能性が高いが、現状で調査区の南に隣接する動物医療センター敷地と遺構面との比高が約1m存在するため、動物医療センター新営に伴い調査区南側地盤が大幅にカットされたものと想像される。しかし動物医療センター新営時の埋蔵文化財調査記録が不十分であることから、調査区周辺域の旧地形の復元は困難なものとなっている。

また、当調査地は従前動物医療センター教職員の駐車場として活用されていたが、調査区東地区東端部では、駐車場整備のため敷かれたと見られるバラス混じりの表土(10cm厚)直下が地山となっており、すでに遺跡の破壊が進行していたことを伺い知ることができる。

基本層序については以下の通りである。

第1層 表土(層厚10～40cm)

地山の傾斜に比例し東南東から西北西に向かい厚く堆積する

第2層 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土(層厚4～6cm)

本学統合移転前の旧耕土と見られるが、西地区にしか遺存しない

第3層 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土(層厚4～20cm)

東地区と西地区境界部の攪乱のため不連続層となっているが、東地区③と西地区⑧を同一層と見なす

第4層 地山 東地区 黄褐色(10YR5/6)と明黄褐色(2.5YR5/6)の互層

西地区 黄褐色(10YR5/6)と明黄褐色(2.5YR5/6)砂土の互層

明赤褐色(2.5YR5/6)砂礫土 1～10cm φ の礫多量に混ざる

黄褐色(10YR5/6)と明黄褐色(2.5YR5/6)砂土の互層 0.5～1cm φ の礫少量混ざる

明黄褐色(2.5YR6/6)砂礫土 0.5～5cm φ の礫少量混ざる

東・西地区境界部の攪乱坑は基本層序第3層を掘り込んでおり、坑底面より植物繊維の腐蝕物も確認されたため、比較的新しい時期のものと推測される。また西地区西部には従来調査区西隣にある犬舎

- ① 表土
- ⑦ にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土(旧耕土)
- ⑧ にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土(③と同一層)
- ⑨ 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土(SP147埋土)
- ⑩ 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土炭化物少量混ざる(SP177埋土)
- ⑩-2 黄褐色(10YR5/6)と明赤褐色(2.5YR5/6)砂土の互層(地山)
- ⑩-3 明赤褐色(2.5YR5/6)砂礫土※1~10cmφの礫多量に混ざる(地山)
- ⑩-4 ⑩-2と同質であるが0.5~1cmφの礫少量混ざる(地山)
- ⑩-5 明黄褐色(2.5Y6/6)砂礫土※0.5~5cmの礫少量混ざる(地山)

- ① 表土
- ② 造成土
- ③ にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
- ④ 攪乱埋土1
- ⑤ 攪乱埋土2
- ⑥ 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土(SD1埋土)
- ⑩-1 黄褐色(10YR5/6)と明赤褐色(2.5YR5/6)の互層(地山)

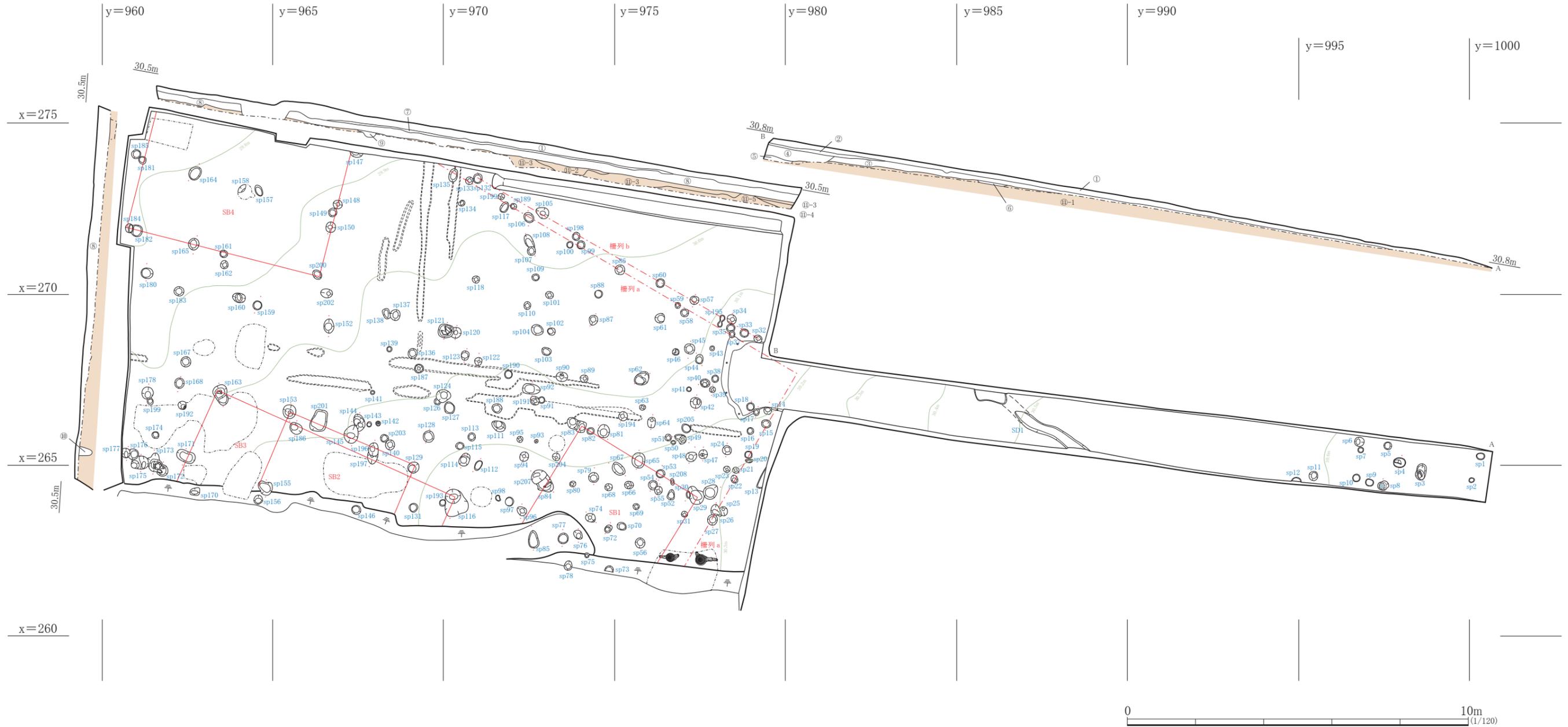


図 58 第1調査区平面図・断面図

の付設建物が存在したため、基礎杭による攪乱を受けている状況であった。その他、西地区南端部にはかつて実験動物を埋葬したらしき坑も複数確認されている。

[註]

1) 横山成己(2007)「吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成17年度—』, 山口

3. 遺構(図58～64、写真134～167)

調査区全域を通じて、ピット208基、溝1条が検出された。その他、検出されたピット群を切る形で座標軸にはほぼ平行・直交する複数の溝が確認されたが、これは耕作に伴う鋤溝と見なされる。旧耕土(基本層序第2層)下に存する基本層序第3層が土質から水田床土とは思われないため、統合移転前の当地は畝地だった可能性が高い。

確認されたピット群は調査区内で分布の粗密を示している。すなわち東地区では東端部にピットの集中が見られるが、以西にはピットは確認されず、西地区に至り再びピット群が出現する。先に東地区の削平について触れたが、最も高所にある東端部で比較的良好にピットが遺存していることから見て、この間に柱穴等の遺構が存在したとは想定しがたい。また、東地区ピット空白地のほぼ中央にあたる地点に1条の溝(SD1)が検出されている。西地区内にもまた遺構分布密度の粗密が見られる。最も分布が密であるのは西地区南東部域であり、西または北に進むほどピットの分布はまばらになる。また西地区北東隅部には遺構が存在しない。このような状況から推察すると、東地区はトレンチ調査であるため断言は避けるが、ピット群はあたかもSD1をはさみそれぞれ集団を持って分布しているかのように見える。

また、狭小な範囲に密に分布するピットであるが、重複が比較的少ないことも一つの特徴であり、重複関係にある遺構はの大半は2基のピットの切り合いである。個別ピットの断面観察から、これらは掘立柱建物の柱穴、または柵列と考えられることから、建造物建て替えに際しては意識的に場所をずらしたものと想像される。

この他、西地区南西隅部において当調査区では異質な重複関係を見せるピット群が確認される。当地点では5基のピットが重複を見せており、埋土の断面観察から柱穴と見なされるが、これに対応する柱穴群が確認できない。おそらく動物医療センター建設により削平された調査区南隣、または犬舎建設により削平された調査区西隣に対応する遺構が存在したものと想像されるが、確認することはできない。

以上が遺構分布状況の概要である。次に復元される建物跡や個別遺構に関して報告する。

【掘立柱建物跡】

狭小範囲に多数のピットが密集するため、1間×1間建物を想定すると根拠なく多数の小型建物が復元される可能性が高いため、本書では2間以上の桁行または梁行が復元される建物跡のみを対象に報告する。

SB1(図59、写真142～144)

西地区南東部に位置する北西—南東方向の掘立柱建物跡で、SP29、SP65、SP83、SP84が柱穴となる。SP84に対応する箇所には樹木が存在するため柱穴を検出できていない。柱間はそれぞれ約1mを測る。桁梁方向は不明であるが、SP65に対応する柱穴が存在しないことから、建物はさらに南西方向に延長していたものと推定され、2間×2間以上の建物が復元されるが、調査区南側はすでに削平を受けているため確認は不可能である。建物軸は座標北に対しN32°Eに振っている。

柱穴深度はSP29が0.34m、SP65が0.28m、SP83が0.26m、SP84が0.23mを測る。柱穴埋土の観察から



写真 134 第1調査区遺構検出状況 (南西から)



写真 135 第1調査区遺構完掘状況 (南西から)



写真 136 第1調査区西地区全景 (東から)



写真 137 第1調査区西地区西半部 (東から)



写真 138 第1調査区西地区東半部南側 (上空から)



写真 139 第1調査区西地区東半部北側 (上空から)



写真 140 第1調査区西地区北壁断面 (南西から)



写真 141 第1調査区西地区北壁断面 (南東から)

は明確な柱根腐蝕土が確認されず、建物廃棄時に抜き取られたものと思われる。SP84からは内部より板石が検出された。当調査区では内部より板石が出土する柱穴が複数確認されているが、柱穴底面に敷かれた状態での出土はSP121の1例しか存在せず、板石の用途を安易には推定できない。多くは斜めもしくは縦に投入された状況で検出されており、柱穴埋め戻しに際し不足する土量を補うための行為であるかの印象を受ける。

SB2(図60、写真145～148)

西地区南側西寄りに位置する北西－南東方向の掘立柱建物跡で、SP129、SP145、SP153、SP155が柱穴となる。この建物跡も南側の削平により半壊しており、建物規模は不明である。建物軸は座標北に対しN24°Eに振っている。東西柱間2m、南北柱間2.2mを測り、SB1に比して柱間距離が長い。

柱穴深度はSP159が0.39m、SP145が0.47m、SP153が0.36m、SP155が0.31mを測る。SP129に底面付近には柱根が遺存しているが、腐蝕が著しく取り上げは不可能であった。その他の柱穴に柱根または柱根腐植土層は確認されず、遺存する柱穴ではSP129のみが地上面で切断され、他の柱材は抜き取られたものと推定される。

SB3(図61、写真149～153)

西地区南側西寄りに位置する北東－南西方向の掘立柱建物跡で、SP116、SP197、SP186、SP163、SP171が柱穴となる。SB2と重複する建物であるが、柱穴の切り合いもなく、出土遺物としてはSB2のSP145から土師器坏(図66-7)と瓦質土器体部片(図66-8)が、SB3のSP171から瓦質土器鍋口縁部片(図66-1)が出土しているものの、瓦質土器鍋口縁部形態に時期幅が推定されるため、両者の先後関係を知り得ない。この建物も南側の削平により半壊しており、建物規模は不明である。建物軸は座標北に対しN24.5°Eに振っており、SB2と近似値を示す。東西柱間が2.4m、南北柱間2.1mを測る。

柱穴深度はSP116が0.30m、SP197が0.24m、SP186が0.315m、SP163が0.32m、SP171が0.24mを測るが、SP197は後世の攪乱により南半部が破壊されている。断面観察では明確な柱根腐蝕土層が確認されず、SP186、SP163埋土に板石が投げ入れられていることから、柱材はいずれも建物廃棄後に抜き取られたものと推測される。

SB4(図62、写真154～156)

西地区北西部に位置する東南東－西北西の掘立柱建物跡で、桁行2間×梁行2間規模となる。SP147、SP149、SP200、SP161、SP184、SP181が柱穴となり、桁行柱間は2.88m、梁行柱間は約2mを測る。建物軸は座標北に対しN15°Eに振っている。

柱穴深度は半掘であるがSP147が0.16m、SP149が0.12m、SP161が0.2m、SP184が0.12m、SP181が0.08mを測る。ここでは掘立柱建物跡とするが、西調査区北域にて検出されるピットは総じて南域のものに比して深度が浅く、埋土も単一層のものが多い。柱穴であったとしても柵、小屋等簡易的な建造物に伴うものである可能性が高い。

またSP149－SP181軸間にピット3基(SP157、SP158、SP164)が存在する。SB4との関連は特定できないが、特にSP164は底面に強い粘質土層が堆積しており、上層埋土も他のピット埋土とは異質で地山土に見られる小礫等が混入していないことから、何らかの作業坑であった可能性を残す。

【ピット群】

ここでは、特徴的なピット群を報告する。

調査区西地区南西隅ピット群(図63、写真157・158)

前述した調査区南西隅に分布するピット群である。検出時にはSP172、SP173、SP175、SP176、SP177

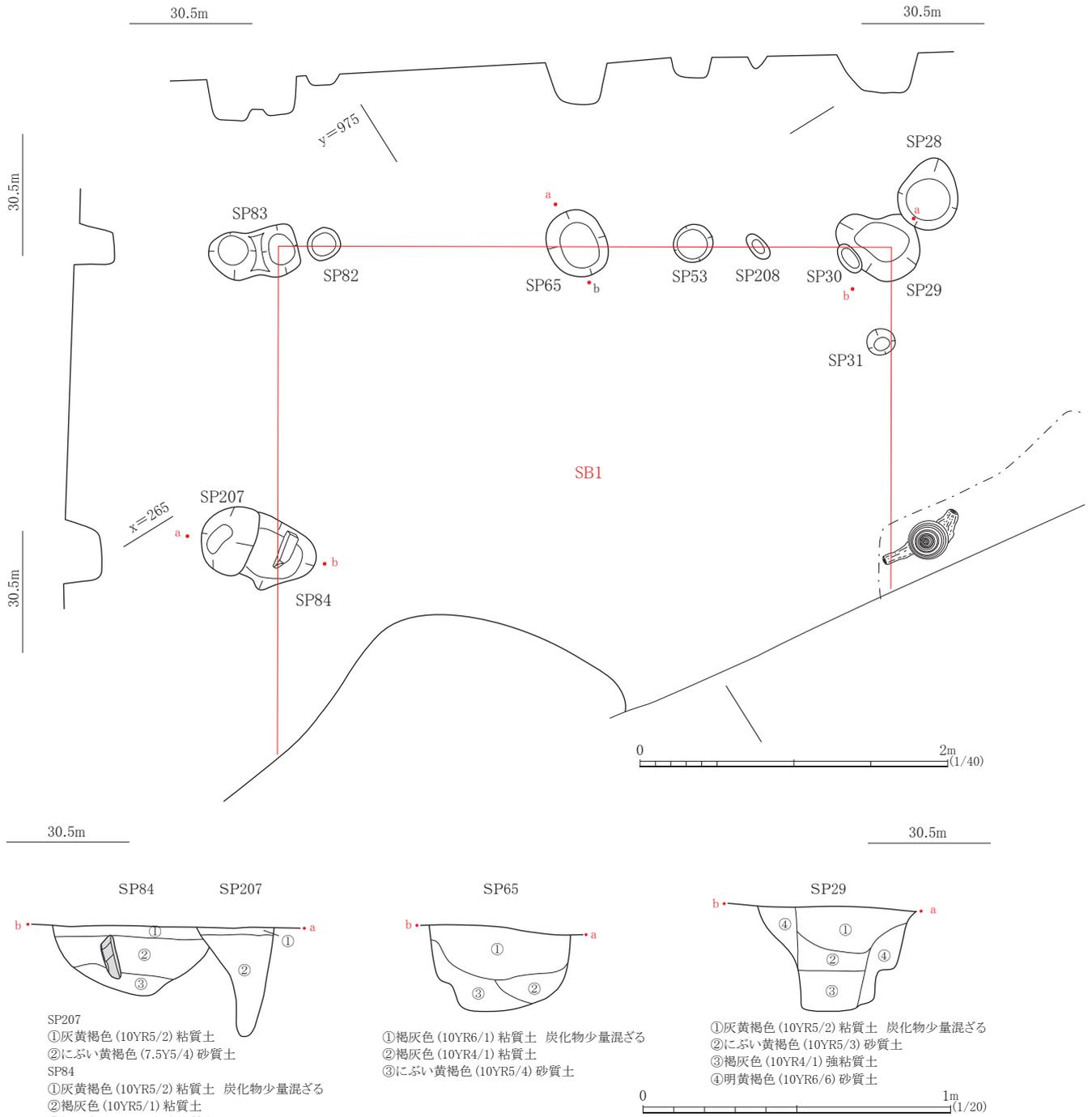


図 59 SB1平面図・断面図



写真 142 SP84・207土層断面(北東から)



写真 143 SP65土層断面(東から)



写真 144 SP29土層断面(南東から)

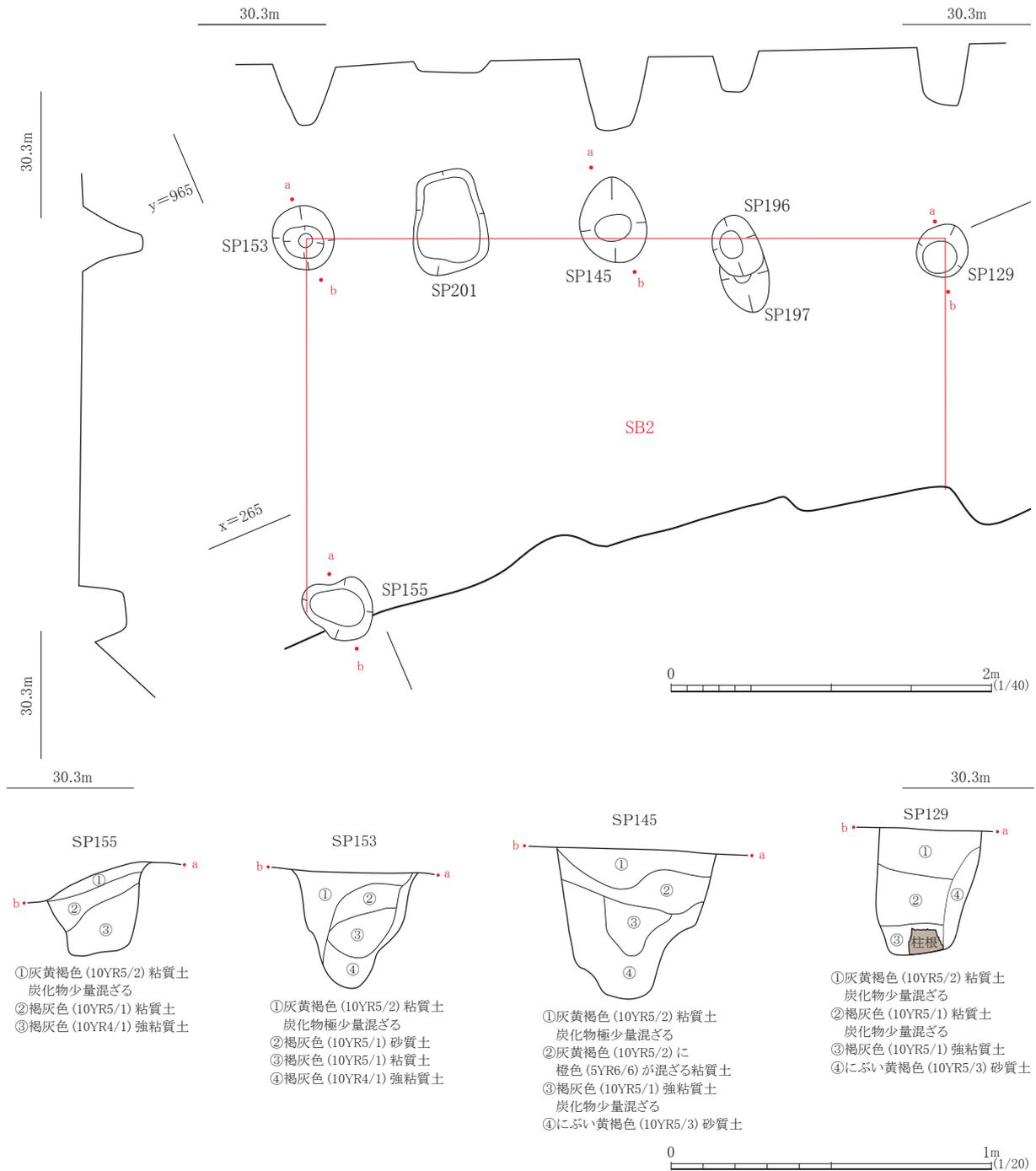


図 60 SB2平面図・断面図



写真 145 SP155 土層断面
(東から)



写真 146 SP153 土層断面
(東から)



写真 147 SP129 土層断面
(東から)



写真 148 SP129 柱根遺存状況
(東から)

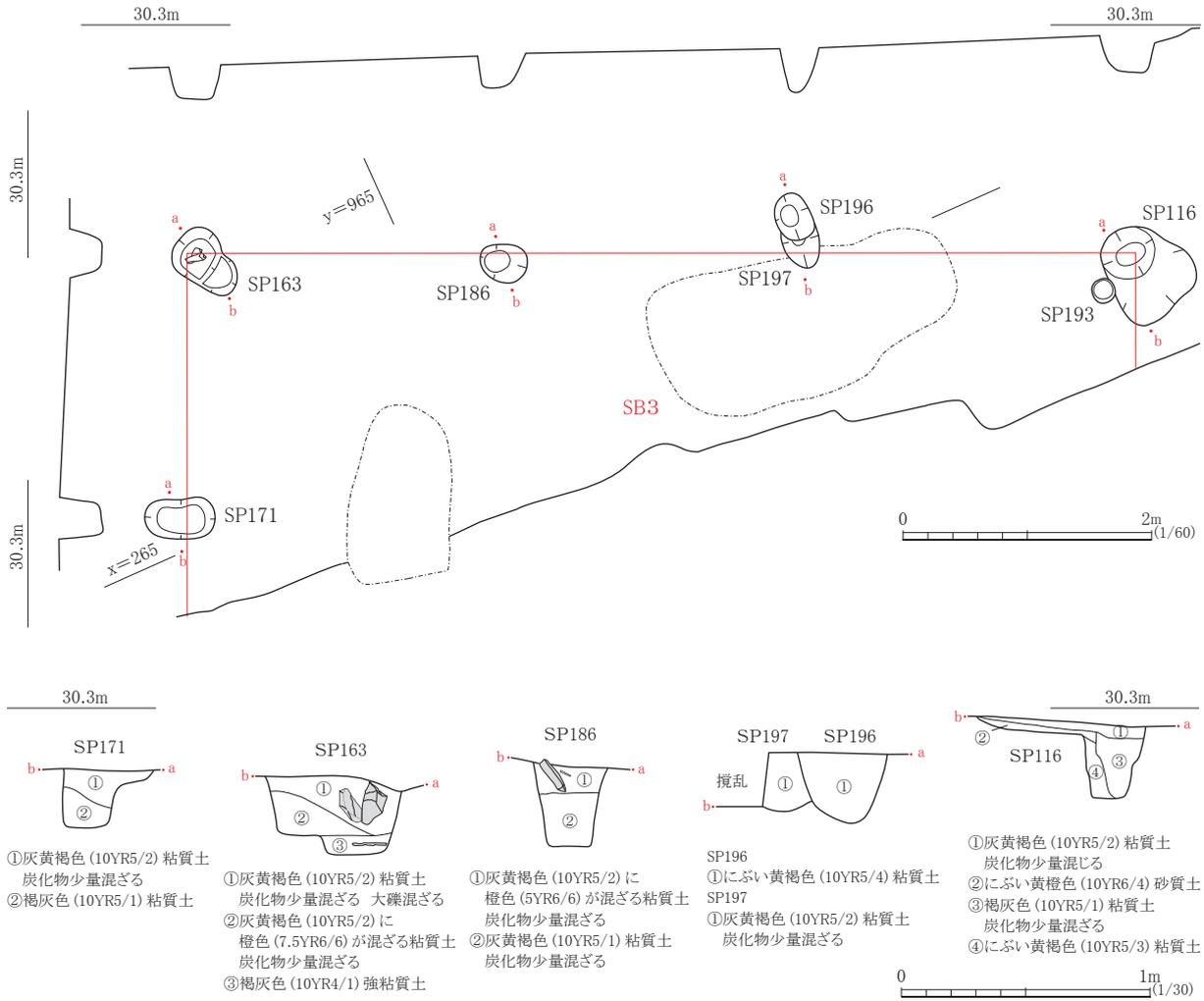


図 61 SB3平面図・断面図



写真 149 SP171 断面 (東から)



写真 150 SP163 断面 (北から)



写真 151 SP186 断面 (東から)



写真 152 SP196・197 断面 (南東から)



写真 153 SP116 断面 (北東から)

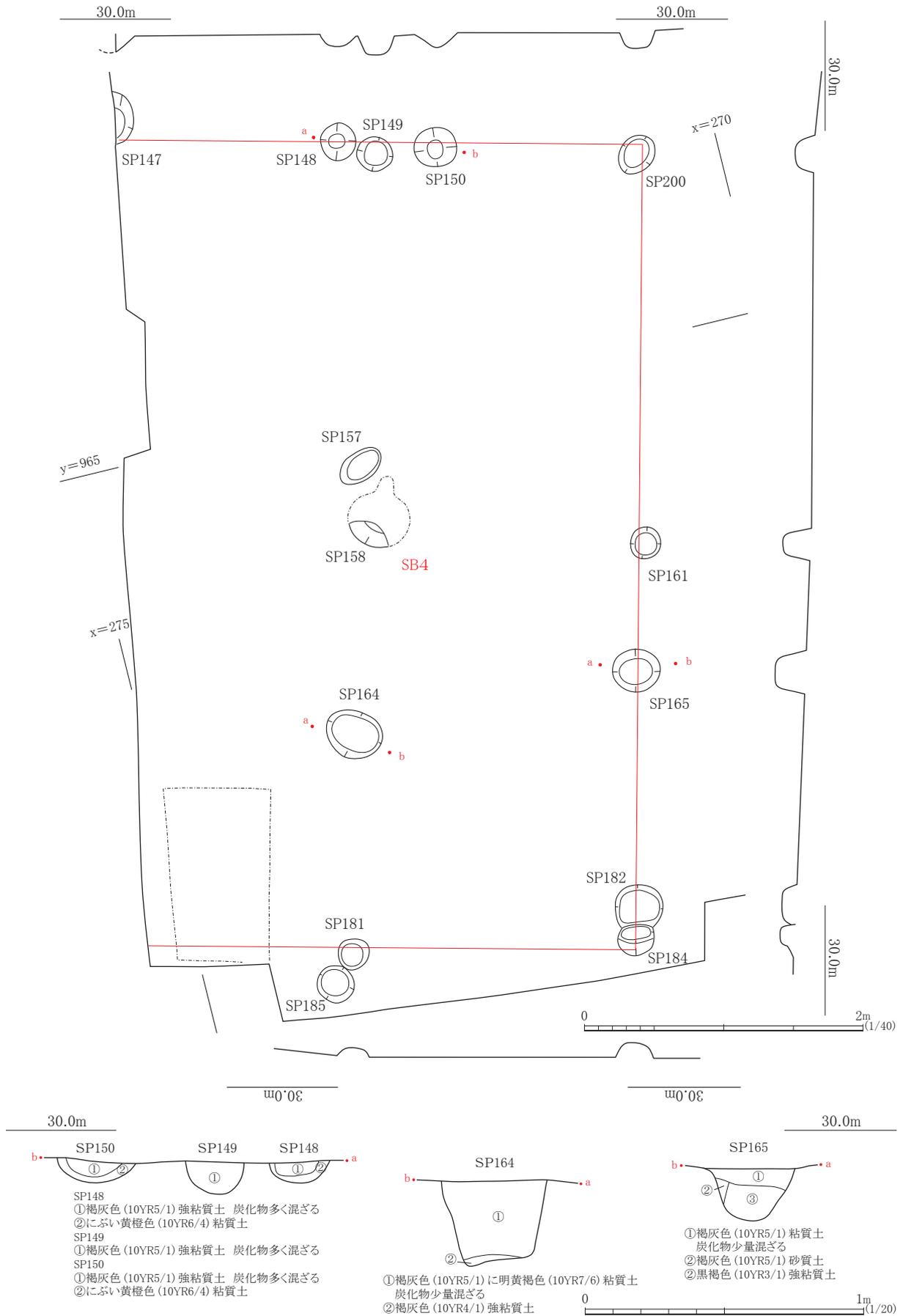


図 62 SB4平面図・断面図



写真 154 SP148-150 土層断面(東から) 写真 155 SP164 土層断面(南東から) 写真 156 SP165 土層断面(東から)

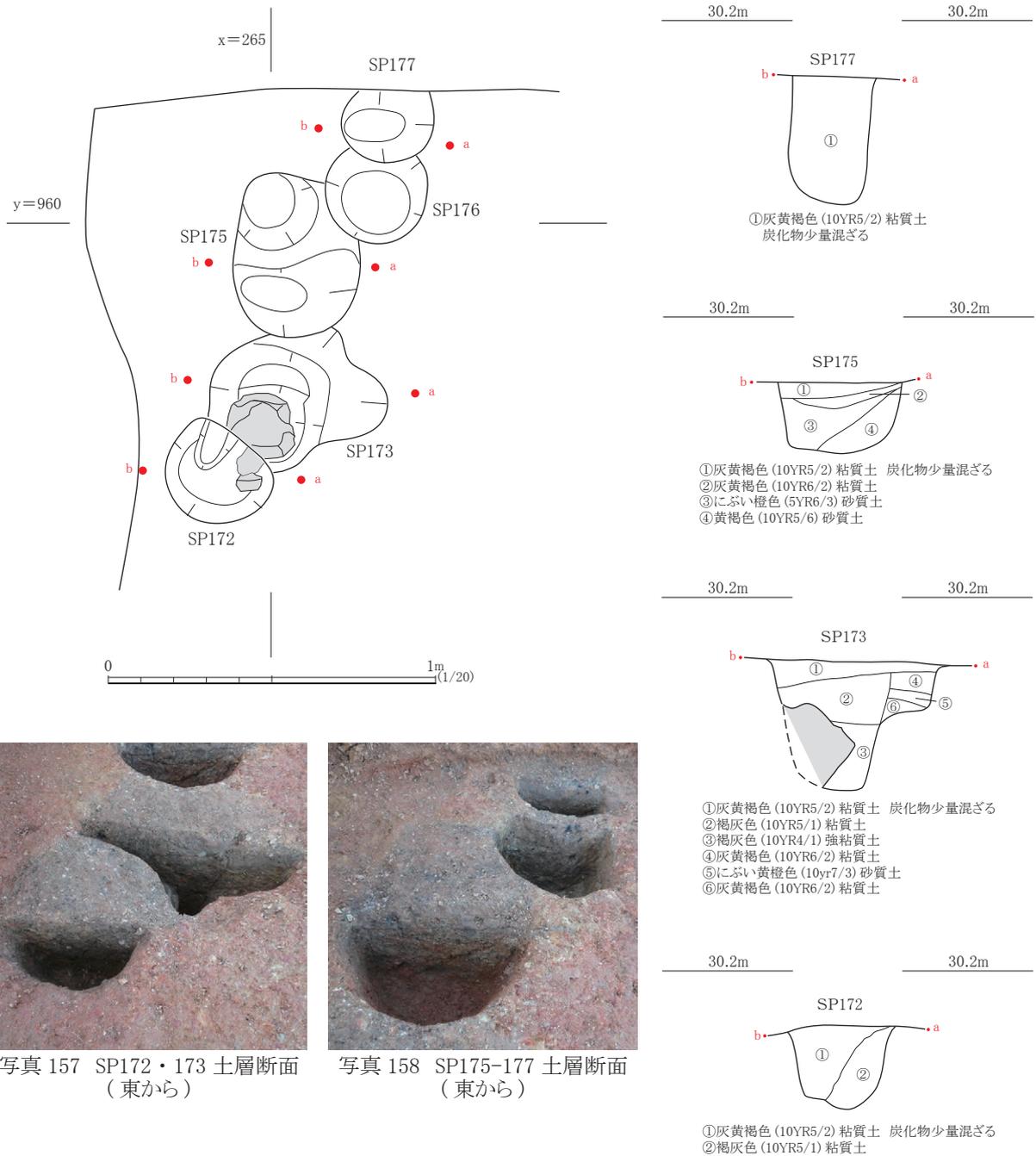


写真 157 SP172・173 土層断面(東から)



写真 158 SP175-177 土層断面(東から)

図 63 調査区西地区南西隅ピット群平面図・断面図

の5基のピットの重複と判断したが、遺構掘削の結果SP175は2基の切り合いであることが判明した。東方のものをSP175a、西方のものをSP175bとしておく。結果このピット群は6基のピットの切り合いとなる。

遺構埋土の土質が極めて似通っており、重複関係の判断に苦心したが、先後の順はSP173が最も古く、次いでSP175、次いでSP176、最後にSP177と続く。SP172に関してはSP173に後出することは確かであるが、他のピットとの関係は不明である。

各ピットの深度を見ると、SP172が0.24m、SP173が0.42m、SP175aが0.25m、SP175bが0.39m、SP176が0.22m、SP177が0.39mであり、0.4m内外と0.22～0.25mの2種に大別される。前述の如くこのピット群に建物跡として対応する遺構は確認されておらず、調査区南方から西方に延びる建物跡の北東隅柱であった可能性が高いが、ここまでの重複を見せる柱穴は他に存在せず、集落構造を考える上で重要な遺構群となっている。

西地区中央部ピット群(図64、写真159～163)

西地区のほぼ中央部に位置するピット群である。

SP120はSP121に切られるピットで、直径0.32mの円形ピットである。断面形態は長い逆台形を呈し、底面までの深度は0.29mを測る。断面観察では柱根腐蝕土と見られる土層が確認されるため、柱の抜き取りは行われなかったものと考えられる。

SP121はおそらくSP92、SP111、SP187と1間×1間建物を構築するが、ここでは建物の詳細に触れない。SP120を切るピットで、平面形態は長軸0.44m×短軸0.4mの楕円形を呈する。断面形態は逆台形状を呈し深度は0.26mを測るが、中位で微弱な二段掘りを行っている。内部からは複数の板石が投げ込まれた状態で検出されている。

SP122は長軸0.27m×短軸0.23mの平面形態楕円形のピットで、断面形態は縦長の逆台形状を呈する。平面規模に比して深度が著しく深く、0.43mを測る。断面には明瞭に柱根腐蝕痕跡が残り、廃棄時に柱材が切断されたことが分かる。底面付近の柱根幅から径11cm程度の柱材が推測される。このような特徴を有するピットは主に西地区中央部から東南部にかけて散見される。

SP123はSP122の南東0.2m地点に位置する直径0.22mの円形ピットである。側面がほぼ垂直に掘り込まれており、底面は丸く凹む。ピットの深度は0.29mを測る。SP122同様明瞭に柱根腐蝕痕跡が残り、径12cm程度の柱材が推測される。

東地区東端部ピット群(図65、写真164～167)

東地区では東端部にのみピットが分布するが、トレンチ調査のため建物構造・規模等は復元できない。埋土は何れも褐灰色(10YR5/1)が基本となっており、土質にもさほど差が見られないことから、西地区同様に複数時代の遺構が混在するわけではなく、比較的短期間に建物の複数回の建て替えが行われた結果と推測される。確認したピットは12基であるが、この内特徴的なピットのみ報告する。

SP4は長軸0.36m×短軸0.29mの楕円形ピットである。検出時ピット中央に円形痕跡が見られたことから柱根痕跡かと思われたが、遺構掘削の結果その可能性は否定された。断面形態は開きの小さい逆台形状を呈し、深度0.25mを測る。埋土下層には他のピットに見られる如く板石が投げ込まれている。

SP8は長軸0.28m×短軸0.23mの楕円形ピットで、深度0.33mを測る。底面に柱根が遺存するが、腐蝕が著しく取り上げは断念した。遺存する柱根は径15cmほどであり、遺存が見られた他の柱根や柱根痕跡に比すとやや太めと言える。

他にも柱根痕跡が見られるピットや大ぶりの板石が投げ込まれたピットなど多数存在するが、本書では報告を省く。

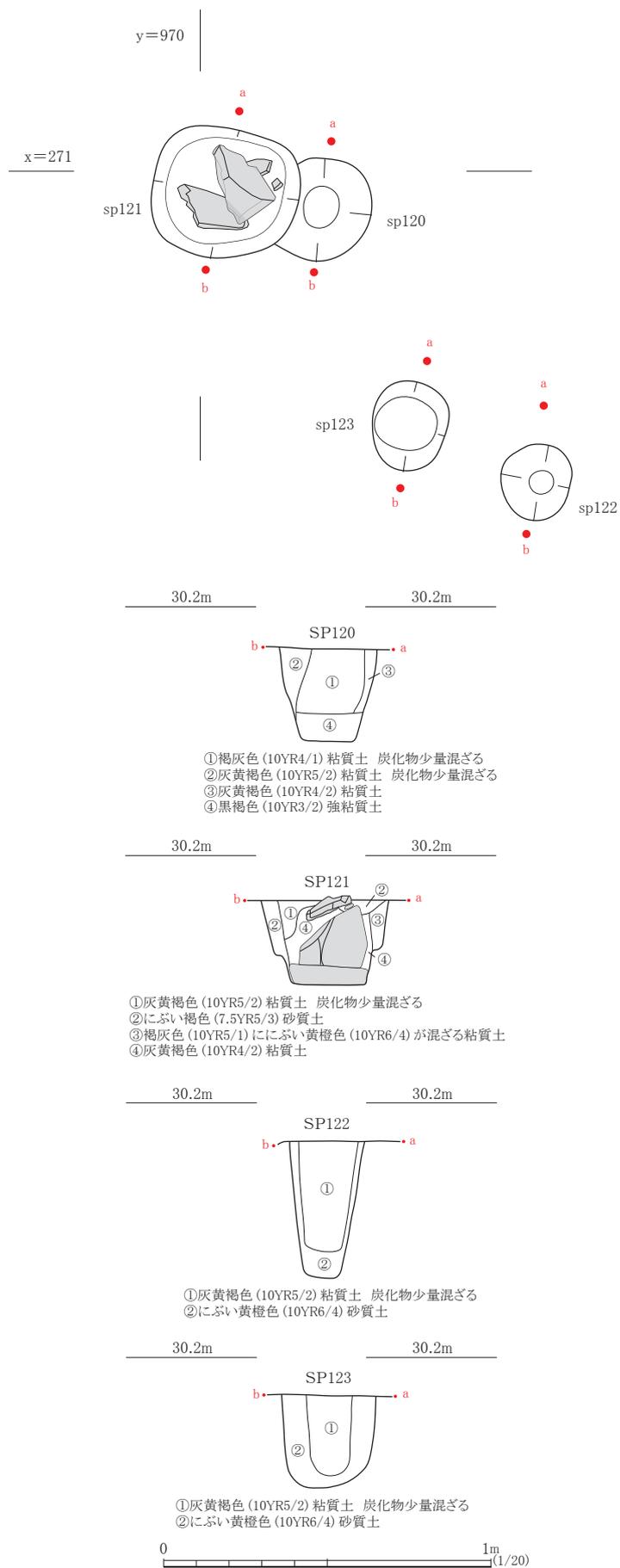


図 64 第1調査区西地区中央部ピット平面図・断面図



写真 159 SP120 土層断面(東から)



写真 160 SP121 土層断面(東から)



写真 161 SP121 完掘状況(北から)

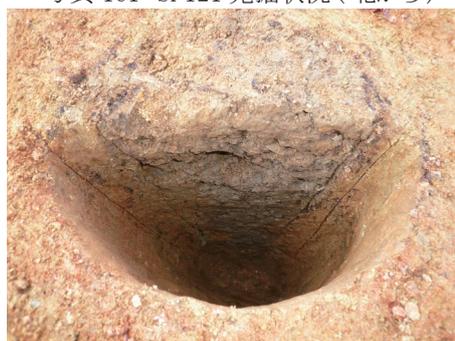


写真 162 SP122 土層断面(東から)



写真 163 SP123 土層断面(東から)

【柵列】

柵列a(図58、写真136・138・139)

西地区北東部を北西－南東方向に直列し、それに直交するように南東部を北東－南西に直列するピット群を、建物配置を取らないことから柵列と推定し、柵列aとする。

北西－南東方向ではSP133・189・199・86・59・37の柱穴列が、北東－南西方向ではSP15・19・22・26か27がこれに該当する。2列の交差地点が攪乱によって破壊されているために両者が一体のものか特定できないが、直交することからほぼ間違いないものと思われる。また、柵列軸は座標軸に対しN30.5° E (E59.5° N)となり、SB1と近似値を示すことも注目される。

用途に関しては、柱穴列のそれぞれ北東、南西方向の遺構が散漫になることから、居住域を区画する施設と見なしておく。

柵列b(図58、写真136・139)

柵列a北西－南東列の北東外側に位置する直列ピット群である。SP132・105・198・60・57・34・32がこれに該当する。両者の方向はほぼ一致し、併存したのか先後関係を有するのか不明である。

【溝】

SD1(図58)

東地区の中央やや西よりに検出されたもので、調査区内では唯一の溝となる。深さ0.02m～0.05mと極めて浅いため、重機掘削時に部分的に削り取ってしまったが、幅約0.3m、検出長約3.6mを測る。埋土からは須恵器の小片しか出土していないため時期の特定は困難であるが、南東－北西(およそE60° N)の走向であることから掘立柱建物SB1や柵列との関連が想定される。

以上、確認した遺構の概要を記した。柱穴に対する建物検討や柵列と見たピット群と溝SD1の関係、さらには西地区ピット群と東地区東端部ピット群との関係について更なる検討を要する。

また現状保存した東地区に関しては、現地表下わずか10cmで遺構面が露出するため、些細な現状変更でも遺構が破壊される状況にある。開発部局及び当該地の所轄部局との連絡を密にし、遺跡の保護に努めなくてはならない。

[註]

1) 岩崎仁志(1999)「足鍋再考」, 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター(編)『陶埴』第12号, 山口

4. 遺物(図66、写真168～170、表11)

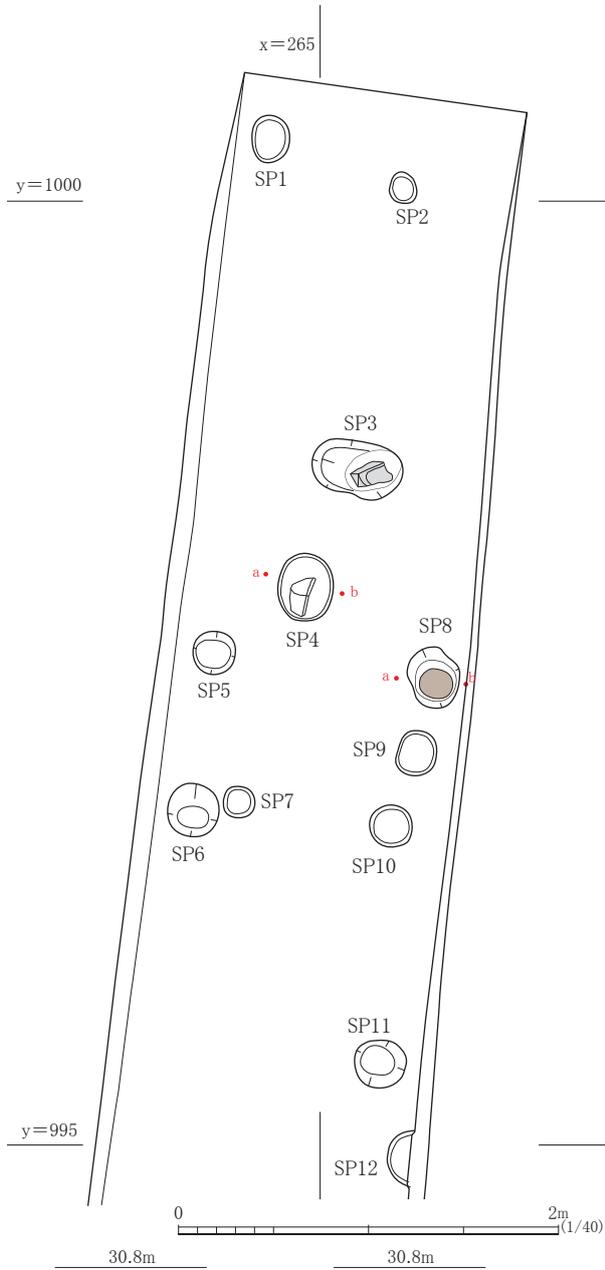
ほぼ半数のピットから遺物の出土を見たが、大半が土師器および須恵器の細片であり、図化可能な遺物は少ない。以下遺構ごとに出土遺物を報告する。

【SP6】 1は土師器皿の底-体部片。底径6.6cmに復元される。口縁端部を欠失しているが現存部より大きくは立ち上がらないものと思われる。全面風化のため調整は不明。灰白色を呈す。

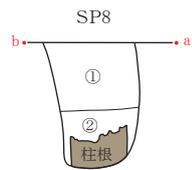
【SP34】 2は土師器杯の底-口縁部片。小片のため口・底径とも復元できない。器高1.0cm。器壁の薄い個体であり、底部から外反気味に体部が開き口縁に至る。口縁端部はやや稜を持ちつつ丸く収める。全面風化のため調整は不明。灰色を呈する。

【SP42】 3は土師器皿の底-口縁部片。小片のため口・底径とも復元不可。器高0.9cm。いわゆる橙色系の土師器皿であり、器壁は厚く底部から湾曲して口縁を立ち上げ、口縁端部を丸く収める。

【SP81】 4は青磁碗の口-体部片。比較的器壁が厚く、灰白色の素地で釉はオリーブ灰色に発色する。



① 褐灰色 (10YR5/1) に明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土混ざる炭化物少量混ざる
② 褐灰色 (10YR4/1) 強粘質土



① 褐灰色 (10YR5/1) に明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土混ざる炭化物少量混ざる
② 褐灰色 (10YR4/1) 強粘質土

図 65 第1調査区東地区ピット群平面図・断面図



写真 164 第1調査区東地区ピット群(東から)



写真 165 SP4 土層断面(東から)



写真 166 SP8 土層断面(東から)



写真 167 SP8 完掘状況(東から)

内外面とも文様は確認されない。

【SP96】5は瓦質土器播鉢口縁部片。口縁内面に隅丸三角形の粘土帯を貼り付ける。内面はヨコハケが明瞭に残り、外面は口縁部はナデ、残存部下端にはタテハケが見られる。内面の2ヶ所にそれぞれ2条の卸目が遺存する。

【SP32】6は土師器坏の底-体部片。底部径は5.2cmに復元される。薄くシャープなつくりであり、平底のから直線的に体部が開く。全面が摩耗しており、糸切り痕は観察できない。浅黄橙色を呈す。

【SP145】7は土師器坏の口-底部片。口径5.2cm、底径3.2cmに復元される。器高0.9cm。平底から体部が直線的に開き、口縁端部は丸く収める。小型品であるが比較的丁寧なつくりである。灰黄色を呈す。8は須恵質焼成となっているが瓦質土器体部片である。外面に格子タタキ痕が残る。内面は摩耗により調整不明。鍋の底部付近の破片と見られるが、横断面の緩やかな弧から大型品と推測される。

【SP163】9は瓦質土器鉢口縁部片。口縁内面に断面半円形の粘土帯を貼り付ける。内面にかすかにヨコハケ状の調整が見られるが、摩耗が激しく詳細不明である。

【SP164】10は瓦質土器播鉢口縁部片。口縁内面に扁平な半円形の粘土帯を貼り付ける。内面に3条の卸目が遺存している。外面調整は摩耗により不明。

【SP171】11は瓦質土器鍋口-体部片。体部から「く」の字状に屈曲し口縁に至り、口縁端部を上方に拡張させる。内面は口縁から体部までヨコナデ痕が明瞭に残る一方、外面は口縁部にヨコナデが観察されるが体部は風化により不明。

【SP172】12は一見土師器坏であるが、底部外面につまみ状の粘土が付着している。坏として計測すると、口径6.9cm、底径6.0cmに復元される。器高0.9cm。平底から短く立ち上がり、口縁端部を丸く収める。内外面とも重ね焼かれた痕跡が明瞭に残る。灰白色を呈する。13は土師器坏の端部を丸く収めた口縁部片。内外面ともヨコナデによる調整が施されている。灰黄色を呈する。

【SP177】14は土師器坏の口-底部片。口径6.7cm、底径4.0cmに復元される。器高1.4cm。器壁は薄く、平底から体部が直線的に開き、口縁を尖り気味に収める。底部には糸切り痕が明瞭に残る。灰白色を呈す。15は突帯部片。瓦質土器羽釜の突帯か。

【SP178】16・17はともに土師器坏口縁部片。16はやや内湾気味に口縁に立ち上がり、端部を尖り気味に収める。にぶい黄橙色を呈す。17は直線的に口縁に至り、端部を尖り気味に収める。浅黄橙色を呈す。

【SP180】18は完形の土師器皿。3同様なゆるいゆるい橙色系の皿であり、法量に比して厚めの器壁を有し、平底外面にはかすかに糸切り痕が見られる。底部内面中央は臍状に窪んでおり、体部は緩やかに屈曲して立ち上がり口縁を丸く収める。19は土師器坏口-底部片。底部から外反気味に体部が立ち上がり、口縁端部は鈍く面をとる。灰黄色を呈する。

平成18・19年度に実施した動物医療センター改修Ⅰ・Ⅱ期工事では、遺構や埋没谷、遺物包含層から古代に所属する多量の須恵器・土師器の出土を見た。平成20年度実施の第1調査区においては、安定的に居住空間が得られる台地上であることから古代の集落遺構の検出が予想されたが、予想に反し時期の推定可能な遺物は、上記に見るごとくいずれも室町時代(14～16世紀)に該当するものであった。他の遺構から出土した図化不能な遺物も大半は中世土師器片と見られ、古代に遡る須恵器・土師器は極めて少量である。この状況から、第1調査区域において奈良～平安時代の集落または官衙が存在した可能性はほぼ否定される。

吉田構内(吉田遺跡)の調査

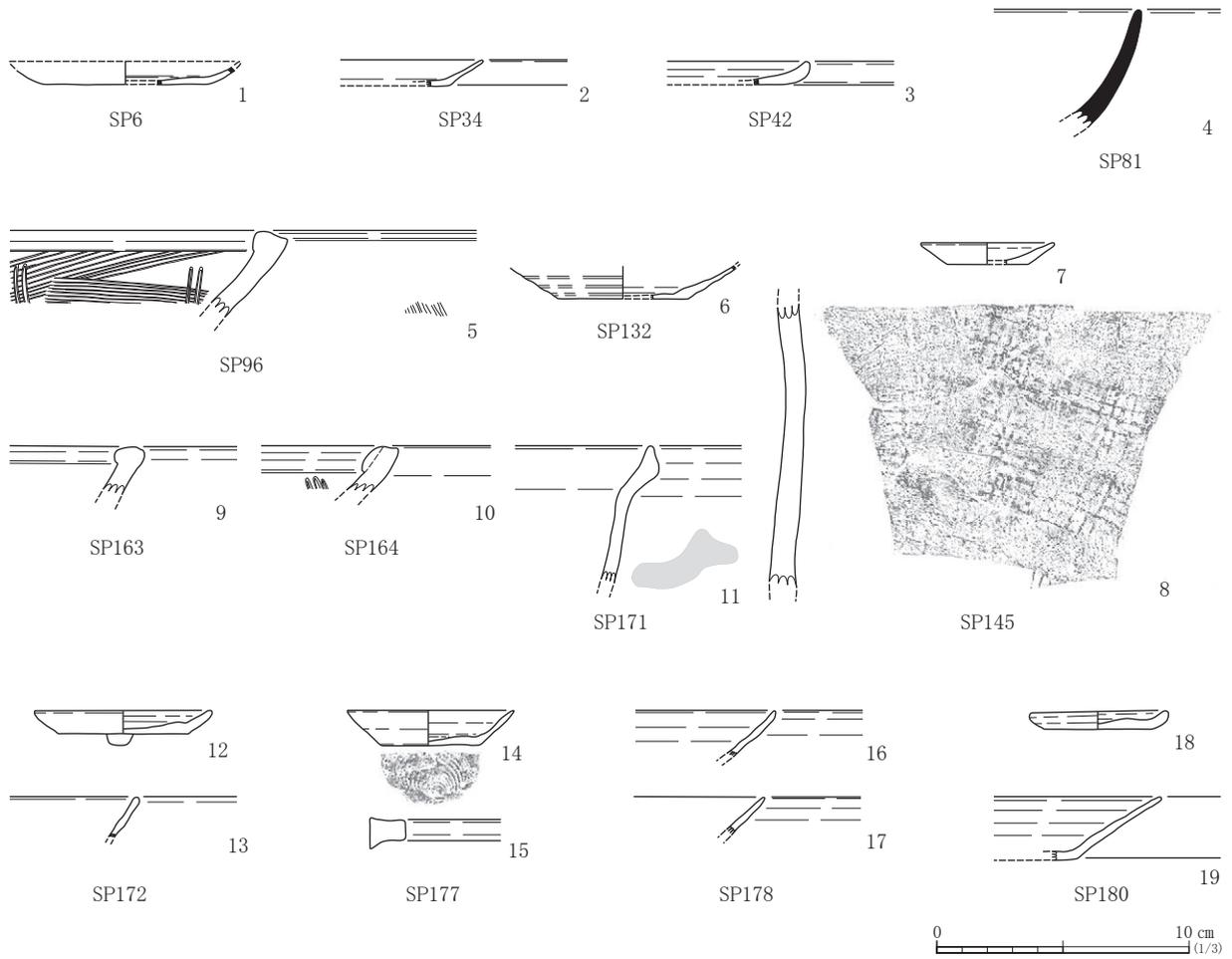


図 66 第1調査区出土遺物実測図

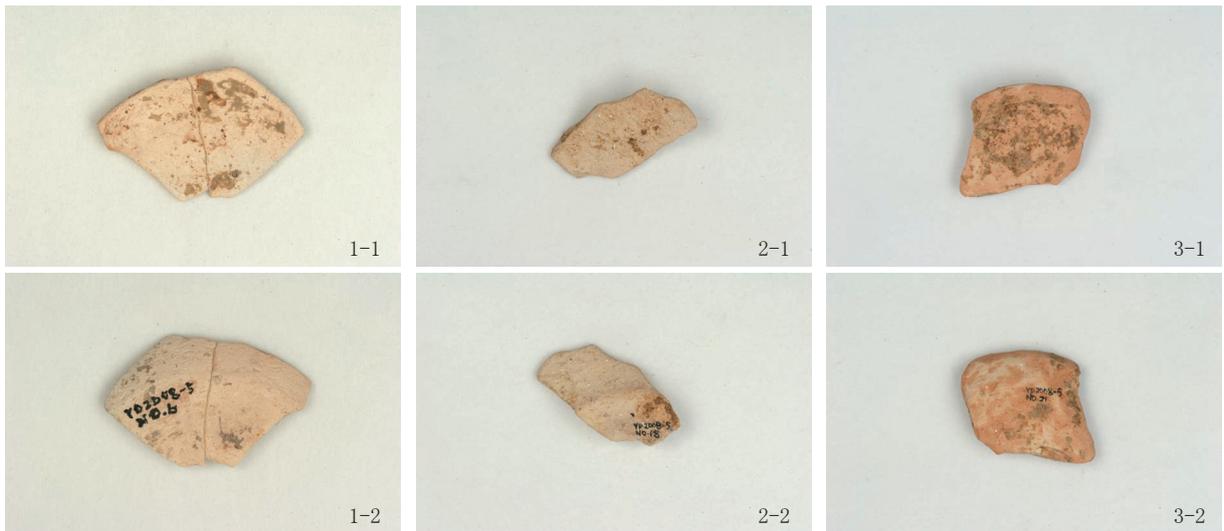


写真 168 第1調査区出土遺物①

吉田構内(吉田遺跡)の調査

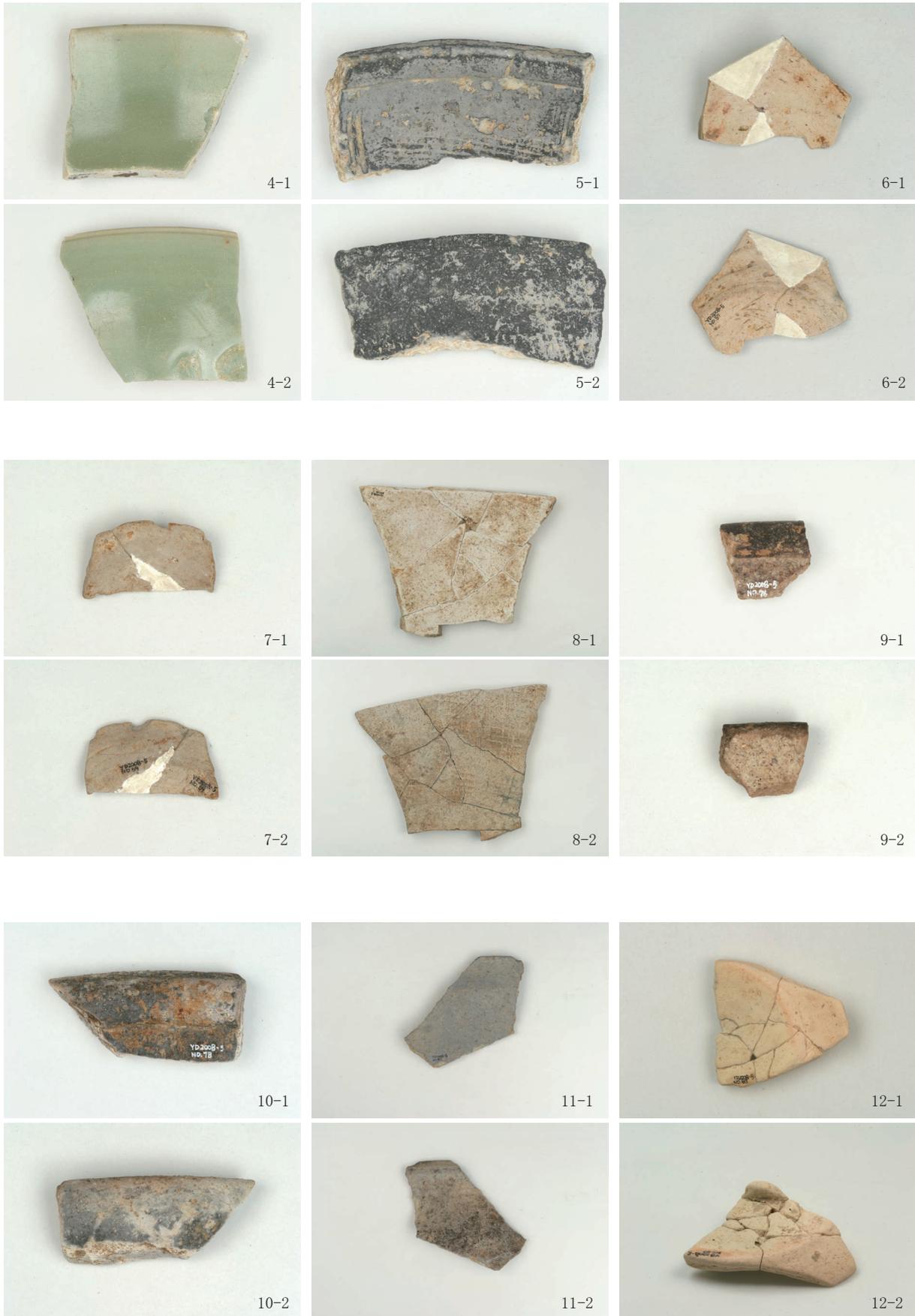


写真 169 第1調査区出土遺物②

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 170 第1調査区出土遺物③

表11 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
				①口径②底径③器高		①外面 ②内面			
1	SP6 埋土	土師器 皿	底部	②(6.6)		①②灰白色(7.5YR8/2)		1mm程の砂粒を極少量含む	
2	SP34 埋土	土師器 坏	口縁部 ～底部	③1.0		①②にぶい黄橙色 (10YR7/3)		0.5mm以下の砂粒を含む	
3	SP42 埋土	土師器 皿	口縁部 ～底部	③0.9		①②橙色(7.5YR7/6)		0.5mm以下の砂粒を少量 含む	
4	SP81 埋土	青磁 碗	口縁部			素地 灰白色(N8/ 釉薬 オリーブ灰色 (2.5Y6/1)		精緻	
5	SP96 埋土	瓦質土器 播鉢	口縁部			①②灰色(N3/)		2mm程の礫を極少量含む 1mm以下の砂粒を含む	
6	SP132 埋土	土師器 坏	底部	②(5.2)		①②浅黄橙色(10YR8/3)		1mm程の砂粒を含む	
7	SP145 埋土	土師器 坏	口縁部 ～底部	③0.9		①②灰黄色(2.5Y6/2)		精緻	
8	SP145 埋土 (最上層)	瓦質土器 鍋	体部			①灰白色(5Y7/1) ②灰白色(2.5Y8/1)		2～3mm程の礫を少量含む 1mm程の砂粒を多く含む	
9	SP163 埋土	土師器 鉢	口縁部			①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)		2mm程の礫を少量含む 0.5mm程の砂粒を多く含む	
10	SP164 埋土	瓦質土器 播鉢	口縁部			①②灰色(N4/)		1mm以下の砂粒を多く含む	
11	SP171 埋土	瓦質土器 鍋	口縁部			①灰白色(N7/ ②灰色(N6/)		1mm以下の砂粒を多く含む	
12	SP172 埋土	土師器 皿か	口縁部 ～底部	①(7.0)②(5.2) ③(1.0)		①②灰白色(2.5Y8/2)		精緻	底部突起は 他個体の融 着、もしくは つまみを付 け蓋とした 可能性あり
13	SP172 埋土	土師器 坏	口縁部			①にぶい黄褐色(2.5Y6/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)		0.5mm以下の砂粒を少量 含む	
14	SP177 埋土	土師器 坏	口縁部 ～底部	①(6.6)②(3.9) ③1.4		①②灰白色(10YR8/2)		0.5mm程の砂粒を多く含む	
15	SP177 埋土	瓦質土器 羽釜	鏝部	幅(1.4) 厚み(0.8)		①橙色(2.5YR6/6)		2mm程の礫を少量含む 0.5mm程の砂粒を多く含む	
16	SP178 埋土	土師器 坏	口縁部			①②にぶい黄橙色 (10YR7/4)		0.5mm程の砂粒を少量含む	
17	SP178 埋土	土師器 坏	口縁部			①②浅黄橙色(10YR8/3)		0.5mm程の砂粒を少量含む	
18	SP180 埋土	土師器 皿		①5.4②4.3③0.7		①②橙色(5YR6/8)		0.5mm程の砂粒を少量含む	ほぼ完形
19	SP180 埋土	土師器 坏	口縁部 ～底部	③2.5		①灰黄色(2.5Y7/2) ②黄灰色(2.5Y6/1)		1mm以下の砂粒を含む	

また遺構からは近世に下る土器資料も出土していないことから、当地では14世紀代に集落が形成され、16世紀中に廃絶したものと思われる。

[註]

- 1) a:横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口
- b:横山成己(2011)「農学部附属動物医療センター改修Ⅱ期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成19年度—』, 山口

5. 小結(図67・68)

第1調査区では、中世集落が確認された。この集落は、出土遺物から14世紀代に成立し、16世紀中に廃絶したものと推定される。時代は降るが18世紀前半～中頃に作成された『地下上申絵図 吉敷郡吉田村精図』(山口県文書館所蔵)においても該当地に集落は描かれていない。

およそ200～300年間の間に建造物は幾度も建て替えられたようで、200㎡の調査区に200基以上のピットが検出された。遺構の重複が少ないことから、建て替えに際しては建物建造場所を少しずつ移動させていたようである。

集落域は北方へは調査区西地区内でほぼ収まるようであり、集落域を区画する柵状施設が存在していた可能性が高い。集落の北方に関しては耕作地が想像されるが、第1調査区北西約70m地点で実施した立会調査(図67)において、今回検出した遺構埋土と同様の土質が見られるピットを検出していることから、安易に集落域を推定することはできない。

また、東地区東端部においてもピットの集中分布を確認した。出土遺物や埋土の土質から西地区との時期差は想定されない。西地区集落域との間には微弱ながらも集落建物・柵列と方向を同一にする溝が検出されていることから、近隣地域に複数の集落、換言すれば屋敷地が計画的に造営されていた可能性を残す。

中世集落を考察する上でさらに広域に目を向けると、吉田遺跡の既往調査では、大学本部2号館敷地にて区画溝を有し屋敷墓を持つ屋敷跡が確認されているが、出土遺物によりこの屋敷は室町時代に成立し、江戸時代まで存続することが想定されている^{if2}。また平成20年度に実施した新教育研究棟新営に伴う発掘調査においても中世集落が検出されている^{if3}。この他、不確実ではあるが本学吉田地区への統合移転時に実施された吉田遺跡第Ⅱ地区(動物医療センター南西の現飼料園)においても中世集落が存在した可能性が高い^{if4}。

吉田遺跡においては、弥生時代以降近世まで継続的に定住生活の痕跡が認められるが、その中でも複数の空白期間が存在する。その一つが古代末から鎌倉時代にかけてである。当期間に所属する出土遺物は主として遺物包含層から出土するが、未だ明確な遺構群は確認できていない。その中でも、吉田遺跡第Ⅱ地区周辺は該当時期の集落が存在した可能性が高いと考えられる。

吉田遺跡第Ⅱ地区は、動物医療センター改修Ⅲ期第1調査区の南西方向約120m地点に位置する(図67)。両者の間には、動物医療センター南方から北西方向に走り、奈良時代から平安時代にかけての遺物を多量に包含する谷が存在するが、この谷は鎌倉時代にはすでに埋没を終えたものと推定される^{if5}。つまり中世期の両調査区はこの埋没谷をはさむ丘陵台地上に位置することになる。

吉田遺跡第Ⅱ地区は、昭和41年(1966)8月に調査が開始され、同年12月には終了したものと推測される。この調査では現飼料園(第1調査区)とともに動物医療センター敷地(第2調査区)に対しても発掘の手が加えられたようであるが、第2調査区に関しては残念ながら遺物包含層が図示されるに止まっている^{if6}。第1調査区は比較的記録類が充実しているが、遺構分布図(図68)を見ると、調査区中央に南東-北西方向の溝が走り、その溝をはさんで多数の柱穴、土壌が分布している。この溝に関しては、出土遺物に相当の時期幅があるが、主体は11世紀から14世紀に該当する遺物である。柱穴に関しては、遺構と遺物との正確な照合がとれないのが難点であるが、遺物を見る限りでは溝と同時期のものが主体を占めるかに思われる。

一方、動物医療センター改修Ⅲ期第1調査区では、前述のごとく13世紀以前に遡る遺構が確認されず、時期比定が可能な遺物は全て14世紀から16世紀に収まっている。以上の調査成果を見た場合、想

像をたくましくすれば、何らかの要因で第Ⅱ地区第1調査区が位置する丘陵上から、谷向かいの丘陵上へ集落が移動した可能性を指摘できる。

以上の調査成果から、吉田遺跡では室町期の集落が少なくともキャンパス北東部(大学本部～新教育研究棟)とキャンパス南東部(動物医療センター周域)の丘陵台地2ヶ所に存在したことが確実であり、キャンパス南東部の集落は耕地拡大にともない彼の地の集落に集約されたものと推察される。『地下上申絵図 吉敷郡吉田村精図』には現在の農学部附属農場棟周辺に5棟からなる集落が描かれている。この場所では統合移転時の昭和41年(1966)に牛舎新営に伴う発掘調査が実施されており、概報では中世住居跡の存在が指摘されている。その後正式な発掘調査報告を刊行しておらず、近隣地においても新たな知見が得られていないため詳細は不明であるが、中世集落の消長を復元する上で今後重要な地

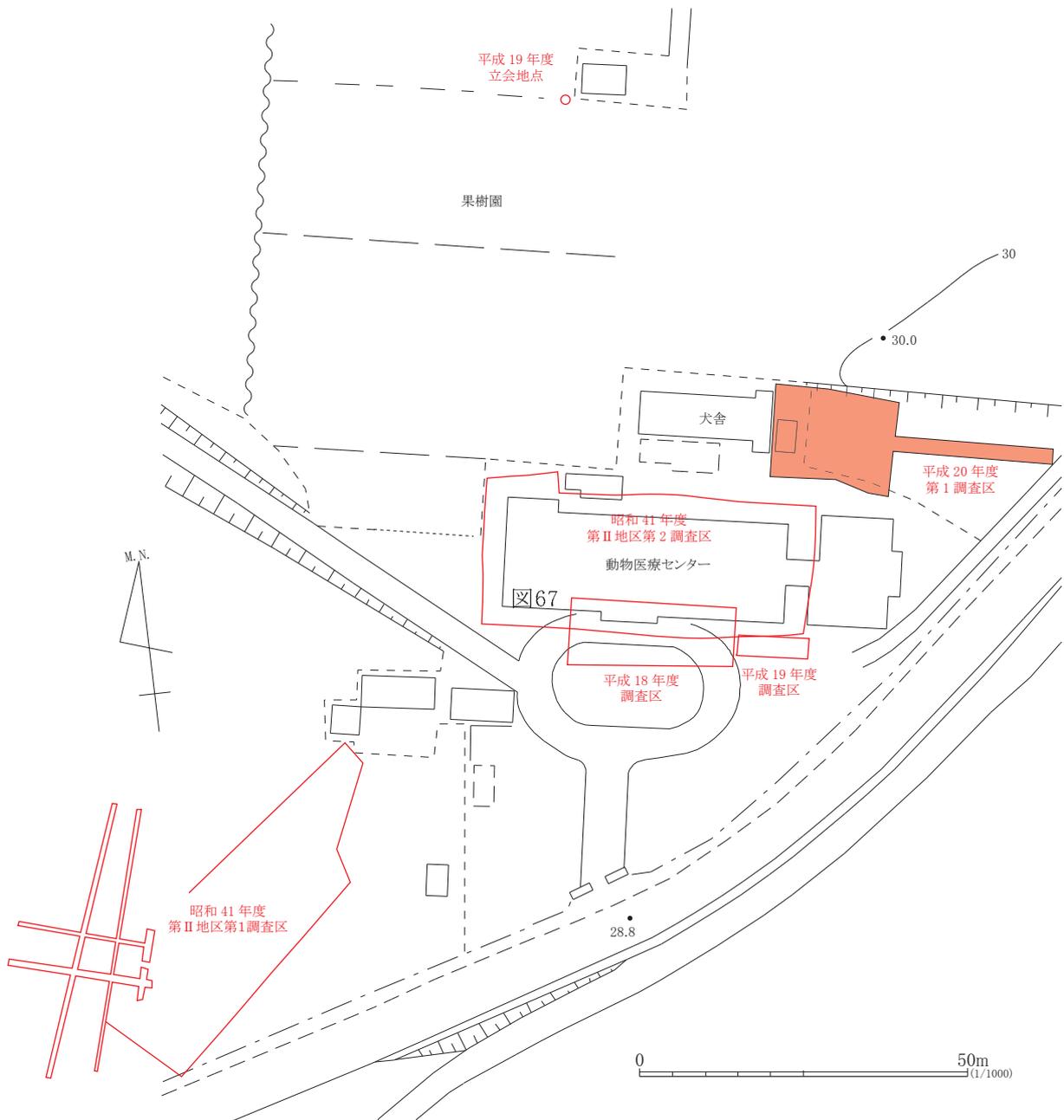


図 67 動物医療センター周辺調査区配置図

吉田構内(吉田遺跡)の調査

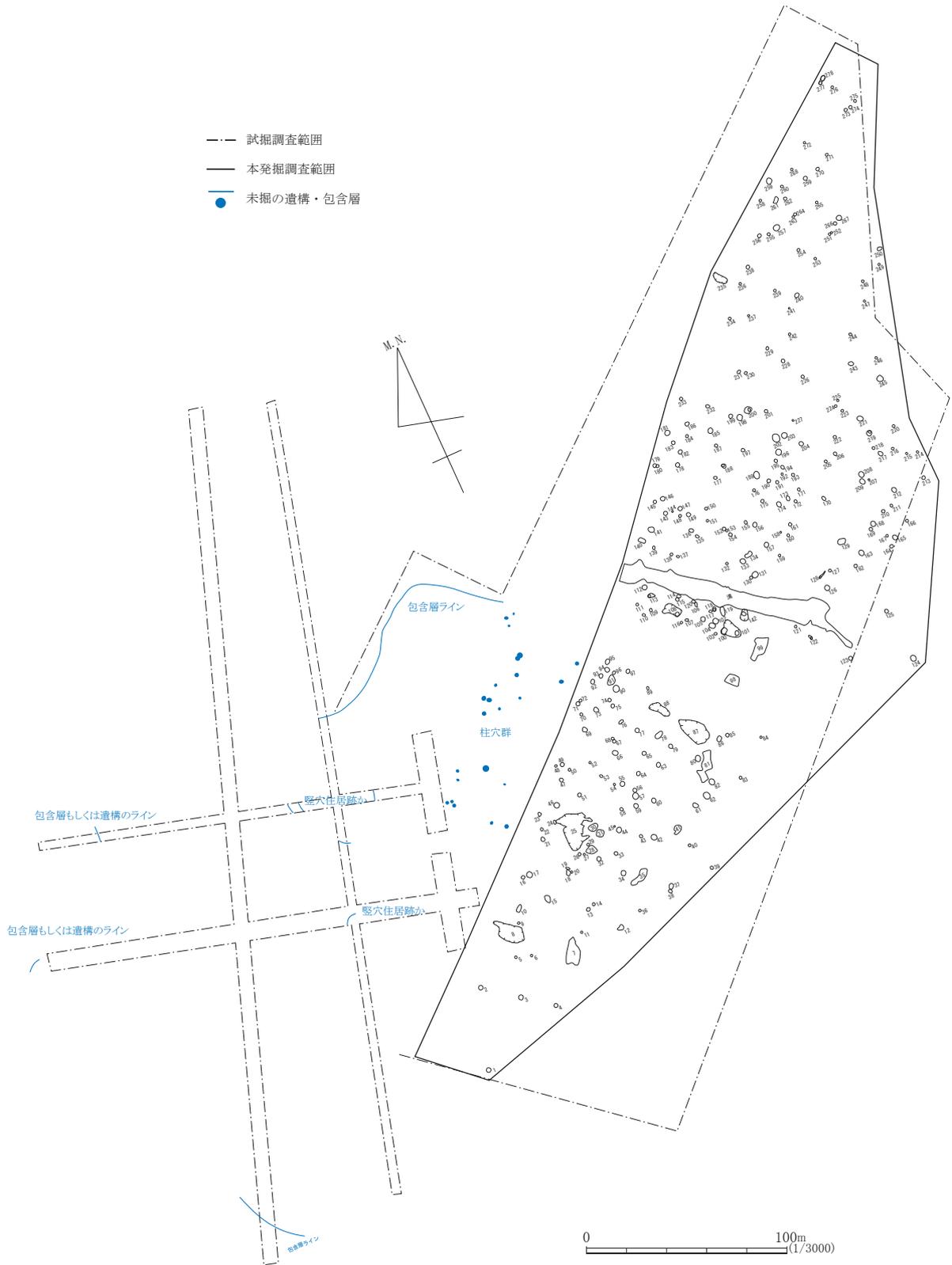


図 68 吉田遺跡第Ⅱ地区第1調査区平面図

域となるであろう。

一方『地下上申絵図 吉敷郡吉田村精図』に白壁の蔵が描かれ、近世「坂本村」の中心部と目される大学本部2号館検出の屋敷跡は、室町時代に成立し江戸時代まで存続する。この場所には本学統合移転時まで集落が営まれており、室町時代以降農村の中心的存在であったことを示している。

吉田遺跡における中世期の様相は未だ不明確な部分が多く、今後に残された課題も山積している。動物医療センター周域を含め、吉田構内北東～南部に広がる丘陵台地上はさらなる集落の存在が想定されるため、開発工事等による地下の掘削に対しては慎重な対応が必要と言える。

[註]

- 1) 横山成己(2011)「農学部附属農場内電源敷設工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成19年度－』, 山口
- 2) 河村吉行(1990)「吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』, 山口
- 3) 本書所収
- 4) 横山成己(2007)「吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度』, 山口
- 5) 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成18年度－』, 山口
- 6) 図示された遺物包含層は谷埋土最上層と推定される(前掲註3)。
- 7) 小野忠熙(1976)『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』, 山口大学吉田遺跡調査団, 山口

(2) 第2調査区

1. 調査の経過

改修工事に伴い浄化槽が新設される動物医療センター西側空閑地を第2調査区と定めた(図57)。第1調査区の西北西約70m地点に当たる。当地点は、平成14年度に実施し、古代に所属するものと推測される総柱建物を含む掘立柱建物群が検出され、遺物包含層および河川埋土中より墨書須恵器、製塩土器、轆羽口、銅鉾石等豊富な資料が出土した農学部解剖実習棟新営に伴う発掘調査区^{ik1}と、平成18年に実施し、古代の大型掘立柱建物とともに多量の須恵器・土師器を包含する埋没谷が確認された家畜病院(現動物医療センター)改修Ⅰ期工事に伴う発掘調査区^{ik2}の中間地点に位置する。既往の調査により少なくとも開発予定地に谷(旧河川)が埋存することが確実視されたため、予備発掘調査を省き本発掘調査に着手した。開発工事規模に伴い、調査区は南北7m、東西7mの正方形とした。

重機掘削は第1調査区の各種記録作業を行っていた2月5日より開始し、谷の埋土上面を検出した後は層位的に人力掘削を行った。谷埋土および遺構掘削を終了し、記録作業を終えたのは年度末も近い3月17日であり、翌18・19日に埋め戻しを行った。

[註]

- 1) a: 田畑直彦(2002)「山口大学構内吉田遺跡－農学部校舎改修(解剖実習棟新営)に伴う発掘調査略報－」, 山口考古学会(編)『山口考古』第22号, 山口

- b: 田畑直彦(2004)「平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
- 2) 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修I期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口

2. 基本層序(図69、写真187～190)

調査前の現地標高は約27.4mであり、南東-北西方向に緩やかに傾斜していた。調査により確認されたアスファルト下位の基本増序は以下の通りである。

第1層 造成土・砕石等(層厚約60cm)

第2層 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(層厚約30cm)…遺物包含層1

調査区北端部にのみ遺存し、大部分は大学造成時に削平されている

第3層 褐灰色(10YR4/1)に褐色(10YR4/4)が混ざる粘質土(層厚10～25cm)…遺物包含層2

部分的に大学造成時に削平されている

第4層 明黄褐色(2.5Y6/6)粘質土に灰色(N/5)粘質土が部分的に混ざる…地山

その他、調査区北部には東西方向に水道管が埋設されており、工事掘削により包含層と谷埋土、そして西端部においては地山を部分的に破壊している。

3. 遺構(図69、写真171～186)

遺構はピット3基、杭列1条、谷が確認された。

谷(NR1)(図69、写真171～184)

調査区の南東-北西を結ぶ位置に谷の左肩部を検出した(写真171)。検出面の標高は26.4～26.6mであり、南東が高く北西が低い。断面形態を見ると、左肩部より約30度の傾斜をもって降下しており、底面はほぼ平坦となる。調査区内において谷幅は肩部上端で約5m、底面で約3.4mを計測する。東壁断面では北端部で底面がやや上昇するかに見られるが(写真187)、これが谷底からの立ち上がりを示すものかは不明である。

埋土は6層に分かれ、以下の特徴を有する。

第1層(NR1L1) 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土に1～2mmφの白色礫が極少量混ざる

第2層(NR1L2) 黒褐色(10YR3/1)弱粘質土に0.5～2mmφの礫が少量混ざる

第3層(NR1L3) 第2層と同質であるが0.5～3cmφの礫が多量に混ざる

第4層 上下2層に細分される

上層(NR1L4上層) 黒褐色(2.5Y3/2)泥土に0.5～3cmφの礫が極少量混ざる(木製品多量に含む)

下層(NR1L4下層) 黒色(N/2)泥土(木製品・自然木多く含む)

第5層(NR1L1) 黒褐色(2.5Y3/2)泥土に灰黄色(2.5Y6/2)強粘質土が混ざる

第6層(NR1L6) 0.5～10cmφの砂礫層(水流堆積層)

この内第1～3層は部分的に谷肩部をオーバーフローした状態で検出されている。調査中、第1層掘削時より湧水を見たが、最下層に位置づけられる第6層に至っては激しい水流があり、現在まで地下水脈として機能し続けていることが確認された。第6層の層厚は最大で0.26mを測る。

第5層は肩部から谷底にかけての傾斜面に地山を取り込みながら流下・堆積したものであり、層中からは墨書須恵器を含む若干の人工遺物が出土している。層厚最大0.26m。

最下層直上に堆積する第4層下層は、有機物が腐蝕したようで泥炭層状を呈している。層中より自然木および木製品が多く出土した(写真175～182)。出土資料に関しては後述するが、多くは成品ではなく加工痕を有した木材片であり、木製品の製作中に生じた不要部位等を谷中に廃棄した状態を示すものと考えられる。土器資料を包含しないこともこの層の特徴と言える。層厚約0.2mを測る。

第4層上層は土質的には下層と類似するが、下層に比して有機物の腐蝕痕跡が顕著ではない。層厚は最大で0.45mと埋土中最も厚く堆積するが、明確な水流痕跡は見られない。泥土であることから見て埋没当時は沼地であった可能性を残す。層中より多量の木製品が出土しているが、その状況は第4層下層と同様である。

第3層以上は、厳密には凹地と化した埋没谷の上面に形成された遺物包含層と言える。包含される遺物も時期的に下るものが多くなり、第1層では瓦質土器を少量含む。第1調査区小結で記述した第2調査区の南方に広がる丘陵台地部、吉田遺跡第Ⅱ地区出土の遺物群と時期的な類似を示すことから、南方台地部から流入した遺物群と推察される。

第2調査区南西約25mに位置する平成18年度調査区でも埋没谷は確認されている(図57)。確認された埋土は4層に分類されるが、土質から見て当調査区の第1～4層に対応するものと推定している。平成18年度調査区では谷埋土の下位にさらに堆積層が確認されたが、当調査区の谷埋土下は地山となっている。

一方、第2調査区北西16m地点に位置する平成14年度調査区においても河川跡が確認されたと報告されている^{注12}。未だ正式報告を行っていないため詳細は不明であるが、位置的に当調査区で検出した埋没谷の延長と見て間違いない。平成14年度調査では河道の右肩部が確認されており、今回の調査を合わせて谷(河道)の規模の概略が推定可能となった。

また、断面形態や埋土を観察する限りにおいて、谷は自然地形を利用しつつも人為的に整形された可能性が高いと考える。

杭列(図69、写真172・175・177)

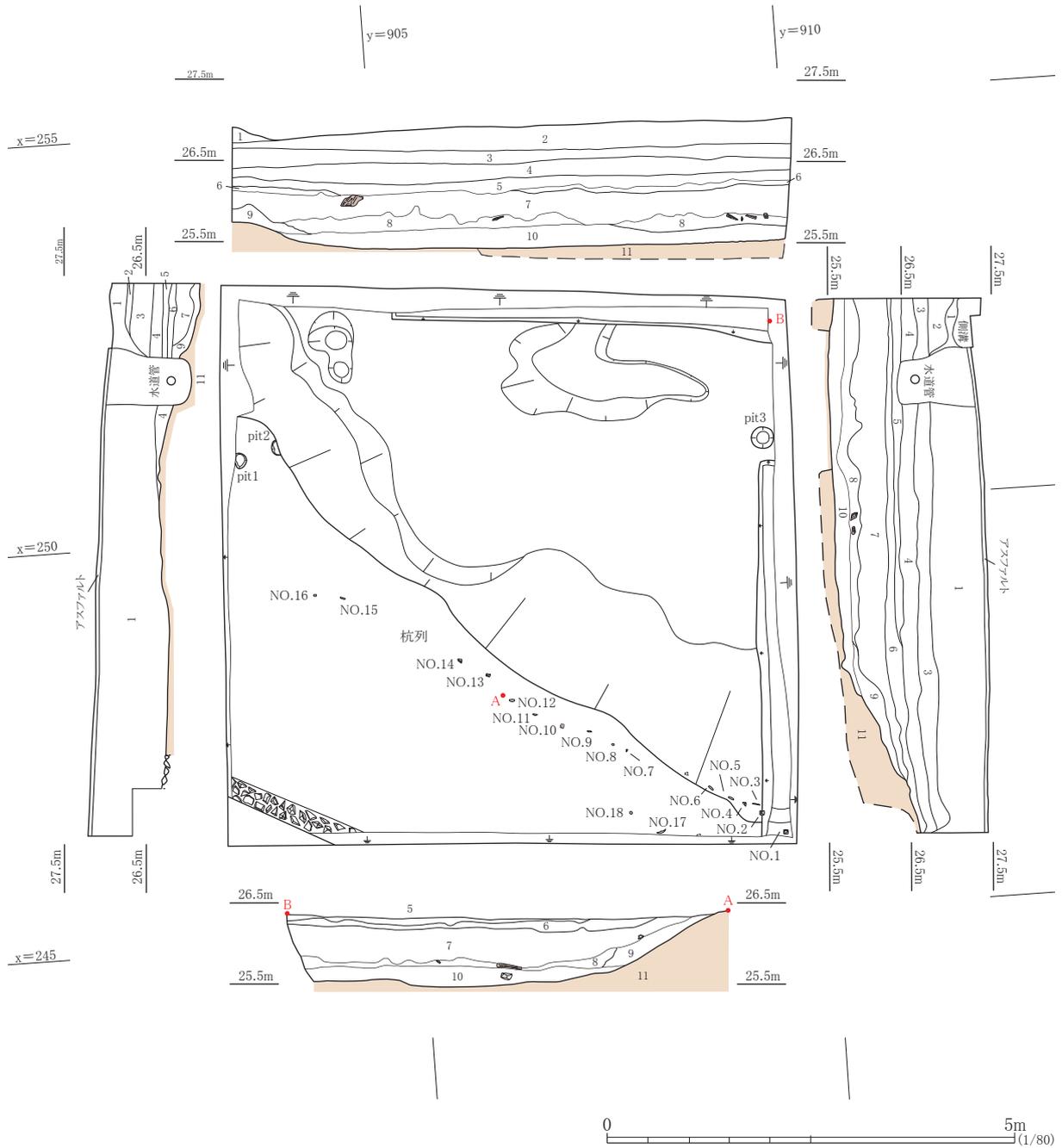
谷の右肩部に杭列が検出された。木製杭は谷の走向同様南東-北西方向に列しており、調査区南東隅部から直線距離にして約6.4mまでの範囲に確認した。杭・矢板合わせて18本が出土しているが、地山面上位はすでに欠失した状態にあった。

杭列の並びを見ると、NO.1～NO.6までは谷傾斜部内に設けられているが、NO.7～NO.16は肩部上面より検出されている。また北西部の杭ほど谷肩部より南西方向に偏る傾向が見られる。この杭列は護岸施設と見なされるが、北西部の杭列は護岸の用をなさない位置に存在することから、谷肩部は北西ほど後世に流失、または削平を受けたものと推察される。杭の遺存部が比較的短い(打ち込みが浅い)こともその論拠となるであろう。従って、分布が薄くなる北西部の杭列およびNO.16地点より北西部においては、当初より杭が存在しなかったのではなく、後世に欠失したものと推測しておく。

ピット1・2(図69、写真185・186)

調査区北西端部に検出された。ピット1は西壁直下地山面にて検出されたもので、長軸19cm、短軸14cm以上の平面楕円形を呈する。深さ10cmを測り、埋土は単一で黒褐色(10YR3/1)強粘質土。遺物は含まれていなかった。ピット2はピット1の北東0.4mに位置する。径20cmの円形ピットであり、深さ8cmを測り、埋土は単一で褐灰色(10YR4/1)粘質土。こちらも遺物は含まれていなかった。また、ピット2は地山面で検出したが、埋土が谷の埋土とほぼ同質であったため、谷埋土上からの掘り込みである可能性を残す。この2基のピットに関しては、現状では谷との関係を明瞭にし得ない。

吉田構内(吉田遺跡)の調査



- 1 造成土・碎石等
- 2 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土…包含層1
- 3 褐灰色(10YR4/1)に褐色(10YR4/4)が混ざる粘質土…包含層2
- 4 黄灰色(2.5Y4/1)強粘質土に1~2mmφの白色礫が極少量混ざる…谷埋土1(NR1L1)
- 5 黒褐色(10YR3/1)弱粘質土に0.5~2mmφの礫が少量混ざる…谷埋土2(NR1L2)
- 6 5と同色・同質であるが0.5~cmφの礫が多量に混ざる…谷埋土3(NR1L3)
- 7 黒褐色(2.5Y3/2)泥土に0.5~3cmφの礫が極少量混ざる(木製品多量に含む)…谷埋土4上層(NR1L4上層)
- 8 黒色(N/2)泥土(木製品多く含む)…谷埋土4下層(NR1L4下層)
- 9 黒褐色(2.5Y3/2)泥土に灰黄色(2.5Y6/2)強粘質土が混ざる…谷埋土5(NR1L5)
- 10 0.5~10cmφの砂礫(水流堆積層)…谷埋土6(NR1L6)
- 11 明黄褐色(2.5Y6/6)粘質土に灰色(N/5)粘質土が部分的に混ざる…地山

図 69 第2調査区平面図・断面図

ピット3(図69、写真187・188)

調査区北東隅、谷底面にて検出された。前述の通り谷埋土最下層は水流堆積による砂礫層で、調査中も激しい湧水を見た。ピット3はその砂礫層の下位、地山面にて検出されたが、湧水のため写真撮影および埋土の断面観察はできなかった。

ピット3の平面形態は径27cmのほぼ正円で、深さは13.5cmを測る。埋土は黒褐色粘質土。埋土中に遺物は含まれていなかった。当ピットに関しては上層からの掘り込みでないことを確認しており、積極的な根拠はないものの、不自然な平面形態と埋土の質から遺構の可能性のあるものとして記録しておく。

この他、谷底面には不整形な落ち込みが複数見られたが、これらは人為的なものではなく水流に起因するものと判断している。

[註]

- 1) 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修 I 期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口
- 2) a: 田畑直彦(2002)「山口大学構内吉田遺跡—農学部校舎改修(解剖実習棟新営)に伴う発掘調査略報—」, 山口考古学会(編)『山口考古』第22号, 山口
b: 田畑直彦(2004)「平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
- 3) 杭列NO.6北西隣1ヶ所にも杭の痕跡が確認されている。

4. 遺物(図70~92、写真191~211、表12~14)

【土器類・土製品】

土器類には縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器が、土製品には土錘が存在する。谷埋土の下層から順を追って報告するが、第6層からは遺物の出土を見なかった。

谷埋土第5層 NR1L5(図70)

個体数としては3点の須恵器坏が確認される。遺物は主として谷左岸傾斜部上位に堆積した第5層にめり込むように出土している(写真177)が、第4層上層中から出土した小片とも接合する。第4層堆積時に第5層から滑落した結果か、第4~5層がほぼ同時期に堆積したのか不明であるが、包含される遺物に明確な時期差が存在しないことから後者である可能性が高い。

1は須恵器高台付坏。底-体部境界のやや内側に扁平な高台を付ける。高台内端部で接地する。底部は上げ底状となっており、ヘラ切り後回転ナデ調整が施されている。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は弱く外反する。底部外面には墨書が見られる。一見「主」と読めるが(写真191の1-2)、縦棒は連続して一気に引かれている。縦棒下端部の器面が凹んでいるために墨が及ばなかった可能性を考慮すると「卅」とも読める。2は1と器形・法量ともほぼ同様の特徴を有する須恵器高台付坏。1に比して体部が直立し、口縁の外反が強い。3は1・2に比して底径の小さい須恵器高台付坏。底-体部境界のやや内側に小ぶりの断面逆台形状の高台が付く。端部全面で接地する。体部はやや開き気味に立ち上がるが大きく欠損しており、接合資料も確認されなかった。底部外面はヘラ切り後回転ナデ調整。体部内外面にも回転ナデ調整が施されている。

谷埋土第4層 NR1L4(図71・72)

須恵器、土師器、製塩土器が存在する。

4～13は須恵器坏蓋。4はボタン状つまみを有する扁平な蓋である。天井部から肩を形成し口縁に降下する。口縁部は水平方向に拡張される。口縁部は内外面とも回転ナデ調整、天井部外面は不定方向のナデ、内面は直線的なナデ調整が施される。5はほぼ完形に復元される蓋で、天井部に宝珠形つまみを有する。4に比して器高が高く、平らな天井部から肩を形成し、外反気味に口縁部に降下させる。口縁端部は鳥嘴状に下垂させている。内外面ともに回転ナデ調整が施される。他は蓋の小片であり、口縁を強く屈曲させ端部を下垂させるもの(6)や端部のみを下垂させるもの(7・8)、口縁内面にかえりを有するもの(9・10・11)が存在する。つまみは2種のもので確認できる。12は中央部を囲ませるボタン状つまみの剥離片である。13も同様にボタン状つまみ片であるが、こちらは中央部を突出させている。

14～23は須恵器坏。14は半損品であるが完形に復元可能であり、体部の歪みが大きい高台付坏である。1・2に比して長く外方に張り出す高台を有しており、貼り付け箇所もより内側となっている。高台貼り付け後、丁寧に回転ナデ調整が施されている。体部は開きが少なく、ほぼ直線的に立ち上がる。体部調整は内外面ともに回転ナデ。15は須恵器高台付坏のやや焼成不良品である。こちらも半損品であるが完形に復元可能である。断面方形の高台は底-体部境界のやや内側に付き、内端部で接地する。体部はやや外反気味に立ち上がる。体部は内外面とも丁寧な回転ナデ調整が施されており、内面には部分的に縦方向のナデも見られる。底部外面はヘラ切り後回転ナデ調整、内面は不定方向の直線的なナデ調整が施される。16も須恵器高台付坏。およそ3/4を欠失するが、高台の遺存状況が良いため完形復元した。器高・法量は1・2に似るが高台はやや幅細であり、底-体部境界にはっきりと稜が形成される。底部は丸底を呈し、高台とともに底部外面でも接地する。外反気味に開く体部を有する。この他、高台を有する底部片(17・18・19・20)を図示しておく。20・21は無高台平底の坏底部片。20は底部外面ヘラ切り無調整、内面は不定方向のナデが観察される。21の底部外面には小さな「安」の墨書が見られる(写真195の21-2)。吉田遺跡の既往調査で確認された墨書はいずれも字体が太いという特徴があったが、当資料は細筆で小さく書かれている。字体の特徴としては、右のはらいを長く伸ばす。「安麻呂」等の人名が推測されるが字義は定かではない。22・23は坏体部片。23内面には墨痕が残っている。

24・25は須恵器皿の底-口縁部片と見られる。両者とも口縁内外面に回転ナデ調整が施されている。また25の口縁内端部には当資料が重ね焼かれたことを示す焼成痕跡が残っている。

26～29は須恵器高坏。26は長脚の高坏。坏部上半を欠失している。細身の脚部を有し、裾端部を下垂させ接地する。脚柱部内面にはしぼり痕が明瞭に残り、外面上半には1条の沈線が巡らされている。動物医療センター改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査では、谷埋土の下位に堆積する遺物包含層L6より、7世紀後半～8世紀初頭を主体とする土器群が出土している。層中に含まれる須恵器高坏は、当資料と同様の特徴を有しながらも、沈線は脚柱部のほぼ中位に巡らされており、坏部もより深い。それぞれに伴出する須恵器から時期差を示す可能性が高く、注意が必要である。27は坏部を欠失するが脚部は完形に残る。26に比してやや低脚であり、脚柱部も太身となるが、やはり外面やや上位に沈線が巡らされている。裾端部を下垂させて接地させる。28は歪みの大きい裾部片。同様に端部を下垂させる。29は高坏の坏部口縁片と判断した。

30は器種不明の脚部片。太身の脚柱を有し、裾は大きく開き端部を下垂させている。内外面に回転ナデ調整が施されている。内面裾部に「主」、その対面脚柱部に「井」の墨書が確認される(写真196の30-2)。1と異なり「主」の「」は独立して書かれている。「井」は「主」と同方向から書かれていることから、この2字の字義を合わせて何かを表しているものと想像される。谷への投棄を重視すれば、「主」は「つかさどる」、「井」は「用水」の意で、用水管理を意味しているのかも知れない。



写真 171 第2調査区遺構面検出状況（東から）



写真 172 谷埋土完掘状況（東から）



写真 173 谷埋土掘削風景 (東から)



写真 174 谷埋土掘削状況 (南西から)



写真 175 谷埋土 L6 上面検出状況 (東から)



写真 176 谷埋土 L6 直上木製品出土状況 (南東から)



写真 177 谷肩部須恵器出土状況 (東から)



写真 178 谷埋土 L6 直上木製品出土状況 (南から)



写真 179 木製品出土状況①(南東から)



写真 180 木製品出土状況②(南から)



写真 181 木製品出土状況③(南から)



写真 182 木製品出土状況④(南西から)



写真 183 土層確認アゼ断面①(西から)



写真 184 土層確認アゼ断面②(南西から)



写真 185 Pit1・Pit2半裁状況 (南東から)



写真 186 Pit1半裁状況 (東から)



写真 187 調査区東・北壁土層断面 (南西から)



写真 188 調査区東壁土層断面 (南西から)



写真 189 調査区東壁南側土層断面 (北西から)



写真 190 調査区北壁土層断面 (南から)

31・32は須恵器甕。31は器壁の厚い口縁部片。口縁端部に面を形成する。内面には横ナデが見られるが、外面は灰が被っており調整が不明瞭である。内外面とも部分的に自然釉が付着する。32はやや焼成不良気味の頸-口縁部片。口縁端部を欠失する。外面頸部下端に沈線が巡るようである。口縁内面には「八」のヘラ記号が見られる。内外面とも横ナデが施される。

33は平瓶の円盤閉塞部片と見られる。器壁7.5mmの体部に厚さ5mmの円盤を重ね接合している。体部内面には当て具痕が残る。

34は土師器碗口縁-体部片。内湾する体部から口縁部を弱く外反させる。口縁端部は丸く収める。口縁内外面と底部内面に回転ナデが残るが、他は縦方向の丁寧なナデ調整が施される。体部の3/4を欠失するが、口径はおよそ14cm弱に復元される。

35・36は土師器坏。35は内外面とも赤色塗彩された坏で、平底状の底部から湾曲して体部に立ち上がり、口縁は外反する。口縁内端に沈線を1条巡らしている。内面は風化が激しく調整が観察できないが、外面は口縁部付近に横ナデ、以下は密に横方向のミガキが施されている。全体の3/4を欠失するが、口径はおよそ19cmに復元される。36は口縁部の小片である。外面には横方向のミガキが、内面には横ナデ後左上がりの細いミガキが施される。

37・38は土師器甕。37は長胴の甕で、約3.5cm幅の粘土板を積み上げて成形されている。口縁端部の遺存状態が悪いため器の傾きが復元できないが、体部上半はやや内傾気味に窄まり、口縁を大きく外反させる形態と思われる。体部外面は縦方向、部分的に斜め方向のハケが密に施されている。内面は横ナデ。口縁部外面には横ナデが、内面には横方向のハケが施される。口縁外面にはスス痕が残る。38は37と異なり口縁下で体部が弱く膨らむ形態の甕である。口縁は短く外反し、端部に微弱ではあるが面が形成される。内外面とも横ナデが施されているが、体部外面には部分的に縦ハケが観察される。また外面には部分的にスス痕が残る。

39は第2調査区谷埋土において唯一確認された美濃ヶ浜式製塩土器。脚部下端片で、脚上半部と裾部を欠失する。脚柱部径は1.4cmを測る。

以上第5層、第4層出土土器の概要を記した。この内、3点の墨書須恵器が確認されたことは特筆に値する。文字が判読できる墨書土器として、吉田遺跡ではこれまでに「富」¹¹³「官」¹¹⁴の2例が確認されていたが、この度の調査でさらに「安」「主」「井」の3例を加えることができた。

また前述したように、第5層出土須恵器は第4層出土の破片と接合する。この2層の堆積時期に関しては、一部須恵器に9世紀以降の特徴を有するもの(高台付坏3、蓋4・6など)が見られるが、主体は8世紀の前半から中頃と考えられる。

谷埋土第3層 NR1L3(図73・74)

前述したが、第3層は検出した谷を部分的にオーバーフローしている。谷肩部杭列の存在から、人為的に整備された谷の肩部はさらに上方に存在していた可能性が考えられる。よって第3層は谷肩部がある程度流失した、または人為的に削平された後、第4層までの堆積で窪地となった一帯に堆積した遺物包含層として認識される。

第3層から出土した土器は何れも破片資料であり、完形復元可能なものは存在しない。内容としては土器類に須恵器、土師器、緑釉陶器、弥生土器が、土製品に土錘が確認される。

40～47は須恵器坏蓋。40・47はかえりを有する口縁部片である。小片であるが両者とも径10cm以下に復元されるようであり、須恵器坏G類の蓋と見られる。42は焼成不良であるが器高の低い須恵器蓋の天井-口縁部片。低い天井部から屈曲して口縁に至り、口縁端部を鈍く下垂させる。口縁端部は丸く収めて

吉田構内(吉田遺跡)の調査

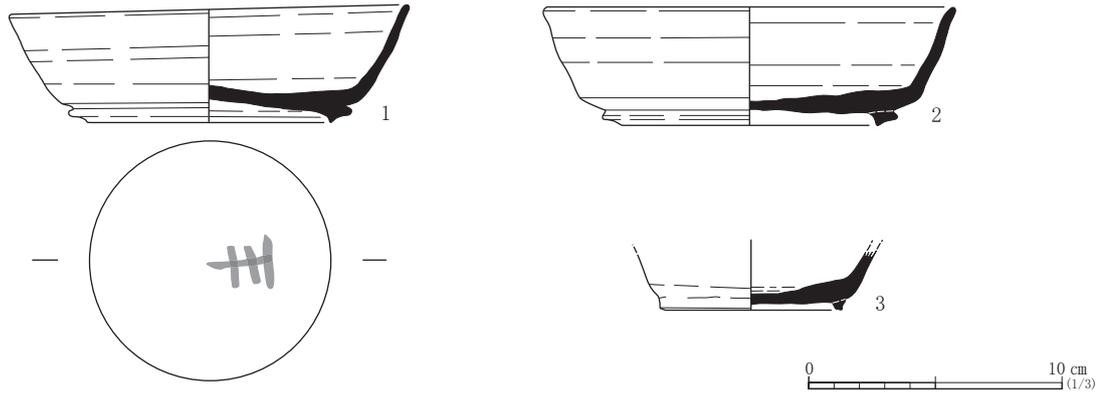


図 70 第2調査区 NR1L5出土須恵器

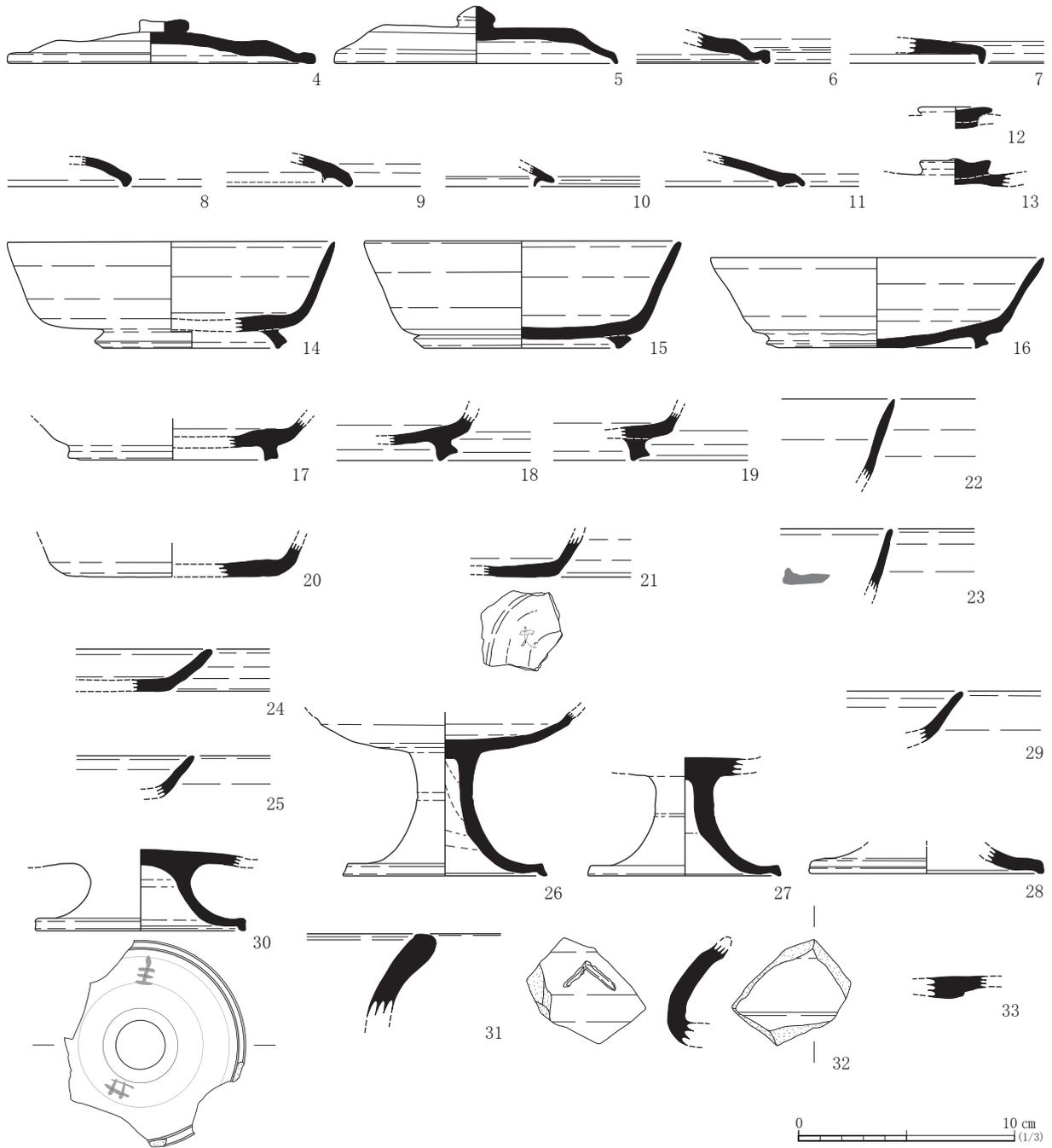


図 71 第2調査区 NR1L4出土須恵器

いる。器面の風化が激しいが、口縁部のみ内外面とも回転ナデ、他は直線的なナデが施されているようである。43はドーム状の天井部を有する蓋の口縁部片と見られる。口縁端部を下垂させる。内外面とも回転ナデ調整。44は口縁下端が丸く肥厚する口縁部片。外面にへら状工具による刻線が見られるが、意図的なものかどうかは不明である。45は口縁端部を鳥嘴状に下垂させる口縁部片。口縁端部外面及び内面は回転ナデ調整が施されるが、天井-口縁部外面は無調整と見られる。46は44同様口縁下端を丸く肥厚させた口縁部片。内面に重ね焼き痕跡を留める。47はボタン状のつまみが付く天井部片。

48～55は須恵器高台付坏底部片。48が底-体部境界部に太身の高台が付くのに対し、49～50は断面方形で端部を凹ませる小ぶりの高台が底-体部境界やや内側に付く。52は断面方形細身の高台を有するが、端部の凹みはなくなり平坦化している。53・54は摩耗が激しいものの端部が丸みを帯びた高台が底-体部境界付近に着く。55は長く外方に開く高台を有する個体である。高台は約4/5を欠失するが、高台外径は8cm内外と推定される。高台端部を凹ませるが、内外両端で接地する。精緻な胎土が用いられ、焼成状況も良好な優品と言える。

56・57は須恵器無高台の坏底-体部片。56はやや厚めの台状底部を有する。体部は外方に大きく開く。底部はへら切り後無調整、体部は内外面回転ナデ調整が施される。57も体部が大きく開く坏である。底部外面に板目状の圧痕が残る。

58・59は須恵器坏体部片。58は直線的に体部から口縁に至り、口縁端部は尖り気味に丸く収める。内外面とも回転ナデ調整。59は口縁がわずかに外反し、端部を丸く収める。

60～62は須恵器高坏片。60は裾部片。脚柱部より「く」の字に強く屈曲させて裾部を張り出す。裾端部を尖り気味に下垂させ接地する。61は高坏坏部の口縁-体部片。坏底から外反気味に口縁が立ち上がる。小型高坏の坏部片と見られる。62も同様に高坏坏部の口縁-体部片。61に比して口縁が直線的に大きく開き、口径も大きい。

63は須恵器壺類の底部片であろうか。無高台平底であるが、底部中央がやや上げ底状を呈する。底部外面は不定方向のナデおよびへら掻き、内面は不定方向のナデ調整。底-体部境界内外面のみ回転ナデ調整が施される。

64は須恵器壺または甕の口縁部片。口縁端部内側を断面三角形状につまみ出している。内外面とも横ナデが施される。

65は小型壺又は平瓶などの口縁部片と見られる。小片であるが口径7cm程度と推定される。外面に深緑色の自然釉がかかる。焼成時に生じたものであろうか、内外面とも器面に2mm程度の爆ぜ痕が多数残っている。

66は須恵器器種不明品。1.1cmの厚い器壁を有し、平行沈線3条により区画された2つの文様帯に波状文が充填されている。内面には横ナデが施される。横断面はかすかに弧を描くが、縦断面はほぼ平坦である。大型甕の頸部であろうか。

67は土師器坏。ロクロ水引き成形した坏底部外面に粘土を貼り足し台底を形成している。68は土師器高台付坏の底部片。ロクロ水引き成形した坏の底-体部境界に断面三角形の高台が付くが、半分は剥離している。底部外面には板状圧痕が見られる。69もほぼ同様の高台を有する土師器高台付坏底部片と見られる。70は土師器坏体部片か。内外面ともに赤色塗彩が見られる。内面にわずかにミガキの痕跡が観察される。

71は土師器甕口縁部片。短く軽く外反する口縁を有する。内外面ともに風化しているが、外面頸部下にわずかにタテハケが残る。

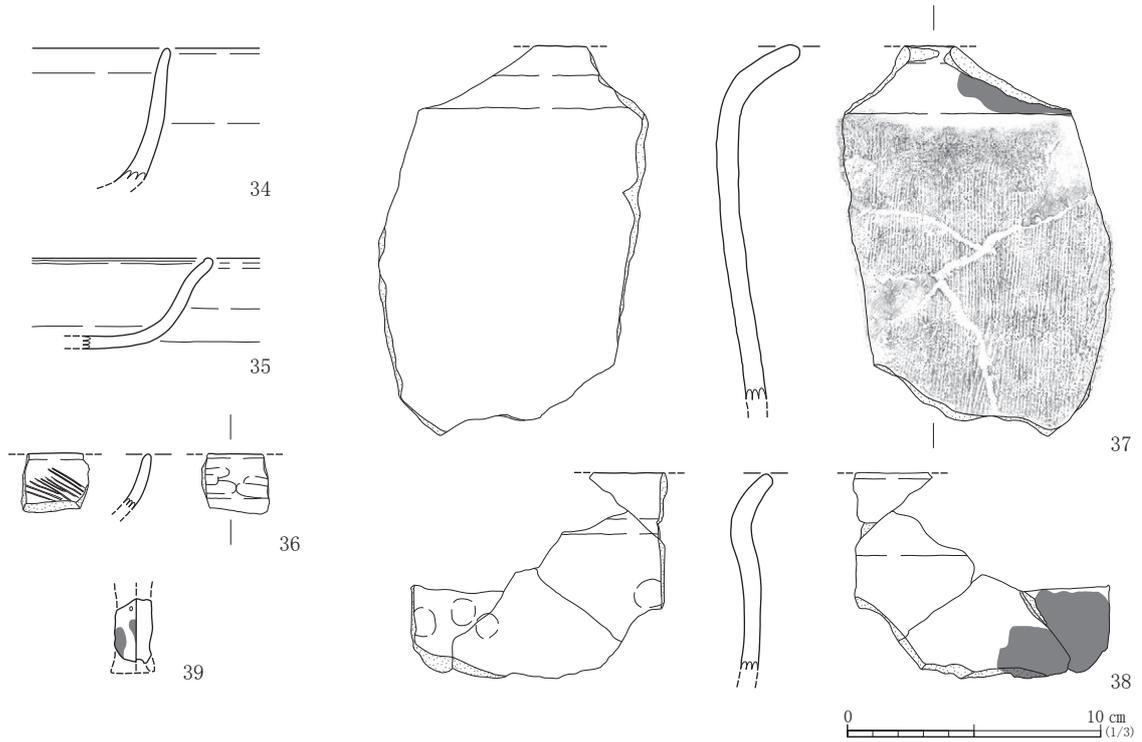


図 72 第2調査区 NR1L4出土土師器

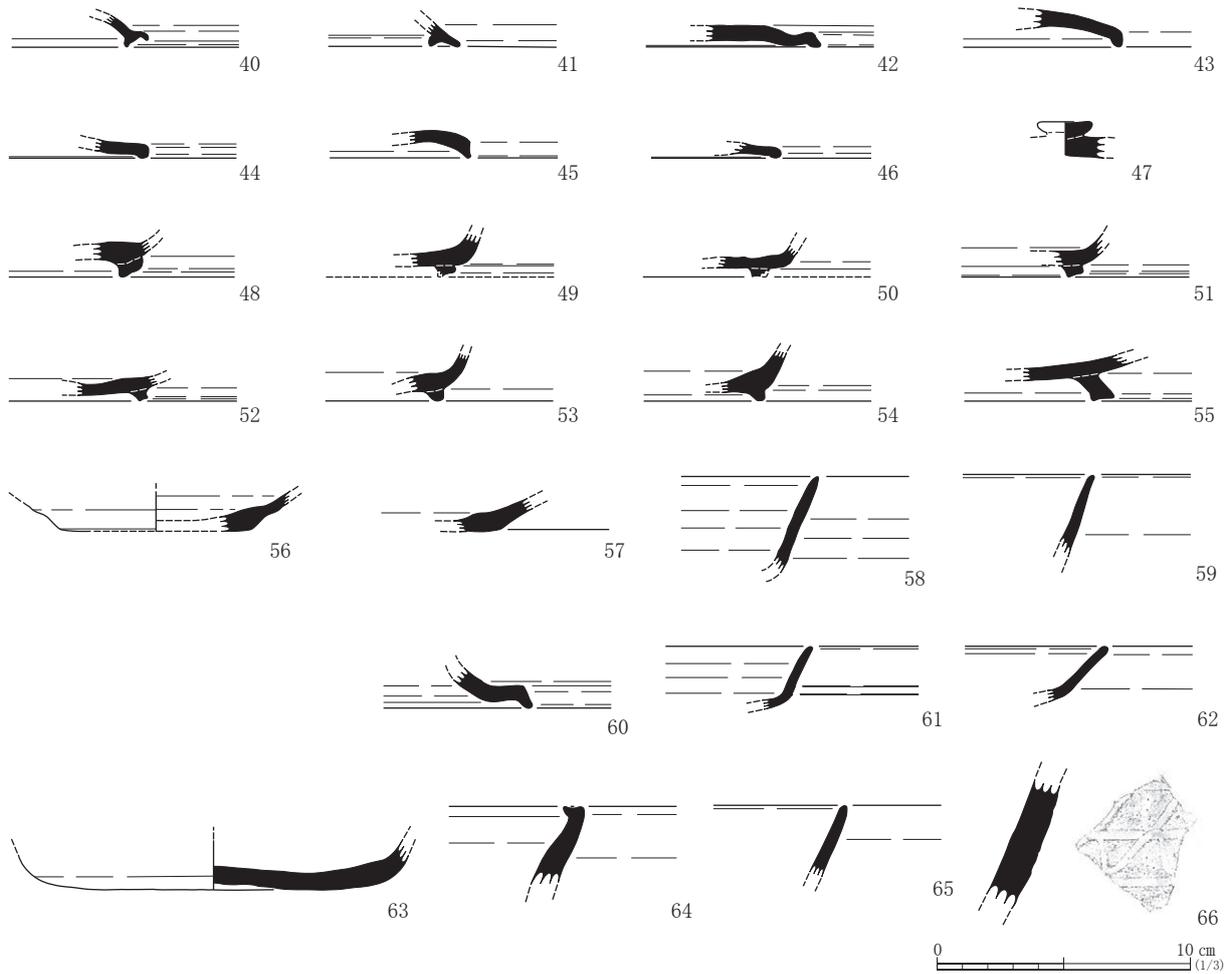


図 73 第2調査区 NR1L3出土須恵器

72は緑釉陶器片。内外面に深緑色の釉が遺存する。調整痕から底部付近の破片であることが分かり、高台坏椀と推される。

73は弥生土器甕底部片。底部は厚くやや上げ底となっている。調整は風化のため不明であるが、胎土には2mm程度の石英・長石等が多量に含まれている。弥生土器底部は第2調査区南方の台地上で実施された吉田遺跡第Ⅱ地区第1調査区の発掘調査においても複数出土しており、当堆積層の由来地を考える上でも重要な資料となっている。

74は土師質管状土錘の半損品である。孔径約6.5mmを測る。

以上第3層出土土器類の概要を記した。当層の堆積年代に関しては、須恵器は小片が多く時期比定が困難であるが、かえりを有する蓋の口縁部片や高坏など古手の資料が混ざりつつも、9・10世紀代の資料が主体となるように思われる。土師器に関しても台付坏や高台付坏の形態は10世紀以降のものであり、緑釉陶器の存在もこれを裏付ける。

谷埋土第2層 NR1L2(図75)

第2層も第3層同様に比較的薄く堆積する遺物包含層である。

75～79は須恵器坏蓋。75はかえりを有する口縁部片。口縁部の処理は極めてシャープである。胎土は精緻で焼成も良好。小破片であるが、孔径は13cm内外と推測される。76は端部を下垂させる口縁部片。口縁端部は丸く収める。内外面とも回転ナデ調整。77はボタン状つまみの付く天井部片である。内面にヘラ状工具による刻線が見られるが、意図的なものか不明である。78は形骸化した扁平なつまみが付く天井部片。つまみ径は3.2cmと巨大化するが、高さは2mm程度となる。79は蓋としたが坏底部である可能性を有す。外面に「×」または「V」と見られるヘラ記号を有す。

80～90は須恵器高台付坏。80は約2/3が欠失するが完形に復元可能な資料である。底-体部境界のやや内側に、細身で外方に弱く張り出す高台が付く。高台端部は面を形成している。体部は直線的に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。底部内外面は比較的丁寧なナデ調整が、体部内外面は回転ナデ調整が施されている。81は底-体部片。底-体部境界付近にやや外方に張り出す断面方形の小ぶりの高台が付く。高台は内端部で接地する。体部はほぼ開かず直線的に立ち上がるようである。内外面とも風化が激しく器面調整は不明。82も底-体部片。高台は底-体部片より内側に付く。高台端部は凹み、外端部は大きく外方に拡張されている。底部高台付近及び体部内外面は回転ナデ、底部内面は不定方向のナデが施される。83～90は底部および高台の破片資料であるが、小片のため底径・高台径とも復元できない。幅広で低い高台が底-体部境界内側に付くもの(83)、断面方形で小ぶりの高台が底-体部境界付近に付くもの(84～87)、高台内端部が内方に摘み出されるもの(88)、底-体部境界に明確な稜が形成され、逆T字状に内外端部が摘み出された高台が付くもの(89)、断面三角形の小ぶりの高台が付くもの(90)が見られる。

91～93は無高台の須恵器坏。91は底-体部片で、平底の底部から開き気味に体部が立ち上がる。底部はヘラ切り後ナデ、体部は内外面とも回転ナデ調整が施される。92・93も同様の底-体部片である。

94は須恵器坏口縁-体部片。体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部を丸く収める。95も口縁-体部片。直線的に開く体部から口縁部が軽く外反する。

96は須恵器高坏裾部として報告するが、復元径が16cm内外と見られるため、蓋の可能性を有す。端部を鳥嘴状に鋭く下垂させている。

97は須恵器短頸壺または鉢の口縁部片。膨らみをもつ体部から頸が窄まり短く外反して口縁に至る。口縁と体部の焼成具合に差が見られることから、蓋が被せられた状態で焼成されたものと思われる。

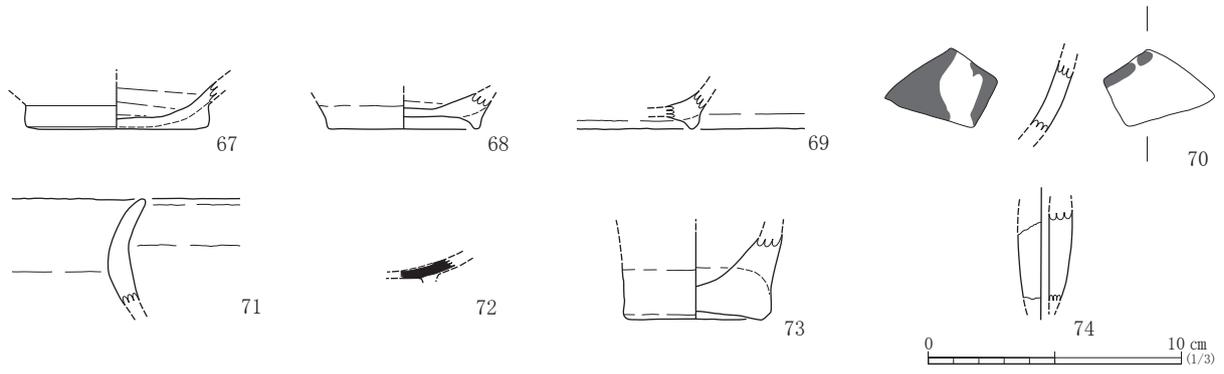


図 74 第2調査区 NR1L3出土土師器・緑釉陶器・弥生土器・土製品

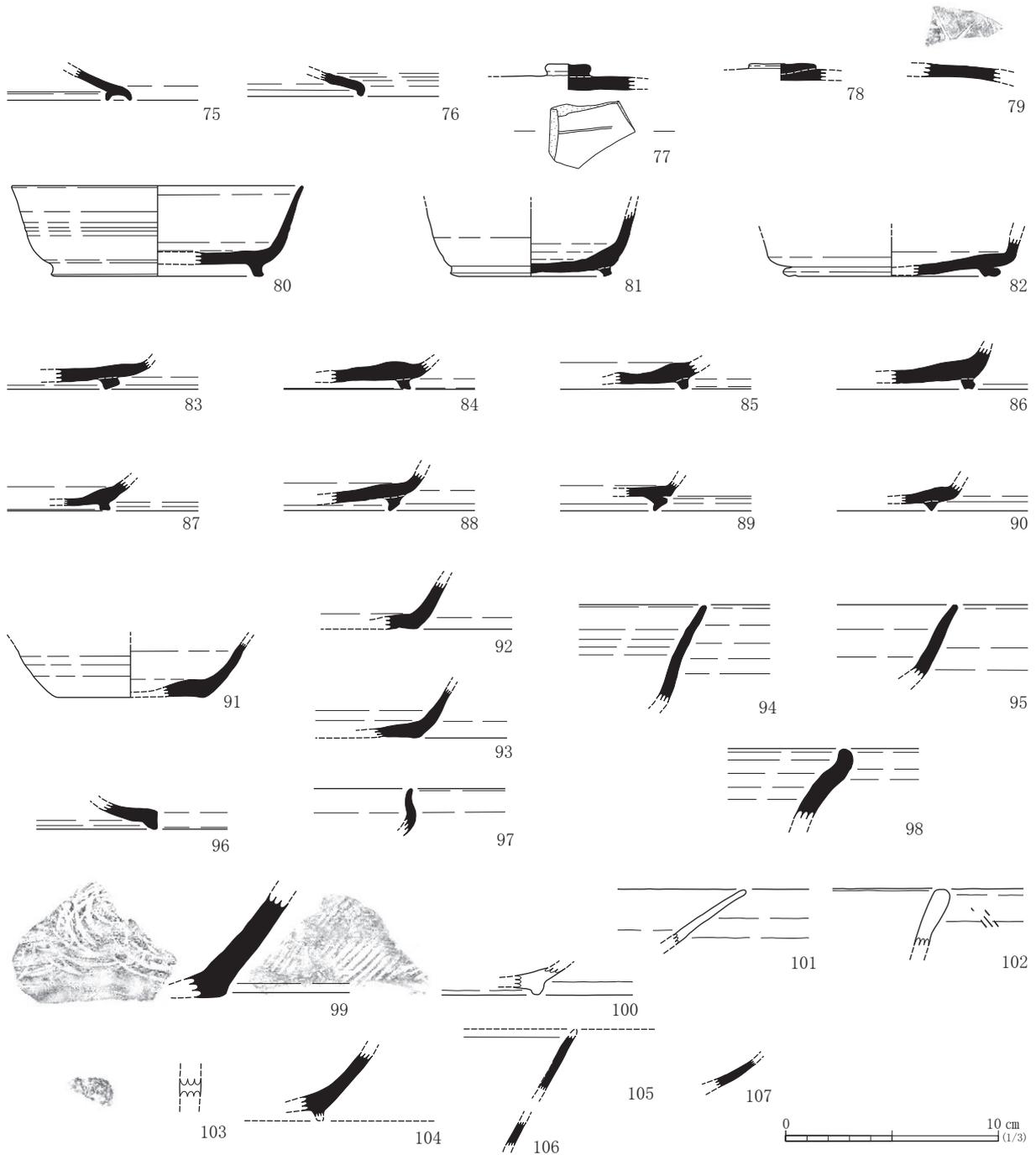


図 75 第2調査区 NR1L2出土土器類

98・99は須恵器甕。両者ともに焼成不良で軟質となる。98は口縁部片。口縁上部を外反させた後上方に拡張させる。口縁内端を摘み出している。内外面とも横ナデを施す。99は底-体部片。体部外面には平行タタキ痕が、内面には同心円当て具痕が残る。

100は土師器坏底部片。底-体部境界に断面方形の高台が付く。101は土師器口縁-体部片。緩やかに外反しつつ口縁が大きく開くことから、皿と見られる。内外面とも丁寧な回転ナデ調整が施されている。

102は土師器甕口縁部片。内外面に横ナデを施すが、外面に部分的に縦ハケが残る。

103は唯一確認された六連式製塩土器体部の小片。内面に細かな布目痕が残る。

104～106は緑釉陶器。104は椀の底-体部片と見られる。風化が激しいが、体部外面には深緑、底部外面と内面には薄緑の釉が残る。105は坏体部片であろうか。器壁の両面に深緑の釉が残る。

107は灰釉陶器片。底部付近の破片と見られる。

第2層の土器構成は第3層とさほどの相違を見せないが、古相の土器を含みつつもその比率はより低くなり、土師器皿、緑釉・灰釉陶器など新相を示す土器の比率が高くなるようである。

谷埋土第1層 NR1L1(図76)

埋土最上層で、第2・3層に比して厚く堆積する。須恵器、土師器、緑釉陶器、瓦質土器が見られる。

108・109は須恵器坏蓋。108は器高の低い蓋の天井-口縁部片で、天井部から屈曲して口縁に至る。口縁端部は欠失しているが、鳥嘴状の口縁を形成していたものと思われる。天井部にはヘラ状工具による平行する2条の刻線が見られる。109は口縁部片。口縁はほぼ水平に開き、口縁端部に明瞭な面を形成する。微弱であるが口縁下端部を下方に摘み出している。

110・111は須恵器高台付坏。110は底-体部片。底-体部境界に断面方形で小ぶりの高台が付く。体部はやや内湾しながら開くようである。111も底-体部片。底-体部境界やや内側に断面方形の高台が付くが、110に比して高台はやや太身である。体部はあまり開かず立ち上がるものと思われる。112は須恵器無高台坏で、平底から体部はやや外反して立ち上がる。底部外面はヘラ切り無調整と見られる。113も須恵器無高台坏だが、焼成不良品である。底部外面はヘラ切り後ナデ調整が施される。

114は須恵器高坏坏部片と見られる。口縁は緩やかに外反しながら開き、口縁端部は丸く収める。体部との境界には段が形成されている。

115は須恵器甕または壺の口縁部であろうか。内湾する口縁を有し、端部を肥厚させている。外面には櫛描き波状文が見られる。

116は須恵器系陶器甕の口縁-体部片。口縁は緩やかに外反し、口縁端部を内方に拡張させる。体部は球形に大きく膨らむようである。口縁部内外面は横ナデ、体部外面には格子タタキ、内部には同心円当て具痕が残る。

117は緑釉陶器椀の底部片。内外面とも風化が著しく、釉は摩滅した高台周囲にかすかに残る。

118は土師器皿もしくは椀の底部。内外面とも風化が激しいが、底部外面にかろうじて糸切り痕が観察できる。体部は大きく開くものと思われる。

119は瓦質土器羽釜の突帯と見られる。羽釜は吉田遺跡第Ⅱ地区第1調査区より複数出土している。その他の土器(図77)

谷埋土上面検出時、地山直上から出土した。120は縄文土器深鉢口縁部片。器面の風化が著しいが、外面に2枚貝条痕が残る。

【石器】(図78、表13)

谷埋土より3点出土している。詳細は図表を参照されたい。

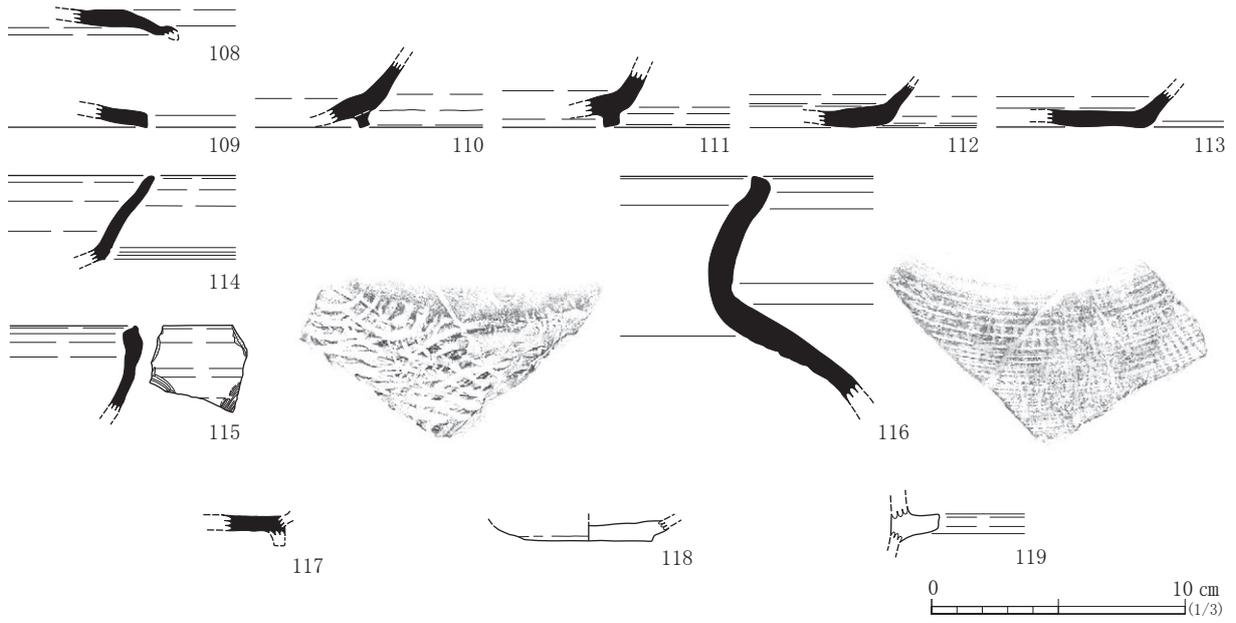


図 76 第2調査区 NR1L1出土土器類

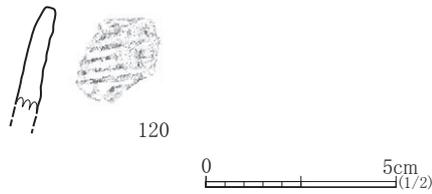


図 77 第2調査区出土その他土器類

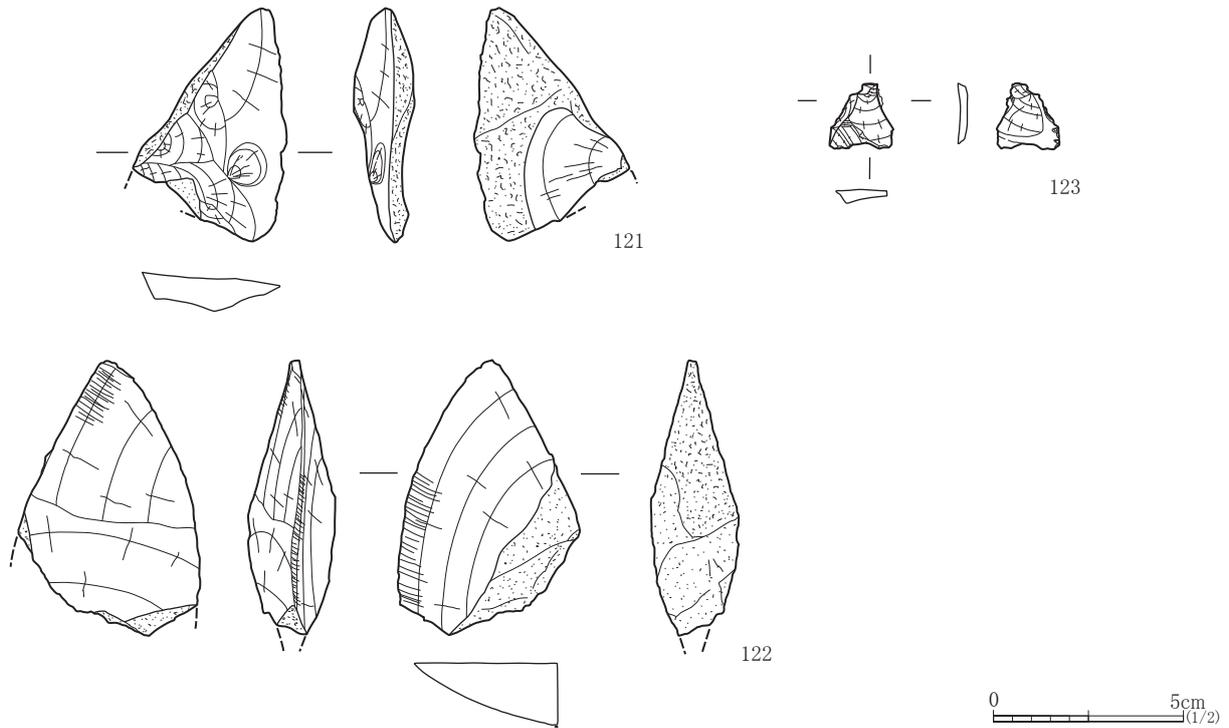


図 78 第2調査区出土石器類



写真 191 第2調査区出土遺物(土器類)①



写真 192 第2調査区出土遺物(土器類)②

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 193 第2調査区出土遺物(土器類)③



写真 194 第2調査区出土遺物(土器類)④

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 195 第2調査区出土遺物(土器類)⑤



写真 196 第2調査区出土遺物(土器類)⑥

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 197 第2調査区出土遺物(土器類)⑦



写真 198 第2調査区出土遺物(土器類)⑧

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 199 第2調査区出土遺物(土器類)⑨

吉田構内(吉田遺跡)の調査



67



68



69



71



73



74



75-1



76-1



77-1



75-2



76-2



77-2



79-1



81-1



82-1



79-2



81-2



82-2

写真 200 第2調査区出土遺物(土器類)⑩

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 201 第2調査区出土遺物(土器類)①

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 202 第2調査区出土遺物(土器類)⑫

吉田構内(吉田遺跡)の調査

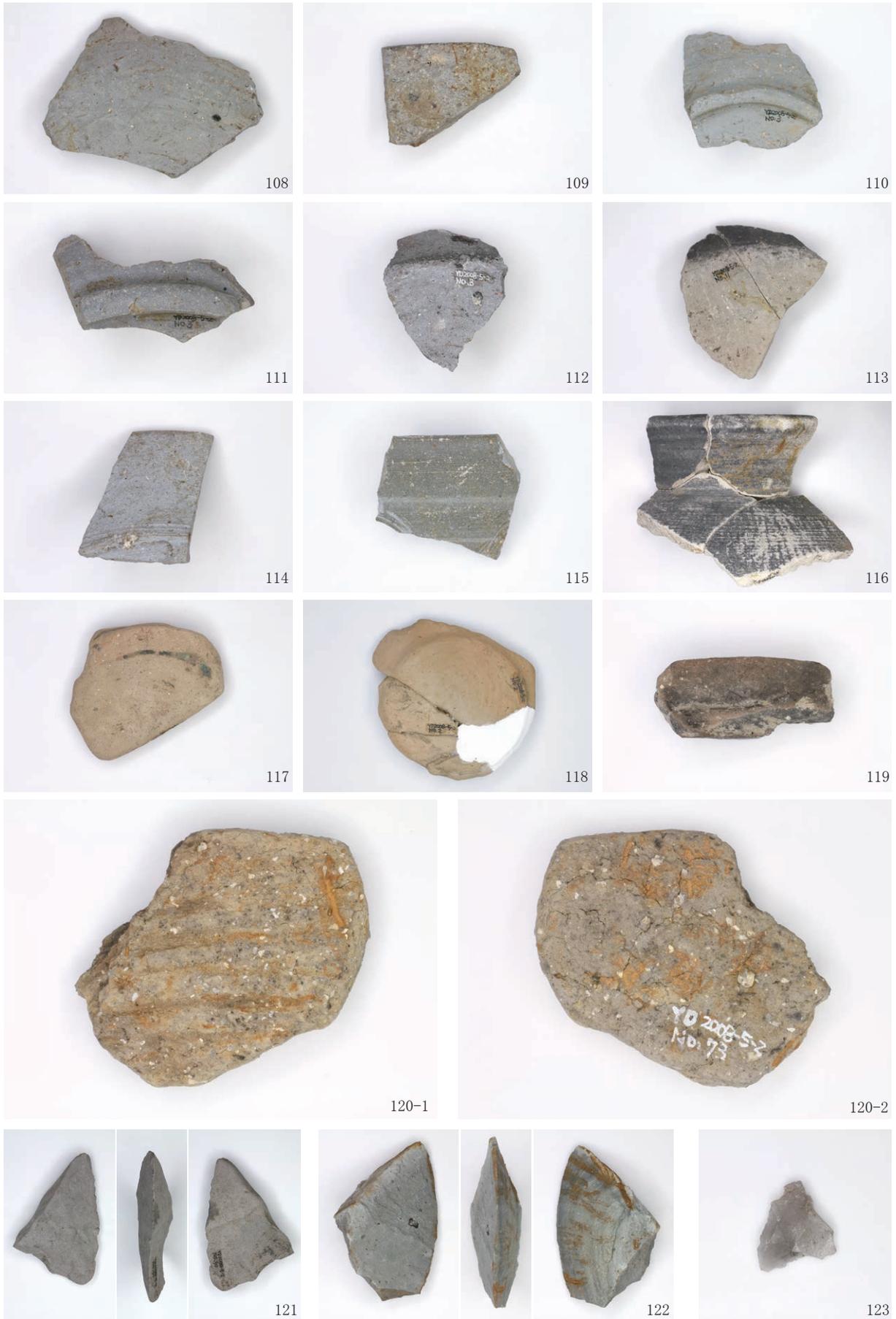


写真 203 第2調査区出土遺物(土器類)⑬・(石器類)

【木製品】

谷埋土より大量の木製品が出土しているが、土器類と同様に谷埋土第6層中からは出土を見なかった。谷埋土の下層から順を追って報告を行う。

谷埋土第6層直上NR1L6直上(図79・80)

第6層直上として遺物を取り上げたが、出土状況(写真176～182)に見るごとく第4層下層最下部に沈殿した状態で出土している。

124・125は不明棒状製品。断面円形であり、先端部に突起をつくり出している。124は先端より12.4cm、125は13.3cm地点にほぞ穴のような平面方形の掘り込みが見られる。124にはその他2ヶ所に全周する浅い挟りが設けられている。類似する棒状製品が平成18年度動物医療センター改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査遺物包含層L6からも出土しているが、断面形態は方形である。

126は円形曲物底板の半損品。側板を綴じる樹皮が1ヶ所に遺存する。残存径18.8cm、厚み0.6cm。

127は板材の一端を三角形状に削り出し、他方を方形に加工したものである。中央両側面を挟り込んでいる。祭祀具であろうか。

128～133は板状製品もしくは板材。端部を斜めに切り落としている材が多い。

134は先端部が焼け焦げている。松明として使用されたものか。

135は片側端部と表裏面に面を形成する板状製品である。横断面は緩やかに弧を描いている。井戸枠などに用いられた桶側板の可能性を指摘できる。

136は断面楕円形の棒状製品。先端部は一部欠損するが、嘴状に加工されている。表皮は遺存していない。残長68.4cm。何かの柄として使用されたものであろうか。

137・138は角材。137はほぼ全面が焼け焦げている。断面形態は隅丸長方形。138は両端に手斧痕が明瞭に残る。

谷埋土第5層 NR1L5(図81)

139は幅2cm、残長11.9cmのやや湾曲する板状製品。両端部を欠失する。140も板状製品。原形を保つ端部を見ると、1.5cm下に軸に直交する刻線を入れ、その地点まで幅1.0cmでコの字状に挟り込みを行っている。残存幅3.4cm、残長14.1cm。

谷埋土第4層下層 NR1L4下層(図82・83)

141は円形曲物底板。半損品であり、破損部2ヶ所に綴じ孔が残る。残存径17.7cm。厚み0.6cm。

142～144は板材。144は両端部、両側面とも斜めに切り落としている。

145は杭。両端部を欠失する。全面焼け焦げていることから、廃材の燃え残りと思われる。146は先端部のみ焼け焦げる。松明か。

谷埋土第4層上層 NR1L4上層(図84～89)

埋土中最も多く木製品が出土している。ここでは注意すべき木製品だけに言及する。

147は横斧柄。柄の大半と斧台前部を欠失する。斧台上部はやや凹み、下部は膨らんでいる。斧台と柄との角度は約75°を測る。

148は円形曲物の蓋または底板。外縁内側0.8cmの位置に刻線が残る。復元径は17cm弱となる。

149・150は木錘。蓆編みなどに用いられた錘である。149は水平方向に半損している。残長17.7cm。150はくびれ部で半損している。木錘については、吉田遺跡では初めて存在が確認された。

151は最大幅1.8cm、最大厚1.2cm、長さ43.2cmの棒状製品。片面の両角を削り取っているため、断面六角形状を呈している。端部は両端を斜めに切り取り山形に成形している。斎串の一種であろうか。

152は不明部材。最大幅8.6cm、最大厚2.1cm、全長43.9cmを測る。片側面は直線的に加工されるが一部に段を形成している。対する側面は3種の異なる角度で削り取られているため、庖丁形の平面形態を呈している。また片面に多数の擦痕が見られることから、最終的には作業板として用いられ廃棄されたものと思われる。

153～246は加工痕が観察される角材・板材・棒材の類を掲載した。大多数は未製品ではなく、何らかの木製品を製作する途中に生じた木材を谷に放棄したものと推測される。この内、166は両端部の両側面を削り落とした板状製品である。151同様齋串の可能性もある。167は欠損品であるが片側端部を両面より削り込んでいる。矢板であろうか。168は横幅9.5cm、縦幅11.7cm、最大厚0.5cmの板状製品。片面に段を形成している。217から229までは木簡の可能性のある板状製品。肉眼観察では墨書は確認できない。223は人為的に小孔が穿たれている。

247は1・2と同様の製品と思われる。挟り部で両端ともに折損している。裏面も剥離しているが、断面形態は円形に近い多角形となる。248も同様の製品と見られる。断面方形の棒状製品の1ヶ所にほぞ穴のような方形の掘り込みが見られる

249は円形曲物の蓋または底板であろうか。欠損が著しいが、側縁部の一部が残る。表面は焼け焦げている。

250～255は杭。いずれも杭先を粗雑に加工する。250・252・254・255には表皮が遺存している。また250・254はほぼ全面が焼け焦げており、252も部分的な炭化が見られる。

256～281は片側端部もしくは両端部が炭化しているものを集めた。前者が主体である。ここでは松明として報告しておく。加工が丁寧な板状、棒状のものは不要となった製品の再利用であろう。281は細い木杭を再利用したものと思われる。

谷埋土第3層 NR1L3(図90)

282は板状製品。表裏面が部分的に欠失しているが、両端部は原面を保っている。全長14.2cm、幅1.7cm、最大厚0.8cmを測る。

283～288は板材。加工痕は残るが、大半は木製品製作途中に生じた廃材である可能性が高い。ただし286の片側端部には人為的なものと見られる切り込みがあり、何らかの製品であった可能性を残す。

289は断面凸レンズ形に加工された材である。残長11.9cm、幅3.0cm、最大厚1.5cm。

290～295は片側端部もしくは両端部が炭化しているものを集めた。これらも松明として報告しておく。第4層上層出土品同様、加工が丁寧な板状、棒状のものは不要となった製品の再利用であろう。

谷埋土第2層 NR1L2(図91)

296は板材。遺存する片側面は表裏面から削り込まれ、凸レンズ状の断面形態を示す。

297は板状製品。両面ともに肉眼では墨書等の存在を確認できなかった。299は両端を欠失するが、4面を比較的丁寧に加工した棒状製品。残長9.2cm、幅1.0cm、最大厚0.6cm。

298は全木製品中で唯一確認された竹製品である。片側端部に切断痕跡が見られる。

300～303は部分的に炭化した加工痕のある木材。燃料の燃え残り、または松明として使用されたものであろう。

304は表皮の剥がされた棒状製品。柄としての使用が考えられる。残長26.5cm、径2.0～2.3cm。

以上、谷埋土出土木製品の概要を記した。第1層からは木製品の出土を見なかった。これらの資料に関しては、現在まで水漬け保管を行っているが、保存処理を実施すると同時に樹種の同定、赤外線カメラによる墨書等の存否確認を行う予定である。

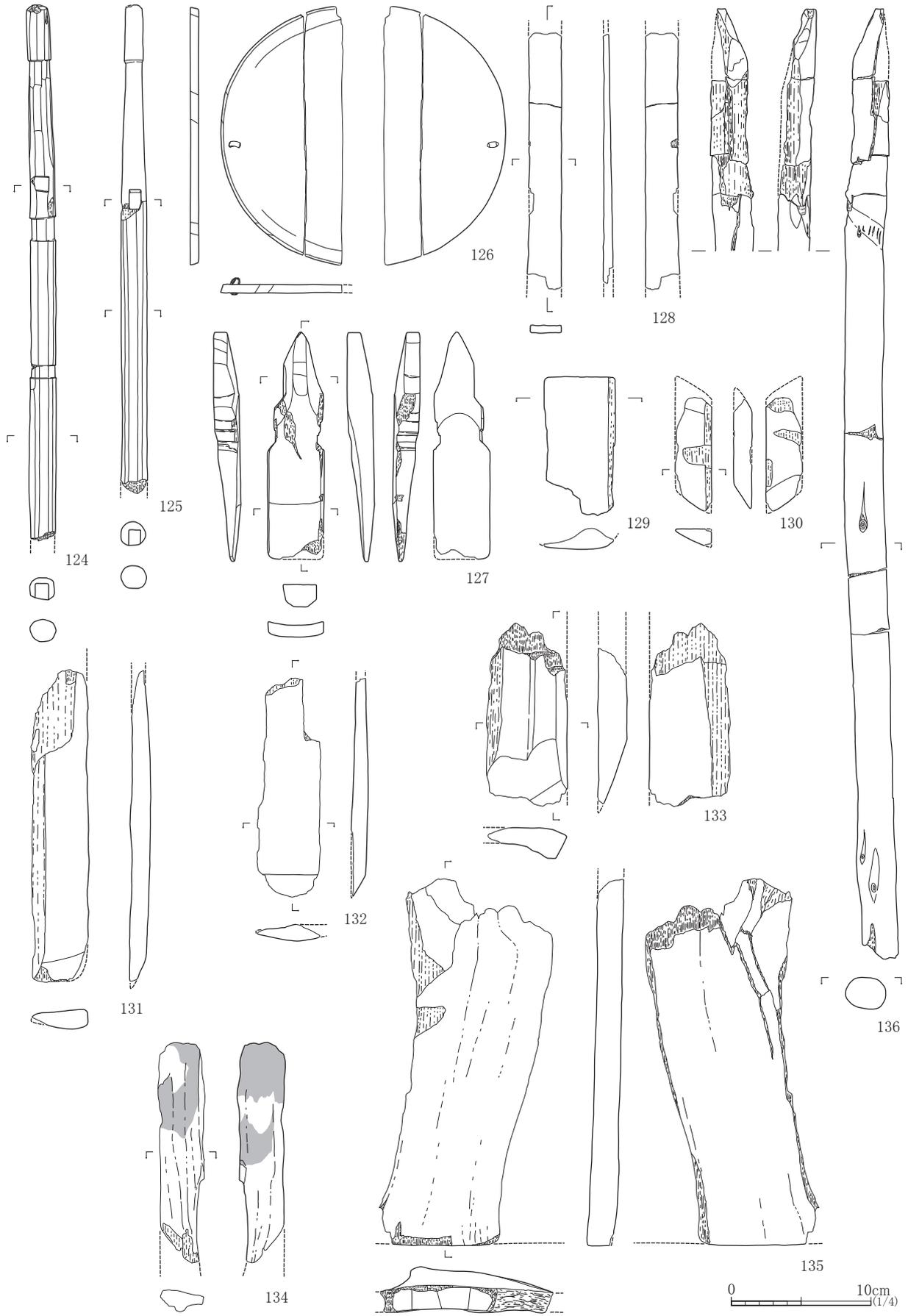


図 79 第2調査区 NR1L6直上出土木製品①

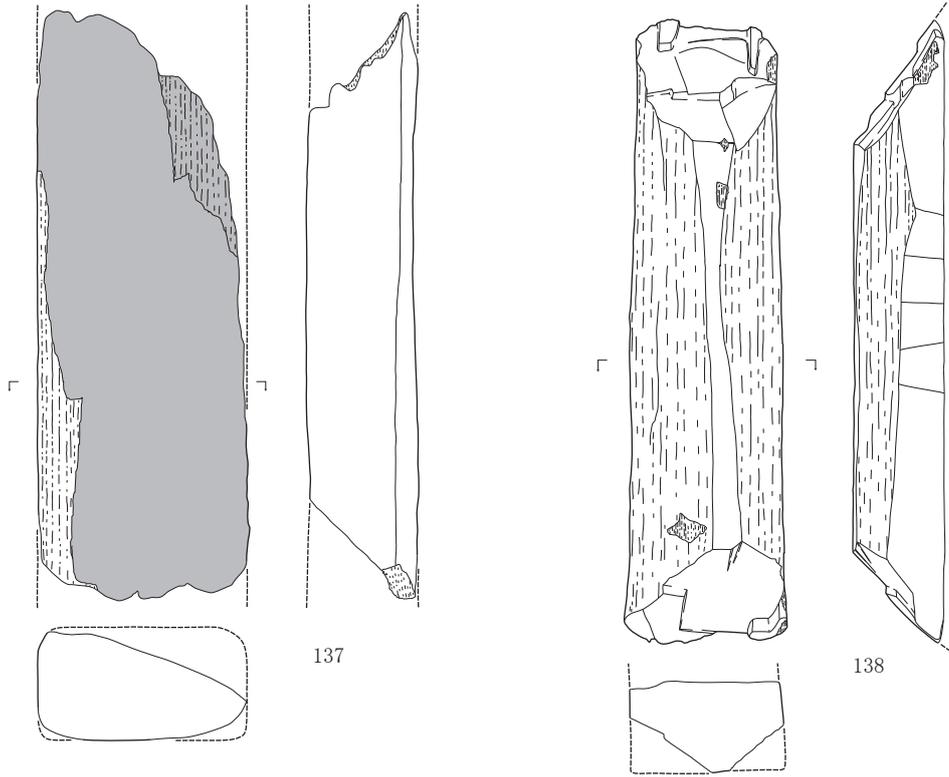


図 80 第2調査区 NR1L6直上出土木製品②

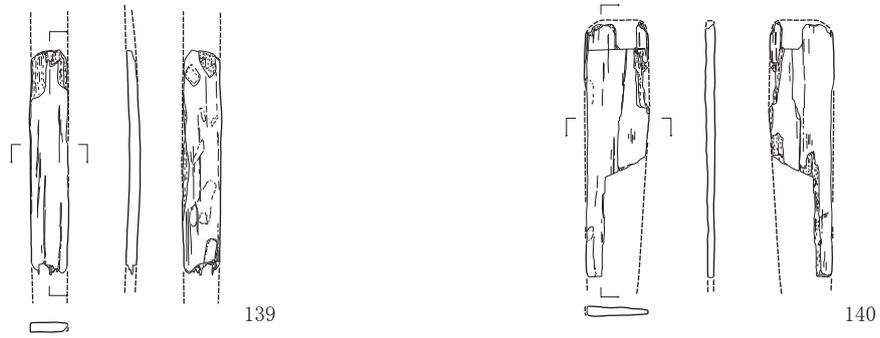


図 81 第2調査区 NR1L5直上出土木製品

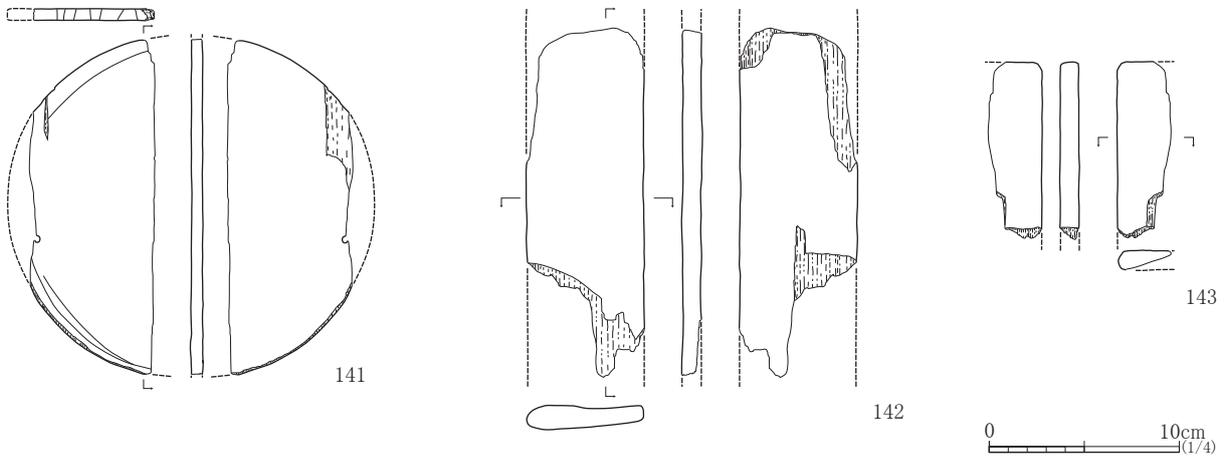


図 82 第2調査区 NR1L4下層出土木製品①

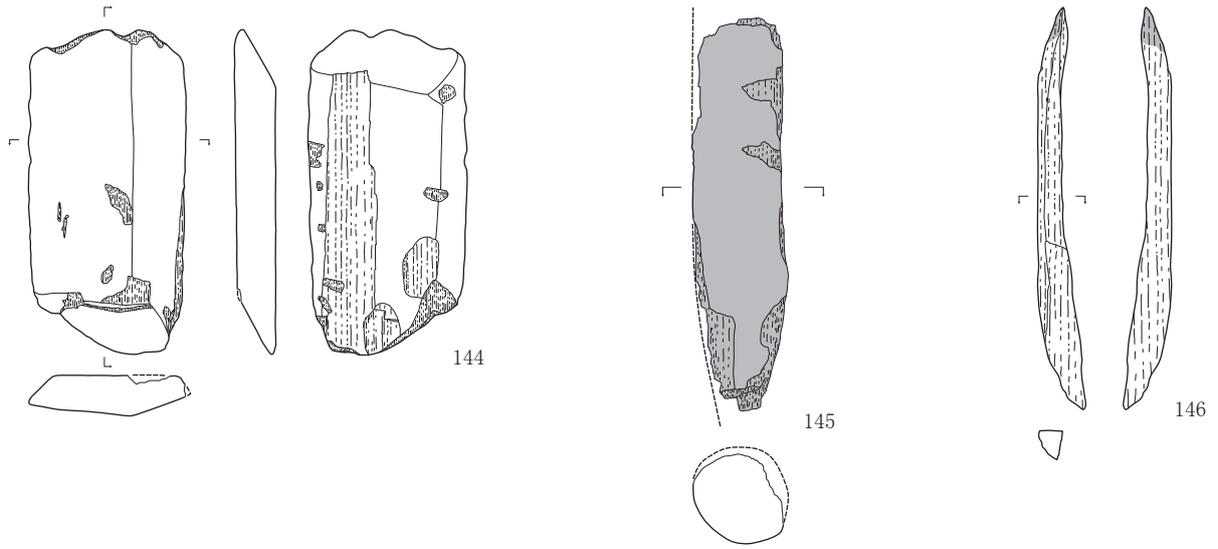


図 83 第2調査区 NR1L4下層出土木製品②

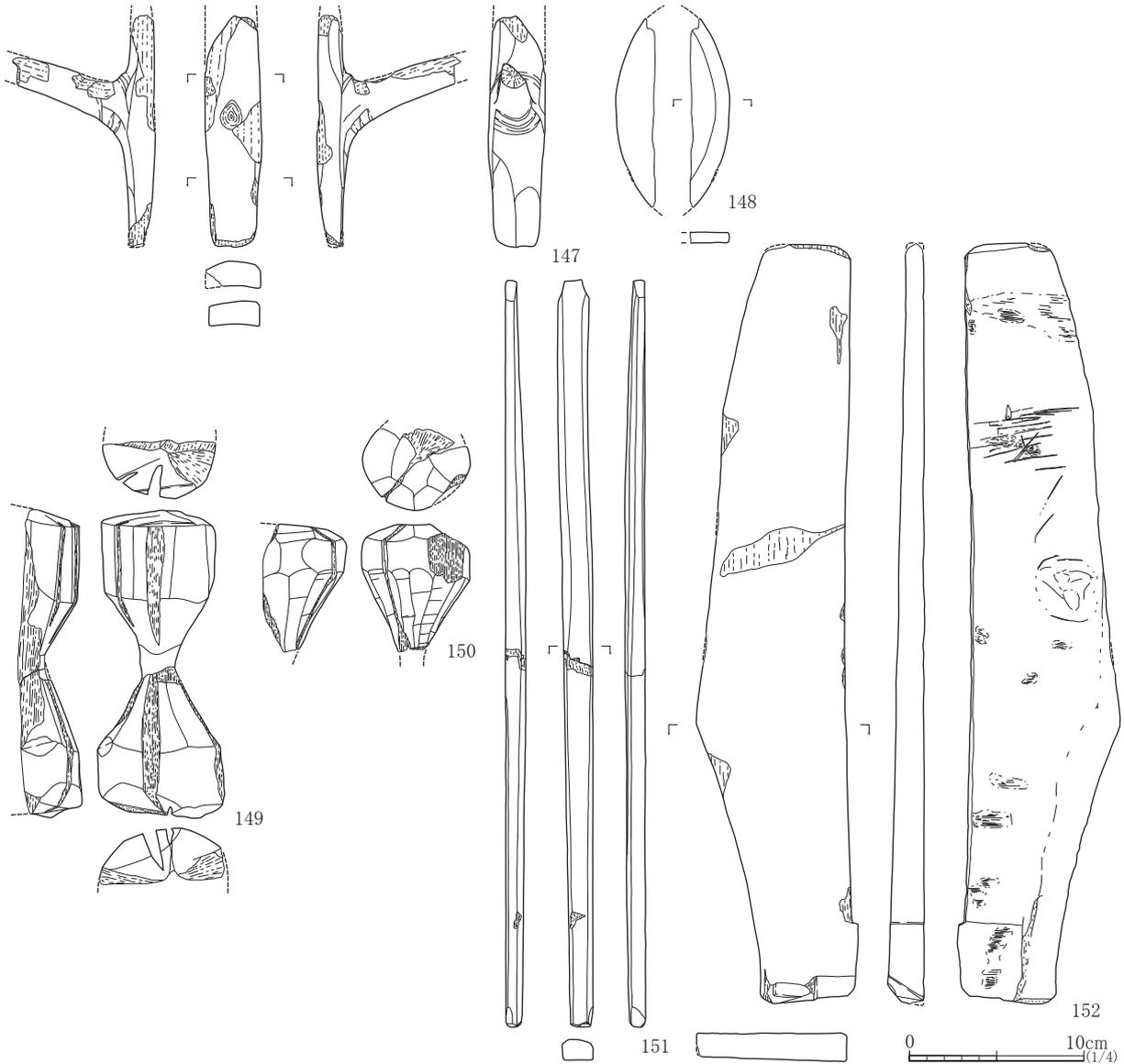


図 84 第2調査区 NR1L4上層出土木製品①



図 85 第2調査区 NR1L4上層出土木製品②

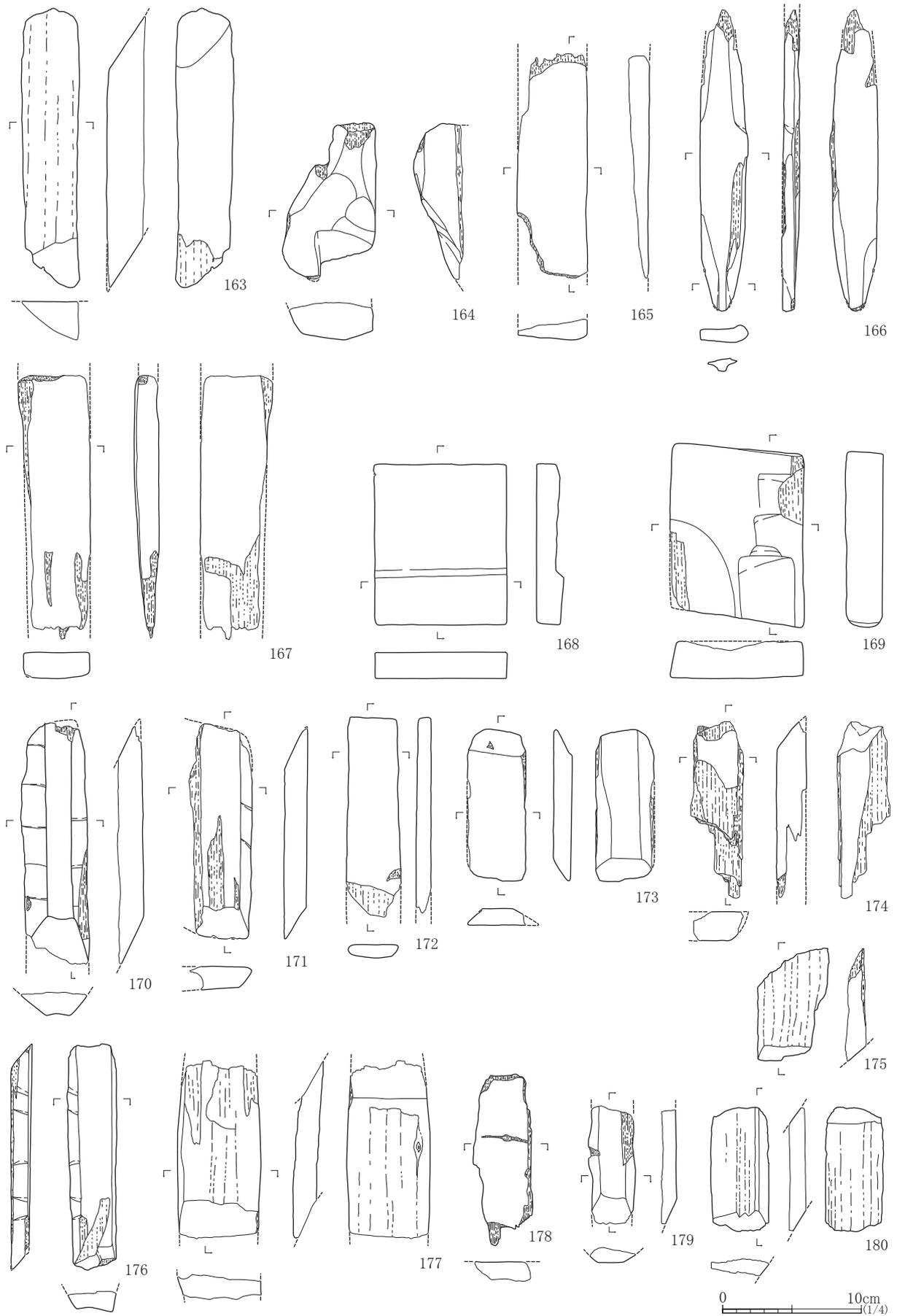


図 86 第2調査区 NR1L4上層出土木製品③

吉田構内(吉田遺跡)の調査

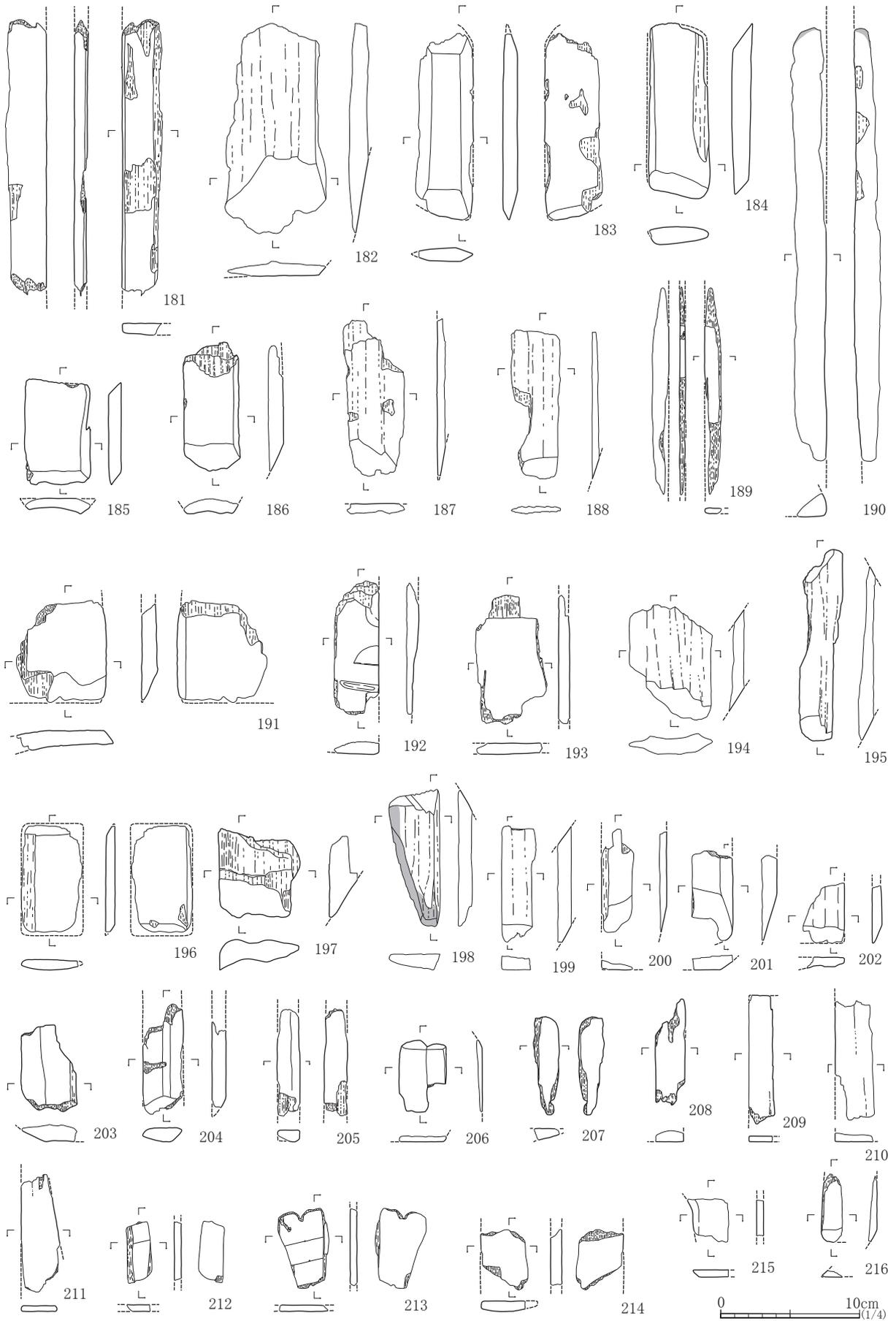


図 87 第2調査区 NR1L4上層出土木製品④

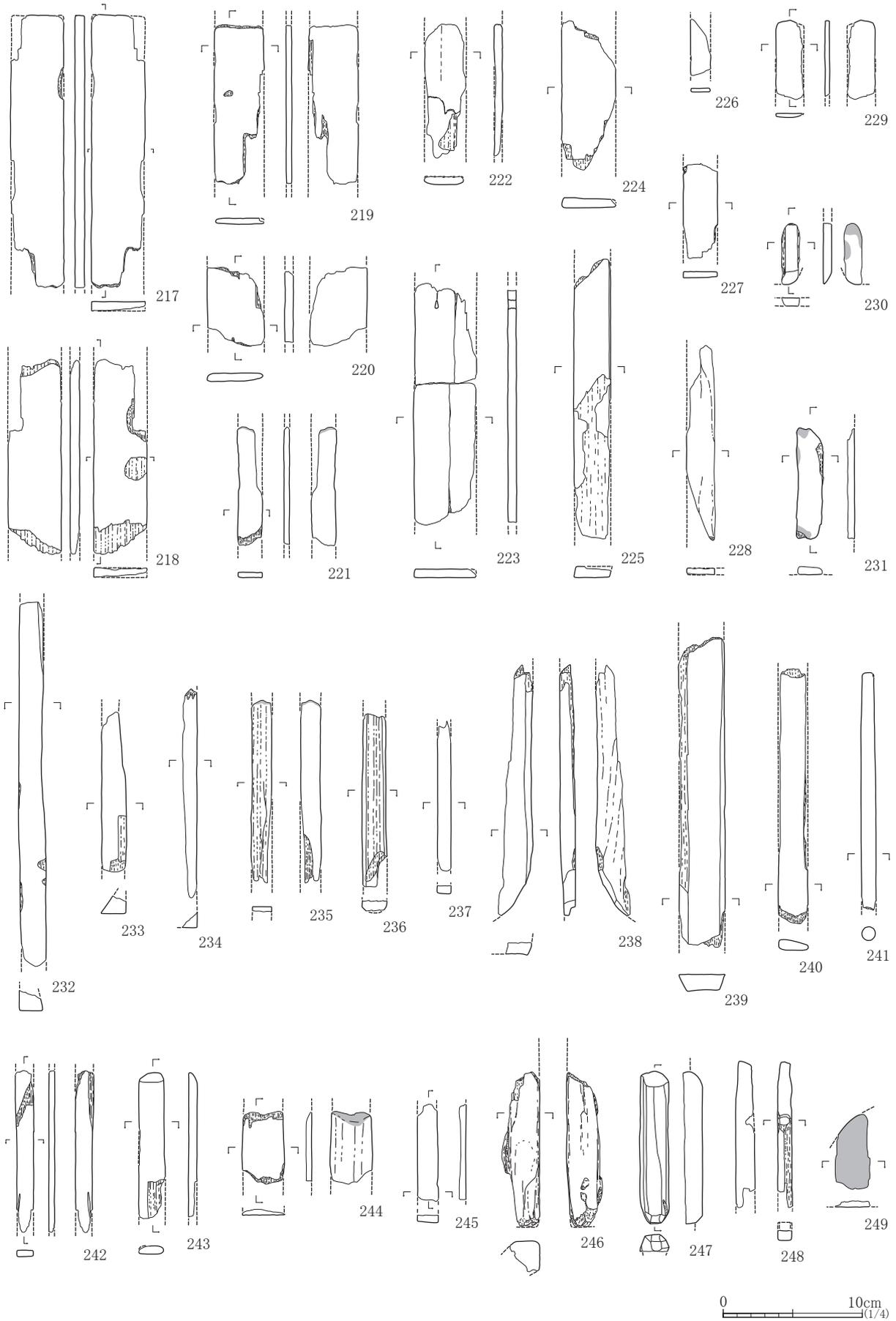


図 88 第2調査区 NR1L4上層出土木製品⑤

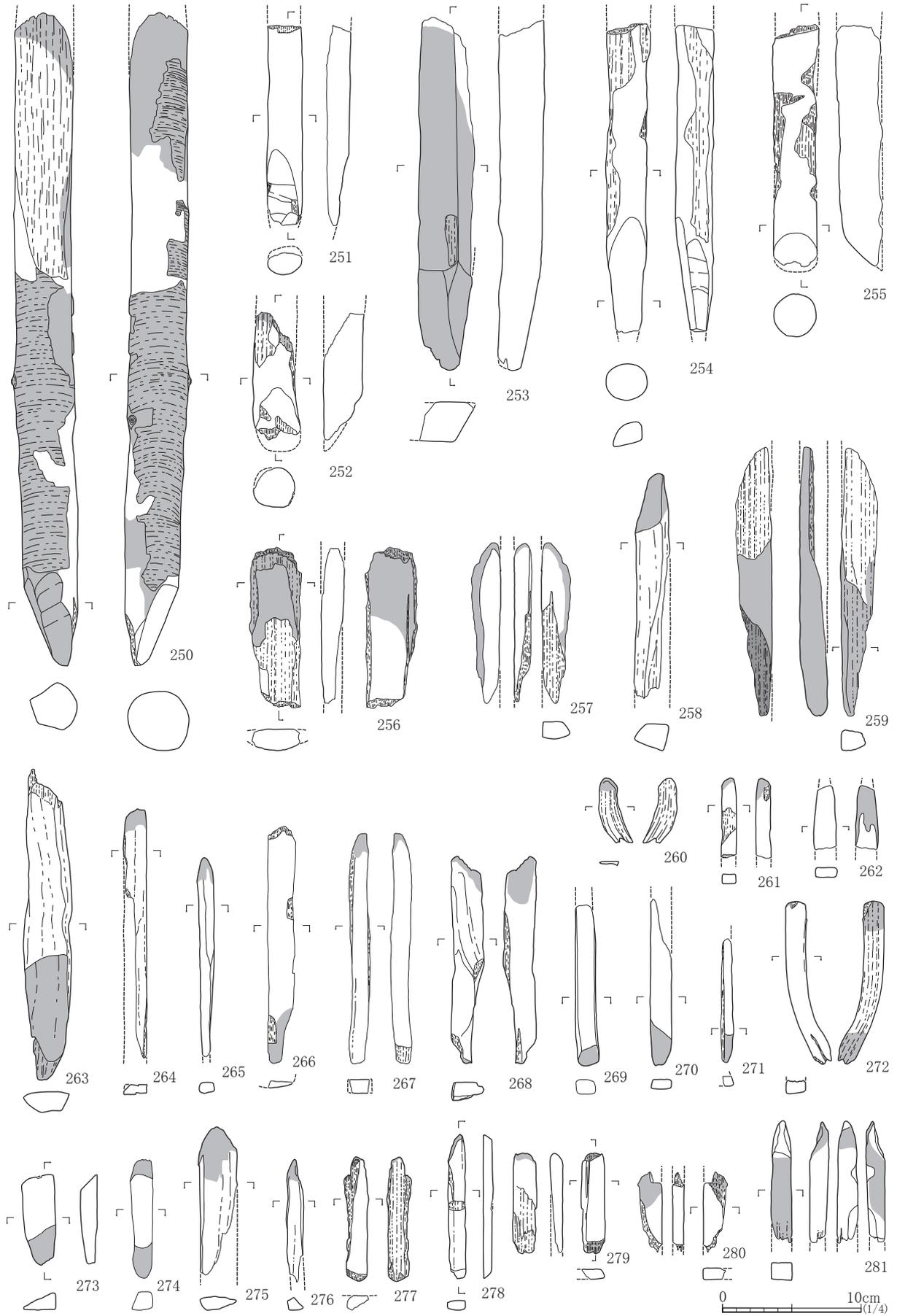


図 89 第2調査区 NR1L4上層出土木製品⑥

吉田構内(吉田遺跡)の調査

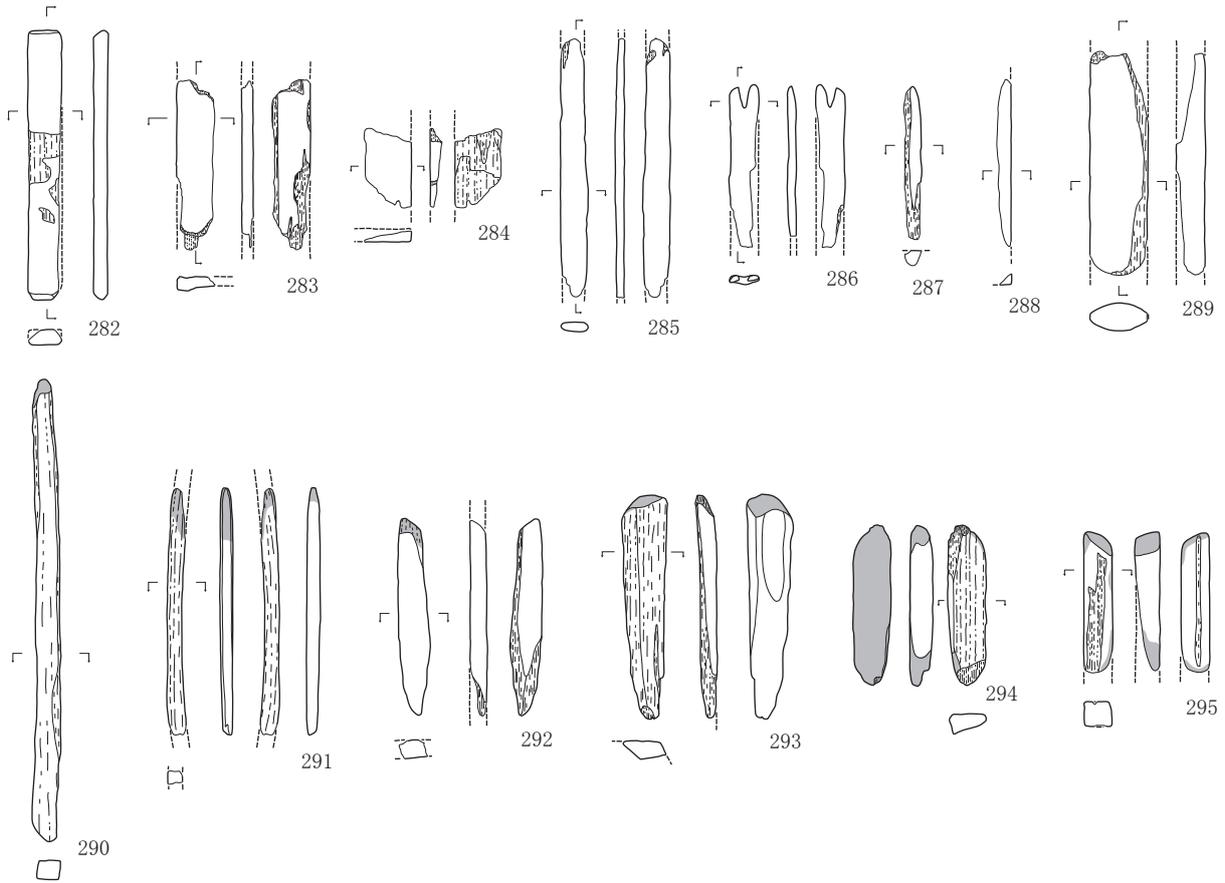


図 90 第2調査区 NR1L3出土木製品

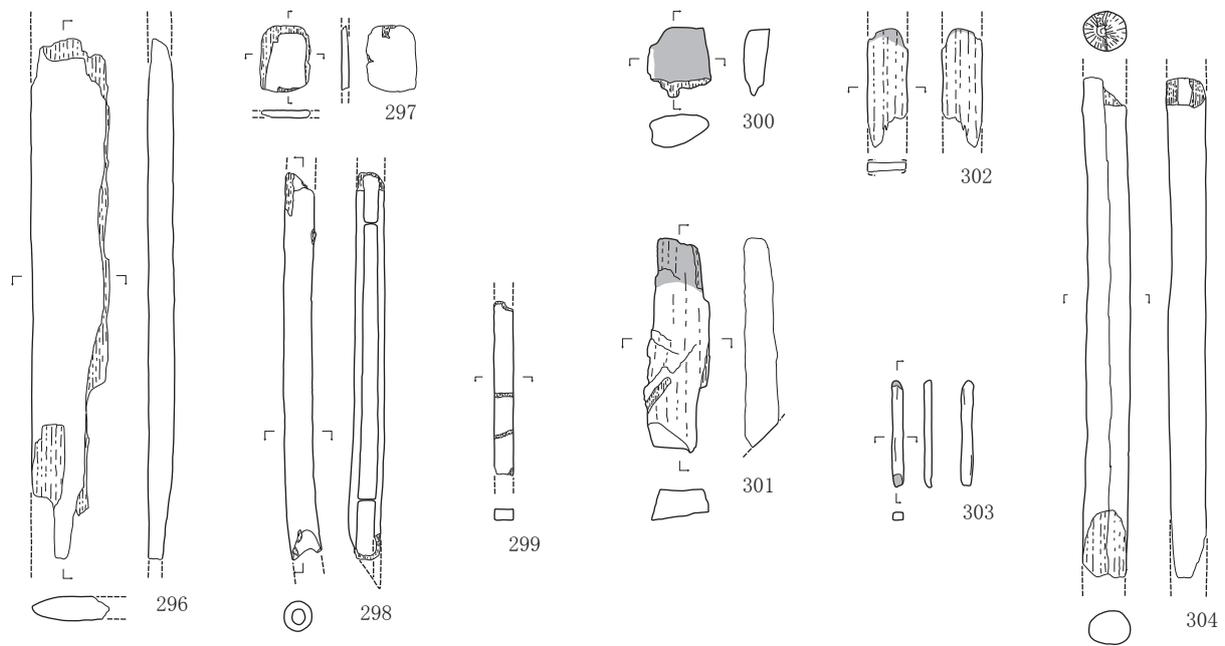


図 91 第2調査区 NR1L2出土木製品

谷肩部杭列(図92、写真211)

調査終了時、谷肩部に検出された杭列(図69)の抜き取りを行った。土中に遺存した木質の状態は極めて良好であった。以下に各杭の特徴を記す。

305(杭列NO.1)は角杭。手斧による成形痕が明瞭に残る。断面は五角形を呈する。残長25.8cm、最大幅5.0cm。306(杭列NO.2)も角杭。305に比してやや太めの材を用いている。断面は五角形を呈する。残長23.0cm、最大幅5.9cm。307(杭列NO.3)は矢板と見られる。抜き取り途中で先端部を破損させてしまった。残長17.0cm、最大幅8.6cm、最大厚0.7cm。308(杭列NO.4)は断面不整形であるが、欠損した上部で板状になるものと想像される。残長14.5cm、最大幅5.3cm。309(杭列NO.5)は矢板。板材の両側面を削り板先としているが、原面をとどめていない。残長14.2cm、最大幅4.7cm、最大厚0.6cm。310(杭列NO.6)は杭先に厚みを持つが上部が板状となっていることから矢板と見られる。残長26.7cm、最大幅6.4cm、最大厚3.2cm。311(杭列NO.7)は杭先のみ遺存していた。先端部は取り上げ時の破損である。断面が台形状を呈している。これも矢板であろうか。残長11.7cm、最大幅1.6cm。312(杭列NO.8)は角杭。断面は五角形を呈する。残長30.2cm、最大幅6.9cm。313(杭列NO.9)は矢板。板材の両側を削り込んで板先としている。残長18.2cm、最大幅4.9cm、最大厚2.2cm。314(杭列NO.10)は角杭。断面は方形を呈す。上部に至るほど断面長方形になることから、矢板である可能性も残す。315(杭列NO.11)も矢板であろうか。断面形態が五～六角形状を呈しているがやや扁平な杭である。残長13.8cm、最大幅4.3cm。316(杭列NO.12)は杭先しか遺存していないがその形状から矢板と考えられる。断面五角形の扁平な板材を両側面から鋭く削り込み杭先としている。残長8.7cm、最大幅3.0cm。317(杭列NO.13)は角杭または矢板。断面五角形を呈する。残長16.7cm、最大幅4.6cm、最大厚2.8cm。318(杭列NO.14)は角杭。発見された杭・矢板の中では最も地中深くに打ち込まれていた。杭先は比較的鈍く、上部の断面は長方形を呈する。残長32.3cm、最大幅5.9cm、最大厚4.1cmを測る。319(杭列NO.15)は矢板。板材を両側面から緩やかに削り板先とする。残長19.3cm、最大幅5.5cm、最大厚1.8cm。320(杭列NO.16)も矢板と見られる。先端部はすでに腐蝕していた。残長9.6cm、最大幅3.6cm、最大厚2.0cm。321(杭列NO.17)は矢板と推定されるが、杭列の中でも比較的遺存状態が悪いもので、ほぼ全面に腐蝕が進行していた。残長13.0cm、最大幅8.5cm、最大厚4.0cm。322(杭列NO.17)は取り上げ時に杭先を破損してしまった。杭先しか遺存していないため断定できないが、杭列中唯一の丸杭である可能性を残す。棒材の片面のみ削り杭先としている。残長6.7cm、最大径2.3cm。

[註]

- 1) 墨書に関しては本学人文学部の橋本義則教授に判読いただいた。動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査出土の他の墨書資料についても同様である。
- 2) 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口
- 3) 杉原和恵(1988)「墨で文字を書きこんだうつわ—既刊の報告 補訂—」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』, 山口
- 4) 田畑直彦(2004)「平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』, 山口
- 5) 横山成己(2007)「吉田遺跡Ⅱ地区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成17年度—』, 山口
- 6) 註2の64頁遺物番号433。

吉田構内(吉田遺跡)の調査

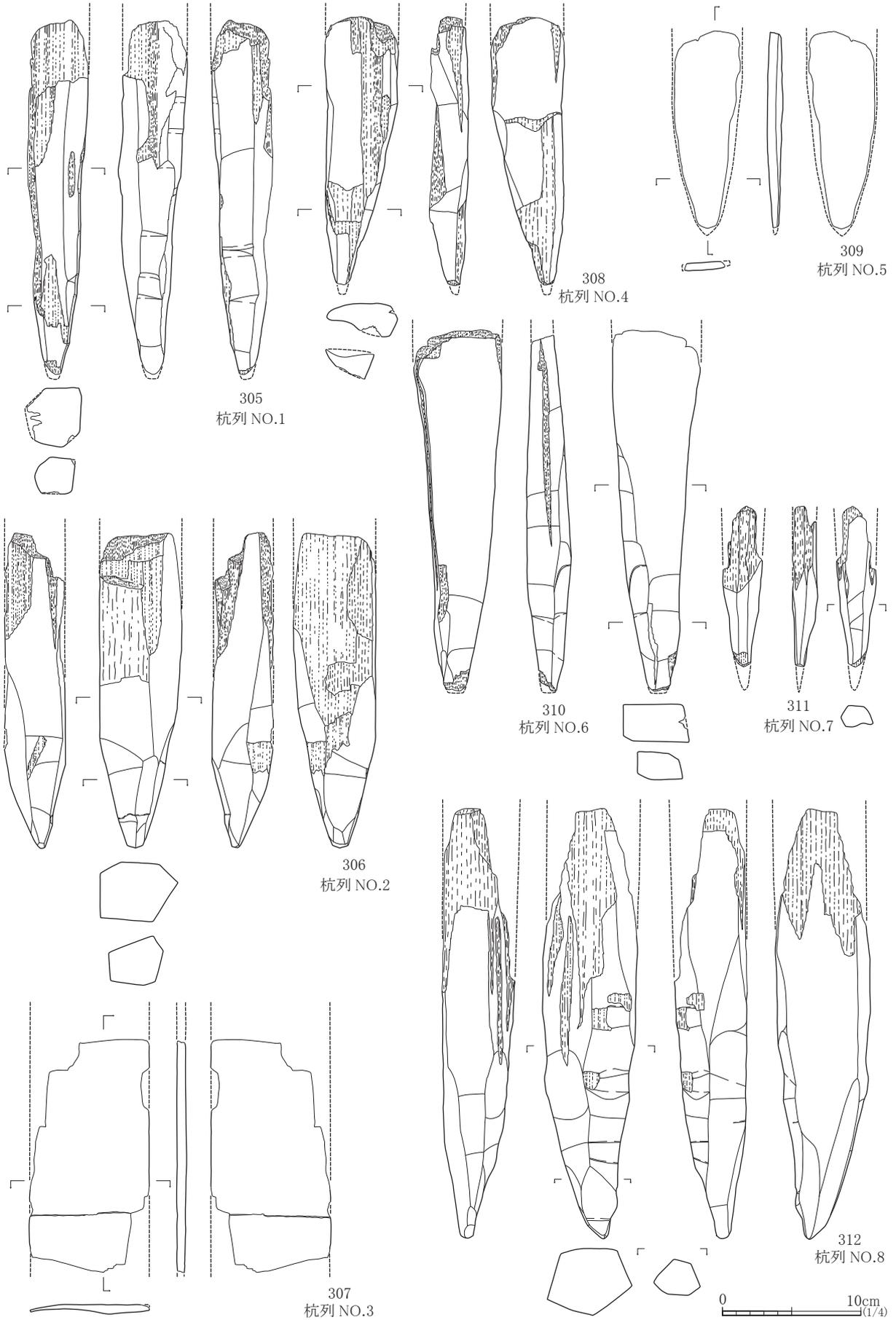


図 92 第2調査区 NR1肩部木製杭①

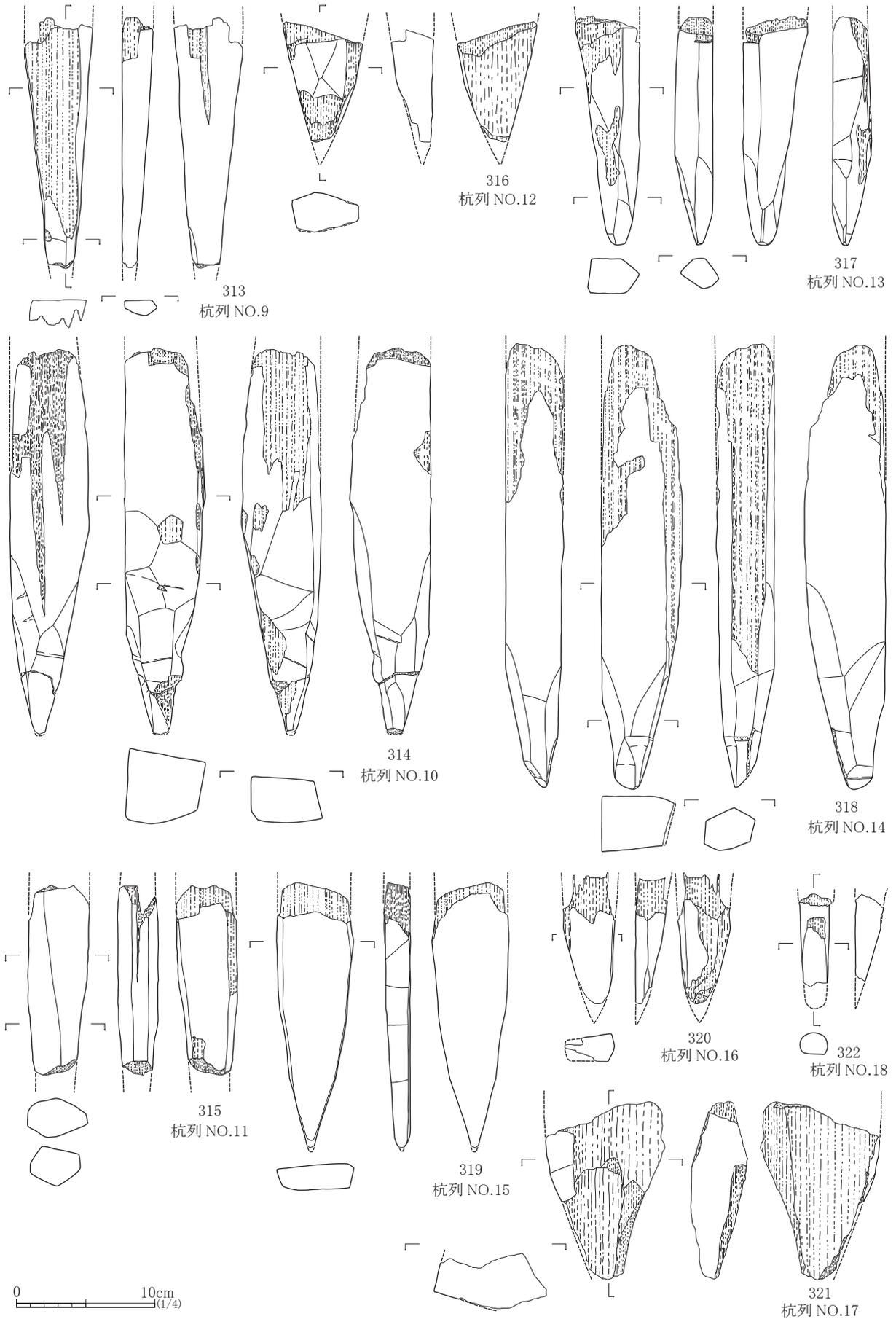


図 93 第2調査区 NR1肩部木製杭②



写真 204 第2調査区出土遺物(木製品)①



写真 205 第2調査区出土遺物(木製品)②



写真 206 第2調査区出土遺物(木製品)③



写真 207 第2調査区出土遺物(木製品)④



写真 208 第2調査区出土遺物(木製品)⑤

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 209 第2調査区出土遺物(木製品)⑥



写真 210 第2調査区出土遺物(木製品)⑦

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 211 第2調査区出土遺物(木製品)⑧

表12 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
				①口径②底径③器高		①外面	②内面		
1	NR1 L5直上	須恵器 高台付坏身		①15.6②9.46 ③4.7		①灰色(N6/) ②灰色(N5/)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	底部外面に 「主」の墨書	
2	NR1 L5直上	須恵器 高台付坏身		①(16.0)②8.1 ③4.7		①灰色(N6/) ②灰色(N5/)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む		
3	NR1 L5直上	須恵器 高台付坏身	体部～ 底部	②6.7		①灰色(10Y6/1) ②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を含む		
4	NR1 L4	須恵器 坏蓋	天井部 ～ 口縁部	①(15.0)③2.1 つまみ径 2.3		①青灰色(5B6/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の砂粒を少量含む		
5	NR1 L4	須恵器 坏蓋		①13.0③2.7 つまみ径 1.8		①明青灰色(5PB7/1) ②青灰色(5PB6/1)	精緻		
6	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①青灰色(5B5/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む		
7	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①明青灰色(5PB7/1) ②灰白色(N5/)			
8	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①青灰色(5PB6/1) ②青灰色(5B6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む		
9	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①②灰色(5Y5/1)	0.5mm以下の砂粒を少量 含む		
10	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①②灰色(N7/)			
11	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①②明青灰色(5PB7/1)			
12	NR1 L4	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径 3.8		①②灰色(N7/)	0.5mm程の砂粒を少量含む		
13	NR1 L4	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径 3.6		①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒を多く含む		
14	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	口縁部 ～ 底部	①(15.1)②8.0 ③5.0		①②灰色(N7/)	1mm以下の砂粒を少量含む		
15	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	口縁部 ～ 底部	①(15.0)②(9.0) ③5.0		①②灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒を少量含む		
16	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	口縁部 ～ 底部	①(15.4)②(9.2) ③4.2		①②青海色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を含む		
17	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	底部	②(8.6)		①②灰色(N7/)	1mm以下の砂粒を少量含む		
18	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	底部			①灰色(N5/) ②黒褐色(10YR3/2)	1mm以下の砂粒を多く含む		
19	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	底部			①②明青灰色(5PB7/1)	1mm程度の砂粒を少量含む		
20	NR1 L4	須恵器 坏身	底部	②(10.0)		①②灰色(N6/)	0.5mm以下の砂粒を多く 含む		
21	NR1 L4	須恵器 坏	底部			①②灰色(N7/)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	底部外面に 「安」の墨書	
22	NR1 L4	須恵器 坏身	口縁部			①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	2mm程の礫を少量含む 0.5mm以下の砂粒を少量 含む		
23	NR1 L4	須恵器 坏身か	口縁部			①灰白色(N7/) ②明紫灰色(5P7/1)	0.5mm以下の砂粒を多く 含む		
24	NR1 L4	須恵器 皿	口縁部 ～ 底部	③2.0		①②灰色(N6/)	2mm程の礫を少量含む 0.5mm以下の砂粒を少量 含む		
25	NR1 L4	須恵器 皿	口縁部			①②灰白色(N7/)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を極少量 含む		
26	NR1 L4	須恵器 高坏	坏部～ 脚部	②(9.2)		①②灰白色(N7/)	1mm程の砂粒を極少量含む		
27	NR1 L4	須恵器 高坏	坏部～ 脚部	②8.8		①②明青灰色(5PB7/1)	0.5mm程の砂粒を極少量 含む		
28	NR1 L4	須恵器 高坏	脚部	②(10.6)		①②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を少量含む		
29	NR1 L4	須恵器 高坏か				①②灰白色(N7/)	2mm程の礫を少量含む		
30	NR1 L4	須恵器 高坏	坏部～ 脚部	②(9.6)		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を多量に 含む	脚部内面に 「主」・「井」 の墨書	
31	NR1 L4	須恵器 甕	口縁部			①②灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒を含む		
32	NR1 L4	須恵器 甕	頸部			①②灰白色(2.5Y7/1)	0.5mm以下の砂粒を含む	内面にヘラ 記号あり	
33	NR1 L4	須恵器 平瓶か	体部			①灰色(N6/) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm程の砂粒を極少量含む		

吉田構内(吉田遺跡)の調査

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
34	NR1 L4	土師器 椀	口縁部			①②灰白色(2.5Y8/2)	0.5mm程の砂粒を極少量 含む	
35	NR1 L4	土師器 坏A	口縁部			①②にぶい黄橙色 (10YR6/3)	精緻	全面に赤色 顔料を施す
36	NR1 L4	土師器 坏C	口縁部			①②にぶい黄橙色 (10YR6/3)	0.5mm程の砂粒を多量に 含む	
37	NR1 L4	土師器 甕	口縁部 ～体部			①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	1mm以下の砂粒を多く含む	外面煤付着
38	NR1 L4	土師器 甕	口縁部 ～体部			①褐灰色(10YR4/1) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	0.5mm以下の砂粒を多く 含む	外面炭付着
39	NR1 L4	美濃ヶ浜式製塩土器	脚部			①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.5mm程の砂粒を少量 含む	
40	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①②青灰色(5PB6/1)	精緻	
41	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①②明青灰色(5PB7/1)	0.5mm以下の砂粒を少量 含む	
42	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①②灰白色(2.5Y8/2)	2mm程の礫を少量含む 0.5mm程の砂粒を多く含む	
43	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒を極少量 含む	
44	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	0.5mm程の砂粒を多く含む	
45	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①青灰色(5PB6/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の砂粒を少量含む	
46	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①明青灰色(5PB7/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm程の砂粒を少量含む	
47	NR1 L3	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径 2.2		①②明青灰色(5PB7/1)	0.5mm以下の砂粒を少量 含む	
48	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①青灰色(5PB7/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を少量含む	
49	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①灰色(10Y4/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の砂粒を少量含む	
50	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を少量含む	
51	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の砂粒を含む	
52	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の砂粒を少量含む	
53	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の砂粒を少量含む	
54	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①灰色(N4/) ②灰色(5Y6/1)	0.5mm以下の砂粒を少量 含む	内面と底部 が摩滅
55	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①②灰白色(N8/)	2mm程の礫を少量含む	
56	NR1 L3	須恵器 坏	底部	②(7.6)		①②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む	
57	NR1 L3	須恵器 坏	底部			①②灰色(7.5Y6/1)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	外面に板目 痕あり
58	NR1 L3	須恵器 坏	口縁部			①②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を少量含む	
59	NR1 L3	須恵器 坏	口縁部			①②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を含む	
60	NR1 L3	須恵器 高坏	脚部			①②灰白色(N7/)	精緻	
61	NR1 L3	須恵器 高坏	口縁部			①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	2～3mm程の礫を極少量 含む	
62	NR1 L3	須恵器 高坏	口縁部			①灰白色(5Y7/1) ②灰色(N6/)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	
63	NR1 L3	須恵器 壺か	底部			①②灰色(N6/)	2～3mmの礫を少量含む 1mm以下の砂粒を少量含む	
64	NR1 L3	須恵器 壺	口縁部			①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を極少量 含む	
65	NR1 L3	須恵器 壺か	口縁部			①灰オリーブ色(5Y6/2) ②灰色(N6/)	精緻	外面に自然 釉付着
66	NR1 L3	須恵器 器種不明	体部			①灰色(5Y7/1) ②灰白色(N7/)	2～3mmの礫を少量含む 1mm以下の砂粒を少量含む	平行線文、 波状文あり
67	NR1 L3	土師器 台付坏	底部	②(7.2)		①②暗灰黄色(2.5Y5/2)	1mm以下の砂粒を含む	
68	NR1 L3	土師器 高台付皿	底部	②(5.8)		①②浅黄色(2.5Y7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む	
69	NR1 L3	土師器 坏か	底部			①②灰黄色(2.5Y6/2)	1mm程の砂粒を多く含む	
70	NR1 L3	土師器 坏か	体部			①②にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む	内外面に赤 色顔料が残 る
71	NR1 L3	土師器 甕	口縁部			①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	2mm程の礫を少量含む 0.5mm以下の砂粒を多く 含む	

吉田構内(吉田遺跡)の調査

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
72	NR1 L3	緑釉陶器 椀	底部			釉 暗緑灰色(7.5GY4/1) 素地 浅黄色(2.5Y7/3)	精緻	底部にケズリ調整あり
73	NR1 L3	弥生土器 甕	底部	②5.2		①②灰黄色(2.5Y7/2)	2-3mmの礫を多く含む 2mm以下の砂粒を多く含む	
74	NR1 L3	土錘				①②灰黄色(2.5Y6/2)	1mm以下の砂粒を多く含む	
75	NR1 L2	須恵器 坏蓋	口縁部			①②灰白色(N8/)	1mm以下の砂粒を極少量含む	
76	NR1 L2	須恵器 坏蓋	口縁部			①②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の砂粒を含む	
77	NR1 L2	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径 2.2		①灰黄色(2.5Y7/2) ②明青灰色(5PB7/1)	2mm程の礫を極少量含む 1mm以下の砂粒を少量含む	
78	NR1 L2	須恵器 坏蓋か	天井部	つまみ径 3.2		①灰白色(N7/) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を含む	
79	NR1 L2	須恵器 坏蓋か	体部			①②灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒を含む	外面にヘラ記号か
80	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	口縁部 ~底部	①(13.6)②(8.2) ③4.3		①②灰色(N6/)	精緻	
81	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部	②(6.9)		①灰色(10Y5/1) ②灰色(7.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を含む	
82	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部	②(8.8)		①青灰色(5B6/1) ②灰色(N6/)	2mm程の礫を極少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	
83	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部			①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を含む	
84	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部			①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を少量含む	
85	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部			①②灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒を少量含む	
86	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部			①明青灰色(5PB7/1) ②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む	
87	NR1 L2 側溝	須恵器 高台付坏身	底部			①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む	
88	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部			①②灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒を少量含む	
89	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部			①②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を少量含む	
90	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部			①②灰色(N4/)	1mm以下の砂粒を含む	
91	NR1 L2	須恵器 坏身	底部	②6.9		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以外の砂粒を少量含む	
92	NR1 L2	須恵器 坏身	底部			①②灰色(10Y6/1)	2-3mmの礫を含む 1mm以下の砂粒を少量含む	
93	NR1 L2	須恵器 坏身	底部			①②灰色(10Y6/1)	0.5mm程の粗粒砂を少量含む	
94	NR1 L2	須恵器 坏身	口縁部			①灰白色(2.5Y7/1) ②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の砂粒を多く含む	
95	NR1 L2	須恵器 坏身	口縁部			①②青灰色(5PB5/1)	2mm程の礫を少量含む	
96	NR1 L2 側溝	須恵器 高坏	脚部			①②灰白色(2.5Y7/1)	1mm以下の砂粒を少量含む	
97	NR1 L2	須恵器 短頸壺か	口縁部			①②青灰色(5PB5/1)	2mm程の礫を含む 1mm以下の砂粒を含む	
98	NR1 L2	須恵器 甕	口縁部			①②灰黄色(2.5Y6/2)	1mm以下の砂粒を少量含む	
99	NR1 L2	須恵器 甕か	底部			①②灰黄色(2.5Y6/2)	1mm以下の砂粒を多く含む	
100	NR1 L2	土師器 高台付坏	底部			①②浅黄橙色(10YR8/3)	精緻	
101	NR1 L2 側溝	土師器 皿	口縁部			①②浅黄色(2.5Y7/3)	精緻	
102	NR1 L2	土師器 甕	口縁部			①にぶい黄褐色(10YR5/3) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	
103	NR1 L2	六連式製塩土器	体部			①②にぶい褐色(7.5YR5/4)	1mm以下の砂粒を少量含む	内面に布目圧痕
104	NR1 L2 側溝	緑釉陶器 椀	底部			釉 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 素地 灰白色(2.5Y8/2)	1mm以下の砂粒を含む	風化が目立つ
105	NR1 L2	緑釉陶器 坏か	体部			釉 暗緑灰色(7.5GY4/1) 素地 灰白色(2.5Y8/2)	精緻	
106	NR1 L2	緑釉陶器片				釉 暗緑灰色(7.5GY4/1) 素地 灰白色(2.5Y8/2)	精緻	
107	NR1 L2	灰釉陶器 皿か	体部			①②灰白色(2.5Y8/1)	精緻	
108	NR1 L1	須恵器 坏蓋	口縁部			①②灰白色(N7/)	2-3mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	
109	NR1 L1	須恵器 坏蓋	口縁部			①灰白色(N7/) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の砂粒を少量含む	
110	NR1 L1	須恵器 高台付坏身	底部			①②灰色(7.5Y6/1)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	

吉田構内(吉田遺跡)の調査

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
111	NR1 L1	須恵器 高台付坏身	底部			①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒を少量含む	
112	NR1 L1	須恵器 坏身	底部			①灰白色(N7/) ②灰色(N6/)	2~3mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を極少量 含む	
113	NR1 L1	須恵器 坏身	底部			①暗灰色(N3/) ②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の砂粒を含む	
114	NR1 L1	須恵器 高坏か	口縁部			①灰白色(N7/) ②灰色(5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少量含む	
115	NR1 L1	須恵器 甕か	口縁部			①灰色(5Y5/1) ②灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒を少量含む	外面に櫛描 波状文あり
116	NR1 L1	須恵器系陶器 甕	口縁部 ~体部			①暗灰色(N3/) ②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の砂粒を少量含む	
117	NR1 L1	緑釉陶器 椀	底部			釉 緑灰色(7.5GY5/1) 素地 にぶい黄黄色 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を極少量 含む	
118	NR1 L1	土師器 皿	底部	②5.0		①②にぶい黄橙色 (10YR6/4)	精緻	底部外面に 糸切り痕
119	NR1 L1	瓦質土器 羽釜か	体部			①灰黄褐色(10YR5/2) ②黒褐色(2.5Y3/1)	2~3mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を少量含む	
120	NR1 アゼ肩 (赤褐色土)	縄文土器 深鉢	口縁部			①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	1mm以下の砂粒を 非常に多く含む	

表13 出土遺物(石器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
121	NR1 L4	削器か	残存長(6.2) 幅(4.1) 厚み1.6	石材の原面が残る 砂岩か
122	NR1 L2	削器か	残存長(7.3) 幅(4.8) 厚み2.3	石材の原面が残る 流紋岩か
123	NR1 L2	剥片	残存長1.8 幅1.7 厚み0.3	姫島産黒曜石か

表14 出土遺物(木製品)観察表

質量()は復元値

遺物番号	遺構	器種	質量(cm)	備考
124	NR1 L6直上	不明	残長38.6 径1.8	125と同一個体か
125	NR1 L6直上	不明	残長35.2 径1.8	先端部はNR1L4出土 124と同一個体か
126	NR1 L6直上	円形曲物底板	残存径18.8 厚み0.6	半損品 樺皮結合曲物B
127	NR1 L6直上	祭祀具か	長さ16.4 幅4.0 厚み2.0	
128	NR1 L6直上	板状製品	残長18.4 残幅2.3 厚み0.7	
129	NR1 L6直上	板材	残長10.0 幅5.1 厚み1.5	
130	NR1 L6直上	板材	残長8.2 幅3.6 厚み1.3	
131	NR1 L6直上	板材	残長22.5 残幅4.0 厚み1.4	
132	NR1 L6直上	板材	残長15.7 残幅4.5 厚み1.2	
133	NR1 L6直上	板材	残長13.2 残幅5.8 厚み2.2	
134	NR1 L6直上	松明	残長15.9 残幅3.1 残厚1.5	端部炭化
135	NR1 L6直上	不明	残長26.4 残幅12.8 厚み2.0	
136	NR1 L6直上	柄か	残長68.4 幅2.9	片側端部に加工痕あり 側面に凹みあり
137	NR1 L6直上	角材	残長31.2 残幅10.8 残厚5.7	表面炭化
138	NR1 L6直上	角材	残長33.0 幅8.1 残厚4.7	
139	NR1 L5直上	板状製品	残長11.9 残幅2.0 厚み0.6	
140	NR1 L5直上	板状製品	残長14.1 残幅3.4 厚み0.5	片面端部付近に直交方向の切込み痕(深さ約2mm)
141	NR1 L4下層	円形曲物底板	残長17.7 残幅6.7 厚み0.6	半損品
142	NR1 L4下層	板材	残長18.5 幅6.7 厚み1.0	
143	NR1 L4下層	板材	残長9.3 残幅2.9 厚み1.0	
144	NR1 L4下層	板材	残長17.1 幅8.3 厚み2.1	
145	NR1 L4下層	杭	残長20.7 径(4.7)	表面全体が炭化
146	NR1 L4下層	松明か	残長21.3 残幅1.3 残厚1.5	端部炭化
147	NR1 L4上層	横斧柄	基部残長13.5 幅3.2 厚み1.7 柄部残長6.5 径2.1	斧台装着部・握り基部欠失
148	NR1 L4上層	円形曲物蓋・底板	残長10.9 残幅2.3 厚み0.6	
149	NR1 L4上層	木錘	長さ17.7 残幅(径)7.3 残厚3.3	裏面欠失
150	NR1 L4上層	木錘	残長7.2 幅(径)6.2 残厚4.8	半損
151	NR1 L4上層	不明	残長43.2 幅1.8 厚み1.2	両端部両側面を斜めに切り落とす
152	NR1 L4上層	不明	長さ43.9 幅8.6 厚み2.1	片面を作業板として使用か
153	NR1 L4上層	角材	残長34.5 残幅10.0 残厚6.0	表面炭化
154	NR1 L4上層	角柱	残長13.5 幅14.5 厚み11.5	柱材か
155	NR1 L4上層	角材	長さ10.2 幅5.4 厚み4.0	
156	NR1 L4上層	板材	残長3.1 幅6.5 厚み5.4	
157	NR1 L4上層	角材	長さ5.6 幅5.6 厚み3.0	
158	NR1 L4上層	角材	長さ8.8 幅6.5 残厚6.4	一側面に溝 建築部材を切断か
159	NR1 L4上層	角材	残長18.1 残幅5.3 残厚3.2	
160	NR1 L4上層	角材	残長9.0 幅8.1 残厚2.8	
161	NR1 L4上層	角材	残長9.1 幅6.8 厚み4.8	
162	NR1 L4上層	切断面のある木材	残長15.2 幅10.0 厚み6.3	
163	NR1 L4上層	板材	残長20.4 残幅4.1 残厚2.8	両端部に切断面
164	NR1 L4上層	板材か	残長11.4 残幅6.7 残厚3.6	
165	NR1 L4上層	板材	残長16.3 幅5.0 残厚1.5	
166	NR1 L4上層	不明	残長21.9 幅3.5 厚み1.3	両端部両側面を斜めに削り落とす
167	NR1 L4上層	矢板か	残長19.1 幅4.8 厚み1.8	
168	NR1 L4上層	不明	長さ11.7 幅9.5 厚み2.0	片面に段を形成
169	NR1 L4上層	板材	長さ13.4 幅9.7 厚み2.7	
170	NR1 L4上層	板材	残長17.6 残幅4.7 残厚1.7	両端部に切断面 側部加工面
171	NR1 L4上層	板材	残長16.7 残幅4.5 残厚1.7	両端部に切断面 側部加工面
172	NR1 L4上層	板材	残長14.5 残幅3.9 厚み1.0	
173	NR1 L4上層	板材	長さ11.0 幅4.2 厚み1.3	両端部に切断面 側部加工面

吉田構内(吉田遺跡)の調査

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
174	NR1 L4上層	板材	残長12.8 残幅3.8 厚み2.1	端部に切断面
175	NR1 L4上層	板材	残長6.7 残幅4.9 残厚1.5	端部に切断面
176	NR1 L4上層	板材	残長16.5 残幅3.5 残厚1.5	両端部に切断面 側部加工面
177	NR1 L4上層	板材	残長13.0 幅6.0 残厚1.8	両端部に切断面 側部加工面
178	NR1 L4上層	板材か	残長12.4 残幅4.2 残厚1.4	
179	NR1 L4上層	板材	残長8.6 残幅3.4 残厚1.1	端部切断面 側部加工面
180	NR1 L4上層	板材	残長9.0 残幅4.2 残厚1.2	両端部切断面 側部加工面
181	NR1 L4上層	板状製品	残長20.0 残幅2.9 厚み1.0	
182	NR1 L4上層	板材	残長15.2 残幅4.4 残厚1.1	端部切断面 側部加工面
183	NR1 L4上層	板材	残長13.5 残幅3.9 厚み1.0	両端部切断面 側部加工面
184	NR1 L4上層	板材	残長12.7 残幅4.3 厚み1.5	両端部切断面
185	NR1 L4上層	板材	長さ7.7 残幅4.7 厚み0.9	両端部切断面
186	NR1 L4上層	板材	残長9.3 残幅3.9 残厚1.1	端部切断面
187	NR1 L4上層	板材	残長11.3 残幅4.6 残厚0.6	端部切断面
188	NR1 L4上層	板材	残長10.8 残幅3.5 残厚0.5	端部切断面
189	NR1 L4上層	板材か	残長15.0 残幅1.2 厚み0.4	
190	NR1 L4上層	松明か	残長31.4 残幅2.3 残厚1.9	廃材転用の松明か
191	NR1 L4上層	板材	残長7.4 残幅6.5 厚み1.2	
192	NR1 L4上層	板材か	残長9.5 残幅3.2 残厚0.9	
193	NR1 L4上層	板材か	残長8.9 残幅5.1 厚み0.8	
194	NR1 L4上層	板材	残長8.3 残幅6.0 残厚1.5	両端部切断面
195	NR1 L4上層	板材	残長13.8 残幅3.2 残厚1.2	両端部切断面
196	NR1 L4上層	板材	残長7.8 残幅4.4 厚み0.8	
197	NR1 L4上層	板材か	残長6.4 残幅5.9 残厚2.0	端部切断面
198	NR1 L4上層	板材か	残長9.9 残幅3.7 残厚1.2	表面一部が炭化
199	NR1 L4上層	板材	残長8.4 残幅2.5 残厚1.0	両端部切断面
200	NR1 L4上層	板材か	残長7.5 残幅2.2 残厚0.7	
201	NR1 L4上層	板材か	残長6.5 残幅2.9 残厚1.1	
202	NR1 L4上層	板材か	残長4.2 残幅3.0 残厚0.8	
203	NR1 L4上層	板材か	残長6.3 残幅4.0 残厚1.2	
204	NR1 L4上層	板材か	残長8.0 幅3.0 厚み1.0	
205	NR1 L4上層	棒状製品	残長7.8 幅1.6 厚み0.9	
206	NR1 L4上層	板材か	残長5.2 残幅3.4 残厚0.4	
207	NR1 L4上層	板材か	残長7.1 残幅1.8 残厚0.8	
208	NR1 L4上層	板材か	残長7.6 残幅2.1 残厚0.8	
209	NR1 L4上層	板材か	残長9.3 残幅1.9 厚み0.4	
210	NR1 L4上層	板材か	残長8.6 残幅2.9 残厚0.6	
211	NR1 L4上層	板材か	残長8.5 残幅2.8 厚み0.4	
212	NR1 L4上層	板材か	残長4.5 残幅1.9 厚み0.5	
213	NR1 L4上層	板材か	残長5.8 残幅3.5 厚み0.5	
214	NR1 L4上層	板材か	残長4.4 残幅3.4 厚み0.8	
215	NR1 L4上層	板材か	残長3.1 残幅3.0 厚み0.5	
216	NR1 L4上層	板材か	残長5.0 残幅1.5 残厚0.6	
217	NR1 L4上層	板状製品	残長19.8 幅4.9 厚み0.7	218と同一個体か
218	NR1 L4上層	板状製品	残長9.1 幅4.9 厚み0.7	217と同一個体か
219	NR1 L4上層	板状製品	残長11.5 幅3.6 厚み0.4	
220	NR1 L4上層	板状製品	残長5.7 幅4.7 厚み0.6	
221	NR1 L4上層	板状製品	残長8.5 残幅1.8 残厚0.4	片側端部が炭化
222	NR1 L4上層	板状製品	残長9.7 幅3.0 厚み0.6	
223	NR1 L4上層	板状製品	残長17.5 幅4.5 厚み0.6	一方の先端部に人為的に穿たれたと見られる孔あり
224	NR1 L4上層	板状製品	残長10.8 幅3.9 厚み0.8	
225	NR1 L4上層	板状製品	残長20.3 幅2.7 厚み0.8	

吉田構内(吉田遺跡)の調査

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
226	NR1 L4上層	板状製品	残長4.1 幅2.4 厚み0.3	
227	NR1 L4上層	板状製品	残長6.8 幅2.5 厚み0.5	
228	NR1 L4上層	板状製品	残長14.1 残幅2.0 厚み0.5	
229	NR1 L4上層	板状製品	残長5.8 幅2.0 厚み0.3	
230	NR1 L4上層	松明か	残長4.4 残幅1.3 厚み0.6	片側端部・側面が炭化
231	NR1 L4上層	松明か	残長8.0 残幅1.9 残厚0.6	両端部と側面が炭化
232	NR1 L4上層	棒状製品	残長26.4 幅1.7 残厚1.5	
233	NR1 L4上層	角材か	残長11.6 幅1.8 残厚1.3	
234	NR1 L4上層	角材か	残長15.2 残幅1.1 残厚1.1	
235	NR1 L4上層	松明か	残長13.3 幅1.5 残厚0.4	片側端部が炭化 廃材利用か
236	NR1 L4上層	棒状製品	残長12.5 幅1.8 残厚0.8	
237	NR1 L4上層	棒状製品	残長10.8 幅1.0 残厚0.6	
238	NR1 L4上層	不明	残長16.1 残幅1.9 残厚0.8	
239	NR1 L4上層	板状製品	残長22.4 幅3.3 厚み1.2	
240	NR1 L4上層	板状製品	残長18.5 幅2.1 厚み0.8	
241	NR1 L4上層	棒状製品	残長17.2 径1.0	筆軸か
242	NR1 L4上層	板状製品	残長11.7 幅1.2 厚み0.5	
243	NR1 L4上層	板状製品	残長10.5 幅1.8 厚み0.6	
244	NR1 L4上層	松明か	残長3.2 幅3.0 残厚0.4	片側端部が炭化 廃材利用か
245	NR1 L4上層	板状製品	残長7.0 幅1.5 残厚0.5	
246	NR1 L4上層 側溝	角材か	残長12.3 残幅2.8 残厚2.5	
247	NR1 L4上層	棒状製品	残長11.0 幅2.1 残厚1.2	両端挟り込み部で折損
248	NR1 L4上層	糸巻き具か	残長10.6 幅1.0 厚み1.4	非貫通の孔が穿たれる
249	NR1 L4上層	円形曲物蓋・底板か	残長5.4 残幅2.5 残厚0.4	表面炭化
250	NR1 L4上層	丸杭	残長47.4 径4.3	表面炭化
251	NR1 L4上層	丸杭	残長14.5 幅2.5 残厚1.6	
252	NR1 L4上層	丸杭	残長9.3 幅3.0 厚み2.9	端部が炭化
253	NR1 L4上層	角杭	残長25.8 残幅4.0 厚み3.4	表面炭化 後に松明に転用か
254	NR1 L4上層	丸杭	残長22.2 幅3.0 厚み2.8	
255	NR1 L4上層	丸杭	残長17.5 幅3.3 厚み3.4	
256	NR1 L4上層 側溝	松明か	残長11.3 残幅3.6 厚み1.6	片側端部が炭化
257	NR1 L4上層	松明か	残長11.6 残幅2.1 厚み1.2	片側端部と側面が炭化
258	NR1 L4上層	松明か	残長16.2 残幅2.5 残厚2.0	片側端部が炭化
259	NR1 L4上層	松明か	残長19.5 残幅2.6 厚み2.0	角材から転用か 表面炭化
260	NR1 L4上層	松明か	残長4.6 残幅1.5 残厚0.2	片側端部が炭化
261	NR1 L4上層	松明か	残長5.8 幅1.0 厚み0.7	片側端部が炭化
262	NR1 L4上層	松明か	残長4.7 幅1.6 厚み0.7	表面炭化
263	NR1 L4上層	松明か	残長22.7 残幅3.5 残厚1.5	表面炭化
264	NR1 L4上層	松明か	残長18.1 残幅1.7 残厚0.7	片側端部が炭化
265	NR1 L4上層	松明か	残長14.5 幅1.1 厚み0.8	片側端部が炭化
266	NR1 L4上層	松明か	残長17.2 残幅2.0 残厚0.5	片側端部が炭化
267	NR1 L4上層	松明か	残長16.7 残幅1.5 厚み1.0	片側端部が炭化
268	NR1 L4上層	松明か	残長15.0 残幅2.3 残厚1.0	両端部が炭化
269	NR1 L4上層	松明か	残長11.7 幅1.4 厚み1.1	片側端部が炭化
270	NR1 L4上層	松明か	残長12.1 幅1.5 厚み0.7	片側端部が炭化
271	NR1 L4上層	松明か	残長9.0 残幅0.9 残厚0.7	片側端部が炭化
272	NR1 L4上層	松明か	残長11.8 幅1.4 残厚1.0	両端部が炭化
273	NR1 L4上層	松明か	残長6.6 残幅2.4 残厚1.2	片側端部が炭化
274	NR1 L4上層	松明か	残長8.6 残幅1.6 残厚1.3	両端部が炭化
275	NR1 L4上層	松明か	残長10.8 幅2.8 厚み1.0	片側端部が炭化
276	NR1 L4上層	松明か	残長8.9 残幅1.3 残厚0.9	片側端部が炭化

吉田構内(吉田遺跡)の調査

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
277	NR1 L4上層	松明か	残長9.0 残幅1.8 残厚1.1	片側端部が炭化
278	NR1 L4上層	松明か	長さ10.4 幅1.3 厚み0.7	片側端部が炭化
279	NR1 L4上層	松明か	残長7.2 残幅1.7 残厚0.9	両端部が炭化
280	NR1 L4上層	松明か	残長5.8 残幅1.6 厚み0.8	廃材利用か 片側端部が炭化
281	NR1 L4上層	松明か	残長8.8 幅1.4 厚み1.2	角杭の廃材利用か 端部・2側面が炭化
282	NR1 L3	板状製品	長さ14.2 幅1.7 厚み0.8	
283	NR1 L3	板材か	残長9.0 幅2.0 厚み0.6	
284	NR1 L3	板材か	残長4.2 残幅2.5 残厚0.6	
285	NR1 L3 側溝	板状製品	残長13.6 幅1.5 厚み0.5	
286	NR1 L3 側溝	板状製品	残長8.5 幅1.5 厚み0.5	
287	NR1 L3	板材か	長さ8.1 残幅0.9 残厚0.8	
288	NR1 L3	板材か	残長8.9 残幅0.8 残厚0.6	
289	NR1 L3	板材か	残長11.9 幅3.0 厚み1.5	断面凸レンズ形
290	NR1 L3	松明か	残長24.5 幅1.4 厚み1.0	片側端部が炭化
291	NR1 L3	松明か	残長13.1 幅0.8 残厚0.7	片側端部が炭化
292	NR1 L3	松明か	残長10.4 残幅1.5 厚み1.0	片側端部が炭化
293	NR1 L3	松明か	残長10.0 幅1.6 厚み1.0	片側端部が炭化
294	NR1 L3	松明か	残長60.5 最大径19.7	片面・両端部が炭化
295	NR1 L3	松明か	残長69.8 最大径20.3	両端部が炭化
296	NR1 L2側溝	板材	残長27.6 残幅4.1 厚み1.3	
297	NR1 L2	板状製品	残長4.7 残幅3.5 厚み0.5	
298	NR1 L2	丸杭か	残長20.5 幅1.5 厚み1.6	竹材
299	NR1 L2	板状製品	残長9.2 幅1.0 厚み0.6	
300	NR1 L2	松明か	残長3.7 残幅3.2 残厚0.3	表面炭化
301	NR1 L2	松明か	残長11.3 残幅3.4 残厚1.8	片側端部が炭化
302	NR1 L2	松明か	残長6.3 幅2.1 残厚0.5	板状製品の廃材利用か 片側端部が炭化
303	NR1 L2	松明か	残長8.1 残幅6.0 残厚3.1	両端部が炭化
304	NR1 L2	棒状製品	残長26.5 幅2.3 厚み2.0	柄か
305	NR1肩部	角杭	残長25.8 幅5.0 厚み4.3	断面六角形 杭列No.1
306	NR1肩部	角杭	残長23.0 幅5.9 厚み4.4	断面六角形 杭列No.2
307	NR1肩部	板杭	残長17.0 幅8.6 厚み7.0	杭列No.3
308	NR1肩部	板杭	残長14.5 幅5.3	断面不整形 杭列No.4
309	NR1肩部	板杭	残長14.2 残幅4.7 厚み0.6	断面長方形 杭列No.5
310	NR1肩部	板杭	残長26.7 残幅6.4 厚み3.2	断面長方形 杭列No.6
311	NR1肩部	杭	残長11.7 残幅1.6	杭列No.7
312	NR1肩部	角杭	残長30.2 幅6.9 厚み5.2	断面五角形 杭列No.8
313	NR1肩部	板杭	残長18.2 幅4.9 厚み2.2	断面長方形 杭列No.9
314	NR1肩部	角杭	残長27.8 幅5.8 厚み5.7	断面四角形 杭列No.10
315	NR1肩部	杭	残長13.8 幅4.3	断面凸レンズ形 杭列No.11
316	NR1肩部	板杭	残長8.7 残幅3.0	断面長方形 杭列No.12
317	NR1肩部	角杭	残長16.7 残幅4.6 厚み2.8	断面五角形 杭列No.13
318	NR1肩部	角杭	残長32.3 残幅5.9 厚み4.1	断面四角形 杭列No.14
319	NR1肩部	板杭	残長19.3 幅5.5 厚み1.8	断面長方形 杭列No.15
320	NR1肩部	板杭	残長9.6 残幅2.0	断面長方形 杭列No.16
321	NR1肩部	板杭	残長13.0 残幅8.5 残厚4.0	断面不整形 杭列No.17
322	NR1肩部	杭	残長6.7 残幅2.3	断面円形 杭列No.18

5. 小結(図94)

第2調査区では、調査前に予測していた通り、調査区の東南東約24m地点で実施した動物医療センター改修Ⅰ期工事で確認された埋没谷^{註1}の延長部が確認された。当調査において谷埋土は大きく6層に分類されるが、改修Ⅰ期工事で確認された谷埋土との対応を見ると、

改修Ⅲ期 第1層:黄灰色(2.5Y4/1)強粘質土…改修Ⅰ期 第1層:灰色(5Y4/1)弱粘質土

改修Ⅲ期 第2層:黒褐色(10YR3/1)弱粘質土…改修Ⅰ期 第2層:灰色(5Y4/1)粘性砂質土

改修Ⅲ期 第3層:黒褐色(10YR3/1)礫混弱質土…改修Ⅰ期 第3層:オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘性砂質土

改修Ⅲ期第2調査区 第4層上層:黒褐色(2.5Y3/2)泥土…改修Ⅰ期調査区 第4層:灰色(7.5Y5/1)粘性砂質土となるであろうか。

しかし、改修Ⅰ期工事で谷埋土とした堆積層からは木製品の顕著な出土が見られていない。大量の木製品及び自然木を検出したのは谷埋土下位の自然堆積層と位置づけたL6遺物包含層であるが、この層に包含される土器類は7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられるものが主体となっており、改修Ⅲ期谷埋土4層とは堆積時期が異なる可能性が高い。また改修Ⅰ期L6層の下位に遺構が検出され、その検出層も地山とは見られなかったことに対し、改修Ⅲ期の谷底は地山であった(写真184・189)。

両調査区の間にはなお約25mの距離が存在し、谷地形ということもあり厳密な堆積層の同定は困難である。動物医療センターは既存建物西側、まさに両調査区間の空閑地にさらなる増築計画が存在する^{註2}ため、計画実現時には事前の発掘調査が必要となる。この問題はその調査時に解明が期待される。

前述したが、第2調査区の北西16m地点では平成14年度に農学部解剖実習棟新営に伴う発掘調査が実施されている。略報しか公開されていないため詳細を知り得ないが、重複する河川2筋(河川跡1・2)が報告されている。その位置関係を確認すると(図94)、その走向から同一のものであることが分かる。調査者によって河川跡1は7世紀から14世紀の遺物を含み、8世紀後半から9世紀後半と推測されるSB8・9の上を覆うことから、9世紀後半以降に堆積が開始したと推察されている。

河川跡1埋土から出土する遺物の所属年代は、第2調査区谷埋土から出土する遺物の所属年代と同様であることから見て、今回確認された左岸は河川跡1の右岸に対応する可能性が高い。一方で筆者は谷(河川)は自然の谷筋を人為的に整備したもので、当初は底面に水流があったものの8世紀中頃にはすでに埋没を開始し、9世紀代には窪地化しており、上部に複数の遺物包含層が形成されたと考えている。谷地形の完全埋没は埋土最上層の出土資料が少ないため断定できないが、やはり14世紀代と推定しておく。また、包含層中(谷埋土第1～3層)に含まれる遺物の由来地は谷の南西に広がる台地、すなわち吉田遺跡第Ⅱ地区にて確認された集落遺跡^{註4}と想定している。

動物医療センター改修Ⅰ期調査区、そして農学部解剖実習棟新営調査区を見る限り、官衙を想像させる古代の建物群は、谷の右岸傾斜地に設けられたようである。つまり人為的に整備された谷は建物群の南西域を区画していた可能性が高い。杭列が現在まで左岸にのみ確認されているのは、右岸に比して左岸の丘陵傾斜がより急峻で護岸設備が必要であると同時に、区画の内外を示す意図を含んでいた可能性も残す。

出土遺物に関しては、49㎡という狭小な調査区であるにもかかわらず、谷埋土より墨書須恵器3点を含む多量の土器資料の出土を見た。墨書には「主」の字が2点(内1点は「卅」の可能性もある)、「井」の字が1点、そして「安」の字が1点確認された。農学部解剖実習棟新営調査区の河川跡からも「官」の字を持つ須恵器坏蓋が出土しており、埋土における墨書須恵器の出土率は極めて高い。特に文字「安」は「安部」、「安麻呂」等人名を示す可能性が指摘される。吉田遺跡の古代の実像を探る上で貴重な資料と

言えよう。

一方で農学部解剖実習棟調査区からは鈍尾の未製品、銅鉍石、鉍滓、鞆羽口など金属器生産工房の存在を示唆する遺物が出土しているが、第2調査区では官衙を連想させる資料として墨書須恵器の他2点の製塩土器小片が存在するものの、金属生産に関連する遺物は出土していない。

その反面、谷埋土、特に第4層上層より多量の木製品の出土を見た。用途不明品を含め曲物、斧柄、木錘など少数の製品も存在するが、大半は未製品ですらなく廃材や加工時に出た木屑と推定される。有機物の遺存には種々の条件が必要であるが、さほど離れていない農学部解剖実習棟新営調査区との間で大きな条件の違いは想像しがたく、やはり第2調査区周辺に木材が多量に投棄される要因、つまり木製品を主として取り扱う施設の存在が想像される。

以上が第2調査区の調査成果である。出土資料に関しては、多量に出土した資料の中から図化可能資料だけを抽出し、報告したに過ぎない。墨書須恵器「安」の存在も本書写真図版作成時に気づいた次第である。本書に未掲載の膨大な破片土器資料についても再調査の必要性を感じている。

また、本書対象年度の翌平成21年度に実施した動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う立会調査において、第2調査区の北東に新設された管路工事中に、谷の右岸を確認している。埋土の掘削は第1層に止まったものの相当数の遺物が出土している。次年度刊行予定の年報において谷の規模を含めて報告する所存である。

[註]

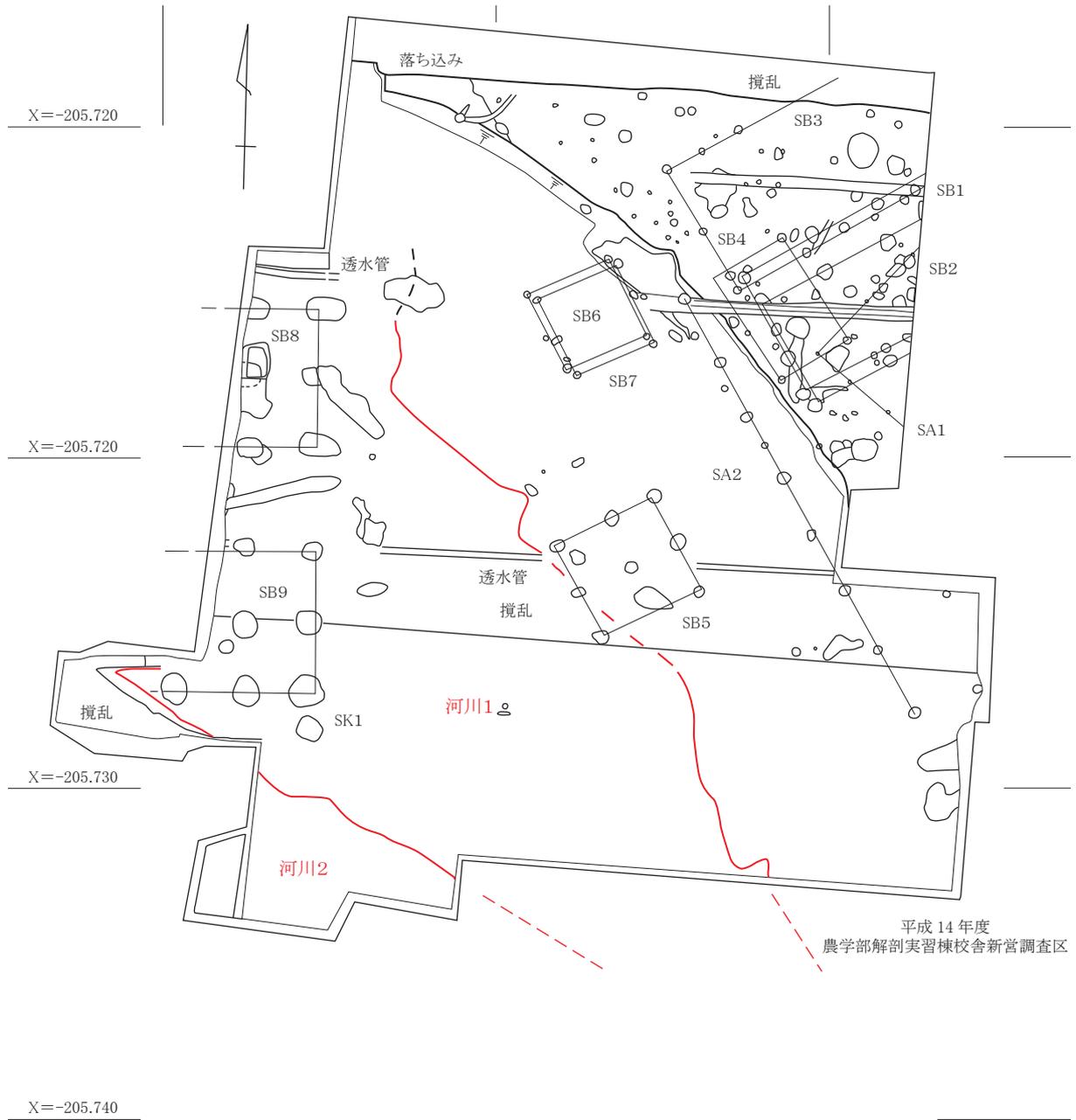
- 1) 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口
- 2) 「山口大学キャンパスマスタープラン2011」による。山口大学公式ホームページ平成24年2月22日発表。
<http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~fms-01/kikaku/campus-master-plan2011digest.pdf>
- 3) a: 田畑直彦(2002)「山口大学構内吉田遺跡—農学部校舎改修(解剖実習棟新営)に伴う発掘調査略報—」, 山口考古学会(編)『山口考古』第22号, 山口
b: 田畑直彦(2004)「平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
- 4) 横山成己(2007)「吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成17年度—』, 山口

(4)まとめ

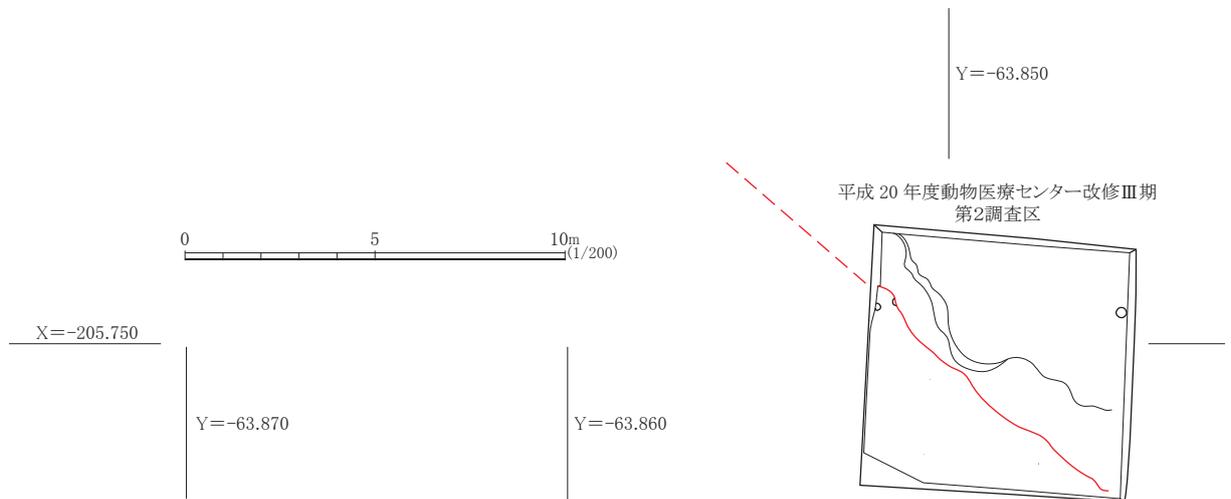
農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事は、発掘調査対象地が決定された段階で、ある程度の調査成果が予測された。すなわち、第1調査区は埋没谷の北東側安定台地上に該当するため、古代官衙に関連する建物群の出土が、そして第2調査区ではその位置が埋没谷の予想走向線上に当たするため、古代官衙関連資料を含め土器や木製品の多量出土が予想されたのである。

この予測は結果的に半ばはずれ半ば当たったことになる。第1調査区では、古代官衙関連建物どころか古代以前の遺構は1基も確認されず、代わって14世紀から16世紀にかけて継続的に存続した集落跡が発見されるに至った。当集落の出現に関しては、谷向かいの吉田遺跡第Ⅱ地区にて確認された集落の消長と関連するものと推定される。一方第2調査区では予測通り、埋没谷を検出した。調査区内にて谷肩部を確認することができたのも大きな幸運であった。調査区が狭小で谷埋土の掘削に集中できたため、遺物の所属層は一部の層境界部出土のものを除き保証されている。埋土からは、墨書須恵器をはじ

吉田構内(吉田遺跡)の調査



平成 14 年度
農学部解剖実習棟校舎新営調査区



平成 20 年度動物医療センター改修Ⅲ期
第2調査区

図 94 農学部解剖実習棟調査区との位置関係

め多くの土器資料と、多量の木製品を得るに至った。本調査区においては、この谷は8世紀中頃から埋没が開始し、9世紀以降は窪地化した状態であり、14世紀頃埋没を終了するものと推察される。調査終了から本書刊行まで出土資料の整理・調査を行ってきたが、未だ細片資料にまで目が届いていない。新知見があった場合には追って報告を行う所存である。

動物医療センター周辺は、時期的には古代以降を中心とする遺構の密集地帯である。近世以降耕地化された地域であるが、耕地化に伴う削平はあまり受けていないようで、既往の調査においても総じて遺構の遺存状況は良好である。

統合移転時には広大な敷地に感じられた吉田構内も、継続的な開発事業により徐々に空閑地が狭まっている。開発の手は主として丘陵地に存在する農学部附属農場敷地周辺にまで伸びてきているのが現状である。動物医療センター改修Ⅲ期工事の調査成果を見るまでもなく、今後も変わらぬ慎重な埋蔵文化財保護対応が必要であることは言を俟たないであろう。

6. 国際交流会館2号棟改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内N-22区、O-22区、N-23区
調査面積 約457㎡
調査期間 平成20年5月15、26、30日、6月17日、
 8月20日、25日、9月2、3日、10月7日
調査担当 田畑直彦
調査結果

山口大学では留学生の宿舎が大幅に不足しているため、吉田構内の旧独身宿舎を「国際交流会館2号棟」に名称・用途を変更して全面改修を行うことになった。そしてこの改修に伴い、建物南側におけるベランダの新設工事、進入路の新設工事(敷地の切り下げ)、建物周囲における設備配管の取り替え・新設等の工事が計画された。

同棟周辺については平成7・8年度に試掘調査が行われたが、いずれも顕著な遺構・遺物は確認されていない。しかし、工事範囲が広範囲に及ぶため、立会調査を実施することになった。以下、主要な箇所について調査結果を報告する。

A地点は現地表下約69cmまでが縁石及び造成土で、以下約69～99cmで青灰色(10G6/1)シルト、灰色(2.5GY6/1)粗砂、黄褐色(10YR6/6)粗砂、明緑灰色(10G7/1)粗砂からなる河川堆積土を検出した。B地点は現地表下約42cmまでが造成土で、以下約42～50cmで暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト(旧水田耕土)、約50～58cmでオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト(旧水田床土)、約50～85cmでオリーブ灰色(10Y6/2)砂礫土(地山)を確認した。C地点は現地表下約115cmまでが造成土で、以下約115～130cmでオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト(旧水田床土)を確認した。これより下位は河川堆積土で、約130～142cmでオリーブ灰色(10Y6/2)シルト、約142～160cmで灰色(10Y6/1)粗砂、約160～190cmで明緑灰色(5B7/1)砂礫土を確認した。D地点は電柱の新設箇所である。現地表下約130cmまでは造成土であった。以下、約130～190cmでオリーブ灰色(2.5GY6/1)粗砂・シルトの互層(河川堆積土)、約190～280cmで青灰色(5B6/1)シルト(地山)を確認した。E地点は現地表下約90cmまで掘削を行ったが、全て造成土の範囲内であった。F地点は現地表下約70cmまでが造成土で、以下約70～8

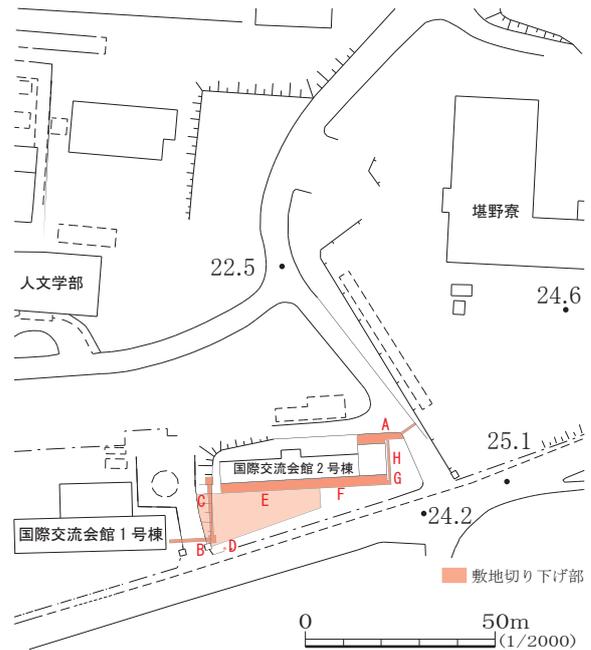


図95 調査区位置図



写真 212 A地点土層断面 (南から)



写真 213 B地点同断面 (南から)

2cmで灰色(10Y5/1)シルト(旧水田耕土)、約82～87cmで明黄褐色(10YR7/6)シルト(旧水田床土)を確認した。続く約87～97cmは黄灰色(2.5Y5/1)シルト(河川堆積土)で、同層からは時期不明の土器片1点が出土した。G地点は現地地表下約32cmまでが造成土で、以下約32～45cmで明黄褐色(2.5Y7/6)シルト(旧水田床土)、約45～75cmで灰色(5Y5/1)粗砂・灰褐色(7.5YR5/2)粗砂(河川堆積土)、約75～90cmで黄色(2.5Y8/6)粘土(地山)を確認した。また、造成土から須恵器底部片が1点出土した。H地点は現地地表下約19cmまでが造成土で、以下約19～28cmで灰色(5Y4/1)シルト(旧水田耕土)、約28～40cmで明黄褐色(2.5Y7/6)シルト(旧水田床土)、約40～59cmで灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト(河川堆積土)、約59～84cmで明青灰色(10BG7/1)粗砂・明黄褐色(2.5Y6/6)粗砂(地山)を確認した。敷地切り下げ工事では西端部で現地地表下約120cmまで掘削を行ったが、底面で旧水田床土が検出されるにとどまった。

今回の立会調査では、E地点以外の箇所では河川堆積土を検出したが、F地点で土器が1点出たのみであるため、詳細は不明な点が多い。ただし、隣接する国際交流会館敷地^{註2}では、幅19m以上の河川が検出され、少量ではあるが、弥生時代前期から古墳時代後期の土器が出土している。今回検出した河川と同一の可能性が高く、注意が必要である。

なお、調査区南側の道路については、山口市教育委員会によって送水管埋設に伴う立会調査^{註3}が行われているが、今回調査区から国際交流会館1号棟南側においては顕著な遺構等は検出されていない。一方、ハンドボール場の南側では、南北に走る幅1.5mの溝状遺構が検出されている。同溝の時期は不明であるが、弥生土器、須恵器が出土している。また、今回調査区から南に約75mの地点(神郷大塚遺跡^{註4})では、古代のものと考えられる掘立柱建物4棟、土壇7基、柱穴等が検出されている。

以上の状況から、吉田構内においてもハンドボール場周辺においては遺構が存在する可能性が高く、今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

[註]

- 1) 村田裕一(2004)「第3章第1節2 吉田構内基幹環境整備(独身宿舍・国際交流会館排水管布設に伴う試掘調査)」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
- 2) 河村吉行「第3章 国際交流会館新営工事に伴う試掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
- 3) a: 柴崎文男・小田村宏 山口市教育委員会(編)「吉田遺跡」『吉田遺跡・障子岳南(山水園)遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第40集,山口
b: 河村吉行「第4章第1節17 市道神郷1号線および問田神郷線の送水管埋設に伴う立会調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』,山口
- 4) 青島啓(2006)「神郷大塚遺跡6次調査」山口市教育委員会(編)『山口市埋蔵文化財年報—平成16年度—』,山口



写真 214 C地点土層断面 (西から)



写真 215 D地点土層断面 (北東から)



写真 216 E地点掘削状況 (東から)



写真 217 F地点掘削状況 (南西から)



写真 218 F地点土層断面 (南から)



写真 219 G地点土層断面 (北から)

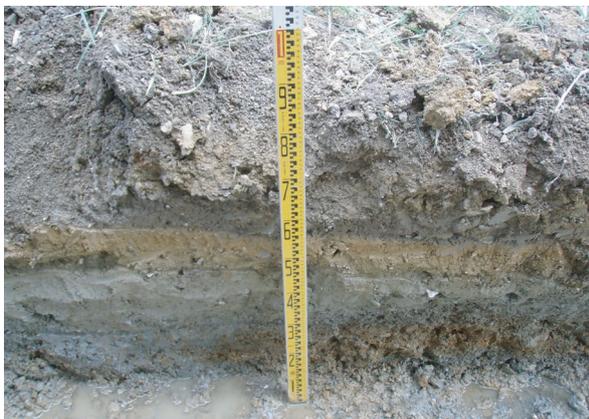


写真 220 H地点土層断面 (西から)



写真 221 敷地切り下げ部土層断面 (南西から)

7. サッカーグラウンド防球ネット取設工事に伴う立会調査

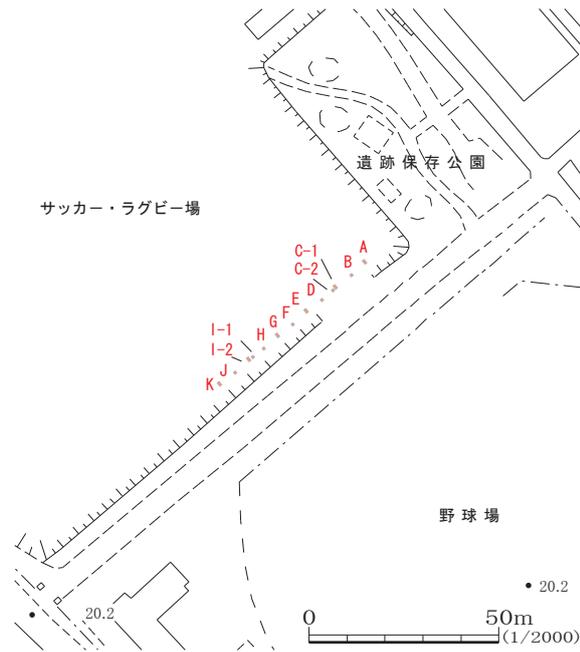


図96 調査区位置図



写真 222 調査区全景 (南西から)



写真 223 A地点同断面 (北西から)

調査地区 吉田構内H-21・22区、I-21区

調査面積 約8.5㎡

調査期間 平成21年2月18日

調査担当 田畑直彦

調査結果

吉田構内のサッカーグラウンドにおいて、サッカーボールがグラウンド南側の道路にまで飛球することがしばしばあり、危険であることから、グラウンド南側に防球ネットを新設することになった。工事は防球ネットの基礎を11箇所において掘削するものである。調査区は平成8年度に実施された外灯新設に伴う試掘調査区と重複している。同試掘調査では河川や土壌、柱穴が検出された。調査による掘り込みは一部にとどめたため時期等は不明な点が多いが、河川・遺構からは縄文時代晩期～古墳時代前期の土器が出土している。以上から、今回の調査にあっても、遺構・遺物の検出が十分に予想されたが、掘削が小規模のため立会調査を実施した。

各地点の土層断面は図96の通りである。A地点は現地表下約23cmまでが表土・造成土で、以下約23～39cmで黒色シルト、約39～68cmで青灰色シルト(地山)を確認した。A地点東側に隣接するグラウンド屋外照明施設新設に伴う発掘調査のA調査区^{註1}、西側に隣接する外灯新設に伴う試掘調査区では弥生時代中期～古墳時代前期の河川跡が検出されていることから、黒色シルトは河川埋土と考えられる。

B地点は現地表下約17cmまでが表土・造成土で、以下約17～70cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。C-1地点は現地表下約14cmまでが造成土で、以下約14～24cmで遺構埋土ないし遺物包含層と考えられる黒褐色シルト、24～67cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。C-2地点は現地表下約10cmまでが表土・造成土で、以下約10～30cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。また地山上面で直径約12cmのピットを検出した。D地点は現地表下約18cmまで

が表土・造成土で、以下約18～70cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。E地点は現地表下約15cmまでが表土・造成土で、以下約15～70cmで緑灰色シルトと灰色粗砂の互層となっていた。溝もしくは河川

吉田構内(吉田遺跡)の調査

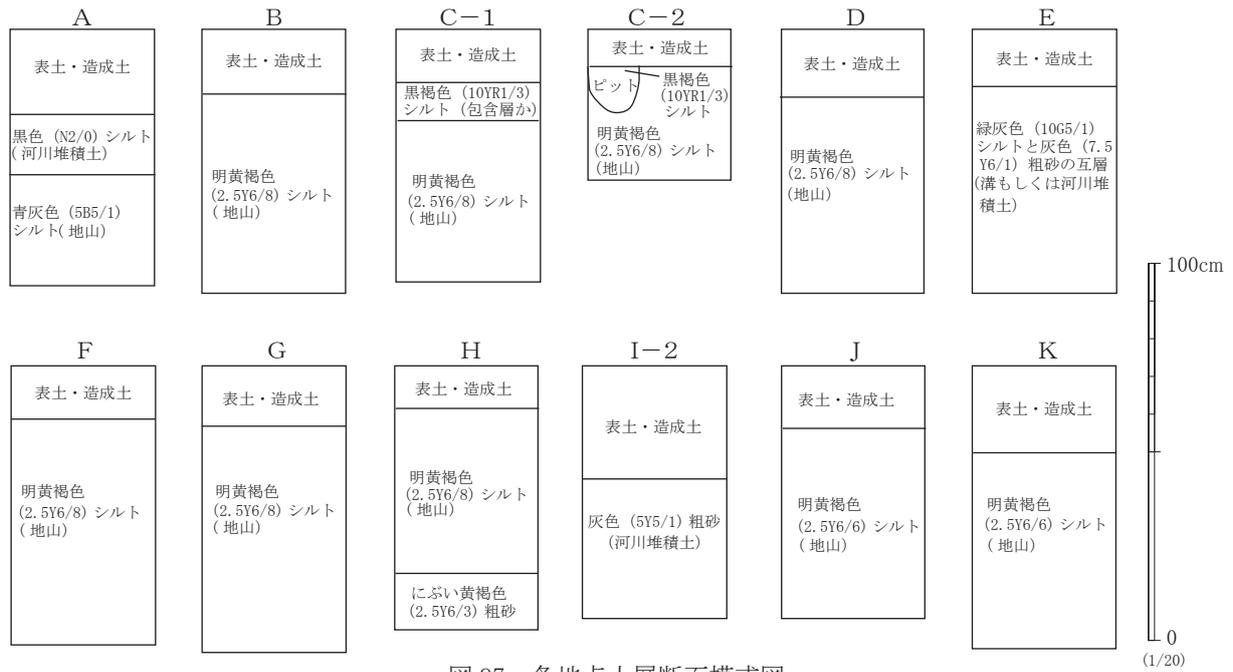


図 97 各地点土層断面模式図

堆積土と考えられる。また同層からは時期不明の土器片が少量出土した。F地点は現地表下約14cmまでが表土・造成土で、以下約14～74cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。G地点は現地表下約16cmまでが表土・造成土で、以下約16～76cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。H地点は現地表下約11cmまでが表土・造成土で、以下約11～55cmが明黄褐色シルト(地山)、約55～70cmで湧水を伴うにぶい黄褐色粗砂を確認した。I-1地点は現地表下約50cmまで掘削を行ったが、全て造成土の範囲内であった。I-2地点は現地表下約30cmまでが表土・造成土で、以下約30～67cmで灰色粗砂を検出した。灰色粗砂は外灯新設に伴う試掘調査区で検出された河川2埋土と考えられる。J地点は現地表下約57cmまでが表土・造成土で、以下約57～70cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。K地点は現地表下約23cmまでが表土・造成土で、以下約23～75cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。

以上の調査の結果、A地点、I-2地点で河川埋土、C-1地点で遺構埋土ないし遺物包含層と考えられる土層、C-2地点でピット、E地点では溝もしくは河川堆積土と考えられる土層を検出した。しかし、調査面積が狭小であり、遺物もほとんど出土しなかったため、詳細を明らかにすることができなかった。サッカーグラウンドにおいては統合移転時の調査以来、縄文～古墳時代の遺構・遺物が濃密に分布していることが判明している。また、水田面が削平されているため、現地表面から遺構面までの深さが20cmに満たない箇所も多く、今後の地下掘削工事にあたっては慎重な対応が必要である。

[註]

- 1) 村田裕一(2004)「第3章第1節2 吉田構内基幹環境整備(外灯新設)に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
- 2) 豆谷和之(2004)「第2章 吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XIV』,山口
- 3) 小野忠熙編(1976),山口大学吉田遺跡調査団(編)『吉田遺跡発掘調査概報』,山口



写真 224 B地点土層断面 (北西から)



写真 225 C地点土層断面 (北西から)



写真 226 E地点土層断面 (北西から)



写真 227 F地点土層断面 (北西から)



写真 228 G地点土層断面 (北西から)



写真 229 H地点土層断面 (北西から)



写真 230 I-2地点土層断面 (北西から)



写真 231 K地点土層断面 (北西から)

8. 正門導線改善工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内Q-15、S-18区

調査面積 約174㎡

調査期間 平成21年3月30日～4月1日

調査担当 横山成己

調査結果

(1) 調査の経緯(図98、写真232)

施設環境部より、正門改修工事に伴い正門駐車場・旧実験水田埋め立て地・大学会館西側空地等において導線(道路)を整備する工事計画が提出された。開発面積が広範囲に及ぶことから、埋蔵文化財資料館専門委員会(平成20年10月15日開催)において種々審議が行われたが、掘削深度が浅いことから埋蔵文化財に支障を来す可能性は極めて低いと判断されたため、遺跡を所轄する山口市教育委員の指導の下該当工事を文化財保護法第93条の「慎重工事」として取り扱うことが決定された。

しかしながら、同年12月24日より開始された吉田構内新教育棟新営工事(設備関連工事)に伴う本発掘調査成果において、大学会館西側に予定された道路建設工事で地下に埋存する遺構が破壊される可能性が指摘されたため、急遽遺跡破壊推定範囲において立会調査を実施する運びとなった。調査範囲は予定道路幅6m×全長29mの174㎡、調査期間は諸所の事情により平成21年3月30日から4月1日にかけての3日間と決定された。

(2) 基本層序(図99、写真239・240)

調査対象地の現状地形は南東から北西方向にかけて緩やかに降下しており、現地標高は調査区南東端部で21.09m、北西端部で20.51mを測る。これは該当地が姫山から南西に派生する舌状丘陵の北西側斜面に位置することに起因する。調査の結果、基本層序は①表土(層厚5～22cm)、②暗灰黄色弱粘質土:旧耕土(層厚2～8cm)、③黄褐色粘質土:旧床土(層厚最大16cm)であることが判明した。また調査区南半部では表土下に旧表土層(黄灰色弱粘質土層)が存在し、旧表土層を削って②③層が形成されていることを確認した。なお、調査区北側約4m、南側約1mの範囲は大学造成時に攪乱を受けたものと思われる。

(3) 遺構(図99、写真233～238)

調査区内で検出された遺構は、ピット(Pit)60基、溝(SD)2条、落ち込み(SX)2基である。

ピット群

調査区全域において確認されたが、その分布は疎らである。いずれも直径12～25cm程の小ピットであ



図 98 調査区位置図



写真 232 調査前全景 (南東から)

り、深度も稀に20cmを測るものがあるが大多数は10cm以内と浅い。後世の削平によるものであろう。

確認したピットの配列からは建物は復元されないが、等間隔に分布するピットから柵列の存在が推定される。図98に示した柵列1・2・5は原地形の傾斜に沿う方向で約8mの間隔で平行しており、柵列3はそれに直行して設けられている。これらの柵列は耕作に伴う施設と推される。

これらピット群の埋土はいずれも同質であり、褐灰色(7.5YR4/1)を呈する砂質土で締まりが弱い。ピット中には遺物がほぼ含まれておらず、僅かにPit7の須恵器甕と見られる小片1点、Pit14の陶器皿口縁部片1点、Pit23の土師器片1点、Pit26の磁器碗体部片1点を数えるのみである。

なお、Pit44・54・55は前述した吉田構内新教育棟新営工事(設備関連工事)に伴う本発掘調査で確認された遺構の再検出である。

溝

SD1は調査区中央部西側で検出した東-西方向に走る溝である。西側は調査区外に抜けており、検出長約150cm、幅約30cm、深さ約10cmを測る。遺物は出土していない。SD2は調査区北部東側で検出した南東-北西方向の溝である。北西側は後世の攪乱により破壊されており、検出長約130cm、幅約20cm、深さ約10cmを測る。埋土から土師器の小片5点が出土しているが、器形、時期ともに不明である。走向から柵列と同様に耕作に伴う施設と推察される。

落ち込み

SX1は調査区ほぼ中央部で検出した不整形な落ち込みである。長軸約140cm、最深部で深さ約5cmを測る。北西部は後世の攪乱により破壊されている。遺物は出土していない。調査区北東隅で検出したSX2は南北幅約100cm、東西幅約50cmを測る落ち込みである。南から北に向かい段状に降下しており、調査区北東隅で最大深度約25cmを測る。埋土は2~5mmφの砂礫であり、調査区壁面より激しい湧水を見た。埋土中からは須恵器甕体部片1点と土師器小片5点が出土している。この落ち込みは吉田構内新教育棟新営工事(設備関連工事)に伴う本発掘調査で確認された埋没谷の南側肩部にあたるものと思われる。なお、当遺構に関しては調査最終日の降雨により調査区断面図に遺構断面を付加することが出来なかった。

(4) 遺物(図100、写真241)

上記の如く、当調査では遺構から良好な資料が得られていない。図示し得るのは僅か2点のみである。1はPit14出土の陶器皿口縁部片で、内外面に灰釉がかかる。2はPit26出土の磁器碗体部片で、外面高台脇の単圈線上に草花文の染付けが見られる。この他、遺構検出時に須恵器甕頸部片、瓦質土器底部片・足鍋脚部片、粗陶器甕体部片等が出土しているが、特筆すべきものはない。

(5) 小結

当調査地点は、昭和46年に山口大学吉田遺跡調査団により発掘調査が実施された吉田遺跡第I地区D区第2地点の北西に近接する。第I地区D区第2地点に関しては「耕耘された土壌が黒褐色であったので、総めぐりして調べた。その結果、削平が著しいため明瞭な遺構の形態はとらえられず、若干の小起伏面や、小石の配石を見出したにすぎなかった。」と報告されており、その後の第I地区D区の再整理調査報告においても「おそらく、表土除去作業中に攪乱の激しいことが判明し、本地区の調査はその時点で切り上げられ、他地区に調査の主力が置かれたものと考えられる。削平により遺物包含層も遺構も検出されなかったため、第2地点の土層断面図も遺構平面図も作成されなかったのだろう。」との推察がなされている。出土遺物においては古墳時代中期の高坏片が存在するもの他は中世の土師器皿、瓦質土器足鍋脚部片、滑石製石鍋片、近世の粗陶器甕底部・口縁部片、砥石等であり、表土出土品と

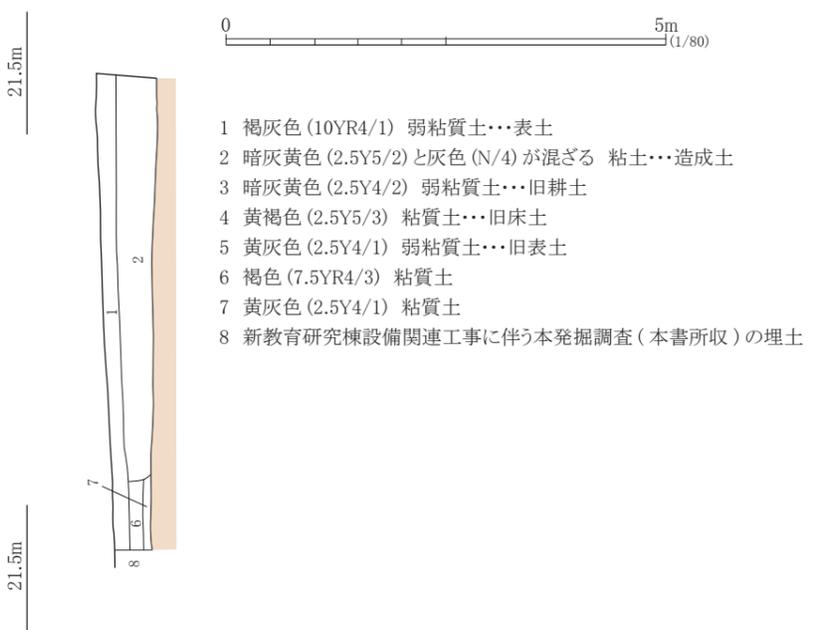
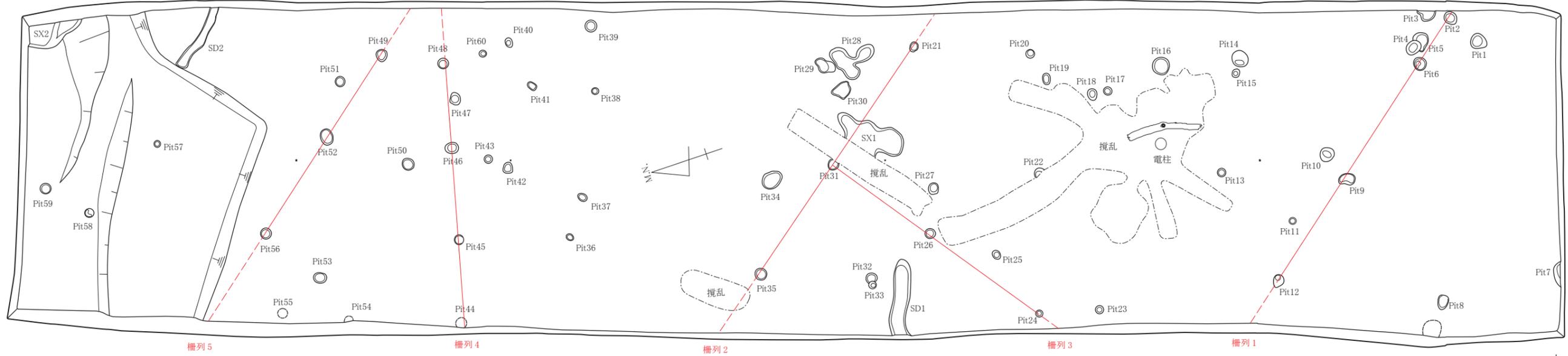
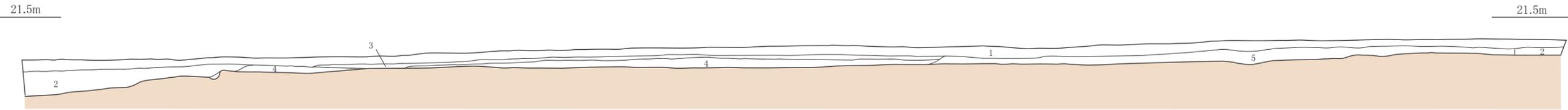


写真 233 遺構検出風景 (北東から)



写真 234 調査区全景 (南東から)

図 99 調査区平面図・断面図



写真 235 調査区南東部遺構群検出状況 (南西から)

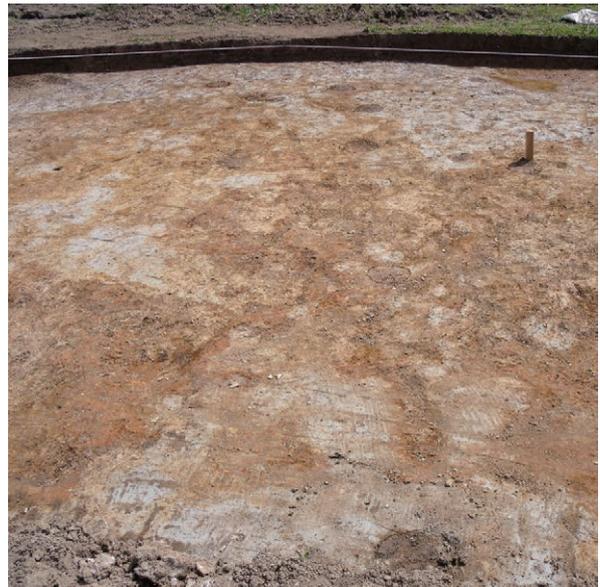


写真 236 調査区西部遺構群検出状況 (西から)



写真 237 調査区南東部遺構群完掘状況 (南西から)



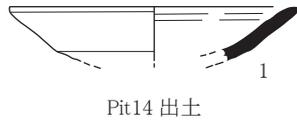
写真 238 遺構完掘状況 (北から)



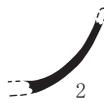
写真 239 調査区東壁断面 (北西から)



写真 240 調査区北壁断面 (南西から)



Pit14 出土



Pit26 出土

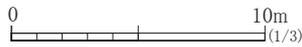


図 100 出土遺物実測図



写真 241 出土遺物写真

表15 出土遺物(土器)観察表

遺物 番号	遺構 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	Pit14	陶器 皿	口縁部	①(11.4)	胎土 灰褐色(5YR4/2) 釉 灰白色(5Y8/1)		精緻	灰釉
2	Pit26	磁器 碗	体部		胎土 灰白色(2.5Y8/1)		精緻	染付(草花文)

法量()は復元値

見られる。

以上の調査成果に対し、今回の調査においてもほぼ同様の所見となる。調査地西側一帯は現在「国際・社会連携ゾーン」として埋立整備されており、将来的な開発工事等が予想されるが、少なくともその東部域において埋蔵文化財が良好に遺存する可能性は極めて低いと判断される。

【註】

1) 本書所収23～42頁

2) 小野忠熙(1971)『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』,山口大学, 山口

3) 豆谷和之(1995)「吉田遺跡第Ⅰ地区D区の調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XⅢ』,
山口

9. 教育実践センター廻りフェンス取設その他工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内K-19区

調査面積 約2㎡

調査期間 平成21年2月27日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内教育実践センター東側歩道拡幅工事に付随し、教育実践センター周囲にフェンスを設置する工事計画が立案された。予定されたフェンスの設計上の掘削深度は現地表下約0.4mであったが、昭和62年に実施された教育実践センター棟新営に伴う発掘調査において、地表下40～60cmに検出される浅黄色土(縄文時代遺物包含層)上面に近世の土壌や溝、弥生時代から古墳時代に所属すると推察される柱穴等が検出されているため、立会調査を行う運びとなった。調査はフェンス設置予定地の内、教育実践センター棟建設における余掘り範囲を除く1m×2m区間で実施した。

調査の結果、該当地の基本層序は第1層:表土(層厚約15cm)、第2層:真砂土(層厚約10cm)、第3層:造成土(層厚約30cm)、第4層:灰黄褐色粘質土(層厚約20cm)、第5層:明黄褐色粘質土であった。この第5層が上述既往調査の浅黄色土に該当するものと思われる。

調査区北東部の第5層上面において、長軸75cmの平面楕円形を呈する土壇1基を検出した(写真243)。遺構埋土はにぶい黄褐色粘質土であり、埋土中から土師器の小片1点が出土している。

既往の調査により、教育学部校舎南西-西地域には弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落跡および古墳時代後期から古代の遺物を包含する自然河川跡が確認されており、今回調査区の北に近接するメディア基盤センター棟敷地の調査では、縄文時代の自然河川跡、中世から近世にかけての集落跡等が発見されている。遺跡地内においても最も複雑な様相を見せている地域に当たる。今後の開発計画においても慎重な対応が不可欠である。



図 101 調査区位置図



写真 242 調査区南西部地山検出状況(南西から)



写真 243 調査区北東部遺構完掘状況(北西から)

1) 木村元浩(1988)「吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』, 山口